
MUV-LUV ALTERNATIVE ～武士道～

語り部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M U V－L U V A L T E R N A T I V E 〈武士道〉

【Nコード】

N 3 1 2 8 0

【作者名】

語り部

【あらすじ】

ダブルオー：刹那・F・セイエイとの戦いを終えたグラハム・エーカー。しかし彼の戦いは終わってはいなかった。

これは神に頼まれ、異世界においてその剣を振るうことになるミスターブシドーの新たな物語。

設定変更しました。

＊感想を書いてもらえると作者が喜びます。

#00 プロローグ(修正) (前書き)

変更後。変更前に比べるとだいぶ短いです。

#00 プロローグ(修正)

目の前に広がるのはただ白だけの空間。ここは……どこだ？私は……確か……少年との戦いに敗れて……その後の記憶が……ない？

「ほっほっほ、目が覚めたかのう？ グラハムくん」

私の目の前に1人の老人が現れる。

「あなたは？」

…神……か…普通なら信じないがこの状況では信じるしかないか……

「わしは一言で言えば神じゃ。お主にちょっと頼みがあつてのう」

「頼み？」

「ある世界を救ってほしいのじゃ。その世界の人類は今窮地に立たされておるからな。まあお主に拒否権はないのじゃが」

「世界を救う……か……拒否権がないのでは仕方ないな。やるからには存分にやらせてもらおう」

私にあの少年のような真似ができるかどうかはわからんが……やるだけやってみよう。

「うむ。向こうにはお主をサポートするサポーターも送っておく。他にもいくつか特典を付けておこう。頑張ってくれ」

「望むところだと言わせてもらおう」

こうして、異世界におけるブシドーの戦いが始まる。

設定資料集（前書き）

感想版に要望がありましたので設定を一箇所に纏めました。
話が進むにつれて追加・修正していきます。
見なくてもそれほど問題はないかと思えます。

設定資料集

<キャラ設定>

名前…グラハム・エーカー

年齢

物語開始時…32

現在…36

階級

物語開始時…少佐

現在…大佐

搭乗機…スサノオ、グラハム専用ユニオンフラッグカスタム

詳細…本編の主人公。国連軍独立部隊『ユニオン』の隊長。

刹那の乗るダブルオーとの戦いが終わった直後に神に招かれ、マブラヴオルタの世界に転生した。

マブラヴオルタ世界に転生する際にNT能力とガンダム00以外のガンダム世界の知識を与えられている。

当初はスサノオに搭乗していたがガンダムWのゼクスのようにスサノオの性能がグラハムの能力に追いつかなくなってきたため、スサ

ノオの改修作業中はグラハム専用ユニオンフラッグカスタムに搭乗する。

現在のNT能力は逆シャア時代のアムロ並みになってきている。

名前…ビリー・カタギリ

年齢

物語開始時…36

現在…40

階級…大尉

詳細…神様がグラハムのために用意した主人公のサポーター。国連独立部隊『ユニオン』の技術主任。

グラハムと同様に神に頼まれて転生した。その際にグラハムと同様の知識を与えられている。

隊長であるグラハムをサポートし、世界に配備するMSを考えているのも彼。ただし作業はほとんどハロがしているので過労等はない。最近ユニオンの隊員が増え、整備兵も増えたため負担もかなり軽減されている。

名前…タリサ・マナンダル

年齢

初登場時…14歳（本作オリジナル設定）

現在…18歳

階級…少尉

詳細…本作のヒロイン。初陣となった朝鮮半島の戦いで同じくこの世界で初陣だったグラハムのスサノオに救われる。それからグラハムに憧れと好意を抱き、1年後に同じく朝鮮半島の光州作戦で再会する。

ユニオンへの転属を望んでいたが技量不足ということで保留となった。それ以降はユニオンに転属できるだけの実力を身につけるため、訓練に精を出す。NTのグラハムの影響でNT能力に目覚める。

前線で経験を積み、アラスカにあるユーコン基地のアルゴス試験小隊に配属される。その後いくつか問題を起こしながらも所属し続け、2001年『XFJ計画』の際に正式にユニオンに転属する。

搭乗機はかつてグラハムの乗機でもあったアヘッド近接戦闘型『サキガケ』。4年経ってもグラハムへの好意は健在。グラハムが切っ掛けで目覚めたNT能力も特別な繋がりとして認識している。

名前…リース・フレンツ

年齢

初登場時…24

現在…27

階級…中尉

詳細…国連独立部隊『ユニオン』の衛士。搭乗機はジンクス?・キヤノン。

軍人気質でよく言えば真面目。悪く言えば堅物。TEの篋唯依とは気が合うかもしれない。基本的にグラハムは単独で動くことが多いためレオンとエレメントを組んで行動する。

グラハムのことを衛士として深く尊敬しているが1人で突っ込むことも多く、ミシエルも奔放な性格なのでいろいろな気苦労が多い。

実は胸が少々小さいのが悩みの種だったりする。

名前…ミシエル・グレイザー

年齢

初登場時…25

現在…28

階級…少尉

詳細…国連独立部隊『ユニオン』の衛士。搭乗機はジンクス?・ソード。

楽天的で奔放な性格。真面目な人間からは不真面目に見えるが衛士としての実力は一級品。グラハムにも遠慮なく軽口を叩く。リースとエレメントを組んで戦うことが多く、性格は正反对だがコンビネーションは抜群。

戦闘中はなぜかガンダムスローネツヴァイのパイロット、ミハエル・トリニティと同じような台詞を言う。

名前…ミーシャ・イリユーナ

年齢

初登場時…15

現在…17

外見…銀色の短髪に青い目。年齢よりも幼く見える可愛い系。言っ

てしまえば男の娘

国籍…ソビエト連邦

詳細…ソビエト連邦陸軍に所属していた少尉。オルタネイティブ3で生み出された人工ESP能力者。リーディングは問題なく使用できるがプロジェクションが出来ないことから欠陥品扱いされていた。その代わり衛士としての適正は非常に高い。年齢よりも幼く見え、周りには10歳前後ぐらいにしか見えない。

ソ連軍から厄介払いとソ連がユニオンに借りを作る意味を込め、配属された。ユニオンに来る以前は周りから孤立し、生み出されてから同じESP能力者にほとんど会ったことがないことから孤立しており、上官からの命令には従順だった。ユニオンに着てからは自分と似たような能力を持つグラハムや本心から自分を必要としてくれるリース、レオンの存在により歳相応の姿を見せ始めている。

戦闘においては技量ではリース、レオンと互角だがリーディング能力で2人を圧倒できるようになった。射撃と格闘でバランスよく戦えるタイプ。

2年経ってもほとんど身長が伸びていないのが悩み。最近リースとの仲が怪しまれている。

搭乗機はアヘッド・スマルトロン

名前…イグル・ヴリート

年齢…56

外見…少々白髪の混じった茶色い髪に風格のある壮年男性

階級…少佐

国籍…ドイツ

詳細…国連軍欧州方面軍に所属していた軍人。もとは衛士だったが負傷によって引退し、艦隊指揮官などに就任していた。

明星作戦の後、ユニオンに志願。配属後はユニオンの旗艦『フレイグス』の艦長を務める。

任務中は厳しいが普段は気さくなおじさん。任務中も柔軟な対応ができる。

名前…キャシー・ルーファ

年齢.. 16

外見.. ブロンドのストレートヘアに可愛らしい顔立ちの少女

階級.. 中尉

国籍.. イギリス

詳細.. 国連軍欧州方面軍に所属していた整備士。父親が衛士だった
がBETAとの戦いで戦死している。

明星作戦後、ユニオンに志願し配属された。歳は若いが整備士とし
ての技術は高く、ユニオンの技術副主任に任命された。

性格は明るく友達思いの少女。グラハムやカタギリ、リースやレオ
ンのように歳がかなり離れている場合は敬語でしゃべるがタリサや
ミーシャのように歳が近い相手には普通に喋る。

タリサがグラハムに恋心を抱いているのを察知し、陰ながらに応援
する。配属されてそこまで経っていないがグラハムの人となりは大
概理解している。

名前…ゲイル・クラウザー

年齢…22

外見…髪は茶色い短髪の白人男性。顔立ちはそこまで悪くない

国籍…アメリカ合衆国

詳細…合衆国陸軍の少尉でユウヤ・ブリッジスやヴィンセント・ローエルと同じ基地に所属していた。

衛士としての腕は悪くないが協調性がなく、個人プレーに走りがち。そのためエレメントを組んだ戦いではユウヤに劣る。

さらに他国の人間をひどく差別する傾向があり、上層部からも問題視されていた。そのためアラスカ行きはある種の厄介払いである。

<オリジナル機体設定>

機体名称…近接戦闘型ゲルググ

型式番号…UMS-14S

頭頂高…19.4m

重量…40.3 t

武装…高出力ビームセイバー×2、ビームライフル、90 mm ハンドガン

動力…バッテリー駆動方式

駆動系統…ムーバブルフレーム

詳細…ユニオンのビリー・カタギリが日本帝国の以来を受け、設計した日本帝国斯衛軍及び將軍専用機。

日本帝国の戦い方に合わせ、高機動と接近戦に主眼を置いて設計されている。

装甲、動力はザクウォーリアを基にしているが駆動系統や武装は宇宙世紀の技術が盛り込まれている。

脚部には宇宙世紀時代のジオン軍のドム系統のMSと同様の熱核ホバーエンジンが導入され、地上戦で高い機動力を実現している。

機体の基本カラーは1年戦争で配備されたゲルググと同じグレーとグリーン。ただしこれは一般兵用の塗装で將軍専用機や武家出身者の機体はそれぞれ固有のカラーリングとなる。

基本性能ではザクウォーリアを凌駕し、ドムトルーパーを超える。

また、武装の高出力ビームセイバーは日本刀の形をしており、柄の部分を含体させることでビームナギナタとして運用できる。

ただでさえ基本性能の高い機体だが特に將軍搭乗機にはさらなるチューニングが施されている。他にもそれぞれ武家出身者の機体は通常よりも性能が上がっている。

操縦系統はザクウォーリアと統一されており、ザクウォーリアから乗り換えた衛士でも問題なく扱える。

現在では日本帝国の財政事情等の影響でまずは將軍専用機と五摂家の機体を優先して配備し、それ以外は日本帝国で開発された武御雷

が配備される予定で同機の一般兵への配備はまだ先となる。
ちなみに型式番号のUはユニオンを意味し、MS-14はジオン公
国でのゲルググの型式番号である。

機体名称…烈火

型式番号…JMS-00

頭頂高…21.36 m

重量…75.25 t

武装…74式近接戦闘長刀×2、帝国式ビームライフル

動力…バッテリー駆動方式

詳細…日本帝国がザクウォーリアやゲルググを解析し、作り上げた
初のユニオン製ではないMS。

ザクウォーリアやゲルググがもっているため、デザインはジオンやザフトの系列に近く、見た目はバックパックのないジンといった感じ。ただし頭部はメインカメラはモノアイだが頭部パーツの一部に不知火の面影がある。

まだまだ動力などに問題が多く、稼働時間がザクウォーリアに劣るため、武装は実体剣である74式近接長刀2本と帝国が解析し、苦心の末完成させたカートリッジ式のビームライフルになっている。機体自体の性能はザフトで作られたZGMF-1017『ジン』とほぼ同等で既存の戦術機よりも性能は高い。本小説における『XFJ計画』はこの機体をより完成されたものにするためであり、この計画で得られたデータをもとに帝国のMS開発をさらに向上させるのが目的。

<部隊設定>

正式名称…国連軍独立機動部隊『ユニオン』

詳細…グラハムが隊長を勤める独立部隊。その国の許可が取れば世界中のどこにでも行く。

部隊で使用するMSは擬似太陽炉搭載機で固められており、その技術は機密によって護られている。

入隊方法はエース級の実力を持ち、なおかつ自身で志願したもの。そのどちらかが欠けていても入隊はできない。

常に少数で最前線において戦うことから命の危険も多いが各国には存在しない擬似太陽炉搭載機に自然豊かな基地では天然ものの食料が食べられる。

基地内には広大なラボがあり、そこでMSの開発が行われている。現在はフレイグスのクルー含め隊員がかなり増員されている。

制服は一目でユニオンかそうでないかが判別できるように通常の国連軍の軍服と違い、アロウズの軍服となっている。

#01 異世界での再会（前書き）

修正後です。

#01 異世界での再会

〔SIDE・Graham〕

「ん…んう…」

あの白い空間から出た私が目を覚ますとそこは知らない天井だった。

「やあ、気が付いたかい？」

私が声をかけられたほうを見るとそこには見覚えのある眼鏡をかけたポニーテールの男が立っていた。

「カタギリ？」

そう、そこにいたのは私の友人で元ユニオンの技術者、ビリー・カタギリだった。

ということは、カタギリが神の言っていたサポーターなのか？

「カタギリ、君が私のサポーターでいいのかな？」

「その通りだよ。もっとも、僕もあの神様に頼まれてね」

「そうか…心強いな」

「他にも君にはいくつかの特典があるよ。とりあえず説明するね」

そうして私はカタギリから説明を受ける。与えられた特典とはまず

私たちが活動するための基地と戦艦、私たちがいた世界とはまた別の世界のMS等の知識、そしてこの世界の最低限の知識だった。

この世界は私たちの世界よりも300年以上過去であること。もつとも、辿った歴史が違うからもはや別世界だが……さらにこの世界ではBETAという人類に敵対的な存在によって人類は存亡の危機に立たされていること。なるほど、神が救ってほしいと言ったのはこれか。

「あともう1つあるよ。少し精神を研ぎ澄ましてごらん？そうすればわかるって言ってたよ」

「どれ………!?!」

私はカタギリに言われたとおりに目を閉じて意識を集中する。すると、ほんの僅かだが遠くから悪意を感じる。これは………

「NT能力………というものか……」

私が得た知識の中にある『人の革新』と呼ばれる力。あの時の少年の力に似ているな。

感じる悪意が遠いことから考えてもかなり遠くのBETAだろう。それでも精神を集中しなければ感じないことから結構距離があるのだろう。

まあそれはいい。他に確認しなければならぬことは………

「カタギリ、私のMSを見たいんだが？」

「言うと思ったよ。着いてきてくれ」

私はカタギリに連れられて部屋を出て格納庫に向かう。その道中でカタギリに説明を受けたがここは神が与えてくれた戦艦の中で名は『フレイグス』というらしい。

この艦はもともと私たちがいたのとは別の世界の機動戦艦アークエンジェルをもとに改造したものでありとあらゆる世代のMSの運用製造に適しているらしい。さらにこの艦があるのは特別な基地らしく人類はおろかBETAにも察知されないらしい。ここだけでMSを量産することが可能だそうだ。

「ついたよ」

カタギリに続いて私も格納庫に入る。そこには一機のMSが立っていた。黒を主体とし、所々白いカラーリング。そしてかつての愛機、フラッグをもとにした造型。

それはかつて私が搭乗し、あの少年と戦ったときに乗っていた擬似太陽炉搭載機の『スサノオ』だった。

「スサノオか……私はサキガケがあればいい方かと思っていたが。なかなか過保護だな、あの神は」

「そう言ってあげないでくれよ。あの神様も律儀なんだ。この世界に君を送ったからにはこれぐらいしなきゃ気が済まないんだろう」

律儀を越していると思うが……まあいい、スサノオならば言うことはない。私が乗った中でも最も性能が高く、乗りなれた機体だ。心強いにも程がある。

「それとこっちも見てくれよ」

私はカタギリが言った方を見るとそこには別の機体が鎮座していた。

「……………まさかこれも贈り物か？」

そこにあっただのは緑色のカラーリングに左肩に装備された巨大なシールドでモノアイのMS、ザクウォーリアがあった。

「これだけじゃないよ。ガンダムを除く様々なMSのデータを受け取っている。古いものではMS-05から生産できるよ」

「MS-05……ザク？か……しかし性能は低いだろう。パイロットを死なせるだけだ」

「だろうね。とりあえずまずは換装能力があって性能も高い量産機を用意したらしいよ」

「なるほど、これを量産すれば人類の大きな力になる……か」

他にも知識の中には換装機能がある機体としてウインダムやダガーシリーズもあるが、それは後々完成させればいいか。

「それとこの艦の制御や整備の手伝いはハロがやってくれるとのことだよ」

ハロ：これも知識の中にあるな。なるほど、操縦や整備のサポートメカか。

「で、どこかの陣営に入るかい？」

「そうだな……ならば国連の事務総長でも訪ねるか」

「国連？アメリカや日本でなくていいのかい？」

確かに私もカタギリもアメリカ人だ。だが知識の中にあるこの世界のアメリカはそんなにいいものではない。それに……

「世界のあちこちを飛び回るなら国連のほうがいいだろう？それに国連はアメリカの隠れ蓑のイメージが強い。そのイメージ、払拭するの面白い」

「でも、会ってくれるかな？」

「問題ないさ。手土産もあるしな」

私はザクウォーリアを見上げる。さて、事務総長殿に恋文でも送るとしよう。

#02 初陣(修正)(前書き)

修正後です。

#02 初陣(修正)

国連総司令官の執務室。そこにはイギリス人の壮年男性、アーサー・ラインハルト元帥がいた。その手元にはグラハムの搭乗機スサノオと量産型MSザクウォーリアの設計図が描かれていた。

「これは……人が乗れるものなのか？」

アーサーはスサノオのデータを見て呟く。その性能も驚くがなにより特筆すべきはその最高速度。その速さによって発生するGはパイロットの安全を度外視しているといってもいい。

実際、同じようにカスタムされていたオーバーフラッグに搭乗していたグラハムはそのGによって吐血している。スサノオはそれよりも遥かに速いのだ。

「だが、この機体が量産できれば……」

今度はザクウォーリアのデータに目を通す。性能ではスサノオに及ばないがそれでも現存の戦術機よりも遥かに高性能。しかもウィザードと呼ばれる換装パックを換装することで多様な戦闘が展開できる。

コンコン

すると執務室のドアがノックされる。

「来たか・・・・・・・・入れ」

アーサーがそう言うのとドアが開き、ビリー・カタギリと黒い仮面を被り、陣羽織を着たグラハムが入ってきた。

（SIDE：G r a h a m）

私は今国連総司令官の前にいる。私は相変わらず仮面を被り、アロウズにいた頃と同じ服を着ている。

さて、さすがは国連の総司令官殿。良い面構えをしている。歴戦の勇士といった感じだ。その総司令官殿だが私をいぶかしむように見ている。

「私の顔に何か？」

私がそう言うのと隣にいたカタギリが苦笑いしながら口を開いた。

「多分、君の仮面が原因じゃないかな？初対面でそれは結構驚くよ？」

む、そうか？私はそれほどおかしいとは感じないが。

「いや、構わんよ。そう言ったものを着けるのには何か理由があるのだろう？それよりもこのデータの事を聞きたい」

そういうと総司令官殿はスサノオとザクウオーリアのデータを出す。

「この戦術機……いや、MSだったか？確かにこの性能は素晴らしい。スサノオは一般兵士にはとても扱えるものではないがザクウオーリアは性能が第三代最強のラプターの倍以上の性能。これが量産できればBETAとの戦闘で大きな力となるだろう。だが………」

総司令官殿は私たちに疑惑の目線を向けた。

「だからこそ解せん。これほどの機体のデータを渡し、何を望む？」

当然の疑問か………

「1つは私とカタギリの戸籍の作成。そしてもう1つは国連所属で自由に動ける独立部隊を作っていたきたい」

「それだけのためにわざわざ？ だいたい部隊を作らずとも君たちならば勝手に動けるだろう？」

わかっているのに聞いているか……食えん人物だな。頼もしい限りではあるが。

「私たちが軍に属さず、自分勝手に動いても人類側に無用な混乱を招くだけです。そうなればBETAに勝つのは厳しいでしょう。そして、手紙でも伝えましたが私たちは異世界人。この世界で生きねばならぬならBETAを倒すのは大前提です」

私たちは自分たちが異世界の人間だと言うことは知らせてある。変に隠し事をして信用を得られんからな。

「無論、そのためにはこれらの機体を再現するための人員や施設が必要です。そのための独立部隊の提案です。そして国連からこれらの技術を各国に供給し、BETAに対する力にします」

私に続いてカタギリが説明する。やはり私よりもカタギリのほうがこういったことは向いているか……

「なるほど……だが、私はまだ君たちを完全に信用できていない。君たちを信用するかどうかは……戦場での働きで判断させてもらう」

ふっ、そうではなくては……私は微笑すると仮面に手を書け、そして外した。

「望むところだと言わせてもらいましょう」

私が仮面を外して見せた素顔に総司令官殿は驚いた顔をしながらもどこか納得したような顔になった。おおかた、私の仮面がこの傷を隠すタメのものだと察したのだろう。

「まずは君たちに戸籍と階級を与え、試験運用中の独立部隊として活動してもらう。ただし、他国の領域に入る場合は私を通してもらわなければならん。そうしなければ領土侵犯だとうるさいからな」

こうして私たちは国連の部隊として活動することになった。私は少佐、カタギリは大尉の階級を得ることになった。大まかなことを決めた私たちは部屋を出ようとする。と総司令官殿から声がかかった。

「1つだけ聞いておきたい。君たちはこれらの兵器でいったい何と戦っていたのか……それが知りたい」

総司令官殿の言葉に私は振り向いて答える。

「人間ですよ。エネルギー、宗教、人種、私たちの世界ではありとあらゆる理由で人は争っています」

「……所詮、人の敵は人か……」

物憂げに総司令官殿が溜息をつく。だが、そう悲観することでもない……

「ですが、人はいつか分かり合うことができる……私は思っています。たとえどれだけ時間がかかろうとも……そのためにもBET

Aに対抗することが必要なのです」

だが、如何に私がNTになったところであの少年のように人と人とをわかり合わせることはできないだろう。ならば、私は軍人として人類を信じて戦うのみだ。

あれから数日、ついに私に出撃の命令が出た。向かう場所は朝鮮半島。朝鮮でBETAと戦っている国連と大東亜連合の救援が私に与えられた任務だ。

「カタギリ、スサノオの調子は？」

私は出撃の準備を進めながらカタギリに自分の機体の調子を聞く。今、私たちの母艦『フレイグス』は太平洋沖合いを進み、日本海に入った。

しかしフレイグスはたいしたものだ。元型のアークエンジェルのように水中からかなりの速度で進めるシミラージュコロイドまで搭載している。もっとも、今のところ私の送り迎えが限度だ。まだこれを世界に見せるわけにはいかん。

「問題ないよ。擬似GNドライブも順調だ」

カタギリの言葉を聞きながら私はスサノオの前に立つ。今の私はこの世界の強化装備ではなくアロウズにいた頃のノーマルスーツだ。やはり私にはこちらのほうが馴染む。

「では行ってくる」

私はカタギリにそう言うときスサノオのコクピットに乗り込んだ。

「フレイグス、海面まで上昇。私が出撃したらすぐに艦を海中に戻せ」

『リョウカイ、リョウカイ』

通信機からは艦の操縦を任されているハロの声が聞こえる。

そしてフレイグスは海面に上昇し、ハッチが開かれた。

「グラハム・エーカー、スサノオ……いざ、参る！」

私はスサノオのオレンジ色の粒子を撒き散らしながら、私が愛した大空へと飛び立っていった。

（SIDE END）

＼SIDE..???.＼

「はあ……はあ……はあ……」

みんな……みんな死んだ……同じ部隊だった隊長も……他の連中も……初陣で、どっか緊張してたアタシを励ましてくれた……気のいい奴らだった……なのに……みんな、死んだ……

アタシにはなんもできなかった……助けられなかった……みんな、BETAに殺された……

「チクシヨオ……チクシヨオオオオオオオオオ!!!!」

こいつらのせいで……みんなも、アタシの故郷も!アタシはF-1

5Cの突撃砲を乱射しながら近接戦闘用短刀を構え、BETAに突っ込んでいった。

「この！このおおおおおおお！！！！！！」

アタシは要撃級を撃ち抜きながら暴れまわる。けど、そんな中で突然敵が近づくアラームがなり始めた。

「っ！？」

その方向に目を向けると突撃級が突っ込んできていた。

「ぐあ！」

アタシは何とか直撃は避けたけど結局吹き飛ばされ、転倒してしまふ。

「ぐう……」

何とか機体を立て直そうとする。けどそんなアタシの耳には耳障りな音が聞こえ始めた。

ガリガリガリガリ！！

「っ！？」

それはBETAの中でも一番多く衛士を食い殺してるBETA、戦車級がイーグルの装甲を噛み砕いてる音だった。

「くそお…こんなところで！」

近づいてくる死にアタシは恐怖を覚える。機体はすでに両足が大量の戦車級に噛み千切られ立つこともできない。

「（アタシは…みんなの仇も討てないまま…死ぬのかよ…）」

諦めかけたそのとき、通信機から大声が聞こえてきた。

『斬り捨て……御免!!』

その声が響いた瞬間、近くにいた要撃級と突撃級が切り裂かれた。そしてアタシの目の前にはオレンジ色の粒子を放出する黒い……見たこともない戦術機が立っていた。

（SIDE END）

〔SIDE・Graham〕

私はスサノオを駆って友軍の援護に向かっていた。眼下には大量のBETAがいるがこの辺には光線級はいないようでこちらに攻撃は来ていない。

「む？あれは・・・」

急ぎ飛んでいるとBETAの大群の中で奮闘している1機のイーグルがいた。周りの残骸を見る限りもはやこの辺に生き残りはいないのだろう。

「見捨てては置けんな……私とて人の子だ」

私は腰からシラヌイとウンリュウを抜刀するとイーグルの元に向かう。イーグルは突撃級の攻撃をなんとか避けたもののバランスを崩して転倒し、戦車級に群がられていた。

「あれを避けるか……やはり、ここで死なせるには惜しい！」

先ほどの突撃級の攻撃。あれは並みのパイロット……この世界では衛士か……衛士なら直撃していてもおかしくなかった。それをあの機体は避けたのだ。恐らくかなり反射神経がいいのだろう。操縦技術はまだ未熟のようだがな……

「斬り捨て……御免！」

私はシラヌイとウンリュウで近くにいた要撃級を切り裂き、続いて突撃級を斬り捨て、群がっていた戦車級を蹴散らした。突撃級は高い防御力を持つがこのシラヌイとウンリュウは実体剣の表面にビームサーベルを纏わせることができるため斬り捨てることができる。BETAを切り殺した私はすぐにイーグルに向き直って通信を繋げる。

「聞こえるか？ そのイーグル。すぐにベイル・アウトしろ！」

『お、お前………いったい？』

「話は後だ！死にたいか！？」

私がそう言うといーグルの衛士はすぐにペイル・アウトし、それを私がスサノオの手で回収し、他のBETAが近づいてくる前に空へと上昇し、コックピットのハッチを開く。

「さあ、速く乗れ。そうモタモタしてられんぞ」

するとその衛士はスサノオの手を伝ってコックピットに入ってきた。その衛士は褐色の肌で濃い茶色の髪。かなり小柄でおそらく少女だろう。こんな少女が戦場に出ているか……この世界では仕方がないことなのだろうが……

「すげえ………なんだこれ？」

少女はスサノオのコックピットを見て簡単の声を漏らす。

「悪いが速く私の膝の上に座れ。急ぐのでな」

「はあ！？／＼／＼」

私の発言に少女は顔を赤くする。確かに女性に対してはあれな発言だがこの少女はかなり小柄だ。私の膝に座っても障害になどならない。Gがかかるのはしょうがないがそんなものはどこにいても同じだ。逆にGの影響でどこかに頭をぶつけられたほうが困る。

「速くしろ！移動するぞ！」

そう言うとき少女は渋々私の膝に座る。その顔は真っ赤だ。私の身体にも女性特有の柔らかい感触がするが今の私には戦闘中ということもあって差して関心がない。

「行くぞ、しっかり掴まっている」

私はスサノオで少女にあまりGがかからない速度で飛ぶ。

「（キヨロキヨロ）」

膝の上に座っている少女は物珍しそうにスサノオの中を見回している。

「そんなにこの機体が珍しいか？」

「当たり前だろ！こんな戦術機・・・見たことねえ」

それはそうだろう。MSはこの戦闘が初お披露目だからな。

「そうか・・・む・・・」

すると眼下にちょうど戦闘中の部隊が眼に入った。

「少女、喋るなよ？舌を噛むぞ」

「え？うわ！？」

私はそのまま急降下すると部隊の目前にいる要撃級を切り裂く。

「この部隊の指揮官、聞こえるか？私は国連軍のグラハム・エーカ

「少佐だ！貴官らを援護する！」

『な、なんだ、あの戦術機は？い、いや、それよりも本当に国連軍なのか？そんな機体は見たことが………』

「疑うならば後でラインハルト司令に問いただすがいい。いまはBETAの撃退こそが重要だ」

それだけ言うと私はスサノオをBETAに突撃させた。

「お、おい！突っ込む気かよ！？」

「安心しろ、あの程度のものたちに遅れはとらん！」

私はまずシラヌイで要撃級を、ウンリュウで向かってくる戦車級を斬り捨てる。それからすぐに私は上昇し、スサノオ唯一の射撃武器、トライパニッシャーでBETAを薙ぎ払った。

「なんだよ……あれ………」

少女は初めて見るビーム兵器に眼を見張らせている。この世界ではまだビームなど使えんからな。

「ち………」

トライパニッシャーである程度のBETAを焼き払うことに成功したが、あるBETAの姿を確認し、私は舌打ちする。

「こ、光線級………」

少女が口を開く。そう、あれは光線級だ。重光線級でない分まじだが、今は率先して私が狙われるだろう。

「しっかり掴まっている」

私がそう言うのと同時に光線級が攻撃を開始した。だが、私はスサノオを操作してその攻撃を避けていく。

「す、すげえ………」

少女が何度目かわからぬほどの簡単の声を漏らす。私が光線級の攻撃を避けているのが信じられないのだろう。

「少女、多少Gが強いが耐えられるか？」

「え………いいぜ、耐えてやるよ！」

一瞬驚愕するが少女はすぐに察したのか笑顔でサムズアップする。どうやら私の技量を理解し、もはや心配ないと思ったのだろう。少女の目には何が起こるのかを楽しみにするような眼の輝きが見て取れる。まるで戦闘狂だな………私の言えることでもないか。

「では………行くぞ！」

次の瞬間、一気にスサノオが加速し、地上すれすれを飛ぶ。すると光線級は攻撃をやめた。私に撃てば味方を巻き込むとわかっているのだろう。それを利用して私は光線級との距離を詰める。

「ぐ……ぐううううう………」

私の膝の上では少女がスサノオのGに必死に耐えている。無理もない、この機体はもともとパイロットの安全性など考えてないのだ。いまはまだ最高速ではないが最高速を出したら慣れていないものは吐血する。私もそうだったからな。

「もう少しだ………」

私は少女にそう言うとしらヌイとウンリュウで1匹目の光線級を切り裂き、そのまま2匹目も撃破した。その後、立て続けに3、4、5匹と切り裂くとこの辺りの光線級は掃討することができた。さらにその間に国連と連合の部隊がBETAを押し返した。こうして私のこの世界での初陣は幕を閉じた。

「はあ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

戦闘終了後、スサノオの中ではあの少女が荒い息を吐いている。そうとうあのGが応えたらしい。

「大丈夫か？」

私は少女に気遣いの言葉をかけながらヘルメットを脱ぐ。

「・・・・・・・・・・なんだ？その仮面？」

「気にするな」

少女はどうやらさっきまで私の顔をしっかりと見れていなかったらしい。確かに戦闘中にヘルメットで見えにくいからそれも仕方ないか。

「着いたぞ」

私はスサノオを基地に着地させる。すると足元には多くの将兵が集まっていた。

少女を抱きかかえて降りると基地の責任者らしき人物が私の前に歩いてきて敬礼する。

「ラインハルト元帥から聞き及んでおります。エーカー少佐、ご協力感謝します」

「いえ、これは私の務めです。お気になさらず」

私は敬礼を返すと少女のことを説明し、すぐにスサノオに乗り込もうとする。

「もう行かれるのですか？ いろいろとお聞きしたいこともあるのですが……」

「この機体のことでしょう？ ならばすぐにでも知ることになります。私もやることがあるので、これで……」

「お、おい！ ちよま！」

少女が何か言っていたようだが私は気にせずにスサノオに乗り込み、そして飛び立った。

その少女との再会は1年後になる……

#02 初陣(修正) (後書き)

第二話でした。今回登場した少女は原作キャラでヒロインです。一応、オリ設定入ってます。

でもこの子が誰だかわかる人いるかな？

#03 ザクウォーリア（前書き）

• なんか調子いいです。今回は説明ばかりです。ザクウォーリアの
•
•
•
•

#03 ザクウォーリア

SIDE・GRAHAM

私が朝鮮半島での戦闘に参加してから数日。世界は私のスサノオの話題で持ちきりだった。

従来の戦術機を大きく上回る機動力。そして何よりこれまで実装されていなかったビーム兵器。そして私が国連軍所属と言うことで総司令官殿のもとには各国からの問い合わせが殺到していた。

総司令官殿もあのかのときの戦果には満足してもらえたようで私とカタギリは希望通り、独立部隊を得ることができた。

部隊名は『ユニオン』。かつて私たちが所属していた軍と同じ名前だ。

スサノオはユニオンが独自に開発した機動兵器『MS』ということになった。各国は国連に頻繁にMSのデータを求めてきたが機密のため、公開できない。その代わり近々各国に配備する予定の量産型MSを公開するということで渋々だが納得してもらった。

また、我々ユニオンだが、国連に所属して一定以上の実力を持ち、志願したものが所属するエース部隊と言うことになった。

こちらからのスカウトは基本的にしない。下手に引き抜いて反感を持たれでもしたら士気に関わるからだ。

そして今、私は1人で基地にいる。カタギリは国連の会議室でザクウォーリアのデータ公開をしている。隊長である私だがユニオンの技術主任はカタギリだからな。

＼SIDE END＼

（SIDE…KATAGIRI）

僕は今、国連の会議室で各国の代表を前にしている。これは各国に配備する予定のザクウォーリアのプレゼンをしている。

本来は隊長であるグラハムもいるはずなんだが彼は技術関連は僕に任せるといつてこなかった。まったく、信頼してくれるのは嬉しいけど……まあグラハムは技術者ではなく武人だから仕方ないけど。

僕はザクウォーリアの材質などについて説明しているけど各国の偉いさん方にはザクウォーリアの装甲の生成法とかがわからないからユニオンじゃないと量産できないしね。

「では次に武装の説明をします」

基本的な機体説明を終えた僕は次に武装の説明に入る。

「まず、この機体の標準装備として両腰部にマウントされた戦術機サイズの手榴弾『ハンドグレネード』。3基のスパイクを持つ対ビームコーティングが施されたシールド。そしてシールドに収納されたビームトマホークと精度は多少低いですが速射性に優れたビーム突撃銃を標準装備としています」

武装の説明……特に最後のビームトマホークとビーム突撃銃の説明をしたときに各国の代表たちがざわめく。この世界ではビーム兵器がまだ実装されてないから仕方ないけどね。

「まず、ハンドグレネードは3種類存在し、『高性能炸裂弾』『テルミット焼夷弾』『通常榴散弾』が存在し、状況に応じて使い分けることが可能です」

ハンドグレネードの説明をしていると各国の代表がそわそわしている。ふふふ、早くビーム兵器の説明を聞きたいみたいだね。

「次に、近接武装のビームトマホークですが、これはシールド内に収納されており、ハンドアックス状のビーム発生デバイスを持っています。格闘兵器としての運用が基本ですが、場合によってはブーメランのように投擲することも可能です」

僕の説明と共に後ろのモニターにザクウォーリアがビームアックスを投げる映像が映し出される。

「続いてビーム突撃銃です。先ほどもおっしゃったように精度は多少低いですが速射性に優れ、多数の敵に同時攻撃を行うことが可能です。着脱式のビームマガジン方式を採用しており、機体ジェネレーターの負担を軽減しており、小型で取り回しも優れています。また、シールドの裏面にビーム突撃銃の予備カートリッジを2基搭載しております」

ビーム突撃銃の説明を終え、僕はモニターを切り替える。

「ですが、これらはいくまで標準装備であり、これから説明するウイザードシステムこそ、本機の最大の特徴となっています。このウ

イザードシステムとはバックパック換装システムです。戦況や作戦、衛士の戦い方によって用途の異なるウィザードを換装することでザクウォーリアという単一の機種に複数の機能を持たせております」

代表たちがざわつく中、モニターにブレイズウィザードが映し出される。

「まずはブレイズウィザード。多数のスラスターを備えた高機動タイプです。この機体の武装は通常のザクウォーリアと同じですがブレイズウィザードには小型ミサイル『AGM138ファイアビー誘導ミサイル』が両側スラスターの先端に内蔵されており、広範囲の目標制圧や弾幕形成による攪乱に威力を発揮します。装弾数は片側19発の計38発です」

すると今度はモニターがガナーウィザードの映像に切り替わる。

「次がガナーウィザード。大型ビーム砲と専用エネルギータンクによって構成される遠距離砲撃用のウィザードです。主要装備はウィザード右側に装備された長射程ビーム砲『M1500オルトロス高エネルギー長射程ビーム砲』です。通常時はバレットとストックが折り畳まれており、展開時の全長は機体の身長を超えます。長射程における高い破壊力を有し、また射撃に必要なエネルギーは全て付属の大容量エネルギータンクによって賄われているので機体の稼働時間にも影響はありません」

そしてガナーウィザードの説明が終わると同時にモニターに最後のウィザードの映像が映し出される。

「最後がスラッシュウィザード。近接格闘戦用に開発されており、機体の運動性を維持するため、他のウィザードに比べて軽量化が成

されています。主要装備はバックパックに2門装備されている『MI-M826 ハイドラガトリングビーム砲』と接近戦用のビーム斧『MA-MR ファルクスG7ビームアックス』です。

ガトリングビーム砲は高速連射による面の制圧を目的としており、有効射程はそれほど長くはなく、主に近接戦闘での牽制に使用するのが用途となっています。左右の砲にそれぞれビーム突撃銃と同規格のエネルギーカートリッジを1基ずつ設置してあります。

もう1つの格闘用武装・ファルクスG7ビームアックスは高出力のビーム刃形成し、通常のビームアックスを大型化したもので高い切断力を誇ります。収納の際は柄を短縮し、腰部背面のマウントすることが出来ます。このようにザクウォーリアは装備を換装することで1機で様々な戦局に対応しております」

それからしばらくの間、簡単に質問に受け答えして今回のプレゼンは終了した。

さて、早く基地に帰ってザクウォーリアを各国に届ける準備をしないかね。

基地に帰ってきた僕を出迎えたのは上半身裸で汗を流しているグラハムだった。顔以外にもその脇腹や背中には痛々しい傷が残っている。

「む？カタギリ、帰ってきたのか？」

どうやらシュミレーターで汗を流していたらしい。彼はここに来てからこうして身体を鍛えるばかりだ。……まあ、もともとそういう男だったけどね。

「あまり無理するなよ？トレーニングも過ぎれば怪我のもとだよ？」

「問題ない。自分の限界ぐらいは心得ている」

そうは言ってもグラハムは何かと無茶するからね。

「ところで、どうだった？各国の反応は？」

「随分驚いていたよ。性能もそうだけどビーム兵器を標準装備していることが余計にね」

「ふむ、これでBETAとの戦いを有利に進められればいいが・・・」

グラハムの考えていることは良くわかる。僕もいろいろ不安だよ。

「ちゃんと配備されれば問題ないけど、国が来るかどうかともわからない戦後を考えてMSを出し渋るようなことがあれば・・・」

「苦戦は必死か・・・そうならないことを祈る他はないか・・・」

） D I D E E N D （

その頃、アメリカのボーニング社ではザクウォーリアのデータを見ながら重役たちが話をしていた。

「ユニオン・・・・・・・・国連の1部隊がこれほどのものを開発するとは・・・・・・・・」

「ビーム兵器を常備し、兵装を換装することでわざわざタイプの違う機体を作るコストは必要ない。かなり合理的だ」

「だが、もう1つ気になるのはこの機体だ」

だが、そんな中で重役たちの前にはもう1つの写真があった。それは先日の朝鮮半島に現れたスサノオだった。それは朝鮮半島で戦っていた国連の中のアメリカ人がとった写真だった。

「この機体とザクウォーリアは根本的に違う技術で建造されている。こちらの機体は機密ということで公開されなかったが・・・・・・・・」

「何とかしてこの技術も手に入れたいな・・・・・・・・」

「ユニオンの隊長と技術主任はアメリカ人だという。何とかこちらに引き込めないものか・・・・・・・・」

こうしてボーニング社の会議は夜遅くまで続けられた。

#04 アラビア半島撤退戦（前書き）

なんかアイディアが結構出るなあ。遊戯王のほうももうすぐ更新できそうです。

そして感想版のほうでザクウォーリアよりもジンクスやアヘッドのような機体のほうがいいのではないかという指摘があったのでここで説明という名の弁解をさせていただきます。

ジンクスなどの擬似GNドライヴの機体は空中での活動が主なので光線級が大量に出てきた場合、エースクラスならとにかくそれ以外の衛士では落とされ放題なんじゃないかと思いました。

だったら地上戦でバックパックの交換だけで戦い方を変えられるザクウォーリアのほうが安全だと思ったんです。

ただし、擬似GNドライヴの機体はエース部隊であるグラハム率いるユニオンの専用MSとして出す予定です。

つまり一般の部隊がザクウォーリアをはじめとするモノアイ系MSで擬似GNドライヴ系がユニオンの機体ということです。

納得いかないかもしれませんがお許してください。

#04 アラビア半島撤退戦

＼SIDE…GRAHAM＼

カタギリがザクウォーリアのプレゼンを行ってから早4ヶ月。ザクウォーリアは常任理事国を中心に配備が進んでいた。

だが、それでもやはりBETAとの戦いは劇的には変わらなかった。理由は実に単純だ。私たちが危惧していた通り、多くの国が来るかどうか分からない戦後のことを考え、MSを戦場に出すことを渋っていたのだ。

「まったく、政治家と言うのは本当に厄介だね」

「同感だ…上に立つものが先のことを考えるのは当然だが見通しも聞かぬ先など何の意味もない」

ちなみに我が部隊『ユニオン』はまだ新たな部隊員は来ていない。一定以上に能力が高く、自ら志願する衛士はやはりそうはいないらしい。

「ん？どうやら任務のようだよ、グラハム」

総司令官殿からの通信。任務か……

『エーカー少佐、君にアラビア半島に向かって欲しい』

「何かあったのですか？」

総司令官殿の顔色が悪い。かなり悪い知らせか……

『つい先ごろ、10年間BETAの侵攻を防いでいたアラビア半島の戦線が瓦解し始めた。アフリカ連合軍と中東連合軍はスエズに渡って戦線を再構築するために撤退する。君にはすぐに現地に行って戦闘に参加して欲しい』

「そうですか……MSの配備状況は？」

アフリカ方面にもMSは配備されているが……アメリカや日本に比べれば少ない。数に圧されたか……

『出撃してはいるがBETAの数が多く、戦線をカバーし切れていない。すぐに向かってくれ』

「了解しました。グラハム・エーカー少佐、すぐにアフリカ連合及び中東連合の援護に向かいます」

私とカタギリが敬礼を返すと通信が切れ、すぐに指示を出す。

「カタギリ、すぐにスサノオの出撃準備を頼む。ハロ、ミラージュコロイドを展開させ、全速力でアラビア半島近海まで向かう！」

「リョウカイリョウカイ」

指示を出すとともにミラージュコロイドによってフレイグスの姿が消え、アークエンジェルを遙かに凌駕する速度でアラビア半島に向かい始めた。

『マモナクアラビア半島！マモナクアラビア半島！』

私がパイロットスーツに着替え、スサノオのコクピットの中で待機

しているとハロから通信が入る。

「よし、いつも通り私が出撃した後、海中に退避しろ」

出撃前の最後の指示を出し終わるとMSハッチが開く。

『進路クリア、発進ドウゾ！ドウゾ！』

「グラハム・エーカー、スサノオ・・・・・・・・いざ参る！」

フレイグスから出撃した私はアラビア半島の空を飛ぶ。眼下には大量のBETAの群れ。ところどころ戦術機の残骸も見えている。

「む!？」

そのまま進んでいると私を光線が襲う。

「光線級か……………」

光線を避けた私の目の前には4体の光線級。こんなところで時間を食うわけにはいかん。

「落とさせて貰うぞ、BETA！」

私は以前、あの少女を乗せたときには出せなかったスサノオの最高速を出して光線級に近づく。光線級は迎撃しようとするがNTとしての力を得た私とこのスサノオのスピードがあれば！

「当たらなければどうと言うことはない！」

私の叫びと共に抜刀したシラヌイで光線級を両断する。さらにすぐ近くにいたもう1体もウンリュウで叩き切る。私はそのまま上昇し、残り2体のもとに向かう。

「でやあああああああああ!!」

シラヌイとウンリュウを連結させた双刃の薙刀『ソウテン』で残りの光線級を立て続けに切り裂くとその場を後にする。

「思わぬところで時間をとられた……………急がねば」

「見えた！」

私が全速力で向かっているとちょうど撤退行動中の部隊を視認できた。

「これ以上はやらせん！」

私はBETAの群れにトライパニッシャーを撃ちこみ、そのままB

ETAの群れに切り込んだ。

SIDE END

SIDE.. 連合軍隊長

く、これ以上はきつか・・・俺の乗るブレイズザクウォーリア・・・確かにこの機体は既存の戦術機よりも高いがBETAの数があまりにも多い。だが、それでも今までの戦術機ならば俺もとづくにやられていただろう。

それでもこの数の差は正直辛い・・・だが、ここが抜かれればアフリカにまで入られる。ここで何とか食い止めねば！俺がそうしてBETAを切り裂いていたときだった。

「あ、あれは・・・」

オレンジ色のビームがBETAを貫いた。その先にはオレンジ色の粒子を出す黒い機体が飛んでいた。その機体のビームがBETAを薙ぎ払うと通信が聞こえてきた。

『こちら国連所属、グラハム・エーカー少佐だ。アフリカ連合及び、中東連合の撤退を援護する！』

そう言うとその機体は腰の剣を抜いてBETAの大群に突っ込んだ。

「しょ、正気か!？」

国連の独立部隊『ユニオン』の隊長が凄腕だと言うのは聞いている。だが、いくらMSでもあの大量に突っ込むなど・・・

だが、俺のそんな思いは杞憂に終わった。あの黒い機体は信じられないスピードで動き回り、次々にBETAを切り裂いていた。

こうしてられない・・・我らも続かねば！

「全機、エーカー少佐を援護しながら撤退を続けろ！エーカー少佐の奮闘を無駄にするな！」

そしてそれから数時間後……俺たちは撤退を成功させ、アフリカ大陸への侵入を食い止めることができた。

エーカー少佐はそれを確認するとすぐに帰還していった。俺たちはその背中にずっと敬礼をしていた。

#05 新たな仲間（修正）（前書き）

修正後です

#05 新たな仲間(修正)

SIDE: Graham

ザアアアアアア!!

私は今、基地の自然が多い区画にある滝つぼで滝行をしている。

この基地は太平洋に浮かぶ比較的大きな島で、あの過保護神のおかげかBETAにも発見されず、人類側でも所在を知っているのは私とカタギリを除けばラインハルト元帥だけだ。

基地にはMS開発施設やこう言った自然施設だけでなく、この世界では貴重な天然物の食べ物も普通に存在する。

また、この島には他の動物たちも生息しており、施設の外も自然が多い。

「……カタギリか？」

私が気配を感じたのでその方向を見るとそこにはカタギリが立っていた。

そういえば神に貰ったNTとしての感覚にも今ではかなり慣れた。最初の頃は気分が悪くなってはいたからな。

「ちょっといいかい？朗報だよ」

「朗報？」

「ラインハルト元帥から連絡があつてね。ユニオンに志願する衛士が2人いるんだ」

ほう、存外早く志願者が現れたな。

「ラインハルト元帥からの連絡ということはその2人、腕は立つのか？」

「何年もBETAと戦つてゐる衛士だよ。フランス人とドイツ人だそうだ」

「そうか。で、着任はいつ頃なんだ？」

「来週の頭にはこちらに来るそうだよ。こちらに送られてきた2人のデータもあるよ。見るかい？」

そう言われて私はカタギリから渡された2人の衛士のデータを見る。そこには金髪のポニーテールの女性と茶色い短髪の男性の写真が乗っている。

「リーラ・フレンツ、国籍はフランス、年齢24歳。国連欧州方面軍所属。初実戦は18歳。階級は中尉か。もう1人はミシェル・グレイザー、国籍はドイツ。同じく国連欧州軍所属。年齢は25歳。初実戦は16歳。階級は少尉……」

「2人ともユニオンへの配属を強く希望してゐるって話だよ」

なるほど、多少は評価され始めているということか。

「彼らが着任したらこちらのMSに馴れさせる。シミュレーターは

光線級を中心に行う」

「馴れてくれるかな、彼らは？」

「馴れて貰わなければ困る。そうでなければ連携がとれんからな」

確かに光線級は空を飛ぶものには脅威だが、ユニオンに志願したならば空戦ができるようになってもらわなければ困るからな。

「お手柔らかにね？ ミスターブシドー？」

カタギリがからかうように口にする。

「周りが勝手に言っているだけだ。こちらからすれば迷惑千万」

そう、この世界でも私のことを『ミスターブシドー』と呼ぶものが出てきた。最初は私が救援に向かった朝鮮半島、そこで私の戦い方が広まり、次いで私の軍服姿が話題になり、いつの間にか国連内で私をそう呼ぶものが出てきたのだ。

まったく、本当に迷惑千万だ。ちなみにユニオンの制服はアロウズと同じものになった。新しく作るのも面倒だからな。

それから数日後、2人の追加要員が着任する日となった。私はロツカールームで軍服に着替え、仮面を着用するとブリーフィングルームに向かう。

私がブリーフィングルームに入るとカタギリと追加要員の2人の衛士がいた。2人は私を見ると立ち上がる。女性は背筋を伸ばして立つのに対し、男のほうはどこかのんびりだ。これだけでだいたいどのような性格かわかるな。

「遅れてすまない。私がユニオンの隊長グラハム・エーカー少佐だ」

私が敬礼をすると2人も敬礼する。

「国連欧州方面軍から転属してきたリース・フレンツ中尉であります！よろしく願います！」

まずリースは生真面目な、根っからの軍人だな。

「同じく国連欧州方面軍から転属してきたミシェル・グレイザー少尉です。よろしく願います」

それと対称的にミシェルは不真面目・・・というわけではないが奔放な性格のようだ。友人として付き合う分には退屈はしなさそうだな。

「さて、我等ユニオンだが実質戦闘要員は私と君たち2人しかいない、ということは理解しているな？」

私の問いかけに2人とも頷く。

「さらに我等の戦場は平たく言えば世界中だ。無論、各国の領土に入るにはその国の許可がいるが、許可さえあれば世界中のどこにでも行つてBETAと戦う。どこか決まった場所に駐屯する部隊と違い、休息はとりにくいだろう。そのことも理解できるな？」

「はい！」

「よし、君たちには明日からあるMSに乗って訓練してもらう。まずはその機体に慣れることだ。言っておくがユニオンの部隊専用機は現在、各国に配備されているMS『ザクウォーリア』とはまるで別物だ。そのことを頭に入れておけ」

私の言葉に2人は敬礼で返す。

「では、基地内を案内しよう」

そう言って私はカタギリと2人を引き連れて部屋から出た。

それからしばらく2人を案内していたが2人には驚くことばかりだった。無理もない、基地内に自然があり、天然物の食料も豊富だといわれればな。

「ここが格納庫だ」

格納庫に着くと2人はさらに辺りを見回す。

「えーと、少佐？これって少佐の機体っすよね？」

ミシエルがスサノオの前で私に話しかけてきた。

「グレイザー少尉！エーカー少佐に馴れ馴れしすぎるぞ！」

フランクなミシエルに対し、リースが叱り付ける。

「構わんよ。ミシエルの言うとおり、この機体が私の専用機、GNX-Y901TW『スサノオ』だ。明日から君たちにもこれと同じ概念で作られた機体で訓練をしよう。こちらだ」

私が2人を別の機体の前に連れて行く。そこには2機のグレーの機体が鎮座していた。

「この機体は……？」

「GNX-603T『ジnkス』。我等ユニオンにのみ存在する疑似太陽炉搭載型MSで君たちはまずこの機体に慣れよう」

私は機体の簡単な説明をするとハロにジnkスのマニュアルを渡させる。ちなみにこのジnkスが搭載しているのは改良型の疑似太陽炉であり、もともとこの機体に搭載されていた毒性の強いものではない。

「このジnkスは空戦も得意としている。それは私の乗るスサノオの戦闘記録を見ればわかるな？ 光線級によって制空権はBETAに奪われたが、私はいつまでもそうさせるつもりはない。明日からの訓練はジnkスに馴れるのと同時に光線級の攻撃を避けられるようになるもらう」

そのためのシュミレーターも準備はできている。彼らにはやらなくてもならなければならないからな。

「期待しているぞ？」

「ハッ！」

2人が敬礼するのを見ると私も敬礼を返し、この日は解散となった。さて、明日からが楽しみだな。

）SIDE END（

#05 新たな仲間（修正）（後書き）

というわけで#05でした。ちなみにこの2人の機体はあとと、別の擬似太陽炉搭載機になる予定です。

それと戦闘要員はあと1人ぐらいしか増える予定はありません。戦艦のクルーは何とかしたいですけど。

#06 専用機

日本の帝都大学。そこでは1機のMSがハンガーに入れられ、帝国政府の技術者や国連所属の日本人、香月夕呼がそのMS『ザクウォーリア』を見上げていた。

「これが、ユニオンの開発したMSね……」

そこに鎮座するザクウォーリアを見上げて香月夕呼は考えを廻らす。

「（ビーム兵器を常備している上に装備を換装することであらゆる戦場に対応できるウィザードシステム。たかが1部隊が各国を超える技術力を持つって言うの！？）」

香月夕呼はしだいに苛立っていく。

「（しかもあのグラハムとか言う男の乗ってる隊長機。あの粒子はいったいなに？あの粒子だけで翼もなしに空を飛んでしかもあの機動力、ふざけんじゃないわよ！）」

香月夕呼の苛立ちはユニオンに思いつきり向けられていた。

その頃、ユニオンでは……………

グラハムが見る画面、そこにはシュミレーターでジnkスを駆るリースとミシエルの姿があった。

「どうだい？ 2人の調子は？」

そこにカタギリがコーヒーを持ってやってくる。グラハムはカタギリからコーヒーを受け取って一口飲むと口を開く。

「たいしたものだ。訓練を開始して1週間、もう馴れ始めている。この順応性の高さは素晴らしいよ。さすがはエース級の衛士だ」

画面の中のリース機とミシェル機は光線級の攻撃を避け、ときにジンクスのGNシールドで防いでいる。

「しかし、君も無茶言うね。擬似GNドライブ搭載機は光線級の攻撃を防げるのに：避けるとは」

「確かにその通りだ。だが、防御にのみ頼るようではダメだ。余裕のある攻撃は回避し、どうしても回避できないならば防御する。なにより擬似太陽炉はオリジナルと違って活動限界がある。わざわざGNフィールドを展開してはエネルギーを無駄にするようなものだ」

そう、ジンクスを含む擬似GNドライブ搭載機はGNフィールドを展開すれば光線級の攻撃を防ぐことができる。しかし、オリジナルのGNドライブ搭載機と違い、活動限界のある擬似GNドライブ搭載機の粒子残量節約のためにグラハムは避ける訓練をさせていたのだ。

「だが、これならもうそろそろ彼らの専用機を用意しても良いか」

グラハムはリースとミシェルの機動を見てそう呟く。2人はすでに光線級の攻撃を避けられるようになっていた。この対応の速さはやはり何年も戦術機に乗って生き残ってきた経験からだろう。

「そう言うと思って、彼らの戦い方からそれにあった機体をチョイスして製作しているよ」

そう言ってカタギリはグラハムに手元にあるデータを見せる。

「これは……」

「2人とも綺麗に得意な戦い方が別れてたからね。リースは射撃戦、ミシェルは近接戦。それに合致した機体がこれらだったからね」

それを聞いたグラハムはニヤリと笑っていた。

それからさらに数日、グラハムはリースとミシェルを連れて格納庫

に来ていた。

「隊長、今日は訓練ではないのですか？」

リースが疑問を投げかけるとグラハムが口を開く。

「いや、訓練はしてもらおう。だが、その前に君たち2人に見せたいものがある」

グラハムが格納庫の電気をつけるとそこには2体のジンクスが鎮座していた。だが、その姿は通常のジンクスとは少々異なっている。カラーリングこそ同じだが1機は左肩に巨大な大剣が装備されており、もう1機は右肩に巨大なビーム砲が付いている。

「隊長、これは？」

「これは諸君の正式搭乗機『ジンクス？』だ」

グラハムの言葉にリースとミシェルは2機のジンクス？を見る。

「『ジンクス？』、機体名からもわかると思うが君たちが使っていたジンクスを改良した発展機だ。この機体の特徴は両肩のハードポイントだ。これによって装備を換装することができる。ここにあるのが『GNX-607T／ACジンクス？・ソード』と『GNX-607T／BWジンクス？・キャノン』だ。ソードは同様の装備に大型GNバスターソードを装備した近接戦闘型。キャノンは大型GNキャノンを装備し、頭部のセンサーも強化されており頭部の形状がジンクスとは異なっている」

ジンクス？の足元にいたカタギリがグラハムたちに近づきながらジ

ンクス？の機体説明をする。

「この2機は君たちの戦闘データを基にOSを組んである。いわば君たち専用機だ」

「私たちの専用機……」

カタギリの言葉にリースは軽く感動する。普段、感情をあまり表に出さないリースもやはり自分専用のMSに感情を隠しきれないようだ。ミシエルも言葉にしないが嬉しそうだ。

「外見はジンクスに似てるけど性能は君たち用にチューンしてあるからジンクスよりも動きやすいと思うよ？」

「君たちにはこれからこの機体で訓練を行ってもらおう。わずか数週間でジンクスに馴れた君たちだ。問題はないと思うが頼む。当てにさせてもらうぞ？」

「「ハッ!!」」

カタギリに続いて言葉を紡ぐグラハムにリースとミシエルは敬礼する。

「それともう1つ君たちに伝えることがある。それは『トランザムシステム』についてだ」

「「トランザム？」」

聞いたことのない単語にリースとミシエルは疑問符を浮かべる。

「これは君たちが訓練に使っていたジンクスには搭載されていないんだけどグラハムのスサノオ、そして君たちのジンクス？に搭載したシステムだ。これはマニュアルにも書いてあるからよく読んでおいて欲しい」

カタギリはそう言いながら2人にマニュアルを渡す。

「この『トランザムシステム』は機体内部の高濃度圧縮粒子を全面開放することでスペックを3倍以上に引き上げることができるんだ」

「「3倍!？」」

リースとレオンは揃って驚きの声を上げる。

「すげえ、けど……」

「ああ、それほどのシステム。当然、リスクもあるのでしょう？」

2人はすぐにトランザムが何らかのリスクを孕んでいるだろうことを理解する。

「勿論だ。トランザムを使用すると大量にGN粒子を大量に消費してしまう。その分、稼働時間も短くなることを覚えておいてくれ。もっとも、途中停止もできるからその辺もうまく計算してくれ」

カタギリの説明にリースとミシェルは納得する。もっとも、カタギリは語っていないが本来、カタギリの作ったトランザムシステムでは1度使うと擬似太陽炉が使用不能になるという欠点があったがカタギリが神から貰った知識の中に『イノベイド』であるリボンス・アルマークたちが使っていたトランザムのデータがあったので現在

のスサノオやジンクス？はトランザムを使用しても擬似太陽炉が使用不能になるなどということは無いのだ。

「あ、隊長！専用機ってことは色変えたりしていいんですか？」

マニュアルを読んでいたミシェルが嬉々として聞いてくる。グラハムはその姿に苦笑いする。

「構わんよ。これはもう君たちの専用機だ。それにユニオンはエース部隊だ、パーソナルカラーぐらいあっても良からう。好きに塗装するといい、リースもな？」

「い、いえ、私はそんな・・・／／／」

リースは顔を赤くして照れる。パーソナルカラーを許されるというのは実質エースと認められたものなのだから衛士としては嬉のだらう。

その後、訓練の後にハロに指示をしてジnkクス？に自分のパーソナルカラーを施すミシエルと、そしてリリースの姿をグラハムが微笑ましく見ていた。

#07 再会の朝鮮(修正) (前書き)

修正後です。

#07 再会の朝鮮(修正)

SIDE・Graham

リースとレオンにジnkクス?を与えてから数週間。2人はもはや完全にジnkクス?を乗りこなしていた。オプションはやはりカタギリが考えたとおりリースがキャノンでミシェルがソードを使っている。もう2人とも十分実戦に出れるようになった。そんなある日、ラインハルト司令から通信が入った。

「朝鮮半島?」

『そうだ。国連と大東亜連合は朝鮮半島を撤退することとなった。そのための撤退作戦『光州作戦』に君たちユニオンも参戦して欲しい』

「つまり、もうそれほどまで戦況が悪化したと?それ以前にMSの配備状況はどうなっているのです?」

MSが問題なく配備されていればそうそう戦況が悪くなることはないはずだが。いや: 私たちの嫌な予感が当たったというわけか。

『どうやら各国は戦後のためにMSを温存しておきたいようだ。戦線に出ているのはほとんどがイーグルや不知火。それに先日、日本が配備し始めた吹雪だよ』

「つまり来るかどうかわからない戦後を気にしたツケが回ってき

たということですね。我々の任務はその尻拭いというわけですか」

私はそう言っていると立ち上がる。

「任務了解しました。ユニオンはこれより光州作戦に参加いたします」

『頼むぞ？ エーカー少佐』

司令との通信を終えた私はカタギリたちに連絡を取るとブリーフィングルームに向った。

私がブリーフィングルームに入るとすでにカタギリたちが待っている

た。

「たった今、ラインハルト司令から我が隊に任務が下された。国連と大東亜連合は朝鮮半島からの撤退を決めた。我等はその撤退戦『光州作戦』に参加し、国連及び大東亜連合の撤退を援護する」

私の言葉にリースとミシェルは納得できないような顔をしている。

「隊長、MSの配備状況はどうなっているのですか？MSがあれば……」

リースの質問に私は溜息を着く。やはり考えることは同じか。

「各国は戦後のことを考え、MSを出し渋っているのが現状だ。そのため、朝鮮半島で出撃しているのは旧来の戦術機のみだ」

「うわー、なんすかそれ？自業自得じゃないっすか」

「だが、見捨てるわけにはいかん。国がどのような対応をとろうと前線で戦っている衛士たちには罪はない」

私の言葉にリースとミシェルが頷く。すると私はカタギリを見る。

「カタギリ、すぐにスサノオとジンクス？の出撃準備を頼む。衛士は搭乗機に乗って待機。フレイグスが朝鮮半島に近づいたら出撃する」

「「了解……！」」

さて、急がねばな。私はハロたちに指示を出すとフレイグスの進路

を朝鮮半島に向けた。

『マモナク到着！マモナク到着！』

ブリッジのハロから機体のコクピットに通信が入る。

「よし、いいか？我々の任務は撤退支援だ。深追いするなよ？」

『了解！！』

返事が聞こえるとフレイグスのハッチが開く。

『進路クリア！発進ドウゾ！ドウゾ！』

「グラハム・エーカー。スサノオ・・・いざ、参る！」

『リース・フレンツ。ジンクス？・キャノン、出撃します！』

『ミシエル・グレイザー。ジンクス？・ソード、出るぜ！』

開いたハッチから私のスサノオ。そしてリースの乗る純白のジンクス？とレオンの乗る空色のジンクス？が出撃する。結局、リースはパーソナルカラーを白に、ミシエルは空色にした。

カタパルトから発進した私たちがしばらく飛ぶとすぐにBETAと交戦する友軍が目に入った。

「リース！」

『了解』

私の言葉の意を汲み取ったリースがすぐにGNキャノンの発射体制に入る。すると私たちの存在を感知した光線級がレーザーを撃ってくる。

『させるかよ！』

だが、GNキャノンの発射体制に入っているリースを護るようにミシェルが大型GNソードでGNフィールドを発生させ、さらに私が囷になることでリースの元には1発たりともレーザーは届かない。

『GN粒子圧縮……GNキャノン、シュート！』

そして放たれたGNキャノンが地上のBETAたちに向かって放たれる。

『まだだ！』

さらにリースはGNキャノンの方向を変え、そのままBETAを薙ぎ払っていく。そしてそのままBETAの大半を消滅させ、そうではないBETAも溶解し、死んでいる。

『ヒュー！リースは顔に似合わずやることがえげつねえな』

『うるさい。無駄口を叩いている暇はないぞ、グレイザー少尉』

『へいへい』

軽口を叩いていたミシェルはリースに一括される。

「リースとミシェル、私たちはこのまま撤退中の友軍を援護する。行くぞ」

『『了解!!』』

私たちはそのまま友軍のもとに向かった。そこで気付いたが国連軍は撤退を始めているのに大東亜連合軍は撤退をしていない。私は撤退していない軍の指揮官と思われる機体に通信を開く。

「こちら国連軍所属独立部隊『ユニオン』隊長、グラハム・エーカーだ」

『ッ!? あなたが、ミスターブシドー。私は日本帝國軍の綾峰萩閣中将です』

む、もう日本までその名が広がっているのか。日本人でない私がブシドーと呼ばれるのは複雑だが……

「中将殿でしたか、失礼しました。国連は撤退を開始しましたが、貴官らは撤退しないのですか？」

『我等の後ろにはまだ民間人がいるのです。それを残してはいけません』

なるほど、その身を立てに人々を護るか。

「了解した。我等ユニオン、貴官らに助太刀する」

『ありがたい！よろしく頼む！』

『隊長！』

私が綾峰中将と会話をしているとリースが割り込んできた。

『大変です！BETAが国連軍が転進、撤退中の国連軍に向かい始めました！』

「わかった、私が国連軍の救援に向かう。リースとミシェルは中将殿たちを援護をしろ！中将殿、助太刀するといいながら申し訳ない」

『いえ、十分です』

私は綾峰中将に断りを入れるとそのまま国連軍のほうへ向かう。

「む？」

国連軍に近づくとすでに一部の部隊がBETAに攻撃され、1機のイーグルが3体の要撃級に囲まれている。そのイーグルは要撃級の攻撃で片腕をもぎ取られている。

「ふっ、この状況。1年前と同じ、さらに場所は朝鮮半島。ならば、もしあのイーグルの衛士があ那时的少女ならば、乙女座の私はセンチメンタリズムな運命を感じずにはいられないな！」

私は笑みを浮かべながらイーグルを囲む要撃級を切り裂いた。

）
S
I
D
E
E
N
D
（

）
S
I
D
E
..? ? ?
（

アタシがユニオンのエーカー少佐に助けられてから1年。国連と大東亜連合は朝鮮半島から撤退を開始した。これでアジアのほとんど

がBETAに落とされちゃった。

クソッ、だいたい上の連中はなに考えてんだよ。アタシは1年間前線で戦ってたけどほとんどMSを見ることはなかった。MSがあればこんなことにはなんなかったかもしれないのに。

「この野郎！」

アタシはイーグルの近接戦闘用短刀でBETAを切り裂く。それでもやっぱりBETAは後から後から湧いてくる。けど、そんなアタシらの上空からオレンジ色の光がBETAに直撃した。

「な、なんだ!？」

アタシがその方向を見るとオレンジ色のビームがBETAを薙ぎ払っていき、BETAの数が激減した。あの粒子の色・・・あれって少佐の・・・・そんなことを考えているとアタシらの上官から撤退命令が出た。アタシも命令に従って撤退する。けど、大東亜連合と日本の奴らは撤退してなかった。

「あいつら!？」

アタシは撤退しない奴らに驚きながら味方とはなれないようにイーグルを後退させる。何で撤退しないのかはわかってる。あそこには避難を拒否した連中がいるからだ。すると撤退しない奴らのほうにオレンジ色の粒子の機体が降り立っていた。けど、それからしばらくしたらBETAはこっちを追いかけてきやがった!背後を突かれた味方が次々にBETAにやられる。このままじゃやばい!

「ッ!この!」

アタシも追いついてきたBETAと戦闘に入る。アタシは突撃砲と短刀で戦うけど周りの味方がやられ、孤立しちまった！アタシの周りには要撃級が3体、戦車級はすぐにでもやってくるだろう。

「こいつら…………ぐあ！」

要撃級の2体の攻撃は何とか避けたけど3体目は避けきれずに左腕を突撃砲ごと持っていかれた。やばい…………やばい！

「くそ…………」

こんなところで死ねねえ。

「アタシは、もう1回少佐に会うまで死ねねえ！」

そうだ！アタシはあのとき、アタシを助けてくれた少佐に、もう1回会って決めたんだ！それまで死ねねえ！

戦おうとするアタシに要撃級が腕を振り下ろそうとする。けど、その攻撃はアタシには当たんなかった。なぜなら…………

1年前と同じ、あの時のMSが…………

要撃級の腕を切り裂いて・・・アタシの前に立っていたから
だ・・・

SIDE
END

SIDE
GRAHAM

「無事か？イーグルの衛士？」

私は要撃級を全体斬り捨てるとイーグルに通信を繋ぐ。するとそこにはあの少女の姿があった。

「（なんと、本当にあの時の少女だったか。これも運命か…）」

『え、あ、えっと』

「動けるか？」

私がそう言うと少女はコクコクと頷く。

「ならば急ぎ撤退しろ。殿は私が務める」

『あ！その、あとで話したいことが！』

「君が生きて撤退できていたら聞くとしよう」

すると少女は意を決したような表情で撤退していった。

「さて、私の相手をしてもらおう。BETA！」

私はそのままシラヌイとウンリュウを振り上げてBETAを迎え撃った。

その後、私たちは友軍の撤退を成功させた。リースとミシエルも訓練通りに動くことができ、見事に役目を果たしていた。やはり熟練の衛士だけはある。

私たちはBETAがいなくなったのを確認すると国連軍の撤退していた空母に乗っていた。

「エーカー少佐、助かりました。さすがはエース部隊ユニオンですな」

目の前の国連のアメリカ人の指揮官が私に声をかける。

「いえ、これが我々の任務なので」

「ところで、あの機体のことですが……」

その指揮官はあからさまに話題を逸らす。明らかにジnkス？が気になって仕方がないといった感じだ。

「あれは我々、ユニオンの部隊専用機です。それがなにか？」

「どうです？ 私もあなたも同じアメリカ人、あの技術を我々に提供していただけませんか？ 見返りは必ず……」

なるほど、アメリカからすれば擬似太陽炉搭載機の情報を得たいというわけか。確かにあれはザクとはまるで違う技術が使われている。アメリカに限らず気になるのは当然か。ましてや私の搭乗機であるスサノオ以外に現れればな……

「断固辞退する」

「な！？」

「あれはユニオン専用機。我々はあの技術をどこの国にも渡すつもりはない。では、失礼する」

指揮官が引き止めるのも無視して私は司令室を出て格納庫に向かった。

私が格納庫に着くとスサノオの前にあの時の少女が立っていた。

「隊長、あの少尉が隊長に会いたいと……」

格納庫に来たことに気付いたリースが私に近づいてくる。リースとミシエルはもしものときのために機体の見張りをさせておいた。

「わかってる、私があの少女と話したら艦に戻る。君たちはいつでも出れるようにしておけ」

「隊長、ああいう子が好みなんすか？」

「さてな、そう言うことを聞くのは無粋だぞ？」

ミシエルの軽口を軽く流すと私は少女に近づく。私が来たことに気

付いた少女は私に敬礼する。

「構わんよ。で、私に話とはなにかな？」

「あの……1年前は、ありがとうございます。あのとき、少佐が着てくれなかったら、アタシは……」

神妙な顔で礼を言う少女。ふむ、こう見ると少々愛らしいな。

「私は自分の務めを果たしたまでだ。なにより、私とて人の子だ。窮地の味方を見捨てることなどできんさ」

そう言うとき若干俯いていた少女は顔を上げる。どうやら話とはそれだけではないようだな。

「それで、頼みがあるんだ！アタシを、少佐の部隊に……ユニオンに入れてくれ！」

なるほど、それが本題か。この少女の目を見るに、決意は確かなようだ。だが……

「悪いがそれはできん」

「ッ!？」

「君もユニオンに入隊するための条件は知っていよう？」

私の言葉に少女はバツの悪そうな顔をする。

「一定以上の技量を持ち、なおかつ自ら入隊を志願する者……」

「そうだ。君自身の志願ということで条件を1つはクリアしているが、君の技量はまだユニオンに入れるほどではない」

そう続けると少女は唇をかみ締める。

「もっとも、これから先はどうなるかわからんがな」

「え？」

「君の名は？」

私が聞くと少女は慌てて自分の名前を答える。

「た、タリサ！タリサ・マナンドル少尉です！」

「マナンドル少尉。もしも君がこれから先も生き残り、私の前に現れたならばそのときは我々ユニオンに迎え入れよう。とはいえ、あまり早く再会しても技量に問題がある。よって、3年以上だ。君が3年以上生き残り、多くの戦場を経験し、技量を上げたならばそのときは君を歓迎しよう」

3年以上というのはこの世界で3年も前線で生き残れるなら十分エースになれるだろうと考えたからだ。

私はそう言うのと彼女に背を向け、スサノオに乗ってリースとミシエルを引き連れて艦に向かって飛び立つ。

『隊長、良かったんですか？お世辞を言わない隊長がああやって言うってことはあの子、結構見込みあるんでしょう？』

「確かに、見込みはある。だが、生憎私は人にものを教えられる人間ではない」

そう、リースとミシエルにも私は光線級の攻撃を避けられるようになれとは言ったが2人とも下地ができていた。マナンドル少尉はまだそこまで至っていない。それに、実戦に勝る鍛錬はない。今私のもとに来てMSの操縦の訓練に時間を費やすより、3年間で多くの戦場を経験したほうが彼女のためにもなる。

『ところで隊長？正直どうなんすか？やっぱりああいう小さい娘が好みなんで？言っちゃあなんですけど俺はもうちょっと出るとこ出たほうが……』

『グレイザー少尉、それはセクハラだぞ？』

『いいじゃんよ、気になるんだから』

まったく、この2人といると退屈しないな。

「ミシエル、私は女性を見た目で判断するような真似はしない。だからこれから先どうなるかはわからん。だが、好意は抱いている。興味以上の対象ということだ。もし彼女が私と運命の赤い糸で結ばれているなら、また会うこともあるだろう」

私のこの言葉に2人は少々呆気にとられていたがすぐに笑みを浮かべていた。

この3年後、私の考えは間違っていなかったということを知ることになる。

#07 再会の朝鮮(修正) (後書き)

というわけでヒロインはタリサです。異論は認めない。だってマブラヴで一番好きなのはタリサだから。タリサはネパール人なので朝鮮にいてもおかしくないと思いました。そして年齢的にはこれぐらいが新米少尉かなと。まあ、いわゆるオリ設定ですが。

#08 それぞれの思惑（前書き）

今回も駄文ですがよろしくお願いします。

ちなみに本作はタリサが原作よりも強くなります。

#08 それぞれの思惑

光州作戦から1ヶ月、グラハムはあからさまに不機嫌だった。その姿に通信機越しのラインハルト司令も困ったような顔をしている。

『中佐、納得してはもらえないか？』

「理解はしているつもりです。しかし、やはり納得はできかねます」
グラハムが不機嫌な理由は1ヶ月前、光州作戦において共に戦った綾峰中将についてのことだった。ちなみにグラハムは光州作戦とそれまでの功績から中佐に昇進している。

さて、その綾峰中将だが、光州作戦において国連の指揮下にあったにもかかわらず、独断で大東亜連合と共に現地住民非難救助を優先し、国連軍を危険に晒したとのことで各国、特にアメリカが軍事法廷にかけると言い出したのだ。

当然、グラハムとて軍人。命令違反をし、軍を危険に晒した人間に何の罰も無しだなどとは考えてはいない。だが、民間人を護ろうとした綾峰中将の行いに感じるものがあったグラハムはラインハルト司令に綾峰中将の減刑を申し出ていた。

だが、国連のほかの人間たちは嚴重に罰すべきと反論。結果、綾峰中将は日本政府の国内法によって敵前逃亡で銃殺刑とされた。グラハムはそのことに理解はできても納得はできていなかった。

『確かに君の気持ちもわかる。だが、各国が強行に主張してる以上どうにもな……それとジンクス？だが、各国から問い合わせ

せが殺到しているよ』

ラインハルト司令は話題を変える。実際、アメリカを始めとする国々が光州作戦で現れたスサノオと同系統であり、明らかにザクウォーリアとは違う技術を持つジンクスに興味を抱いたのだ。もともと各国はあの技術はスサノオのワンオフだと思っていたのが量産できると知って一気に食いついた。

「そうは言われても我々はあの技術を世界に公表する気はありませんよ?」

『わかっている。ただの愚痴だよ。フレイグスのクルーだがもう少し待っていてくれ。中々いなくてね』

「それは仕方ないでしょう。気長に待たせていただきますよ」

「日本、帝都大学」

「なによこれ……」

帝都大学の研究室で香月夕呼は1つの映像を見ながら震えていた。その映像に映っているのは先日、光州作戦でのジンクス?の姿。ジンクス?・ソードがGNフィールドで光線級の攻撃を防ぎ、ジンクス?・キャノンがGNキャノンでBETAを薙ぎ払っている。擬似太陽炉搭載機のビームはスサノオである程度知っていたがGNキャノンの出力は明らかにそれを超えている。そもそも、もともと接近戦用の機体と砲撃戦用の機体の射撃武器の出力を比べるほうがおかしいのだが。

「いったいなんなの? ガナーザクウォーリアを越える出力のビームを何発も……それに光線級のレーザーを防ぐなんて」

そもそも、スサノオにも小型GNフィールドは搭載されているがグラハムは回避しているため滅多に使わない。そのため、光線級のレーザーを防ぐことのできる装備があるのが信じられなかった。

「しかもまたこの粒子を出す機体？これだけで跳躍じゃなく飛行を可能にしてその上これだけの装備？しかもそれを量産しているって言うの？ふざけんじゃないわよ！」

香月夕呼のユニオンに対するイライラはさらに募っていた。

「（ユニオンの技術主任、ビリー・カタギリ。こいつが製作者ね？なんとかこの技術を手に入れられないかしら？）」

一方、アメリカでも擬似太陽炉搭載機は話題になっていた。アメリカの1室ではアメリカを動かす政治家や経営者、軍関係者が会議を行っていた。

「1機しかないものだと思っていたが、まさか量産されているとは」
彼らははジンクス？の映像に顔をしかめる。

「そもそも、この性能差は何だ？ザクウォーリアよりも明らかに性能が上ではないか」

「これほどの機体のデータは是非とも得たい。国連からの返答は？」

「それが……ユニオンの部隊専用の機体であるため、データの公開はできないと……」

その言葉に重役たちはざわつく。

「これほどの技術を、たった1部隊だけで運用するというのか！？」

「ミスターブシドーはこちらの誘いも断ったという。どうにかあの技術をこちらの引き入れられないものか……」

アメリカでもグラハムはミスターブシドーと呼ばれているらしい。

「そもそも、ユニオンについてはあまりにも謎が多すぎる。直接連絡が取れるのはラインハルトだけだということだ」

「いったいあの粒子はなんなのだ？あの粒子があの性能を引き出しているのは間違いないのだろうか……」

「データがなければどうにもできん。なんとかユニオンからデータを得られんものか」

「スパイを送り込もうにもユニオンの基地のある場所がわからなければどうにもならん」

結局、アメリカは擬似太陽炉搭載機を手にするための手段を見出すことはできていなかった。

さらにその頃、ヨーロッパ諸国の代表たちも太陽炉搭載機のことを話題にしていた。

「まさか量産ができていたとは……」

「どうする？これではBETAとの戦いが終わった後はユニオンの独壇場になるのではないか？」

「戦術機とMSの性能差も離れているがザクウォーリアとユニオンの機体ともかなりの性能差があるのではないか？」

「そんなことは見ればわかる！とにかく我等も独自にMSの開発を急がねば！」

各国の代表が論じ合う中、ドイツの代表が手を上げる。

「ですがまずはBETAを駆逐することこそが第一ではないですか？いまだ世界中にハイヴがあるこの状況で来るかどうかともわからぬ戦後を気にするよりもBETAを駆逐し、その戦いの中でなんとかユニオンに貸しを作ればよいのではないですか？ましてやBETAがいる状況ではそんな未来が来るかどうかともわからないのですから」

「しかし、BETAを駆逐するにはMSを投入しなければならぬ。だが、やはり戦後を考えるとMSを温存したほうが……」

「ですから！今のままではその戦後すら来ないかもしれないのです！ならば本格的にMSを投入し、国土を取り戻すことこそが国の代表たる我等の務めではないのですか！」

声を荒げるドイツの代表に他の各国代表は沈黙する。このドイツ代表の名はジークハルト・リビルナー。彼はドイツ騎士の末裔であり、来るかどうかともわからない戦後を気にする各国代表の中で珍しくMSを前線に投入することを積極的に主張していた。騎士の末裔である彼にとってはMSを温存し、悪戯に衛士を危険に晒すのが我慢で

きなかったのだ。

「うむ・・・・・・・・確かに言われてみれば・・・・・・・・」

「ですがやはり何機かは残してMSの研究もさせねば・・・・・・・・」

その後も続いた話し合いの結果、MSを前線に配備することが決定した。

そして、アジアのとある戦場。

「まだまだ！」

そこでは1人の少女がBETAと戦っていた。1ヶ月前、朝鮮半島で2度もグラハムに命を救われたタリサ・マナンドルである。彼女は仲間と共に大量のBETAと戦闘していた。

『タリサはえらく気合入ってるわね』

『なにかあったのかねえ?』

共に戦っている同僚たちから疑問の声が上がるがタリサはそれに構うことなく得意とする接近戦でBETAを屠っていく。構うことなく、というより耳に入っていない。それほどまでに集中しているのだ。

「(まだだ!もっと強くなんねえと!もっと強くなって絶対に……
……ユニオンに入るんだ!)」

タリサは1ヶ月前のグラハムとの約束を信じ、より強くなろうとしていた。上官に許可を貰って自主的に訓練もしている。そしてタリサはイーグルの短刀で要撃級を切り裂き、突撃砲で戦車級を蹴散らす。すると……

ピキイン!

タリサが『何か』を感じ取る。急いで『何か』を感じた方向を振り向くと味方の後方から要撃級が腕を振り上げていた。味方も反応しているが避けることのできない体勢であった。

「させねえ!」

それを確認したタリサは突撃砲で要撃級を撃ち抜く。

『あ、ありがとう・・・・・・・・タリサ』

「ボーっとすんなよ！（なんだ？今の感じ・・・・・・・・）」

この感覚の正体をタリサが知るのは大分後のこととなる。

#09 日本上陸(修正)(前書き)

修正後です。

#09 日本上陸(修正)

光州作戦から数ヵ月後。1998年、8月。重慶ハイヴから東進したBETAが日本に上陸した。その報告を受けたユニオンは出撃準備を完了しているものの、出撃はできていなかった。

BETAの上陸にユニオンも出撃を申し出たが日本の領土に入るには日本の許可が要る。だが、日本と同盟関係にあるアメリカがこれに難色を示し、それにより、日本も戦線参加を拒否した。

「……………」

その結果、グラハムもイラついていた。現在、ユニオンの旗艦フレイグスはいつ許可が来てもいいように出撃準備を整え、出撃許可を待っていた。

「グラハム、少し落ち着いたほうがいいよ？」

「わかっている。だが、私は我慢弱く落ち着きのない男だ。しかも、姑息な輩が大の嫌いときている。苛立たずにはいられんさ」

「……アメリカのことかい？」

カタギリの言葉にグラハムが頷く。実は日本からの回答の後にアメリカから連絡が入ったのだ。その内容は……………

『ユニオン専用機の技術を我々アメリカのみに提供すれば日本への

出撃を後押ししよう』というものだった。

そのことにグラハムの堪忍袋の緒は切れ掛かっていた。もしもこれがただ単にデータを公開しろというものならグラハムはすぐにでも対応した。データを公開しても擬似太陽炉を生成することはできない。だが、アメリカはデータの公開ではなく技術の提供を打診した。つまり、これを受ければアメリカも擬似太陽炉を生成することができる。しかもアメリカ1国にのみである。この明らかに世界のパワーバランスを崩しかねない提案をグラハムは受け入れることはできず、もどかしい思いをすることになったのだ。

そうしている間にも九州、中国、四国が陥落。死者・行方不明者は3600万人にも上る。さらに首都、京都が陥落。首都を東京に遷都するがこれと同時にアメリカが一方的に日米安保条約を破棄し、在日米軍は撤退。日本は佐渡島が落とされ、BETAは佐渡島ハイヴ建設のために一時BETAの侵攻が停滞した。

そして、このときになってようやく日本はユニオンに領海に入る許可を与え、ユニオンは旗艦フレイグスを最大船速で日本へと向かっていた。

「カタギリ、日本の状況は？」

スサノオのコクピットでパイロットスーツに身を包んだグラハムは通信でカタギリに状況を訊ねる。

『かなり悪いよ。もうすでに白稜基地も落とされ、西関東がBETAに制圧されたよ。今は多摩川を挟んで膠着状態だ』

『早いですね。やはり……………』

リースの言葉にカタギリが頷く。

『ああ…………アメリカの突然の同盟破棄が効いてるんだろう。日本もアメリカを当てにしていたからこそ、僕らに要請を出さなかったみたいだしね』

『完全に当てが外れたって訳か』

「…………どちらにせよ、私たちのやることは変わらん。ユニオン、出撃するぞ!」

『了解!!!』

（SIDE…SAGIRI）

『援護を、援護を！』

『うわあああああ！戦車級が、戦車級が取り付いたあ！』

『死にたくない！死にたくな・・・あああああ！』

「く！」

周りでは次々に味方がBETAにやられていく。我々と彼奴らとの戦闘は熾烈を極めていた。何匹倒しても後から後からBETAが沸いてくる。

だが、私たちの後ろには帝都が、帝国の民が、そしてなにより殿下がいらっしゃる。ここを抜かれるわけには行かない！

「な、なんだ！？」

すると突然光線級が見当違いの方向へとレーザーを撃ち始めた。その方向には何も……。いや、ほんの僅かだが確認できた。オレンジ色の粒子を放出した何かが近づいてくる。

「まさか……。あれは!？」

その瞬間、オレンジ色のビームが後方のBETAを直撃し、薙ぎ払う。それに続いて黒い機体が空から降り立ち、BETAを切り裂いた。

『こちら国連軍独立部隊、ユニオンだ。ここの指揮官は誰か?』

黒いMSのパイロットがオープン通信で通信が入った。私は急いで黒いMSに通信を繋ぐ。

「私がここの現場指揮を任されている帝国本土防衛軍の沙霧尚哉大尉だ。貴官は?」

繋いだ通信には赤い角のようなものが着いたヘルメットを被った黒い仮面を着けた人物が映る。

『私はユニオン隊長、グラハム・エーカー中佐だ。我々はこれより、日本政府からの要請により貴官らと共同戦線を張ることとなった』

あれが、ミスターブシドー。国連最強の衛士……。だが!

「いまさら……。いまさら国連が!アメリカの傀儡がなんのようだ!?! 一方的に同盟を破棄しておいて!」

私は叫ばずにはいられなかった。アメリカが残っていればここまで戦局が悪化することはなかった。そうすれば多くの戦友を失わずに済んだ。帝國の民を死なせずに済んだ。なのにいまさら、アメリカの傀儡が・・・・・・

（SIDE END）

（SIDE..GRAHAM）

『いまさら・・・いまさら国連が！アメリカの傀儡がなんのようだ！？ 一方的に同盟を破棄しておいて！』

この怒り、当然か。私とてアメリカの行いには怒りを覚える。アメ

リカが同盟破棄をしなければここまで戦況が悪化することではなく、ここまで多くの人命が失われることもなかっただろう。私がハワードやダリルを失ったときの悲しみと同じだろう……………

「貴官らがどう思おうと私たちは任務でここに来ている。そして、あえて言わせてもらおう。私たちは『アメリカ』ではなく『ユニオン』だ！同盟国を容易く見捨てるような恥知らずどもと一緒にするな！」

私の言葉に沙霧大尉は呆気にとられている。だが、これだけは言っておきたかった。ユニオンが侮辱されるのは私だけでなく、私の部下も侮辱されるということ。それだけは耐えられん。私は大尉にそれだけ言おうとBETAに向き直る。

「リース！ミシェル！BETAを駆逐する！着いて来い！」

『『了解！！』』

私がスサノオのスピードを上げ、BETAの群れに突っ込む。

「生憎と今日の私は虫の居所が悪い……………この鬱憤、晴らさせてもらおうぞ！BETA！」

私は右手のウンリュウで突撃級を切り裂き、トライパニッシャーでBETAを薙ぎ払う。

「ぬん！」

さらに要撃級をシラヌイで斬り捨て、空に駆け上がると今度は光線級の攻撃が飛来する。

「光線級・・・・・・・・だが！」

私は攻撃を避けながら光線級に接近していく。

「今日の私は虫の居所が悪いと・・・・・・・・」

そしてシラヌイとウンリュウを合体させたソウテンを振りかぶり・
・
・

「言ったあああああ!!!!!!」

光線級を両断した。

＼SIDE END＼

＼SIDE..SAGIRI＼

「なんという…強さだ……」

私は目の前の光景に言葉を失う。話に聞いていたミスターブシドーの戦い。それは非常に心躍る接近戦。彼がミスターブシドーと呼ばれるのが理解できる。この戦い方はどちらかというと日本人のようだ。それに先程の通信で彼がアメリカの同盟破棄に本気で憤っているのも理解できた。そして、綾峰中将が言っていたことも……

あれは綾峰中将が罪に問われ刑が執行される前、私は中将に面会することができた。そのとき、私はミスターブシドーのことを聞いた。そのときの綾峰中将の言葉を私は半信半疑だった。

『侍の心を持つアメリカ人』

それが綾峰中将が評したミスターブシドーだった。あのときは半信半疑だったがいまならそれも納得できる。

「帝國軍！ユニオンに遅れをとるな！帝國軍人の誇りに懸けてここは死守するぞ！」

それから私たちは奮闘し、なんとかBETAの攻勢を防ぐことができた。ミスターブシドーたちユニオンはそのまま横浜の援護に行くため、その場を飛び立って行った。ミスターブシドー……いつか面と向かって話をしてみたいものだ。

（SIDE END）

そして、横浜。そこはまさに地獄絵図と化していた。BETAたちが侵攻し、街は壊滅。そこに住んでいた民間人は戦車級や兵士級BETAから逃げ惑っていた。

「はあ！はあ！こっちだ純夏！」

その街を2人の男女が手を繋いで逃げ回っていた。彼らの両親はすでにBETAの手に掛かり、残されたこの2人だけがBETAから

逃げていた。少年のほうは名前を白銀武、そして少女はその幼馴染である鑑純夏である。

「っ！？武ちゃん！」

純夏の言葉に前を向くとその方向からは兵士級が迫ってきていた。武は純夏を背中に隠し、後ずさりする。

「（なんとかか……なんとか純夏を護らないと！）」

武の頭の中は幼馴染を護ることではあった。そうしている間にもさらに数体の兵士級が迫ってくる。だが、本来、正史では惨い未来を辿る筈のこの2人には救いの手が差し伸べられた。

「っ！あれは……」

上空から舞い降りたジンクス？・ソードが兵士級を踏み潰したのだ。

「モビル………スーツ………」

以前にTVで見た国連の独立部隊『ユニオン』が開発した人型兵器。その姿に武は目を奪われる。

一方、ジンクス？の搭乗者のミシェルはオープンチャンネルで2人に呼びかける。

『お前さんたち、すぐにこいつの手の上に乗れ。この辺で生き残ってるのはもうお前さんたちだけだ』

そう言いながらミシェルはジンクス？の掌の上に武と純夏を乗せる。

するとミシエルは辺りの兵士級をGNバルカンで撃ち殺すとそのまま2人を連れて飛び去っていった。

「武ちゃん・・・・・・・・・・私たち助かったんだね？」

「ああ、そうだ・・・・・・・・・・俺たちは助かったんだ・・・・・・・・・・」

「良かった・・・・・・・・・・でも、お父さんとお母さんが・・・・・・・・・・」

「純夏・・・・・・・・・・」

ジnkス？の掌の上で、しっかり機体にしがみつながら2人は助かったことへの安堵と犠牲になった両親への悲しみから涙を流していた。

閑話（修正）（前書き）

修正版です。

閑話（修正）

（日本帝國軍基地）

横浜で武と純夏を回収したミシエルは途中でグラハムとリースに合流すると日本帝國軍の基地に到着する。基地に着地したミシエルはゆっくりとジンクス？のマニピュレーターの上の2人を降ろす。ジンクス？の足元には帝國軍の兵士が集まっていた。

「大丈夫か？」

ジンクス？から降りたミシエルはマニピュレーターの上の2人に確認する。するとそこには寝息を立てる純夏とその純夏を抱きしめた武がいた。どうやら純夏は命の危険という緊張から解かれ、さらに泣き疲れたことで武に抱きついたまま眠ってしまったらしい。

「あ、えっと……」

ミシエルを見た武が戸惑う。するとそこにパイロットスーツを着たグラハムがヘルメットを脱ぎながら近づいてきた。

「あ、隊長」

「その2人が生存者か？」

グラハムは武と純夏のほうを見る。一方、武は仮面を着けたグラハムに怪訝な視線を向ける。もっとも、その視線はこの基地の兵士か

らも向けられているのだが……当の本人はまるで気にしていない。

「…よく生きていてくれた……少年」

優しく微笑みながらグラハムは武に視線を合わせる。すると武はそのままグラハムに持たれかかる様に意識を失った。

「隊長！」

「どうやら緊張の糸が切れたようだ」

それからしばらくして衛生兵が担架を持って現れ、2人は他の避難してきた民間人と共に手当てを受けることとなった。

（SIDE…KATAGIRI）

BETAの日本侵攻から数週間、僕はユニオンの格納庫であるMSの試作機の開発を行っていた。手伝いはハロがしてくれるからいいけどやっぱりもう何人か技術者が欲しいところだね。

「ふう………」

目の前にあるのは最近、日本帝國から極秘裏に依頼された近衛軍の機体だ。これが結構苦労したけど何とか目処が立ってきた。

動力はザクウォーリアと同じバッテリー駆動方式。頭部は角と後頭部にとさかのような形状があり、ザクウォーリアと同じモノアイ。カラーリングは青。腰には2本の日本刀の形状を再現したビームセイバー。

まだ完成していないけど両腕には実弾の90mmハンドガンを装備し、当然ビームライフルも標準装備している。また、2本のビームセイバーは柄の部分をつな結させ、ビームナギナタに変更できる。

カタログスペックも全体的にザクウォーリアを超えている。名称は『近接戦闘型ゲルググ』。その名の通り近接戦闘を得意とし、日本

の戦い方に合わせてある。

もともになったのはオールズモビルの使用した『RFゲルググ』。これを改良して生まれたのがこの機体だ。もともとから設計図のあったザクウオーリアと違い、新しい機体だから少し時間が掛かる。グラハムにもテストをしてもらい、完成したら試作機を持って日本に持って行って機体説明なんかもしなきゃいけないし。

他にもヨーロッパみたいな最前線の国からはエース用の機体の生産を頼まれている。……。やっぱりもう何人か技術者が欲しいな……。作業するならハロがいるからいいけどどんな機体を作るかは僕が考えないといけないしね。

（SIDE END）

一方その頃、グラハムは基地にある滝で滝行をしながら考え事にふけていた。

「（結局私は民間人をほとんど救うことはできなかった）」

それは数週間前の横浜での戦い。ユニオンはアメリカの思惑で出撃が遅れ、結果的に多くの民間人が犠牲になった。

その原因は客観的に見ればアメリカやアメリカの言うことを聞いているだけだった日本だ。しかしグラハムは民間人を救えなかったことを自身の力不足と考えていた。

「（私ももっと強くならなければ……）」

グラハムは決意を新たにMSのシミュレーターに向かって行った。

#10 謁見(修正)(前書き)

修正版です。

#10 謁見(修正)

SIDE・GRAHAM

「グラハム、到着したよ」

私はカタガリの言葉に目を覚ます。今、私たちは日本にやってきていた。理由は先日、カタガリが帝國斯衛軍専用MS『近接戦闘型ゲルググ』の量産試作機8機が完成した。この機体を帝國に届けると共に機体説明をするために来日したわけだ。

この機体は一応斯衛軍の専用機ではあるが同時に將軍専用機にもなる。そういった大事な機体であるため、隊長である私と技術主任であるカタガリが出向いたのだ。もっとも、私も日本の將軍殿下には会って見たかったのでちょうど良かったが。

部隊のほうの指揮はリースに任せてある。リースは指揮を執ることに關しては中々だ。BETAにはあの2人でも対応できるし、ましてや私も長く部隊を空けるつもりはないので問題はない。それにサノオではないが私もMSを持ってきたのでここから任務地に向かうこともできる。

それと私たちが日本に来るのに使ったのはこの世界では当たり前に使われている輸送機の旧型だ。試作機を持つてくるのにフレイグスを使うわけにもいかんから元帥に頼み、使われていない旧型の輸送機を譲り受け、それを改修した。操縦は例によってハロがしてくれている。

「じゃあ行くよグラハム」

「承知した」

私は睡眠中は外していた仮面を着け輸送機から降りる。するとそこには帝国の兵士と顔に大きな傷のある軍服を着た男性が立っていた。

「お待ちしておりました。帝国陸軍の巖谷榮二中佐です」

巖谷榮二……なるほど、歴戦の勇士というに相応しい方だ。私たちは互いに敬礼して挨拶する。

「お出迎え感謝いたします。国連直属独立機動部隊『ユニオン』隊長、グラハム・エーカー中佐です」

「同じく『ユニオン』技術主任、ビリー・カタギリ大尉です」

「おお、あなたがミスターブシドー。お噂は聞き及んでいます」

……どうやらこの呼び名はかなり広まっているらしい。

その後、私たちは巖谷中佐に案内されながら謁見の間に通された。謁見の間に入ると油断なく私たちを睨む緑の髪に眼鏡をした女性や少々おかしい髪形の歴戦の兵というべき男性が立っている。まあ、今だ国連はアメリカの傀儡だと思われるから無理もない。

「さすがだね、これだけの人が集まってるとは……………」

「将軍家守護の斯衛軍の専用機になる予定の機体だ。ましてや将軍殿下専用機にもなる。これぐらいの人数は当然だろう」

周りの人間たちからは私たち、主に私に怪訝な視線が向けられている。もう馴れたが、そんなにこの仮面は変か？

「（仮面だけじゃなくて軍服も日本人みたいな格好だからだと思うけどね）」

*グラハムの服装はアロウズに所属していたときとまったく同じです。ユニオンの軍服はアロウズのものと同じなので。

しばらくすると部屋に青紫色の髪の女性が入ってきた。まだ歳若い
が、凛々しい瞳をした美しい女性だ。

周りの人間たちが殿下に向かって頭を下げる。私とカタギリもそれ
に習って頭を下げた。

「本日はよく来てくださいました。私は日本帝國征夷大將軍、煌武
院悠陽です」

殿下の挨拶に私はすぐに返事をする。

「国連軍直属独立機動部隊『ユニオン』隊長、グラハム・エーカー
中佐です」

「国連軍直属独立機動部隊『ユニオン』技術主任、ビリー・カタギ
リ大尉です」

「本日は殿下にお目通り頂き、誠に光栄でございます」

私はできる限り丁寧に挨拶をする。

「いえ、こちらこそ噂に名高いミスターブシドー殿にお会いできて
嬉しく思います」

「………光栄です」

「先日は我が帝國の民を助けていただき、ありがとうございます」

「私は軍人として為すべきことを為したまでです」

「では早速機体の説明を始めたいと思います」

カタギリがそう言うのとゲルググの資料がその場の人間たちに配られる。ここからはカタギリの仕事だな……

「まず、この機体。『近接戦闘型ゲルググ』は機動力と近接戦闘に重点を置いた機体であり、その基本性能は現在配備されているザクウォーリアを超えています。操作方法はザクと同様であり、ザクに比べ兵装換装による利はありませんが、機動力においては熱核ホバーエンジンにより高い機動性を発揮します」

説明を聞きながら殿下を始めとする帝国の人間は熱心に資料を読んでいる。私自身、ゲルググのテストパイロットをしていたがあのゲルググの性能はクロスボーンバンガードのベルガ・ギロスに匹敵する熱核ホバーに馴れるのにもそこまで時間かからんだろう。

「武装はビームライフルに両腰に高出力のビームセイバー。両腕には90mmハンドガンを装備しており、ビームセイバーは柄を合体させることによってビームナギナタにすることができます。また、ビームライフルはカートリッジ方式を採用しており、カートリッジを付け替えることでエネルギーの消費を抑え、長時間に渡る戦闘が可能です」

ちなみにビームセイバーは私がかつて乗っていたサキガケのビームサーベルを参考に、日本刀の形状となっている。この辺は日本には受けがいいだろう。

「すばらしい……」

「これなら斯衛の機体としても申し分ないな・・・」

辺りからも賞賛の声が聞こえる。それからしばらく事細かにカタギリによるゲルググの説明が続けられた。

「以上です」

カタギリの説明が終わると殿下たちを始め、皆満足げな顔をしている。

「エーカー中佐、カタギリ大尉。我が帝國のためにこのような機体を開発していただき、誠に感謝いたします」

「いえ、私たちでも日本はBETAと戦う最前線の国の1つ。それを護るために力をお貸しするのは当然のことです」

「感謝いたします。では本日はこれでお開きにしましょう。今夜はゆっくりと疲れを癒してください」

殿下の言葉に部屋にいた人間たちは解散し、私たちは巖谷中佐の案内で宿泊する部屋に向かっていく。

「今日は本当にありがとうございます。あなた方のおかげで衛士た

ちの命を護ることができる」

「私たちはBETAを殲滅するため、やるべきことをやるのみです」
私がそう言うと巖谷中佐は苦笑いをする。

「ですがやはりMSを全軍に配備することはできないでしょう。どうしても戦術機が多くなってくる」

カタギリの言葉に私は内心で納得する。確かに、この機体として斯衛全軍への配備は無理だろう。ザクウォーリアも然りだ……。結局既存の戦術機のほうが多い。いかにユニオンの基地の設備をもつてしても各国の全軍にMSを配備するのは今の段階では到底できない。

「ええ、その通りです。我ら日本の企業のほうでも斯衛専用の戦術機は開発されているのですが……。配備はまだ進んでいません」

日本帝国の斯衛軍専用戦術機……。武御雷^{たけみかづち}……。だつたか……。配備されているMSの数が少ない今、致し方ないことか。

「そういえば明日にはお戻りになるとか……。もう少しゆっくりしていただいてもよろしいのですが……」

「お気持ちは嬉しいですが知っての通り、ユニオンは少数精鋭。僅かでも抜ける時間は短くしたいのです」

少なくともMSの衛士があと1人……。それとフレイグスの

クルーが決まらん限りはそうゆっくりもできんからな。

「そうですか。では、いつかゆっくりできるときが来たらいらしてください」

「ええ。そのときを楽しみにさせていただきます」

そのまましばらく歩いて行くと横の通路から白い服を来た眼鏡をかけた将校が歩いてきた。彼は、確か……

「これは、巖谷中佐……あなたはミスターブシドー!？」

やはりあの時の……

「沙霧大尉。客人の前で失礼だぞ？」

「は、申し訳ありません！」

その男性、沙霧大尉は慌てて敬礼をする。

「お気になさらず。沙霧大尉、無事で何よりだ」

私も敬礼をして沙霧大尉に敬礼を返す。

「おや、中佐は沙霧大尉と知り合いだったのですか？」

「戦場で、顔を合わせたに過ぎません。前線での勇猛な姿は良く覚えています」

「恐縮です。して、ミスターブシドーはなに用でこちらへ？」

沙霧大尉は質問してくる。

「以前より打診していた斯衛の専用機を届けていただいたのだ。もつとも、明日にはお戻りになるそうだが……」

「それは、残念です」

「ではな、大尉」

「は！お時間を取らせて申し訳ありません！」

巖谷中佐の言葉に沙霧大尉は敬礼する。そして私は巖谷中佐の後に続いて歩いていく。

だが、狭霧大尉に私は何か危ういものを感じていた。

#10 謁見(修正) (後書き)

ホバリング推進システムについてはジオンの兵士はザクからドムに乗り換えても問題なく乗りこなしているから衛士も乗りこなせると考えました。

#11 第3計画の遺児（前書き）

今回は新たな追加要員が登場です。多分、タリサを除いて追加される衛士はこれで最後かと・・・・・・・・

あとは戦艦のクルーとかですね。

駄文で穴もあるかと思いますがよろしくお願いします。

#11 第3計画の遺児

日本から戻って数日。グラハムのもとにラインハルト元帥から通信が入っていた。

「追加要員？衛士ですか？」

『ああ、国連軍北極海方面軍からだ。ソ連からでも是非にとのことだな。衛士本人も了承している』

通信の内容は新たなユニオンへの志願者のことだった。ラインハルト元帥によるとソ連からでも是非ユニオンに所属させて欲しいと連絡が来ているとこのことでグラハムはその衛士の情報を見る。

「ミーシャ・イリユーナ、ソビエト連邦軍少尉・・・・・・・・」

グラハムが目を通す書類にはまだ銀色の髪に青い瞳の若い少年の写真が載っていた。そしてその経歴に目を通していく。

「・・・・・・・・なるほど、彼は・・・・・・・・」

書類の一部を見るとグラハムは顔をしかめる。この書類はラインハルト元帥が直々に作成したものでグラハムたちのように異世界から来た存在でもなければどんな経歴であろうと調べられている。

『そうだ、彼は第3計画・・・・・・・・つまりは『オルタネイティブ3』で生み出されたESP能力者だ』

オルタネイティブ3・・・・・・・・1973年に開始された計画でE

SP能力者によるBETAとの意思疎通と情報入手を目的としていた。リーディングには成功し、BETAにも思考があることはわかったがどんな訴えも無効であり、帰還したESP能力者も僅か6%しかいなかった。オルタネイティブ3はソ連主導で行われており、計画で生み出された『人工ESP発現体』の生き残りがソ連においてもなんら不思議ではなかった。

『その少尉はESP能力者としての力はそれほど高くないがその代わり、衛士としての実力は抜きん出ている』

「なるほど、しかしソ連から送られてきたということは……
厄介払いか、それとも……」

『厄介払いの色は強いだろうな。ESP能力者はその能力ゆえ、煙たがられることもある』

人間は自分と違う能力を持ったものを拒絶したり侮蔑したりするものがある。もちろん、そういった人間ばかりでもないが……

『だが、おそらく優れた能力を持つ衛士を送ってユニオンに恩を売りたいというのもあるだろうな』

優れたMSを保有し、またそれを各国に送り出しているユニオン。そのユニオンに恩を売り、少しでもMSを供給して欲しいということなのだろう。ユニオンも人数が少ないので優れた衛士は是非とも欲しいところである。

「了解です。実力があり、少尉自身も納得しているならば構いません」

グラハムはそう言うと言通信を切り、椅子の背もたれに寄りかかった。それからしばらく書類と睨めっこをしているとカタギリが部屋に入ってくる。

「なにかあったのかい？」

「見てみればわかる」

グラハムはカタギリに書類を渡す。

「へえ、新隊員か・・・・・・・・グラハム、これは・・・・・・・・」

「ああ、オルタネイティブ3で生み出されたESP能力者だ。カタギリ、すぐに彼に合った機体を開発をしてほしい」

「それはわかってるけど・・・・・・・・ふむ」

カタギリが思考の海に入る。カタギリがこうなるのはいろいろと考え事をしているときであり、今は新隊員の機体を考えているのだから。

「ジンクス・・・・・・・・いや、それよりも・・・・・・・・」

ブツブツ言いながら顎に手を当て、考え込む。するとすぐに何か思いついたようだった。

「わかったよ、すぐに取り掛かろう」

「頼む」

そして数日後、新隊員がユニオンにやってきた。

（SIDE・MESH）

僕の名はミーシャ・イリユーナ。ソ連軍少尉……。いや、元少尉だ。僕は今、ユニオンの基地に來ている。その在り処がようとして知れなかったユニオンの基地。出迎えの輸送機に人間が乗ってなかったことにも驚いた（操縦は丸いボールのようなメカが行っていたけど）。

そして基地についてからも驚いた。あのボールがさらに大量に活動している。どうやらあのボールは輸送機の操縦だけでなくもつといろんなことができるらしい。輸送機から降りた僕を出迎えたのはユニオン所属のリース・フレンツ中尉とミシェル・グレイサー少尉だった。

2人に会った僕はすぐにリーディングを行っていた。僕は人工ESP能力者としてはプロジェクションができないことから欠陥品の烙印を押された。衛士としての適正が高くなかったら処分されていたと思う。

オルタネイティブ3が終わったあと、僕や他のESP能力者は厄介者扱いされていた。そんな中で今回のユニオンへの配属を聞かされ、僕は特に拒むことはしなかった。どこに行っても何も変わらないと思っていたから。

僕の前を歩く2人はリーディングしたけど2人の『色』はグレイサー少尉は友好的だけどフレンツ中尉は警戒しているみたいだ。僕のことを知っているなら当然かもしれないけど。

「そう言えばミーシャ……でいいよな？ お前さんは何でこの部隊に？」

グレイサー少尉が訊ねてくる。僕の答えは1つしかない。

「命令ですから」

ユニオンの入隊条件から自分で志願したんだと思ったんだろうけど、僕は命令されたからここにいます。僕も了承したし特に問題はない。

そうこうしてるうちに僕たちは1つの部屋の前に来ていた。

「ここだ。リース・フレンツ中尉とミシェル・グレイサー少尉です。ミーシャ・イリユーナ少尉を連れてきました」

「入りたまえ」

中に入るとそこには椅子に座った黒い仮面を被った男性とその傍にポニーテールに眼鏡をかけた男性が立っていた。

「ソビエト連邦陸軍少尉、ミーシャ・イリユーナです」

僕は2人の男性に向かって敬礼する。それと同時にリーディングを開始した。・・・・・・けど・・・・・・

「（リーディングできない！？ブロックされた！？）」

眼鏡をかけた男性は問題なくリーディングできた。けど、仮面の男性にはリーディングをブロックされた・・・・・・こんな初めてだ・・・・・・そのことに驚いている僕に仮面の男性が口を開いた。

「私はユニオン隊長のグラハム・エーカー中佐だ。こっちは技術主任のビリー・カタギリ大尉」

「よろしく」

カタギリ大尉の『色』はグレイサー少尉と同じで友好的だった。けど、エーカー中佐は・・・・・・

「さて、さっそくで悪いが人の中に勝手に入り込むのは少々無粋で

はないかな？」

このとき僕は、初めてNTという存在を知った。

＼SIDE END＼

＼SIDE..GRAHAM＼

「さて、さっそくで悪いが人の中に勝手に入り込むのは少々無粋で

はないかな？」

リーディングが使えると言うことがわかっていたから覚悟していたが中々に不快な感覚だった。これがリーディングか……何よりこの人工的な感覚。これが強化人間……或いは人工ESP能力者の感覚か？

「……あの………」

つと、少々考え事をしすぎたか？

「私たちは君を歓迎するよ、ミーシャ・イリユーナ少尉」

「は……はい！」

ふむ、どうやらまだ私にリーディングをブロックされた驚きが残っているようだな。

「MSへの搭乗経験は？ソ連にもMSは配備されているが……」

「な、ないです」

どうやらリーディングを防がれたことでプチパニックになっているらしい。部屋に入ってきたときの冷静さがなくなり、歳相応の姿になっている。

「では君にはMSの操縦に馴れてもらう。君がMSに馴れ次第、専用機で戦場に出してもらう」

「専用機………」

「そうだ。我等ユニオンではMSに馴れるまでは汎用機だがその後は専用機に乗って作戦行動を行う」

「は、はい！」

私の言葉にミーシャは敬礼で返す。

「あ、あの………」

「ん？ なにかな？」

ミーシャが疑問を口にする。

「どうして、中佐には僕のリーディングをブロックできたんですか？」

その疑問は当然だな。リーディングをブロックされるなど初めての経験だろう。

「それは私がNTだからだ」

「ニュー……タイプ？」

ユニオンのメンバーは私がNTだということ知っているから問題ない。私はミーシャにNTのことを説明した。人類の革新と言われる力であり、その力でリーディングをブロックしたと。

「人類の……革新………」

「もっとも、この力も今は戦いのためにしか使えんがな。この部隊は私のようなものが部隊長をしている。だから君の能力を疎むものはいない。これからよろしく頼む」

ミーシャが人工ESP能力者ということで疎まれていたのはわかっている。だが、自分と同じ様な能力を持つものがいれば部隊にも馴染んでくれるだろう。

#12 幼きエース（前書き）

今回はユニオンに着てからのミーシャです。駄文で短いですがよろしく願います。

そして次回辺りから明星作戦に入る予定です。

#12 幼きエース

ミーシャがやってきてから2週間。グラハムとカタギリは格納庫の1機のMSの前に立っていた。

「彼の調子はどうだい？」

「ミーシャのことか？悪くない。もうMSの操縦にも馴れ始めているしな」

初めの頃は何かと硬かったミーシャだがこの2週間で大分馴染んでおり、歳相応の顔を見せるようになっていた。やはりNTであるグラハムの存在が大きいらしい。

「最近ではリースが何かと世話を焼いているしな。まるで姉弟のようだ」

さらに馴染んだ理由としてはリースがまるで弟に接するようにミーシャの世話を焼いていることだった。真面目なリースにとって同じく真面目で素直なミーシャは庇護欲を駆り立てられるらしい。

「それはそうと機体のほうはどうだ？」

グラハムは目の前の機体を見上げる。

「もうすぐ完成さ。ハロが頑張ってくれてるからね」

「マカセロ！マカセロ！」

カタギリの言葉に傍にいたハロが跳ねながら言う。

「あと戦術機用の武装の方は？」

「それは出来てるよ」

するとカタギリはある書類をグラハムに見せる。

「マラサイが装備してたカートリッジ式のビームライフルだよ。マラサイのビームライフルは連射性が高いからね。カートリッジ式だからエネルギーの心配もないしね」

マラサイを始めとする宇宙世紀のMSはカートリッジ式にすることにより、カートリッジの換装だけでビームライフルのエネルギー補充が完了するため、戦術機の活動時間を変えずに戦闘が出来るのだ。

「なるほど…あとはこれを量産し、各国に販売するだけか」

その頃、ミーシャはリースやミシエルと共に訓練を行っていた。

「そこ！」

ミーシャはシュミレーターの中のジnkスでレオンのジnkスに向かってビームライフルを撃つ。

「うおっと！危ねえ！」

ミシエルはなんとかその攻撃を回避する。しかしミーシャはそれを読んでいるかのように……実際に読んでいるのだが……回避先にビームライフルを撃ち、ミシエルのジnkスの腕を撃ちぬく。最初の頃こそMSに馴れていなかったことからミシエルに負けていたミーシャだが、MSに馴れ始めた現在ではリーディングの能力を生かして圧倒できるようになっていた。実際、衛士としての腕では差はないがミーシャがリーディングの力を持ったため、ミーシャが有利になっていた。

「これで！」

ミーシャはそのままビームライフルでジnkスの胸を撃ちぬいた。

『グレイサー少尉機、大破判定。シュミレーター終了』

通信からリースの声が聞こえ、ミーシャとミシエルはシュミレーターから降りる。

「かゝ、俺もついに勝てなくなったな」

「いえ、僕にはリーディングがありますから……ずるしている様なものですよ」

ミシエルの言葉にミーシャは自嘲気味に笑う。

「おいおい、そりやお前自身の力じゃねえか。気にすることねえよ」

「そうだぞミーシャ。勝てんのはグレイサー少尉の力不足だ」

リースはミシエルとミーシャに近づき、ミシエルの言葉に同意する。ちなみにリースはミーシャのことを公の場以外では名前で呼ぶようになっていた。

「中尉」

「リース、それ結構傷つく……」

近づいてきたリースにミーシャが駆け寄っていく。ミーシャも何かと世話を焼いてくれるリースに懐き始めていた。

「本当のことだろう？」

「あ、でも隊長には勝てませんし……」

MSに馴れ始め、リーディングによってリース、ミシエルには勝てるミーシャだがグラハムにはいまだに勝ててはいなかった。ちなみにその際のシュミレーターでグラハムが乗っていたのはジnkスだった。

「隊長にはリーディング効かねえだろ？そうじゃなくてもあの人の操縦技術はずば抜けてんだから気にすることねえよ。俺たちだって勝ったことねえし」

「そうだぞミーシャ。あまり謙遜するな。お前の実力は本物だよ。恐らくもうすぐお前にも専用機が与えられるはずだ」

「きよ、恐縮です……／／／」

ミシエルとリースの賞賛にミーシャは顔を赤くして恐縮する。ソ連ではなにかと忌み嫌われ、さらにリーディングで心が読めるためにどんなお世辞も見破っていたミーシャだったが、ミシエルとリースの言葉が本心からだとわかるためにこうして褒められるのに耐性がなかったのだ。

「むう…（可愛い）」

／／／／／／／／

さらにリースの心を感じ取ってしまい、余計に赤くなるミーシャだった。

#13 明星前夜（前書き）

ついに明星作戦に入ります。といっても今回はタイトル通り明星作戦が始まる前夜ですが。

#13 明星前夜

1999年8月4日

オルタネイティブ4責任者、香月夕呼の進言により国連軍は横浜ハイヴ奪還作戦、通称『明星作戦』を発動。作戦開始を翌日に控え国連軍はもとより、国土奪還に燃える日本帝國や大東亜連合も参加し、アジア方面最大の大規模反攻作戦が始まろうとしていた。そんな中に当然国連軍の独立部隊であるユニオンも参加しており、彼らの母艦フレイグスは太平洋海中で翌日の作戦開始を待っていた。もともとユニオンの作戦参加に一部の国……主にアメリカ……が反対していたがユニオンは許可さえあればその国に向える独立部隊であることと、日本帝國から参加要請が来ていたことがあって問題なく作戦参加が認められた。

「……………」

フレイグスの格納庫ではユニオンの制服に身を包んだミーシャが目の前に鎮座するオレンジ色に塗装されたMSを見上げていた。

GNX-704T／SP アヘッド脳量子波対応型……通称『アヘッド・スマルトロン』。カタギリがミーシャのために建造した専用機である。

もともとはガンダム00において超兵であるソーマ・ピースが搭乗していた機体であり、後にはルイス・ハレヴィも搭乗していた。調査の結果、ミーシャからは脳量子波が計測されたためこの機体がミーシャの専用機となった。機体はミーシャの希望でオレンジ色の塗り替えられている。

「緊張しているのか？」

しばらくスマルトロンを見上げていたミーシャに横から声が掛かる。声をかけたのはルイスだった。

「大丈夫です。BETAとの戦いは初めてじゃありませんから」

「だが、MSでの実戦は初めてのはずだ。ましてやこの機体はまだ完熟航行が終わったばかりだろう？」

「ですけど、この大規模な作戦でこいつを乗りこなせれば自信が付きます。だから、やってみせますよ」

ミーシャはリースに笑顔を向ける。それを見たリースはミーシャを抱きしめていた。

「そうか・・・ミーシャは強いな・・・だが、無理はするなよ？隊長や私・・・ついでにグレイサー少尉もいる。無茶をする必要はないからな？」

「はい、中尉」

無邪気に笑うミーシャはリースに抱きつく。行動だけ見ればまるで恋人同士だがミーシャの身長は10歳並みなので姉弟にしか見えな
い・・・そして、物陰で2人を見る1つの影があった・・・

「まさかリースがショタコンだったとはな。こいつあ驚いた」

ミシェルがニヤニヤしながら2人を見守っていた。

一方、フレイグスのグラハムの部屋には仮面を外したグラハムとカタギリがいた。

「ついに初のハイヴ戦だね。機体の整備は万全だよ」

「そうか……各国のMSの状況は？」

「日本帝國はかなりの数を出してきてるよ。まだ数機しか配備されてないゲルググも出てるしね。ただ、他の軍はほとんど戦術機だね」

「……日本帝國がMSを出してくれているのはまだ救いか……」

グラハムは溜息を吐きながら自身を納得させる。日本帝國は国土奪

還のためにMSの配備数が段違いに多くなっているがそれに比べ、大東亜連合やアメリカはほとんどMSが配備されていなかった。

「でも日本帝國がMSを出してくれてるなら大分楽になるよ」

「ああ、MSがいてくれるだけで衛士の損害は減る……だが……」

グラハムは頭を押さえる。

「どうかしたのかい？」

「この作戦、何か嫌な予感がする」

そう言うときグラハムは考え込み始める。

「（この状況でBETA以外に警戒すべきはアメリカ……アメリカはこの作戦でG弾の力を示したいと思っているはず……だが、いくらなんでもこちらが優勢に進めれば使うことはないはずだ。日本帝國は大量にMSを投入してきているし国連や大東亜連合も戦術機用に開発したビームライフルを装備しているものがほとんどだ。そうそう劣勢に立たされることはない。これならばG弾を使われることはないか？）」

延々と考え続けるグラハムだが結局たいした策が思いつくはずもなく、警戒することしかできないのだった。

一方その頃、国連軍リザード小隊の格納庫では……

「むう……」

褐色の肌に焦げ茶色の髪の少女、タリサ・マナンドルが難しい顔をしていた。光州作戦後、インド方面に配属された彼女の小隊もこの明星作戦に参加していた。しばらくするとタリサに1人の女性が話しかける。

「あら、どうしたのタリサ？ 難しい顔して」

「イーサ……………」

話しかけてきた女性はインド系のアジア人でタリサの横に立つ。

「明日の作戦のためにも早く寝ないとダメよ？」

「わかってるけどよ……………」

「ましてや明日の作戦にはタリサが入りたがってるユニオンも参加するし、情けない戦いは見せられないんでしょ？」

イーサの言葉にタリサはコクリと頷く。

「ただ、なんか嫌な予感がすんだよ。よくわかんねえけど……………」

「それは、例の勘？」

その問いかけにタリサは肯定の意を示す。光州作戦後に覚醒してからタリサは次第に敵意や悪意を感じやすくなっており、NTとしての能力に磨きが掛かっていた。タリサ本人はNTのことを知らなかったが戦場に出て、どんどんに鋭敏になるその感覚に次第に馴れていた。そのNTとしての勘は何度か小隊の危機を救い、小隊メンバーは『勝利の女神』などと言っていたが……………そんなタリサの勘がこの作戦に嫌なものを感じていた。

「そう…タリサが言うなら気をつけといたほうがいいのかもしれないわね。わかった、隊長にも言うておくわ」

$\left[\begin{array}{c} \hbar \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$

「おい孝之、こんなところで何してんだ？」

「真二」

国連軍A-01部隊。オルタネイティブ4の最高責任者、香月夕呼直属の部隊である。その格納庫で戦術機を見上げていた少年、鳴海孝之にその友人である平真二が話しかけた。

「いや、やっぱりMSに乗りたいたいなと思ってな」

「無理だって。ただでさえMSの数は足りてないんだ。日本帝國はかなりの数のMSを投入してるって話だがそれでも戦術機が多いし参加してる斯衛の機体も大半が戦術機だ。俺らみたいな新人には回ってくるわけねえよ。ビームライフルが回ってきただけ良いだろ」

「まあ、そうだけだな」

孝之は苦笑いして真二に答える。だが、孝之はすぐに真剣な表情になる。

「今回の作戦で、俺たちの街を取り戻せるんだよね？」

「…大丈夫だって。今回の作戦にはユニオンも出るって言うし、お前はそれよりもあの2人への返事を考えとけよ」

「う……」

そう。この鳴海孝之という男、同期の涼宮遙、速瀬水月という2人の女性に言い寄られているのだが、いまだに答えを出せないヘタレ

なのである。その件の2人の女性だが総合戦闘評価演習において事故に遭い、任官が遅れている。

こうして夜は更け、そして明星作戦が始まる。

#13 明星前夜（後書き）

うゝむ、孝之と真二の性格がいまひとつ思い出せない・・・

それはそうと独自設定でタリサを明星作戦に参加させました。

#14 明星作戦（前書き）

更新です。毎回思います……戦闘って難しい。

#14 明星作戦

1999年8月5日

人類による横浜ハイヴ攻略戦『明星作戦』が発動。グラハムたちユニオンもフレイグスから発進しようとしていた。

「リース、ミシェル、ミーシャは3人で友軍の援護。私は切り込む」

『『了解！（了解）』』』

「ミーシャはMSでの実戦は初めてだ。リース、レオンはミーシャに気を配ってやれ」

『『了解！（へい）』』』

グラハムはリースとレオンの対照的な返事に笑みをこぼし、操縦桿を握る手に力を入れる。

「では、ユニオン！出撃^でするぞ！」

『『了解！』』』

フレイグスのMSデッキのハッチが開き、ハロから通信が入る。

『進路クリア！発進ドウゾ！ドウゾ！』

『リース・フレンツ。ジnkス？・ダブルキャノン、出撃します！』

『ミシエル・グレイザー。ジンクス？・ソード、行くぜ！』

『ミーシャ・イリユーナ。アヘッド・スマルトロン、発進します！』

「グラハム・エーカー。スサノオ……いざ、参る！」

オレンジ色の粒子を撒き散らし、4機のMSが空へと飛び立った。ちなみに今回、リースの搭乗するジンクス？はハイヴ攻略戦ということもあり、普段片方の肩にしか装備していないGNキャノンを両肩に装備したダブルキャノンとなっている。

フレイグスから発進したグラハムたちが戦場に近づくと国連軍の指揮官から通信が入る。

『本作戦の国連軍の指揮を執る合衆国海軍のレクサー大将だ。ユニオンには我々の後方に待機し、別命があるまで待機してもらう』

この通信にリースとミーシャは眉を顰め、ミシエルは呆れる。全員彼の……というよりアメリカの意図を理解したのだろう。アメリカは今回の作戦でG弾を使用したいがためにユニオンを戦闘に参加させたくないのだろう。ただでさえ帝国軍が大量にMSを投入しているのにユニオンが参加してG弾の意味がなくなるのを恐れているのだ。

「お言葉ですが、我々ユニオンはラインハルト元帥より独立行動の権利を与えられています。故に我々は貴官等の命令を聞く義務はありません」

グラハムの言葉に見るからにレクサーの顔が怒りで赤く染まる。

『エーカー中佐！そんなことが許されると「権利があると言った！」お、おい待っ！』

レクサーの台詞の途中で通信を切るとグラハムたちはそのまま戦場へと入っていった。

一方、作戦開始と同時に帝國軍のMS部隊はBETAと交戦を開始した。帝國軍はMSを大量に投入したことによりBETAを圧倒していた。

『消えろBETA!』

帝國兵士の叫び声と共にガナーザクウォーリアのオルトロスからビームが放たれ、要撃級や突撃級は身体を焼かれて死亡し、戦車級や闘士級はその余波で消滅する。

『この化け物どもが!』

ブレイズザクウォーリアのブレイズウィザードから放たれたファイヤビー誘導ミサイルが小型種を焼き尽くし、ビーム突撃銃から放たれるビームによって要撃級が撃ち抜かれ絶命する。

「凄い……」

そんな光景を見ながら帝國斯衛軍の新任少尉、篁唯依は目の前の光景に言葉を失っていた。彼女はこの作戦が初実戦であり、そのMSの性能に眼を見開いていた。

「これがMS……戦術機とは全然違う……」

そう呟きながらも彼女は自身の搭乗機である山吹色に塗装されたスラッシュザクウォーリアのビームアックスで要撃級を切り裂き、さらに近づいてくるBETAをガトリングビーム砲で蜂の巣にする。

「これなら…いける！もう、貴様らの好きにはさせない！」

彼女はそのまま次々にBETAを蹂躪していくのだった。

「イーサ、右だ！」

『了解！』

タリサの声に反応し、イーサの乗るイーグルは自分に近づいていた要撃級を射殺する。そしてそれと同時にタリサのイーグルが突撃級を射ち殺す。タリサの所属する小隊のイーグルはユニオンが開発したビームライフルを装備していた。

「あゝ、クソ！わらわらと！コーギ！後ろ！」

タリサは味方に近づくBETAの敵意を感じ取り、声をかける。これによってタリサの所属する小隊は被害を出さずに戦うことができていた。

『しかしすげえな、このビームライフルは！突撃級の装甲がまるで紙だぜ！』

『あまり調子に乗るなよ。今回はハイヴ攻略戦なんだ。油断すれば殺られるぞ！』

隊長の怒声が響き渡る。

「（っ！？この感じ……なんだ？）」

タリサが何かに気付き、上空を見上げる。すると空からオレンジ色の極太のビームがBETAを直撃し、BETAを蒸発させる。

『あの機体って……』

『どうやらお出ましましたいな。ユニオンが』

そこにはリースの乗るジンクス？・ダブルキャノンがGNキャノンを構えていた。

『おら！BETAども、破壊して蹂躪して殲滅してやる！』

ミシエルのジンクス？・ソードは左手でビームライフルを撃ちながら急降下し、右手のGNバスターソードで要撃級を切り殺す。

『消えて』

『GNキャノン……シュート！』

ミーシャのアヘッド・スマルトロンは光線級の攻撃を避け、時にはリースに向かう攻撃を防ぎながらビームライフルで的確に光線級を討ち抜いて行く。するとリースの乗るジンクス？が2門のGNキャノンが火を噴いた。

「（まだだ……上から来る……この懐かしい感じは！）」

『切捨て……ごめええええん！』

そしてスサノオが高速で降り立ち、シラヌイとウンリュウで要撃級2体を切り裂く。

「（この感じ……やっぱり！）中佐！」

『っ!?!これは…マナンドル少尉か?』

通信こそ繋いでいなかったがNT同士の感応現象でタリサとグラハムは互いの存在を感じる。

『(マナンドル少尉……NTになったというのか?)』

考え事をしながらもグラハムは次々にBETAを切り裂いていく。

「中佐がいる……中佐が見てる………」

グラハムの乗るスサノオの姿を見てどんどんタリサのやる気が漲って来る。

「いよっしやあああああああ!!--行くぜえええええええ!!--」

タリサは得意の高速機動でBETAを駆逐していく。

『おお、タリサは凄いな』

『憧れの人が目の前にいるからでしょ?恋する乙女は強いわよ』

ユニオンの参戦や戦術機に配備されたビームライフルの性能もあり、国連も戦術機中心の部隊でありながら以前と違い、BETAを押し始めていた。

「……………予想以上……………ね。しかもなんか1機増えてるし」

オルタネイティブ4の責任者、香月夕呼はオルタネイティブ権限で日本帝國の旗艦に搭乗していた。スクリーンには圧倒的な火力、機動力でBETAを蹂躪するそれぞれ純白と空色に塗装されたジンクス?とオレンジ色のアヘッド・スマルトロン。そしてスサノオの姿があった。

「（見れば見るほどわけわかんないわ。推進力も無しにどうしてあんなに速く動けるのよ。あの粒子が関係してるんでしょうけど……）」

」

「艦長！大変です！」

「どうした？」

艦のCPが慌てて小沢艦長に伝える。

「そ、それが……………」

そのCPの言葉を聞いて夕呼は顔を顰める。

「（アメリカの馬鹿ども、なにやってんのよ！）」

夕呼は内心でアメリカに怒りを露にしていた。

『グラハム！聞こえるかい！？』

BETAを切り裂くスサノオのもとにカタギリから通信が届く。

「カタギリ、どうした？」

『グラハム：アメリカがG弾を発射した』

「っ！？なんだと！？」

カタギリの言葉にグラハムは絶句する。現在、人類側は優勢で戦局を進めていた。それをアメリカはG弾の使用を強行したのだ。

『ちょ、アメリカは正気ですか！この状況でG弾なんて撃ったら味方を巻き込みますよ！？』

普段冷静なリースが珍しく慌てる。

「く……カタギリ、迎撃は可能か？」

『ハロに調べてもらったけど、ここで迎撃したら日本帝国の艦隊を巻き込む恐れがある』

「……そうか…全機、離脱するぞ」

『ちっ、アメリカの馬鹿野郎どもが……』

ミシエルが毒づく。するとグラハムはオープン回線を開く。

「明星作戦に参加中の全部隊に告ぐ！アメリカがG弾を2発発射した！迎撃すれば日本帝国艦隊に被害が出る可能性があるため迎撃は不可能だ！着弾までの時間やG弾の位置データを送る！全機、すぐに戦域を離れろ！」

グラハムが通信を終えるとフレイグスから全部隊にデータが送られる。すでに着弾まで5分を切っている。全ての部隊は大慌てで撤退していく。

「よし、我々も撤退す『隊長！』」

ミーシャがグラハムに声をかける。その方向では国連の不知火がBETA突っ込んでいた。

『おい！孝之！撤退命令だぞ！』

通信で聞こえてくる真二の声を無視しながら孝之は突っ込んでいく。真二はちょうど補給に戻っていたためにこの場にはいない。孝之の周りにいたMSや戦術機が撤退してくる。しかしそれでも多数がG弾の犠牲になるだろう。孝之は単機でさらに突っ込んでいく。

『何をしている！撤退命令は出ているぞ！』

接近してくる機体から通信が入る。

「死なせない……これ以上……俺たちの町で死なせたくないんだあ
あああああああ!!」

孝之は叫びながらビームライフルを乱射する。すると……

『良くぞ言った……少年!だが!』

「っ!?!うわあ!!」

孝之の乗る不知火を衝撃が襲った。

「ちっ、リースたちは先に撤退しろ！私のはあの不知火を回収する！」

不知火を見たグラハムは全速力で不知火のもとに飛んでいく。

「何をしている！撤退命令は出ているぞ！」

グラハムは不知火に通信を入れるが帰ってきたのは1人の少年、鳴海孝之の叫び声だった。

『死なせない……これ以上……俺たちの町で死なせたくないんだあああああああ！！』

その台詞を聞いたグラハムは薄く笑みを浮かべ、シラヌイとウンリユウを腰から引き抜く。

「良くぞ言った……少年！だが！」

そしてグラハムは不知火の両足を切り裂き、不知火の身体が宙を舞う。それをシラヌイとウンリユウを腰に納めたスサノオがキャッチし、そのまま戦域を離れようとする。

『な、なにを「君の思い、聞かせてもらった！その意気や良し！だが、ならばこそ……生きろ！少年、生きて未来を切り開け！」……』

グラハムの言葉に孝之は言葉を失う。そしてグラハムは急いでその場を離れようとする。しかし……

「く……これでは間に合わんか……」

『手を離してくれ！このままじゃあんたまで！』

孝之の言葉通り、スサノオは不知火を抱えているために普段のような速さで移動することができていない。そのため、G弾の範囲から退避は間に合わない。それを察した孝之は自分のせいでこうなったのだからと自分を放すようにグラハムに言う。確かにこのままでは間に合わない……このままであれば……だが……

「ふっ、ならば……見るがいい！我が盟友が造りしスサノオの奥義……トランザム！！」

そしてスサノオは赤く発光しだす。

『なんだ？赤い……光が……ぐう！』

トランザムを発動したスサノオが最大速度でその場を離れ、孝之は発生したGによって苦悶の表情を上げる。そして、その後方ではG弾による黒い光が発生していた。

一方、タリサが所属していた小隊も誰1人欠けることなく撤退に成功し、G弾によって荒野と化した横浜を見ていた。

『これが……G弾の威力……』

『アメリカの野郎……味方なんてお構い無しかよ……』

「う……ぐう……」

『タリサ? どうしたの?』

イーサが苦悶の声を上げるタリサに問いかける。だが、その問いか

けにタリサは答えない。

「なんだ……なんだこれ……？ 気持ち悪い……死んだ奴らが……アタシの中に入ってくる……なんだよ……これえ……アタシ……パ
ンクしそうだ……」

イーグルの中でタリサは死んでいった者たちの念を感じ、頭を押さえながら苦悶の声を上げ続ける。その後、仲間たちによって医務室に運ばれていった。

孝之の不知火を救助したグラハムもまた地上に降り、G弾の跡を見ていた。孝之はスサノオのトランザムによるGに耐え切れず、移動中に意識を失った。

「くっ……これでは……世界の鼻つまみ者だぞ……アメリカ！」

MSと戦術機で勝利を掴めるかも知れなかった戦いに投入されたアメリカのG弾に^{あくい}グラハムは拳を握り締め、怒りに震えていた。

こうして明星作戦はBETAではなく人類の手によって多数の犠牲者を出し、幕を閉じた。

#15 テスト×吉報×思惑（前書き）

ようやく更新です。

例によって駄文ですがよろしく願います。

#15 テスト×吉報×思惑

明星作戦から1ヶ月。結果的には成功したかに見えた明星作戦だが、その方法が非常に問題視された。

言うまでもなくアメリカが事前報告や通告無しに放ったG弾である。戦術機とMSだけで攻略可能だったにも拘わらず撃たれた一撃によって帝國軍や大東亞連合、国連の一部の部隊が大打撃を受けた。特にこの作戦にMSを大量に投入していた帝國軍はハイヴ近くまで接近していたこともあり、逃げ遅れた機体が多数存在してしまい多くのMSと人命を失う結果となった。

これによって帝國の所持するMSは3分の1以上が失われ、もとより経済的な問題でMSの保有数の少なかった日本帝國は怒り狂った。これがBETAによって失われたならまだしも、友軍であるはずのアメリカの手によって…である。先のアメリカによる安保条約の一方的な破棄に加え、アメリカへの日本の怒りはさらに高まっていた。

その影響で日本帝國は新たな戦術機の開発を余儀なくされる。現在でもMSを購入できなくはないが数が揃わなすぎるのである。簡単に言えば如何に戦術機とMSの性能差に開きがあるとはいえ、数が少なくては数の多いBETAに対抗しにくいのである。武装的な面ではユニオンが製作した戦術機に装備するためのビームライフルがある。MSには劣るがそれでもかなり戦力になるのだ。

大東亞連合や国連はそれほどMSが出撃していなかったため、MSの損害は少ないが人的損害は甚大であった。そのため、周辺諸国や他国ではG弾脅威論が巻き起こった。しかし、アメリカを始めとするG弾推進派は世界に一定の成果を示すことができたことでご満悦

だった。

だが、そんな世界の中でもう1つ注目を浴びている存在があった。
あの戦いでスサノオが発動したトランザムシステムである。

G弾の効果範囲から不知火を抱えた状態で離脱できるほどの機動性。
もともとスサノオを始めとするユニオン専用機の姿を記録していた
ため、トランザムを発動したスサノオに各国は注目した。

その頃、ユニオンでは新たなMSや装備の開発が進められていた。

「こちらリース・フレンツ。武装テストを開始します」

『了解。頼むよ』

「はい」

リースはザクウォーリアに搭乗し、ライフルを構える。リースが乗っているのは通常のザクウォーリアだが装備しているウィザードはブレイズ、スラッシュ、ガナーのどれとも違う。

これこそがザクウォーリアの新たな装備『スナイパーウィザード』である。ガナーウィザードを流用し、長射程と貫通性に特化したウィザードであり、精密射撃を得意とする。

「リース・フレンツ、目標を狙い撃ちます」

そう宣言するとリースは引き金を引き、そして放たれたビームは寸分違わずターゲットを撃ち抜いた。

「続いて第2射、行きます」

この装備を開発したのは用は後方からの精確な援護のためである。ガナーウィザードのオルトロスは威力は高いが前方に味方がいる場合、攻撃範囲が広いため、誤射の可能性も高い。その可能性を減らし、味方に近づくBETAを超長距離から撃ち抜く為の装備がスナイパーウィザードである。攻撃範囲はオルトロスに及ばないが射程距離はオルトロスの倍以上ある。

『よし、スナイパーウィザードのテストはこれで終了だ。ミシエル、

続いてソードウィザードのテストを始めるよ』

「了解っす」

カタギリの言葉にレオンがザクウォーリアの操縦桿を握る。ミシエルの乗るザクウォーリアはブレイズウィザードに似たスラスターが着いているが側面に2本の対艦刀が装備されている。

これがザクウォーリアのもう1つの新たな装備『ソードウィザード』である。もともと近接戦闘にはスラッシュウィザードが存在しているがスラッシュウィザードのビームアックスは長柄であるため小回りが効きにくい。そのため近接戦闘型のスラッシュとは別に高機動近接戦闘を主眼に置いたソードウィザードを開発したのだ。

これは特に日本帝國やEUのように剣での近接戦闘をする国の戦術に合わせた装備でもある。ソードに装備された対艦刀はダガーシリーズのソードストライカーのシュベルトゲベルよりも少々小型になっており、片手で使うことを前提にしている。

「そらよお!!」

そうしているうちにミシエルが対艦刀でターゲットを切り裂いていた。

『よし、十分だ。テストはここまでにしよう』

「了解」

ちなみに最初はダガーシリーズを作ろうかという話にもなったがウィザードだけで作ったほうがコストも生産時間も短縮できるという

理由で却下となった。実はユニオンの格納庫には試作的に作られたMSが何機か存在しているがその話はまたに機会に……

一方、グラハムは隊長室でラインハルト司令と通信を行っていた。

『中佐、いい報告だ。以前から要望のあったフレイグスのクルーの件……来週の頭にはそちらに人員を送れそうだ』

「本当ですか？」

『ああ、やはり明星作戦でのアメリカの行動が効いているようだ。ユニオンへの入隊希望が多くなっている。衛士は辛いが戦艦のクルーやスタッフはどうかかなりそうだ』

先月の明星作戦のアメリカがG弾を強行使用した件でG弾推進派の国々はアメリカを支持したが現場の人間たちはそうは行かなかった。明星作戦で味方ごと撃ったアメリカに現場の人間たちが不信感を募らせたのだ。その結果、ユニオンに転属を希望するものが増え始めたのだ。

さすがに衛士は希望しても実力がなければユニオンに入れないが戦艦のクルーや基地スタッフは衛士ほど狭き門ではない。しっかりと仕事をしてくれればそれでいいのだ。

それでもユニオンに転属を希望するものはそういなかったのだが……やはりアメリカのG弾強行はかなり衝撃だったらしい。

『ところで、新型のほうはどうかね？』

「新型ウィザードは現在、カタギリがテストを行っています。MSのほうはもう少し掛かるかと」

『そうか……では、また……な』

通信が切れるとグラハムはいくつかの書類に目を通す。そこにはま

ず新型のウィザードのデータ。続いてドムトルーパーのデータが載っていた。

グラハムたちユニオンはウィザードと共に新型機ドムトルーパーの開発を急いでいた。最初はグフイグナイテッドという案も出たがグフは空戦を得意とする機体であるため、光線級がいることで却下となった。もっとも配備はまだ先であり、早くとも2000年。それもエースに優先配備されることになっている。

「さて、これでようやくフレイグスも実戦に出せるか」

グラハムは安堵の溜息を吐いていた。

その頃、とある国連軍基地。

「ん？イーサか？」

格納庫で休憩をしていた褐色の少女、タリサ・マナンドルは背後に向かつて声をかける。

「よくわかったわね？ 見てもいないのに」

「なんとなく気配を感じるんだよ」

「気配って……あなた何者？」

冗談めかして言うイーサだが当のタリサは困惑していた。明星作戦のあの日、アメリカから放たれたG弾によって発生した死者の念……それを受けたタリサは激しい気持ち悪さに襲われた。それはNT特有の感応現象の一種であり、NTとして戦場に出たものは大概経験していることである。

しかしタリサは当然NTとしての知識もないしこの能力もただなんとなくで使っていた。だが、あの日のあの感覚からタリサのNTとしての力はより磨きが掛かっていた。

そしてそれがタリサを困惑させる。『この力はいったいなんなのかな？』……頭の中はその疑問でいっぱいだ。

「（あるとき感じた……中佐もこの力を持ってるのか？）」

「タリサ、そろそろ休憩終わりよ」

しかし考えても答えなど出てくるはずもなく、タリサはイーサの言葉を聞いて頭をガシガシと掻いて立ち上がる。

「（まあいいや、その内中佐に直接聞きゃいい。今アタシがやんなきゃいけないのは強くなることだ）」

いつかグラハムにNT能力のことを聞くその日のために、タリサは訓練に励むのだった。

一方、アメリカの会議室では……………

「先日の明星作戦の成果は上々だな。G弾推進派の国は我等に賛同してくれている」

「しかし、予想外だったのはあの男……グラハム・エーカーの機体だ」

スクリーンにトランザムを発動したスサノオが映し出される。スサノオは不知火を抱えた状態で信じられない速度でG弾の友好圏内から離脱していた。

「あの技術はいったいなんなのだ？」

「国連から何とか引き出せんのか？」

「無理だ、ユニオンはあれらの機体の技術を公開する気はないだろう。奴らの基地もわからない以上スパイも送りようがない」

ユニオンの機体の入手に頭を悩ませるアメリカ一同……その頃、日本でも……

「いい加減にしなさいよ……なんなのよこれは！」

香月夕呼もスサノオの発揮したトランザムに驚愕を隠せないでいた。

「不知火を抱えた状態でG弾の有効圏内から離脱？ しかも鳴海の話

じゃGで途中で意識を失ったって言うし……なに？ユニオンの衛士は化け物？」

スサノオに抱えられていた不知火の衛士、鳴海孝之は香月夕呼のA-01部隊の人間であるため、孝之からそのときのGで意識を失ったと証言を得ていた。だからこそ、その状態で平然と飛び回るグラハムに驚きを隠せないのだ。

「(MSも有用性は高いし、これじゃあオルタネイティブ計画なんて不要じゃない……まあ、アメリカのオルタネイティブ5よりは全然良いけど。なんとかユニオンと接触できないもんかしら?)」

夕呼もまたアメリカとは違う意味で頭を悩ませていた。

#16 EUにて(前書き)

ようやく更新できました！間を空けてしまい申し訳ない。

言い訳をさせていただけるなら大学のテストとレポートでてんこ舞いでした。しかも今期単位が取れないと留年の危機に……

それもようやく終わり投稿したわけでありますが時間が空けたせいかただでさえ低いクオリティがさらに低下してる気が……

今回は本当は戦艦のクルー紹介でもしようかと思ったのですがそこまで重要なキャラもないので。この話と次話が終わったらキングダムクリムゾンで一気にTEに飛ばうかと思っています。っていうか明星終わったらTEまでこれといったネタが思い浮かばなかったんです。

ようやくタリサを絡められる……

#16 EUにて

000年4月25日。ラインハルト司令の通信から数ヶ月が経過した。フレイグスのクルーとなった新隊員たちも艦の操作に馴れ、ユニオンの旗艦としての本格的な運用が可能となっていた。

ユニオンにとって幸いだったのは艦長として配属されてきたのが経験豊富なベテランのドイツ人男性、イグル・ヴリート少佐であったことだ。

彼はBETAの地球侵攻が開始した1973年から軍人として前線で指揮を取っていた人物でフレイグスでの指揮もすぐに馴れ、的確な指示が出せるようになった。

他にも整備班には優秀な整備兵が多く配備され、その中でもキャシー・リーファという少女は群を抜いていた。

彼女はまだ16歳と若かったが機械に非常に強く、カタギリの教えを受けてユニオンのMSの整備もすぐに習得し、整備班の技術副主任に就任していた。

その他のクルーも非常に優秀でグラハムの期待に十分応えうる人材たちであった。

こうして指揮官、クルー、整備兵が配備されたことである程度留守を任せられるようになったグラハムはカタギリを引き連れ、EUを訪れていた。

「よくいらっしやいました、エーカー中佐」

「お出迎え感謝します。基地司令殿」

司令室に來たグラハムとカタギリはドーバー基地の司令官に敬礼す

る。今回の訪問の理由はE.U.に配備される新型機『ドムトルーパー』の先行量産型10機を届けに来たのだ。

「ユニオンの勇名は聞き及んでおります。今度の新型も大いに期待させていただきますよ」

「望むところだといわせていただきますよう」

「ではこちらへ」

グラハムとカタギリは案内役の男性に促され、戦術機の格納庫に向かった。

その頃、格納庫では3人の女性がドムトルーパーの先行量産機を見上げていた。

「これがユニオンが開発した新型か」

「ザクに比べて随分ごついけど、これで機動力は大丈夫なのかな？」

「問題ありませんわ！ドムトルーパーはホバリング推進システムで機動力はザク以上！しかもウィザードシステムの共有も可能となっています！」

この3人はドーバー基地所属の衛士で上からヘルガローゼ・ファルケンマイヤー、イルフリーデ・フォイルナー、ルナテレジア・ヴィッツレーベンである。

「そう言えばこの基地に彼の名高いミスター・ブシドーが来ているそうだ」

「ってことはもしかしてあの機体も来てるのかな？」

「ミスター・ブシドーの乗機、スサノオのことか？」

ヘルガローゼの台詞にイルフリーデが反応する。突撃前衛を目指す彼女にとって、接近戦特化のスサノオは非常に興味があった。

「私はカタギリ様にお会いしたいですわ」

一方、『戦術機を婿にする』と周囲に噂されるほど戦術機やMSへの情熱が熱いルナテレジアは開発者であるビリー・カタギリに憧れを抱いていた。

それから数日後、翌日にユニオン基地への帰還を控えたグラハムはこの基地の衛士への手土産としてシミュレーターによるグラハムの操るスサノオの模擬戦が開始されようとしていた。

グラハムに対するのはグレートブリテン防衛戦の七英雄と名高い『黒き狼王』と称されるヴィルフリート・アイヒベルガー少佐とその副官である『白き狼』、ジークリンデ・ファールレンホルスト中尉の

2人との2対1である。

ヴィルフリートとジークリンデの2人は使い慣れたザクウォーリアに登場している。ヴィルフリートはブレイズウィザード、ジークリンデはスラッシュウィザードを装備している。

そしてその映像はドーバー基地所属の衛士たちに公開され、イルフリーデたちもその映像を見ていた。

「どっちが勝つと思う？」

「ヴィルフリート少佐たちだろう。いくら噂に名高いミスター・ブシドーとスサノオとはいえあの2人相手ではな」

イルフリーデの言葉にヘルガローゼは冷静に答える。そうしている間に模擬戦が開始された。

『準備はよろしいですか？エーカー中佐』

「問題ない」

CPからの通信にグラハムが答えると模擬戦が開始された。

「さて、噂に名高い七英雄の力。存分に見せてもらおう！」

そう言うときグラハムはスサノオを全速力で発進させた。

『っ！速い！』

スサノオの急加速に相手の2人は驚愕する。しかしその驚きとは裏腹にブレイズザクから精確な射撃が飛んでくる。

「良い腕だ…が！」

それをグラハムは急上昇して回避し、トライパニッシャーの発射体勢になる。

「これで！」

スサノオから放たれたトライパニッシャーを散開して避けるがそれはグラハムの想定内だった。

「まずは……君だ！」

するとグラハムはジークリンデの駆るスラッシュザクに向かう。

『舐めるな!』

一方のジークリンデは直進してくるスサノオにビームガトリングを発射する。それは直撃コースの正確な射撃だった、が。

「見える!」

グラハムは機体を回転させ、ビームガトリングを悉く回避していく。

『な!?!今のを避けた!?!』

「切捨て、御免!」

スラッシュザクがビームアックスを振り下ろすがスサノオは右手のウンリユウでそれを受け止め、さらに左手のシラヌイでスラッシュザクのコクピットを切り裂いた。

『く!?!』

さらにグラハムはすぐにもう1機のブレイズザクに向かっていく。

「さあ、これで……終幕だ!」

スサノオの振り下ろしたシラヌイをザクはビームトマホークで受け止める。

「まだまだ!」

『ぐお！』

しかしスサノオはザクを蹴り飛ばし、シラヌイとウンリユウを連結させたソウテンをブレイズザクに突き刺した。

この光景にそれを見ていたイルフリーデたちドーバー基地所属の衛士たちはしばらく声が出なかったという。

#17 性能（前書き）

更新です。相変わらず穴だらけの駄文ですがよろしくお願いします。
ってうか題名がなかなか思いつかなくなってきた。

#17

この日もまた、ユニオンは前線からの要請を受けアフリカ方面の戦場に出撃していた。

「全MS発進準備！艦の主砲をぶっ放したら発進させろ！」

艦橋でクルーに指示を飛ばすのは壮年の男性、イグル・ヴリート少佐である。他の艦橋のクルーは彼の指示に忠実に行動し、フレイグスの主砲『ゴッドフリート』がBETAに向けられる。

「ゴッドフリート照準! ……撃てええええええ!!」

イグルの号令と共に緑色のビームがBETAを蒸発させる。

「今だ！MS発進！」

っていた。

『隊長、ホント艦のクルーが補充されてよかったっすね』

「ああ、これで私も存分に戦場で動くことができる」

ミシエルの軽口に微笑みながら返すグラハム。するとイグルから通信が入った。

『今だ！MS発進！……中佐、よろしく頼みます』

イグルの言葉に『ふっ』と微笑むとグラハムは操縦桿を握る。

「無論だ」

『カタパルトオープン…進路クリア、スサノオ発進……どうぞ！』

「グラハム・エーカー……スサノオ、参る！」

オペレーターの女性の声が響くとスサノオはカタパルトから射出され、さらに続くように他の3機も戦場へと向かっていった。

グラハムたちが発進したのを見届けたイグルは直ちに次の指示を出す。

「よし、我らはこのまま援護に移る！ゴッドフリート照準！スレッ
ジハマー装填！バリアント起動！味方に当てるなよ！」

そしてフレイグスからの援護射撃によって戦場にはさらに大量のB
ETAの死骸が量産されていった。

「切り捨て……御免！」

一方、戦場ではグラハムのスサノオが要撃級を切り裂いていた。

「こちらユニオン所属、グラハムエーカー中佐だ。貴官らを援護す
る！」

グラハムがその場の衛士たち通信を入れる。

『み、ミスター・ブシドーか！？』

そうしているうちにミーシャの搭乗するオレンジ色のアヘッドスマルトロンが的確にBETAを撃ち抜いていく。

『消えろ』

そう呟いたミーシャは小刻みに動き回って光線級の攻撃を回避し、ビームライフルで逆に光線級を撃ち抜いていく。

『オレンジ色のMS……あれが『黄昏の魔弾』か!?!』

『なんて奴だ……光線級を避けて、あまつさえ逆に全部撃ち抜いていく!?!』

すると今度はミシエルの空色のジンクス?がBETAをGNソードで切り裂く。

『おら!破壊して蹂躪して殲滅してやる!!来いよBETA!!』

ミシエルの乗るジンクス?は切り裂いた要撃級の体液を返り血のように浴びている。

『……き、切り裂きミシエル(ミシエル・ザ・リッパー)……』

そんな兵士の呟きは戦いの喧騒に飲まれていく。

『粒子圧縮……GNキャノン、シュート!』

そして、いまだ上空にいたリースはGNキャノンで大量にBETAを殲滅していった。彼女を狙っていた光線級はすでにミーシャのア

ヘッドによって悉く撃ち抜かれ、少なくとも彼女を狙う個体はいない。

『『純白の射手』………すげえ………』
ホワイト・アーチャー

ちなみにここまででわかったと思うがユニオンのMSパイロットは全員がいつの間にか異名を手に入れていた。

グラハムはもはや『ミスター・ブシドー』として有名であるのは別として、ミーシャはその機体色から『黄昏の魔弾』、レオンは使用する武器と戦い方から『切り裂きミシエル（ミシエル・ザ・リッパ―）』、リースは機体色と戦い方から『純白の射手』。
ホワイト・アーチャー

何の因果かミーシャとミシエルの2人はどこかで聞いたような異名である。

「むっ!?!」

そんな中、グラハムは光線級の攻撃を避けながらも機体に違和感を感じる。……が、特にそれが問題になることもなくBETAの駆逐は終了し、グラハムたちは基地へと帰って行った。

「カタギリ……」

基地へと戻ったグラハムはスサノオの整備をしているカタギリに声をかける。ちなみに他のMSも補充された整備兵たちによって整備されている。

「どうしたんだいグラハム？」

「どうもスサノオの反応速度が遅く感じるのだが……機体に異常はないか？」

そう、これがグラハムの感じた違和感の正体だった。先程の戦闘で僅かながら自分の反応にスサノオが追いついていないと感じたのだ。

「……ふむ、機体自体には異常はないよ。ただ、おそらく機体の性能が君の能力に追い付かなくなってきているのかもしれない」

カタギリの言葉にグラハムは眼を丸くする。

「勿論、スサノオが最高クラスの機体であることは保障する。でもこの3年間で君の腕も上がってるしNTとしての能力も向上している。そのNTの反応速度にだんだん追いつかなくなってきてるんだよ」

「なんと……」

グラハムはスサノオを見上げ、すぐにカタギリに視線を戻す。

「カタギリ、スサノオを新型に改良してくれ。すぐにでもだ」

「……ふう、言うと思ったよ。けど、色々と弄るから完成まで大分かかるよ？それに君は5月にはXFJ計画の協力者としてユーコン基地に行く予定だろう？そのときの機体はどうするんだい？」

実はグラハムたちユニオンは日本とアメリカの合同戦術機開発計画『XFJ計画』に協力者として要請されていた。

これについては少し説明しておこう。日本は明星作戦でMSを多数失い、その穴を埋めるためにも戦術機開発は急務であった。

その結果、ザクウォーリアを参考に何とか簡易型MSの土台ができていたのである。そしてこれをより完成された機体にするため、日本帝国の巖谷中佐の提案によりアメリカの協力によって完成させようというのだ。

当然MSを失った原因とも言えるアメリカに協力を要請することは反対もあったが現在、ユニオンを除けば技術力が最も高いのはアメリカである。

日本が簡易型MSの開発に成功したのは日本には現在ユニオン直属のものを除いて最高の性能を持つ『ゲルググ』が配備されていること。

そして日本の科学者たちの不眠不休の努力によるものである。それ

でも1年以上の時間がかかり、しかもその性能はザフトのジンとどっこいどっこいである。

ちなみにアメリカはラプターの強化にかまけていてMSの開発ができていないのが現状である。

そしてユニオンも日本に協力するため、グラハムと整備副主任のキヤシーがユーコン基地に行くことになった。

「そのことだが……」

グラハムがカタギリに耳打ちする。するとカタギリが呆れたような顔になる。

「……本気かい？ なんならジンクスぐらい持っていけばいいのに……」

「いや、私にジンクスは合わんよ。それに乗りなれた機体の方がやり易い」

するとカタギリは渋々了承する。

「わかったよ……」

「それともう1つ頼みがある」

グラハムは再びカタギリに耳打ちする。すると今度はカタギリは慌て始めた。

「グラハム、本気……いや、正気かい？ あのシステムの危険性は君

も知っているはずだ」

「だから外部からシステムを解除できるようにすればいい。そしてそれを私が持っていく機体に積んでくれ」

カタギリは右手で顔を抑える。

「だが、あのシステムは危険すぎる。乗りこなせる保証なんてないよ」

「構わん、乗りこなして見せるさ」

するとカタギリは諦めたように溜息を吐く。

「…わかったよ……君は1度言い出したら聞かない男だからね」

そしてカタギリはスサノオの強化改良……それと共にグラハムがアラスカに持っていく2機のMSの作製に取り掛かった。

ユーコン基地での邂逅まで……あと少し……

#18 転属命令(前書き)

次回からT E編に入ります。

今回も穴が多い駄文ですがよろしくお願いします。

#18 転属命令

XFJ計画始動まであと3ヶ月となったここ、ユニオン基地ではユニオン基地に持っていく物資の積み込み作業が行われていた。

……とはいっても日本が開発した簡易型MSの為の技術提供用の物資と2機のMSぐらいなのだが。

「大佐、持っていく機体はこれでいいんですか？」

グラハムの執務室に今回同行する技術副主任のキャシー・ルーフアが書類片手に質問する。技術主任のカタギリはグラハムの新型開発などやることが多いので基地を離れないのだ。そこで同じく優秀な腕を持つキャシーがグラハムに同行することになった。

ちなみにグラハムはこれまでの功績で中佐から昇進し、大佐になっている。

「ああ、問題はない」

「わかりました……ところで大佐、向こうで新たに補充される衛士がいるとのことですが……やはりこのMSはその衛士に？」

キャシーは手元の書類を見ながらグラハムに質問する。

「その通りだ。そのデータ上、機体の特性は彼女に合っているし向こうでは私も多少教えられる」

「そうですね、では失礼します」

そう言うときゃシーは執務室を退室した。

「ふっ、ようやく約束の時か……再会が待ち遠しいな」

グラハムはこの世界にいるもう1人のNTの姿を思い浮かべ、微笑みを浮かべていた。

その頃、日本帝国では帝国軍中佐である巖谷榮二と同じく帝国軍中尉である篁唯依と対面していた。

「アラスカ……ですか？」

「そうだ、貴様には5月からアラスカのユーコン基地で開始されるX F J計画に我が国初のM S『烈火』を完成させるために参加してもらう」

その言葉に唯依は困惑するが巖谷はそれを承知の上で説明を続ける。

「このXFJ計画にはアメリカ……そしてユニオンも参加する予定だ。このXFJ計画で『烈火』をより完成された機体にすることが貴様の役目となる」

「ユニオンが……」

アメリカの名が出たときは反論しかけた唯依だがユニオンの名前が出るで一応落ち着いた。日本ではアメリカは嫌われているがユニオンはそうでもない。特にミスターブシドーことグラハム・エーカーを尊敬する帝国軍衛士は数多く存在しているのだ。ちなみに唯依もその1人である。

そして唯依はその任務を受け、不満と期待を胸にアラスカに向かう準備を始めるのだった。

そしてXFJ計画の舞台となるアラスカのユーコン基地。そこでは

その実力を認められ、アルゴス試験小隊に所属となっていた褐色の少女、タリサ・マナンドルがいた。

タリサはその日の訓練を終えて同僚であるステラ・ブレイメル、ヴァレリオ・ジアコーザと談笑していたところに彼女たちの上官であるイブラヒム・ドーウル中尉がやってきた。

やってきた上官にタリサたちは姿勢を正して敬礼する。

「今年の5月に日本とアメリカ、ユニオンの協同の戦術機開発計画『XFJ計画』が開始される。それに伴いアメリカから3人の補充要員が追加される。整備兵が1人と衛士が2人だ」

『ユニオン』という単語にタリサはピクリと反応するが何とか平静を保つ。タリサにとってはユニオンは転属を希望する部隊であり、タリサの努力はユニオンに入りたいという感情が大きかった。

「そしてアメリカからの補充要員の到着に伴い、タリサ・マナンドル少尉」

「は、はい！」

不意に名前を呼ばれたタリサはピクリと反応する。

「貴様はアルゴス試験小隊のテストパイロットの任を解き、転属となる」

「は……え!？」

イブラヒムの言葉にタリサは絶句する。エリート衛士の集まりであ

るアルゴス試験小隊から転属となる。しかも先に受けた説明からアメリカからきた衛士が自分の後任になることは容易に想像できた。そのことに不満が残るタリサ。もっとも、その不満もすぐに晴れることになるのだが……

「貴様の転属先は国連軍機動独立部隊『ユニオン』だ」

イブラヒムの言葉をタリサは頭の中で反芻する。ユニオンに転属……誰が？ 勿論自分だ……しばらく呆然としていたタリサだが、すぐに我に返り元気良く返事をした。

「は、はい!!」

「………とはいえ、貴様には転属後もしくはユークン基地にいてもらうことになる」

転属先を伝えたタリサの顔から途端不満が消えたことに若干呆れながらもイブラヒムは説明を続ける。

「先ほども言ったようにX F J計画にはユニオンも参加している。よって、ユークン基地に詳しい人物がいたほうがいいということだな。貴様は転属後、ユニオンからきた隊員の補佐としてユークン基地に滞在するということだ」

こうしてタリサには正式にユニオンへの転属命令が告げられた。

#19 見えぬ者（前書き）

更新です。今回はNTになったことで強化されたタリサの強さのお披露目。

紅の姉妹ファンのかたがた申し訳ない。はじめに言っておくとこれは2人が弱いんじゃないかとタリサが強くなってるだけです。

穴の多い駄文ですがよろしく願います。感想待ってます。

#19 見えぬ者

アメリカ合衆国アラスカ州ユーコン基地。いまだBETAの侵攻を受けず、青々とした自然が残るこの大地……その上空を大自然に不釣り合いな2つの鋼鉄の塊が疾走する。

1機はSU-37UB『チェルミナートル』……ソ連の開発した複座式戦術機であり、ソ連のエースである『紅の姉妹』が搭乗する機体でもある。

この機体に搭乗する『紅の姉妹』……ソビエト連邦軍少尉クリスカ・ビャーチェノワと同じくソビエト連邦軍少尉イーニャ・シエスチナはユニオンに所属しているミーシャと同じく第3計画によって生まれた少女たちである。

「（なぜだ……なぜだ……なんなんだ奴は!?!）」

彼女たちもまたミーシャと同じくリーディングの能力を持つ2人……その2人が乗るチェルミナートルは何かから逃げるような機動を行っていた。

必死にチェルミナートルの突撃砲を『敵』に向けようとする。しかし『敵』はまるでその動きを予知したかのような機動を行い、さらにチェルミナートルのコクピットにロックオン警報が鳴り響く。

「（なぜだ……なぜ……見えない!?!）」

その相手の動きもそうだがクリスカが困惑している理由はもう1つあった。それはリーディングができないということだった。

「（くっ！！）」

クリスカは何度も行使したことが……『敵』に対してリーディングを試みる……しかし……

「（なぜだ……なぜ！？）」

結果から言うとしリーディングはできなかった……いや、正確に言うならリーディングをしても『拒絶』されるのだ。クリスカやイーニャにとってこれは初めての経験だった。それに対する困惑が彼女たちの冷静な判断を奪っていた。

「くっ！」

そしてクリスカは忌々しそうに自分たちが対峙する『敵』……アメリカ製の戦術機、F-15・ACTV『アクティブ・イーグル』を睨んでいた。

一方、チェルミナートルと対峙しているアクティブ・イーグルのクピットに座っているのいるのは数日中には正式にユニオンへの転属となる褐色の少女、タリサ・マナンダル少尉だった。

タリサは残り僅かとなったアルゴス試験小隊での任務を感慨深く感じながらこなしていた。そんな中でタリサに舞い込んだのはソビエトのチームとの共同での広報任務だった。

普段からタリサは何かと排他的なソビエトチームが気に入らなかった。以前、ソビエトチームのエースである『紅の姉妹』にフレンドリーに接したことはあったが彼女たちはタリサが差し出した手を払いのけ、冷笑を浮かべるなどということもあった。このとき、彼女たちがタリサに対してリーディングを行っていたら多少は違ったかもしれないが……

そういった因縁から2人を嫌っていたタリサだが正式にユニオンに配属が決まってからはアルゴス試験小隊の仲間と別れることに一抹の寂しさを感じていたが同時にソビエトチームと顔を合わせることがなくなると思うと清々したといった感じだった。……もつとも、タリサはユニオン配属後もしばらくユーコン基地にいたため顔を合わせる可能性は十分あるということに失念しているタリサだった。

そんな中で命じられた広報任務に最初は嫌がっていたタリサだが彼女はポジティブ思考で楽しみを見出した。即ち、チェルミナートルを背後からロックオンするという悪戯である。

そしていよいよそれをしようとしたとき、タリサを言い知れぬ不快感が襲った。まるで自分の中を覗き見られているような感じ……直感的にその不快感が前方のチェルミナートルが原因であると察知し

たタリサは不快感を露わにして叫んだ。

「人の中に……勝手に入ってくんじゃねえ!!」

オープンチャンネルは使っていなかったため、その声が他者に聞こえることはなかったがタリサの不快感の原因……リーディングを行ったクリスカは驚愕した。リーディングが拒絶されるという初めての感覚に戸惑ったのだ。

一方のタリサは不快感の仕返しも含め背後からロックオンする。もちろんタリサに攻撃の意思はなく、脅かすだけのつもりだった。

だが、リーディングを拒絶され、軽くパニックになっていたクリスカはロックオン警報が響くと反射的に回避し、チェルミナートルの火器管制を実戦モードにしたのだ。

結果、今のような状況になってしまったのだ。クリスカはタリサに本能的な危険を感じ、突撃砲でロックオンしようとするがタリサはそう簡単に捕まらない。

リーディングという利点がなくなった以上、あとは衛士としての技量の問題だがここに新たにタリサに有利な要素が入ってきた。

タリサの持つNT能力である。NTとしての勘の良さと反応速度で巧みにチェルミナートルを翻弄するタリサ。だが、チェルミナートルがやる気になっている以上タリサも油断できない。

『アルゴス3! 直ちに帰投せよ!! 模擬戦闘の許可は下りていない!』

「知るか！向こうがやる気になってんのに止まれるか！」

チェルミナートルが実戦モードになっている以上、止まったらやられるのは目に見えている。

「んな敵意剥き出しで当たるかよ！」

チェルミナートルのロックを外しながら飛行するアクティブ・イーグル。タリサにも火器はあるがさすがに自分の悪戯が原因である以上、2人を殺しかねない武装を使う気にはなれなかった。

いくらタリサの腕が正史よりも上がっているとはいえ腕や足を正確に撃ち抜くなどというどこぞの自由男のような芸当はできない。

そもそもタリサが得意なのは高機動近接格闘だ。しかもビームライフルではなく突撃砲では流れ弾がどこに当たるかわからない。

「（なんとか近接に持ち込んで……）」

タリサはそう考えながらチェルミナートルに接近する機会を窺う。するとタリサを再び先ほどの不快感が襲った。

「っ！？……だから、勝手に人の中に入ってくなって言うてんだろ！！」

再びクリスカのリーディングを拒絶するタリサ。そんな彼女は私たちの進行方向に国連軍の超大型輸送機が存在を察知していた。

それから遡ること数分前、タリサたちの進行上にいた輸送機の中には3人のアメリカ人が乗っていた。1人は金髪、もう1人は茶髪の白人男性だったがもう1人は日系人だった。

「まったく、ホントお前は日本嫌いだなあ、おい。自国内にハイヴを抱えてる日本独自の戦術機運用理論とか俺はすげえ興味あるけどな。しかも今回の計画は初めてのユニオン製じゃないMSだぜ？それだけでもすげえじゃねえか」

彼らは今回のXFJ計画のためにユーコン基地へ向かう人物であり、先ほどから話している金髪の男性は整備士のヴァインセント・ローウェル軍曹。

「ふん、こっちから技術提供することはあってもアメリカが日本から学ぶことなんかねえよ。だいたいサムライだかニンジャだか知ら

ねえがBETA相手に接近戦やろうなんて考えてる時点であいつら相当のバカだぜ。そんな運用、時代遅れもいいとこだ。どうせMSだって名前だけの機体に決まってる。アメリカだって作れてないもんを日本が作れるかよ」

ヴィンセントの言葉にこたえるのは日系人のユウヤ・ブリッジス少尉。彼はとある事情から日本に関連するものを悉く嫌っていた。

「けどよ、ユウヤ。あのユニオンのミスターブシドーが乗ってる機体だって近接戦闘型だぜ？」

「ふん……それだって実際どんなもんかわかんないだろ？アメリカ人のくせに日本人みたいな戦い方する奴なんてよ」

ヴィンセントの言葉にユウヤは悪態をつく。するとユウヤの後ろの席から茶髪の白人男性が乗り出してきた。

「へっ。ブリッジスよお、同族をそこまで嫌悪するもんじゃねえぜえ？まあ、猿どもがMSを作るわけねえってのは同感だけどよお。ミスターブシドーだって噂ほどじゃねえだろうよ。映像なんざいくらでも改竄できんだからよ」

ユウヤに向かってにやけながら話しかける茶髪の白人男性の名はゲイル・クラウザー少尉。ユウヤやヴィンセントとは同じ部署に所属しており、アメリカの中でも特にアメリカと他国との差別意識が強い問題児で、もといた部署でもいろいろと問題を起こしていた。

「俺はアメリカ人だ！」

「半分は……だろ？黄色い猿とのハーフがよお」

ゲイルの言葉に反論しようとするユウヤ。だが、突然輸送機が激しく揺れた。

「なんだ？再アプローチか？」

突然の揺れに疑問符を浮かべるヴィンセント。一方のユウヤは急いで窓の外を覗きこみ、周囲の状況を確認する。

「っ！？」

するとユウヤは確認を終えると急いで操縦室に駆け込む。そこでは訓練空域を外れた戦術機2機が後方から急接近しているとのこと。パイロットが大慌てしていた。

「ダメだ！高度を上げるな！このまま滑走路に突っ込め！」

ユウヤはそう言うのと同時にパイロットを押しつけ、輸送機の操縦桿を押していた。そしてそれからすぐに輸送機の直上を2機の戦術機が通過していった。

「少尉、助かったよ。あのまま上昇していたらぶつかっていた」

パイロットの礼の言葉も聞き流しながらユウヤは2機の戦術機が通り過ぎて行った方向を見つめていた。

輸送機を回避したアクティブ・イーグルの背後にはチェルミナートルが張り付いていた。

「よし、これなら……」

タリサは背後に張り付いているチェルミナートルの姿に自身のオリジナルコンビンションを披露する機会を窺う。一方、チェルミナートルに搭乗しているクリスカは冷静さを失っていた。

「くっ！なんなんだ貴様は！？」

2度目のリーディングの拒絶はクリスカの冷静さを失わせるには十分だった。1回だけなら何かの間違いかとも思えたが2回続くともはや確信できた。『この敵にはリーディングが効かない』……と……

人間は今まで当然のようにできていたことが突然できなくなると冷静さを失うことは多々ある。しかも相手から意図的にリーディングを拒絶された……そんなことができる人間がいるなど聞いたことがない。

可能性があるとするればESP能力者という可能性だが……今のクリスカにそこまで冷静に判断することはできなかった。

「落ちろ！」

クリスカはチェルミナートルの突撃砲をアクティブ・イーグルに向ける。しかし、いざ引き金を引こうとした瞬間、アクティブ・イーグルは急減速、縦横反転し、まるで木の葉のように舞った。

「なに！？」

それによってチェルミナートルの突撃砲はターゲットを見失った。冷静な時ならば対処できたかもしれないが冷静さを失った彼女にはそれに対処できなかった。

「よし！これで！」

一方、自身のオリジナルコンビネーション……失速域機動でかわし、相手に追い抜かせる『ククルナイフ』と名付けられたその機動が綺麗に決まったことに内心ガッツポーズしながらアクティブ・イーグルの短刀を振りかざす。

「終わりだ！」

「ぐう！」

アクティブ・イーグルの短刀はチェルミナートルの跳躍ユニットを破損させた。結果、チェルミナートルは見る見るうちに高度を下げて行った。

「ふう……」

タリサはチエルミナートルが無事に着地したのを確認すると溜息をつく……が、戦いが終わったことへの安堵感でこの後に落とされる上官からの雷のことをまるで考えていなかった。

#20 着任と不協和音（前書き）

今回は結構早く更新できました。

ちなみにオリキャラのゲイルですがそんなに重要なキャラじゃないです。

穴が多い駄文ですがよろしくお願いします。

もし良かったらあとがきもどうぞ。

#20 着任と不協和音

「おい、ユウヤ！見てみるよ！」

あの騒動の後、輸送機から降りたユウヤとヴィンセント、ゲイルは滑走路から軍用車に乗ってユーコン基地に向かっていった。

さらに滑走路で戦術機を降り、簡易メディカルチェックを済ませたタリサも同乗している。ユウヤとヴィンセントは2列目のシートに、タリサとゲイルは3列目のシートに座っている。

「凄えなあおい！こりゃあ戦術機の見本市だぜ！」

目の前に広がる戦術機の姿にヴィンセントが興奮する。ユウヤはその中にアメリカ製第二世代戦術機『F-15E ストライク・イーグル』を目にして心が落ち着くを感じていた。そしてそれと同時に先程のアクティブ・イーグルとチェルミナートルの格闘戦を思い出す。

「（ふざけるな……あの程度で俺が気後れしてるとでもいうのか？……いや違う、俺がこんな気持ちになっているのはやっぱり日本との共同開発が気に食わないからなんだ！）」

日本人を蔑むユウヤにとってはこの計画自体が気に食わないことだった。

「お、見ろよユウヤ。さっきの奴もあるぜ」

ヴィンセントの目線の先にはほんの数時間前にタリサが乗っていた

のと同じアクティブ・イーグルが立っていた。

「なあ、あれってイーグルの新バリエーションだろ？ 凄え空中機動能力だったよね？ エンジンは何に換装してあるの？ 最高出力は？」

ヴィンセントは身体を捻って後ろの席に座るタリサに矢継ぎ早に質問する。質問されたタリサはその馴れ馴れしさに呆れたような目線を向ける。

「あんたさあ、整備兵のくせに何も知らないんだね」

「は……？」

タリサの言葉にヴィンセントの笑みが引きつる。

「あれはだいぶ前に作られたF-15の高機動実験機だよ。試作機いろんな技術取り入れてピーキーだね。写真ぐらい見たことないの？ だいたい今時MSが出回ってるってのに戦術機でそんなに興奮するもんじゃないだろ？」

とげのある言い方でタリサはヴィンセントに言葉を続ける。

「いやあ、写真は出回らないんじゃないかな？ 一応あれも軍事機密だろうし……それにMSはそんなに多く配備されてるわけじゃないし……ははは……」

ヴィンセントは必死に作り笑いを維持する。タリサはその言葉に「ふーん」と返す。

「あんたたちさ、さうとう田舎から来たんだ？ だいたいアメリカは

MSを前線に出したことなんかないじゃないか」

「あははは、確かにネバダのグルームレイクは田舎っちゃあ田舎だけどね」

わざわざ州の名前を口にすることで自分たちが高名な基地に所属していたことを教えようとする。……しかし……

「ああ、やっぱり」

タリサは本当に知らないというように言葉を返す。

「やっぱりって……知らない？グルームレイク基地って……エリア51とかさ？」

「知らねえよ、そんな3流の基地」

即答するタリサについてヴィンセントの顔から笑みが消えた。

「米軍だか何だか知らねえけど、片田舎の州兵風情が来ていい場所じゃねえんだよこは」

「おいちよつと待て！が片田舎の州兵どころ？」

「あんたでしょ？」

タリサにヴィンセントが食って掛かる。

「お前こそエリア51も知らないおのぼりさんのくせによ！エリア51はな、世界最大最強の先進技術研究所なんだよ！俺らはそこか

らわざわざこんな僻地にきてやってんだ！ありがたく思え！」

自分たちの基地がどれだけ凄いかをタリサに教えようとするヴィンセント。だが、タリサにとってはどうでもいいことだった。

「さっきの格闘戦見てた？後方でのうのうとしてる連中とは次元が違うんだよ」

タリサはこう言っているが実際タリサがアメリカを気に入らないのは明星作戦での出来事も関係していた。ハイヴが攻略可能だったにもかかわらず味方がいる中にG弾を落としたことは明星作戦に参加していたタリサには許せないことだった。もちろん同じアメリカ人でもユニオン所属の人間は別だが……

「だいたい世界最大最強？アメリカ最大最強の間違いだろ？世界最大最強の先進技術はユニオンだろうが」

タリサの言葉にヴィンセントは苦虫をかみしめたような顔になる。

「う……この、小娘だと思って甘やかしてりゃいい気になりやがって！おいユウヤとゲイルもなんか言ってやれ！」

ヴィンセントがそういうとタリサはユウヤとゲイルのほうを見る。

「まあ確かにな。お嬢ちゃん、ちょっと調子に乗りすぎじゃねえの？」

さっきから会話を聞いていたゲイルはタリサに睨みつける。

「はっ、ホントのこと言われて怒ったの？こんなんじゃないそのナント

カ基地の衛士の腕も大したことなさそうだね」

「な!？」

タリサの言葉にゲイルは怒りを露わにする。するとヴィンセントはユウヤを指さす。

「お前バツカじゃねえの? こいつがいなかったらお前さっき輸送機に激突してたんだぜ?」

「はあ?」

なにいつてんだこいつ……といった目線でタリサはヴィンセントを見る。

「あの時ユウヤがアントノフの上昇を止めて降下させてなかったら今頃……」

「ヴィンセント」

「おう、なんだ? お前もこいつに自分の武勇伝を語ってやれ!」

「着いたぞ。降りる準備しろ」

殺風景な司令部のエントランス正面で軍用車から降りたタリサたちの答礼を受けた兵長は軍用車を駆って元来た道を去って行った。

「あんたに一言言っとくけど、あんた何もしてないだろ？」

「ああ、俺は輸送機を予定通りのコースに戻ただけでお前らが避けたんだ」

「お、おいユウヤ？」

どうやらユウヤはそのことに気づいていたらしい。タリサはそのことに関心なさげな表情だ。

「ふーん、まあわかってんならいいけどさ。田舎者はそう謙虚じゃなきゃね。あんたも見習ったら？自称最強部隊の整備士さん？」

タリサが馬鹿にしたような視線をヴィンセントに向ける。

「……こんのガキヤ〜〜〜〜」

「ほらほら、ダメでしょそんな口利いちゃ。謙虚謙虚〜〜〜」

ヴィンセントにまだバカにする笑いを浮かべるタリサ……だが……

「タリサ・マナンドル少尉！」

「いっ!？」

エントランスにタリサのフルネームが響き渡るとタリサは感電したように姿勢を正す。ユウヤやヴィンセント、そしてゲイルすらもいきなりの怒声に肩をピクリと揺らしている。

タリサの背後に立っている男性は中東出身を思わせる風貌に中尉のフライトジャケット、そして胸に衛士の証であるウイングマークがある。タリサの上官であるイブラヒム・ドーウル中尉だった。

「マナンドル少尉、謙虚とは貴様のような人間にこそ必要な言葉だとは思わんか？ 国連軍の名誉ある広報任務を預かっておきながら…貴様は自分が何をやらかしたかわかっているのか？ 勝って帰ってきたのは流石というべきだが…最後の任務でわざわざ問題を起こすとは……」

「は…ひ……」

イブラヒムの声のトーンを落とし、目を細める。

「貴様を締め上げるのは後だ！こいつらへの用事を済ませるまでに俺への言い訳を考えておけ！」

「はっ！……って痛！」

イブラヒムから発せられる怒声に敬礼するタリサだが勢いをつけすぎて敬礼した手が手刀となって頭に直撃した。その姿をゲイルとヴィンセントは笑い出しそうになるのを必死にこらえていた。それを見たタリサは2人を睨みながら逃げるようにその場を走り去っていった。

「まったく、腕は確かなのだが……さて、貴様たちが米軍から来た助っ人か？」

タリサを見送ったイブラヒムはユウヤたちに向き直る。

「ゲイル・クラウザー少尉、ユウヤ・ブリッジス少尉、及びヴィンセント・ローウェル軍曹、現時刻を持って着任しました」

ゲイルがそういうとユウヤとヴィンセントも敬礼する。

「私は貴様らが所属するアルゴス試験小隊を指揮するイブラヒム・ドール中尉だ。転任早々盛り沢山だったな」

するとイブラヒムは爽やかに微笑み、右手を差し出す。

「ようこそ最前線へ」

翌日、ユーコン基地のブリーフィングルームに6人の人影があった。アルゴス試験小隊のイブラヒム・ドーウル中尉にタリサ・マナンダル少尉、ヴァレリオ・ジアコーザ少尉とステラ・ブレームル少尉。そして先日着任になったユウヤとゲイルである。

タリサに関してはまだユニオンの隊員が到着していないので到着次第任を解かれることとなっている。

現在はイブラヒムが『フェニックス構想』の下りと『XFJ計画』に組み込まれることの説明を行っていた。

「……さて諸君。紹介が遅くなったが彼らが本日付で編入となったユウヤ・ブリッジス少尉とゲイル・クラウザー少尉だ。出身は合衆国陸軍戦技研部隊、何とも頼もしいエリート衛士たちだ」

イブラヒムの突然の紹介にユウヤとゲイルは目礼する。ユウヤは興味なさげに隊員を見ていたがゲイルはしきりにステラのほうに厭らしい視線を向けている。

そんな2人に他の3人は特に反応を返していなかった……いや、タリサだけはかなり不機嫌だったが。

「こんな地の果てに飛ばされるとは、よほど普段の行いが良かったということなのか……」

イブラヒムの言葉は実は結構的を射ていた。主にユウヤよりもゲイルのほうが……だが……

「では、我が隊の恥ずかしがり屋どもに代わり、私が紹介しよう。貴様らの右側に座っているのがイタリア軍のヴァレリオ・ジアコーザ少尉だ」

ヴァレリオはユウヤとゲイルに視線を向ける。

「前に座っているのがスウェーデン軍所属のステラ・ブレーメル少尉」

ステラはわずかにユウヤたちのほうを向くと頷く。

「そしてネパール軍のタリサ・マナンダル少尉……はもう十分に知っているな。最後に私はトルコ軍から派遣されているイブラヒム・ドール中尉だ」

イブラヒムの自己紹介が終わるとユウヤとゲイルはあることを思い浮かべた。それはこの場の4人がすでにBETAによって失われた

国の人間だということだ。

「（けっ、寄せ集めの負け犬どもかよ）」

そう考えているのはゲイルであつた。もつとも、上官の手前、口に出すことはなかったが。

「さて、自己紹介も終わったところで本題に入る。先程も説明したとおり我々アルゴス試験小隊は『XFJ計画』に協力することになった。それに伴い、『XFJ計画』の専任テストパイロットとしてユウヤ・ブジッリス少尉、あと数日で転属となるタリサ・マナンドル少尉の補充要員としてゲイル・クラウザー少尉が配属されたわけだが……」

タリサが転属になるということを聞いてユウヤとイブラヒムは視線をタリサに向ける。特にゲイルは嘲笑うかのような視線である。タリサの転属先を知らない彼は彼女が左遷されるものと思ひ込んでいるのだ。

一方のユウヤはタリサの腕で左遷されるということがどうにも腑に落ちていないようだった。ユウヤとタリサの関係は現在険悪だが少なくともユウヤはタリサの腕だけはそれなりに認めていた。

「そこで本日のカリキュラムだがブリッジス少尉、クラウザー少尉の着任祝い代わりに演習を行う。『CASE・47』だ」

『CASE・47』……それは『戦術機を使用するテロリストとの戦闘を想定したカリキュラム』という建前の対人類戦術訓練プログラムである。

「では編成を発表する。A分隊、ジアコーザ少尉、リーダーはクラウザー少尉」

そう呼ばれるとヴァレリオとゲイルが手を上げる。

「B分隊はブレーメル少尉、リーダーはブリッジス少尉」

そう言われ、ユウヤとステラも頷いた。……が、タリサは面白くなさそうな顔だ。

「なお、ブリッジス少尉は1番機、クラウザー少尉には2番機に搭乗してもらう」

「あの……」

イブラヒムの言葉にタリサは質問する。

「なんだ？」

「アタシは？」

その質問にイブラヒムはため息をつく。

「貴様はあと数日で転属になるんだぞ？ ならば隊に残るもので編成するのは当然だ」

タリサはそう言われて返す言葉もなかった。もともとタリサはあの2人に自分の實力を見せつけてやりたいと思っていただけなのだ。

その後、ハンガーにはアルゴスの面々が集まっていた。ちなみに暇を持て余していたタリサはヴァレリオとステラにくつついてハンガーに来ている。

「しかしテメエ良いざまじゃねえか。俺たちがきた途端左遷とだよ」

ゲイルはハンガーについてきていたタリサに嫌味を言う。しかしタリサはそんなものど吹く風だった。

「はん、アタシにしてみたらVGとステラが可哀そうでしょうがねえよ。アンタらみたいなのと小隊組まなきゃなんねえんだからな」

「けっ、負け惜しみも大概にしるよ？左遷されちまう負け犬がよ」
そう言いながらゲイルは2番機に乗り込んでいくのだった。

アルゴス試験小隊がハンガーから出た後、タリサはモニターで模擬戦の様子を見ていた。すると隣に先程までユウヤとゲイルが乗る『アクティブ・イーグル』の整備をしていたヴィンセントがやってくる。

「よう、聞いたぜ。左遷されるんだってな」

ヴィンセントがからかうような顔でタリサを見る。

「言ってる。まったくいつもこいつも」

タリサはウンザリしたような表情になる。実際、同じことを何度も言われればそうなるのもわかる。本当は左遷ではないのだが……タリサには何故か今すぐに訂正する気になれなかった。どうせあと数

日なのだ。その後正式に配属になった時のユウヤたちの驚いた顔は笑えるだろうな……と悪戯心を抱いていたため、ゲイルたちのやっかみも逆におかしく感じていたのだった。

一方、画面の向こうではユウヤとゲイルのアクティブ・イーグルが戦っている。戦況はどちらかというとユウヤのほうが有利に見える。ゲイルはどちらかというと突出しがちでユウヤとステラに比べ連携が取れていないようだった。

結果、ユウヤに気を取られたゲイル機がステラに狙い撃たれ、B分隊の勝利となった。……のだが、問題はこれから起きた。

演習を終えたユウヤが隣の区画で演習をしていた『紅の姉妹』のチエルミナートルにペイント弾を撃ったのだ。

ハンガーに戻ってきたユウヤはヴィンセントに絡まれていた。

「お前何やってんだよ？」

「うるせえな、ほんの挨拶代わりだよ」

そんなやり取りをしているところにゲイルがやってきた。

「おい、ブリッジス。今日でデメエのが上だなんて思うんじゃないぞ？今回は乗りなれねえ機体だったからまぐれで勝てたんだからよ」

来るなりいきなりユウヤとステラに負けたことに悪態をつくゲイル。その光景を見ていたタリサにステラやヴァレリオも彼らのもとにやってきた。

「おい！負け惜しみ言ってるじゃねえよ！」

ゲイルの態度に問題を感じたタリサが注意する。ユウヤもゲイルもどっちも気に食わないタリサだが流石にこのゲイルの物言いはいただけない。

「うるせえ！左遷されちまう雑魚は黙ってる！」

「いい加減にしろ。今回のことはあなたがチームワークを無視したのが原因でしょう？しっかり連携をとっていたブリッジス少尉のほうが上よ」

ステラも仲裁に入る。ユウヤは前もってステラに連携のことで軽く打ち合わせをしていたがゲイルはそれをまるでしていなかった。そのことを指摘されるがゲイルはとまらない。

「うるせえうるせえ！亡国の負け犬どもが俺に意見すんじゃないやねえよ！」

「デメエ……」

その言葉にヴァレリオやステラも瞳に怒りの色が混ざる。ユウヤやヴィンセントもゲイルに侮蔑の視線を向けている。

「この野郎！言いたい放題言いやがって！ぶっ殺す！」

そして沸点の低いタリサはゲイルに殴るために詰め寄ろうとする。それを見たゲイルは舌打ちしながらその場を去って行った。

「デメエ待ちやがれ！」

追いかけてようとするタリサだがステラに抑えられた。

「おいおい、アイツいつもああなのか？」

するとヴァレリオがユウヤとヴィンセントに問いかける。ヴィンセントは敬語で答えようとするがヴァレリオに普通でいいと言われた。

「ああ、前から差別意識が強すぎるんだよ。アメリカにも差別する奴はいるけどあそこまでの奴はそうそういねえ。それに実力はあるけど連携を無視することがあるんだよ」

ヴィンセントの言葉に「なるほどねえ」とヴァレリオは納得する。

おそらくゲイルがここに飛ばされてきたのはそれが理由なのだろう。

こうして不吉な暗雲を漂わせながらも物語は進んでいった。

#20 着任と不協和音（後書き）

以上#20でした。

オリキャラのゲイルはぶっちゃけ救いようがないキャラです。

しばらくしたら退場するかも……

#21 与えられる力（前書き）

更新です。今回ついにグラハムとタリサが対面。そしてタリサの機体が公開されます。

一応設定資料集のほうも追記しておきました。

穴だらけの駄文ですがよろしく願います。

#21 与えられる力

ユークン基地の統合司令室。そこにユウヤとヴィンセントは呼び出されていた。

「ユウヤ・ブリッジス少尉、出頭しました」

「同じくヴィンセント・ローウェル軍曹であります！」

ユウヤとヴィンセントが目の中の男性に挨拶する。2人とも相応に硬くなっているがそれも当然。目の前には自分たちよりも遥かに上位の階級の人間がいるのだ。

「ご苦勞だったな。『プロミネンス計画』を預かるクラウド・ハルトウィックだ。楽にしたまえ」

机の向こうにいる初老の佐官が答礼の手を下すとユウヤとブリッジスは休めの姿勢を取る。

「どうだ、アラスカは？ ネバダと違って寒いだろう？」

「はい、大佐殿」

ピタリと返事が揃った2人にクラウドは穏やかな笑みを浮かべる。

「なんだ貴様ら、米軍出にしてはお硬いな。ここは荒くれ共が集まる筈なんだが……上官に対する礼儀は最低限でいい。普通に話せ、普通に」

テストパイロット

「はあ……」

クラウドの言葉にユウヤは困惑の表情を浮かべる。

「何か言いたいことがあるなら質問も適宜していい。『プロミネンス計画』では形式よりも合理性を重んじるのだよ、少尉」

「合理性……でありますか？」

「ここは実験部隊だぞ？ 過剰な形式を再現するなどという時間や労力を割いてはならん。特にテストパイロットはな」

その言葉にユウヤは何か納得したような表情になった。

「さて、もう少し貴様らと親交を温めたいところだが、そうもいかん」

そう言ってクラウドはユウヤたちに背を向けて歩き出す。そのとき、ユウヤたちは初めてこの部屋に先客がいることに気づいた。どうやら緊張のあまり見落としていたらしい。

奥の4人掛けのソファーには黒縁眼鏡の男性が、手前には国連軍の制服を着た女性が1人、その横には国連軍とはデザインが違う深緑色の制服を着た少女。そしてなぜ気づかなかったのか疑問に思うほどに目立つ存在……少女と同じ深緑色の制服に陣羽織を羽織り、黒い仮面をつけた金髪の男性が壁に寄りかかり、腕を組んで立っていた。

「貴様らをここに呼んだ理由……それは今後アルゴス試験小隊が受け持つ『XFJ計画』についていろいろ説明するためだ」

クラウドの言葉にユウヤは国連軍の制服を着た女性をみて嫌な気持ちになる。その女性が日本人だということに気づいたのだろう。

「紹介しよう。彼女は『XFJ計画』の開発主任であるユイ・タカムラ中尉だ」

すると唯依は立ち上がり、ユウヤとヴィンセントに敬礼する。

「篁唯依中尉だ。ブリッジス少尉、ローウェル軍曹、よろしく頼む」

「イエス、マム！」

ヴィンセントは嬉々として返事を返す。しかしユウヤは敬礼をしたまま押し黙っていた。

「次にこちらが技術顧問のフランク・ハイネマン氏だ」

「ハイネマンです。民間からの出向ですがあなた方と共に働けることを光栄に思います」

笑顔を浮かべているハイネマンはユウヤに手を差し出し、ユウヤは1度敬礼してからその手を握り返した。

「ブリッジス少尉は大変優秀な衛士だと伺っています。よろしくお願ひしますよ」

「どうも……」

ハイネマンとユウヤが握手を終えるとユウヤとヴィンセントの視線

は残りの2人……明らかに見たことのない制服を着た仮面の男性と
唯依よりも年下のブロンドの髪少女にそそがれる。

「そして最後に、国連軍独立機動部隊『ユニオン』から技術提供に
来てくださったグラハム・エーカー大佐とキャシー・ルーファ中尉
だ。エーカー大佐のことは貴様らも聞いたことがあるだろう」

それを聞くとユウヤの眼が驚きで見開かれる。

「（こいつが……ミスターブシドー！？）」

必死に驚きを隠しながらユウヤとヴィンセントはグラハムとキャシ
ーに敬礼する。

「国連軍独立機動部隊『ユニオン』隊長のグラハム・エーカー大佐
だ。ブリッジス少尉、ローウェル軍曹、よろしく頼む」

「同じく国連軍独立機動部隊『ユニオン』技術副主任のキャシー・
ルーファ中尉です。若輩ですがよろしくお願いします」

「「よろしくお願いします！エーカー大佐、ルーファ中尉！」」

先程のクラウスの時と同様に2人の返事がピッタリと一致する。世界
に名を馳せるユニオンの隊員と対面して緊張したらしい。

「さて、ブリッジス少尉。貴様は『XFJ計画』をどの程度理解し
ている？」

「はっ、日本帝国が開発した初のユニオン製ではないMSをより米
国企業の協力で完成された機体にすること……と認識しています」

「結構だ。表向きの情報としては申し分ない」

「表向き？」

ユウヤが思わずそう問い返すがその疑問はヴィンセントによってかき消された。

「ハイネマンさん、それってどういうことですか？」

ハイネマンと技術的なことで意気投合したヴィンセントが訊ねる。

「それがわざわざあなた方だけを大佐がお呼びした理由なんですよ」

その台詞にユウヤは疑問符を浮かべる。

「ふふふ……勿体ぶられるのは我慢ならないという顔だな？結構、それでこそテストパイロットだ。2人ともきたまえ、いいものを見せよう」

「あ、あの……」

するとヴィンセントがクラウドに質問する。

「なにか質問か？」

「は、はい。あの、なぜ我々2人だけでゲイル・クラウドー少尉はお呼びにならなかったのでしょうか？」

ヴィンセントの疑問はユウヤも思っていた。ゲイルも自分たちと共

にこの基地に着任したのだから呼ばれると思っていたのだが……

「クラウド少尉と貴様たちは違う。ブリッジス少尉は『XFJ計画』のテストパイロットでローウェル軍曹はその専属整備士だ。だが、クラウド少尉はアルゴス試験小隊から出る欠員の補充要員だということだ」

つまりはこういうことなのだろう。ユウヤとヴィンセントは『XFJ計画』の主要機体を任されるがゲイルは単なる補充要員。この場に他のアルゴス試験小隊のメンバーが呼ばれていないのと同じだということだ。

それから数十分……幾重ものゲートを潜り抜けた先にそれはあった。厳重な監視の先の格納庫のライトが照らされるとそこに灰色の機体が鎮座している。

デザインはこれまでの帝国の機体とは異なっており、ザクウォーリアに通じる形状で頭部には僅かに帝国の不知火の面影があるがやはりどこか違う。

その機体をみたグラハムはあることを思い浮かべる。

「（ふむ、運命の悪戯か……この機体、やはりジンに似ているな）」

そう、他の人間は知らないことだがこの機体の形状はどこかジンに似ている。もちろん細部は違うが……

「これが……烈火……」

明らかに戦術機とは異なった形状にユウヤは思わず呟いた。

それから数時間後、『烈火』のある格納庫を出たグラハムとキャシーはユーコン基地のブリーフィングルームの1つに来ていた。

「キャシー、日本製の機体……『烈火』をどう見る？」

「性能という面ではザクウォーリアには及ばないでしょう。ですが従来の戦術機に比べれば格段に性能は高いと思います」

グラハムの質問にキャシーが素直に答える。

「ふむ……しかし日本が最も早くMSを完成させるとはな……」

「それだけ必死なんですよ。ハイヴを自国に抱える国はアメリカと違って余裕がありませんからね。もしかしたら他の国もMSの開発に成功するかもしれませんがね」

そうして2人が話していると扉の向こうから声が聞こえた。

「た、タリサ・マナンダル少尉です！失礼します！」

扉が開くと柄にもなくガチガチに緊張したタリサが入ってきた。

くの更衣室に移動した。ちなみにタリサはいまだに顔が赤い。

「私は技術副主任のキャシー・ルーファ中尉。よろしくね？」

「あ、はい！よろしくお願いします中尉」

自分よりも階級が上だとわかりタリサは敬礼する。

「あはは、そんなに固くなくていいよ。ユニオンでは公の場ではとにかく普段ではあんまり敬語って使わないし……タリサって呼んでいい？私のことも普段はキャシーでいいから」

キャシーは先程と打って変わり、フランクな口調になる。キャシーはこちらのほうが地で敬語は公の場かグラハムやカタギリの前でしか使わないのだ。そしてキャシーは同年代のタリサに友好的に接しようとしていた。

「……あ、んじゃあ…わかった」

タリサが口調を元に戻すとキャシーは持ってきていた荷物をタリサに渡す。それはタリサのサイズに合わせて作られたユニオンの制服（デザインはアロウズと同じもの）だった。ちなみにサイズはあらかじめ国連のタリサのデータから作られたものである。

「それに着替えてね？それがユニオンの制服だから」

「へえ……」

もそもそとタリサは先程まで来ていた服を脱いで制服を着ていく。不慣れなところはキャシーに手伝ってもらいながら着替えを終えた。

「うん、似合ってるよ♪」

「そ、そうかな？／／／」

キャシーの言葉にタリサは少し照れくさそうにする。

「ところでさ…タリサって大佐のこと好きなの？」

「ぶっ！な、ななななんで！？／／／」

いきなりの質問にタリサは噴出した。そりゃそうだ。いきなりそんなこと聞かれてしかも凶星なのだから。

「やっぱり…あ、1つ言っとくけどさっきの大佐の台詞は真に受けないほうがいいよ？大佐って結構あいう言い回しが多いから。まあタリサとの再会を喜んでるのは確かだけどね」

「あ、そうなのか…」

キャシーにそう言われ、タリサはシュンと俯いてしまう。

「けど、脈なしってわけじゃないよ？大佐だってタリサに興味以上の感情は持ってるって話だし」

これは3年前にタリサと約束した日にグラハム自身が言っていたことだ。キャシーはここに来る前にレオンに聞いていたのだ。

「とにかく頑張ってるね。私も応援してるから」

「お、おう／＼／＼／＼／」

するとキャシーとタリサは更衣室を後にし、グラハムのところまで戻ってきた。

「大佐、お待たせしました」

「構わんよ。女性を待つのは男の嗜みだ……ふむ」

グラハムは戻ってきたタリサに視線を向ける。

「制服のサイズは問題なかったようだな。よく似合っているぞタリサ」

「っ！？／＼／＼／＼／」

グラハムに褒められ、タリサは再び顔を真っ赤にする。もっとも、グラハムに名前で呼ばれたことも関係しているだろうが基本的にグラハムは部下を名前で呼ぶので珍しいことではない。

「では行くぞ」

それから数分後、グラハムはキャシーとタリサを連れてユニオンのMSが置かれている格納庫に来了。そこには2機のMSが置かれていた。1機はまるで戦闘機のような姿ではあるがどこどこにMSの腕や足が確認できる。

「この機体は？」

タリサが疑問をキャシーに問いかける。

「これは大佐の機体。大佐のもとの専用機『スサノオ』は今改修中でさ、こっちにいる間はこの機体に乗るの。GNドライヴ搭載機じゃないんだけど大佐が乗りなれた機体だからね」

そう、グラハムがこちらに持ってきたのはかつての搭乗機であった『グラハム専用ユニオンフラッグカスタム』である。

ちなみによく間違われるが『オーバーフラッグ』とはこのフラッグカスタムをもとにした機体であり、オーバーフラッグにはパイロットの安全を考慮し、耐Gリミッターがつけられている。そのためリミッターが付いていないこのフラッグカスタムのほうがオーバーフラッグよりも性能が上である。

そしてもう1機……フラッグカスタムの横にまったく別のMSが鎮座していた。

「この機体が……タリサ、君に乗ってもらう機体だ」

グラハムに言われ、タリサはその機体を見上げる。真紅のカラーリングにまるで鎧武者のような外観。背中にはビームキャノンが、腰には2本のビームサーベルが装備されている。

「型式番号GNX-704T／AC……正式名称『アヘッド近接戦闘型』、通称『サキガケ』……ジnkスの発展機であるアヘッドを近接戦闘用に特化させた機体。タリサにピッタリでしょ？」

キャシーが機体の説明をする。確かに高機動近接格闘戦を得意とするタリサには相性のいい機体である。

「もとは私の乗っていた機体だ。この基地にいる間はこの機体に乗って訓練をしてもらう。私も君の訓練に付き合えるしな」

それを聞いた瞬間、タリサの心は言い知れない喜びに満たされた。自分がこれから乗るのはグラハムが昔乗っていた機体。それに乗れるのはタリサにとってかなり喜ばしいことだった。

「さて、機体の説明はこれぐらいでいいか……もう1つ君に教えておかなければならないことがある……それはNTの存在だ」

「ニュー……タイプ？」

グラハムから発せられた聞き覚えのない単語にタリサは疑問符を浮かべる。そしてグラハムはタリサに『人の革新』と呼ばれるNTの

存在を話した。自分以外のNTと感応し合う能力やNTだけが扱うことができる武器があること。そして常人には感じないものを感じることができる能力のこと……

「それって……」

タリサはその能力に心当たりがあった。というより今日まで自分が使ってきた能力がそうなのだと言信が持てた。

「おそらく君がNTに覚醒したのは私と出会ったからの可能性が高い。実質、今現在この世界に存在しているNTは私と君の2人だけだ」

NTは生まれながらにその素養を開花させるものもいるが中にはすでにNTに覚醒したものと出会うことで覚醒したり、その能力が強くなる可能性もある。そういったことをグラハムはタリサに説明していく。

「その点について……すまないと思っている。NTに覚醒することは利点もあるが危険もある」

NTに覚醒したもの、または素養を持つ者は初めて乗っただけである程度MSを動かせたり相手の殺気や敵意を感じ取ることができる。しかし人の死を感じやすく、下手をすれば死者に心を引っ張られたり、場合によっては精神崩壊を起こす者もいる。

タリサも明星作戦で投下されたG弾により多数の人間の死を感じたことがある。かつて覚醒したNTの中にもそう言った経験をした者はいた。

「あ、謝らないでください！大佐は悪いことしてねえし……アタシはこの力を手に入れたの結構嬉しいんですから」

タリサもNT能力に目覚めていいことばかりではなかった。明星作戦のあと何度か人の死を感じることはあったし、今でこそ馴れたが当初は気分が悪くなることも多かった。

だが、それと同時にこの能力に目覚めた切っ掛けがグラハムと出会ったことであつたのが嬉しかったのだ。

「そうか……では少し訓練をするか？キャシー、予定は？」

NTについての説明を終えたグラハムはうつすらと笑顔を浮かべるとキャシーに予定を確認する。

「問題ありませんよ。存分にどうぞ」

そしてこの日、タリサはシミュレーションでグラハムと訓練を行っていた。

好意を寄せる人との訓練とあり、タリサのやる気が漲っていたのをここに記しておく。

#22 圧倒（前書き）

更新です。今回はユニオンとアルゴス試験小隊の顔合わせです。

いつもどおり穴だらけの駄文ですがよろしくお願いします。

もし良かったら感想お願いします。

#22 圧倒

タリサが正式にユニオンに配属されてから2日。タリサはグラハムと共に訓練に励んでいた。

この2日でタリサは持ち前の技量とNTとしての適応力の高さ故か次第にMSによる戦闘をモノにし始めていた。

基本的にやっていることはまず空中で光線級の攻撃を回避することだがそれもほとんど回避することができるようになっていた。

「(やっぱ、大佐はスゲェ……)」

シミュレーターで対BETA戦を行うタリサは改めてグラハムの強さを肌で感じていた。スペック上、自身が乗るサキガケに劣るフラッグカスタムではあるがそのスピードを活かし、光線級の攻撃を回避してリニアライフルで撃ち抜いていく。

「けど、アタシだって！」

タリサはペダルを踏み込んで高速で移動し、GNショートビームキヤノンを撃って光線級を撃ち抜く。

「こんのお！」

そして次の瞬間タリサは大型GNビームサーベルで突撃級と要撃級を切り裂いた。

『状況終了、帰投してください』

タリサが突撃級と要撃級を切り裂いたのと同時にグラハムもBET
Aを殲滅し終え、CP役をしていたキャシーから通信が入った。

通信を聞いたグラハムとタリサはシミュレーターを降り、タリサは
すぐにグラハムのもとに駆け寄っていく。

「タリサ、やはり君は腕がいい」

「あ、ありがとうございます！」

開口1番にグラハムに褒められ、タリサは満面の笑みを作る。ユニ
オンに所属してからというもののタリサはグラハムには非常に従順で
ある。

「大佐、タリサ、そろそろアルゴス試験小隊の人たちとの顔合わせ
の時間です」

「了解した、すぐに行こう」

タリサに一通りアドバイスをするとキャシーの言葉に返事をし、グ
ラハムはノーマルスーツから、タリサは強化装備から制服に着替え
ていた。

その頃、ユニオンとの対面をあと数分に控えたアルゴス試験小隊の面々はハンガーでユニオンの搭乗を今か今かと待っていた。

ヴァレリオとステラは国連最強の部隊とされるユニオンとの対面にヴァレリオは期待を、ステラは程よい緊張をしている。

すでに一足早くグラハムとキャシーに会っているユウヤとヴィンセントは落ち着いており、ユニオンの実力を軽視しているゲイルは別の意味で落ち着いていた。

「へ、うるせえのがいねえってことはもう左遷された後かねえ。いい気味だ」

ゲイルが言っているのはタリサのことだろう。そんなゲイルにユウヤとヴィンセントは呆れているしタリサの転属先を知っているヴァレリオとステラ……特にヴァレリオは必死に笑いをこらえている。

「整列！」

イブラヒムが号令をかけると格納庫にユニオンの制服に身を包んだグラハムとキャシー、そしてタリサが入ってきた。

「なっ!?!」

タリサの姿を確認し、思わず声を上げてしまったゲイルはイブラヒムに睨まれて沈黙する。ユウヤとヴィンセントは声を抑えることに成功していたが目を見開いて驚いている。

「敬礼！」

イブラヒムの言葉と共に部隊員が敬礼する。それと同時にグラハムたちも敬礼した。

「お目にかかれて光栄です。国連軍所属、戦術機開発試験小隊。アルゴス試験小隊、イブラヒム・ドーウル中尉であります」

イブラヒムは敬礼したまま答える。

「右から小隊専属整備士、ヴィンセント・ローウェル軍曹」

紹介されたヴィンセントは先日会ったグラハムに敬礼をするが視線はタリサに注がれている。

「次にアルゴス4、ステラ・ブレーメル少尉」

次いでステラが敬礼する。

「アルゴス3、ゲイル・クラウザー少尉」

いまだに信じられないようなものを見るような目でタリサを見ていたゲイルが慌てて敬礼する。

「アルゴス2、ヴァレリオ・ジアコーザ少尉」

ヴァレリオが笑いながら敬礼する。

「最後にアルゴス1、ユウヤ・ブリッジス少尉です」

必死にタリサに視線を向けないようにしながらユウヤが敬礼する。

「国連軍所属、独立機動部隊ユニオンのグラハム・エーカー大佐だ」

イブラヒムたちにグラハムも敬礼する。

「私の右にるのが部隊の技術副主任のキャシー・ルーフア中尉」

グラハムに紹介され、キャシーは敬礼する。

「そして左が……すでに存じているでしょうがタリサ・マナンドル少尉です」

タリサもグラハムからの紹介が終わると敬礼した。

「改めて、歓迎します」

「感謝します」

グラハムとイブラヒムは互いに固く握手する。

「マナンドル少尉はどうですか？こちらの隊でもなにかと問題を起こしていましたが」

「まだ正式に配属されて2日だが…彼女は優秀だよ、中尉。早くも与えたMSを乗りこなし始めている」

イブラヒムの質問にグラハムが答える。やはりイブラヒムも自隊からユニオンに言ったタリサが心配らしい……主に問題を起こしていないかどうかで。

「／／／／／／／／／／」

一方のタリサはわざわざイブラヒムがグラハムに聞いたことで恥ずかしさ半分。グラハムに褒められたことで嬉しさ半分といった感じだった。

「ところで、このあとの親睦を深めるための模擬戦ですが」

イブラヒムが新たな話題を切り出す。どうやらこの基地では親睦を深めるのに模擬戦をするのは当たり前のことらしい。

「問題ない、こちららも準備はできている。こちらら私1人で構わんよ」

その明確に提示されたハンデにアルゴス試験小隊……特にゲイルとユウヤが怒りに顔を染める。

「……わかりました。では1時間後に……」

イブラヒムも何か文句があったようだがグラハムのほうが圧倒的に階級が上なので渋々従うのだった。

「大丈夫なんですか？」

キャシーがノーマルスーツに着替えたグラハムに質問する。

「問題ない、フラッグでの戦闘は馴れている。4対1とはいえ負けはせんさ」

グラハムが4対1での戦いを提案したのは先ほども言ったが平たく言えばハンデである。フラッグカスタムはGNドライヴ搭載機にこそ性能では劣るがアルゴス試験小隊の機体が全て戦術機である以上、フラッグカスタムのほうが性能は上である。

その性能差……またグラハム自身慣れ親しんだ機体であることから4対1を提案したのである。もっとも、グラハムの実力を実際に見たことがないアルゴス試験小隊からすれば屈辱だろうが……

「あ、大佐……が、頑張ってください／＼／＼」

タリサが赤くなりながらグラハムにヘルメットを渡す。なんだかキヤラが崩壊してるかもしれないが基本的に自分が敬語を使う相手に惚れたらタリサはこうなると思う作者である。

タリサ自身、ヴァレリオやステラには悪いと思っているがグラハムの実力を知っているのでグラハムが負けるとは欠片も思っていない。それでも好きな人にエールを送りたい乙女心である。

「ふっ、女性からエールを貰ったからには応えねばな」

グラハムはヘルメットを受け取るとタリサの頭をワシワシと撫で、フラッグのコクピットに乗り込む。そしてヘルメットを被るとフラッグカスタムを起動させる。

「グラハム・エーカー……フラッグ、参る！」

飛行形態のフラッグが格納庫から飛び立つと後に残ったタリサはグラハムに撫でられた場所を抑えながら顔を赤くしていた。

「で、正直なところタリサはどうなると思う？」

キャシーはニヤニヤ笑いながらタリサを見る。

「VGやステラにゃ悪いけど大佐の勝ちだよ。機体の性能差もそうだけど腕が違うもん」

まだ僅かに頬を赤く染めながら質問に答える。

「でも……クラウドザー少尉だっけ？ 模擬戦終わったら荒れそう」

「…それはアタシも思う」

タリサはアルゴス試験小隊に残っている戦友たち（ステラ&ヴァレリオ）に黙とうを捧げていた。

一方その頃、アルゴス試験小隊は……

「くそ！あの野郎舐めやがって！」

模擬戦が始める前からすでに荒れていた。周りはもうウンザリしている。

「なあおい、あれどうにかなんねえか？」

「なんねえよ。だいたい言って聞くような奴じゃねえ」

荒れているゲイルを見ながらヴァレリオとユウヤが小声で話す。最初はゲイル以外の3人も与えられたハンデに不快な思いをしていたが今はそれ以上にゲイルに不快な思いをしていた。

ユウヤもアルゴス試験小隊に入って間もないがゲイルに関する愚痴でヴァレリオやステラと意気投合していたりする。

「けど相手だってMSなわけだしよう」

ヴィンセントが無謀にも……もとい勇ましくゲイルをなだめようとするが。

「けっ、MSに乗ってようが関係ねえ。どうせ大したことねえに決まってるんだよ」

「はあ……そろそろ行くぞ」

ユウヤが溜息を吐きながらアルゴス試験小隊の面々が機体に取り込んでいく。ちなみに搭乗機はユウヤがアクティブ・イーグル1番機、ヴァレリオがアクティブ・イーグル2番機、そしてゲイルとステラがストライク・イーグルである。

『J I V E S 起動確認。 演習開始します』

CPからの通信後、フィールドに出たアルゴス試験小隊の面々は辺りを警戒している。するとレーダーに反応があった。

『っ！？ 上だ来るぞ！』

ヴァレリオの言葉に全員が反応する。その眼には漆黒の戦闘機が映った。

『へ、なんだありゃ！戦闘機ごときで何ができるってんだよお！』

『アルゴス3、迂闊に前に出るな！』

ユウヤの制止も聞かずゲイルのストライク・イーグルが飛行形態のフラッグカスタムを迎え撃とうと機体を浮かせ、突撃砲を乱射する。

「甘いな！」

その攻撃をフラッグカスタムはバレルロールで回避し、接近する。

『へっ、戦闘機が近づいて何ができるってんだ！』

「ふっ、ならばとくと見せよう……人呼んで、『グラハムスペシャル』……！」

フラッグカスタムが接近した瞬間、飛行形態からMS形態へと変形する。これこそが本来想定されていなかったフラッグによる空中変形技術……通称『グラハムマニューバ』である（本人は『グラハムスペシャル』と呼んでいる）。

それはさておき、それに驚愕したのは迂闊にもフラッグの接近を許したゲイルである。

『変形！？MSだとお……！』

そのフラッグをストライク・イーグルは短刀で迎撃しようとする。

しかし……

「切り捨て……御免！」

それよりも早くフラッグカスタムのプラズマソードがストライク・イーグルの管制ユニットを切り裂いた。

『アルゴス3、管制ユニット切断。衛士即死により大破と断定』

CPからの通信によりゲイル機の撃墜が告げられた。

『な……なんだとお!! この俺がああああああ!!!!!!』

撃墜判定が告げられた機体の中でゲイルが吠える。

『ちっ、あのバカ!』

ユウヤは颯爽とやられたゲイルに悪態をつき、残るヴァレリオ、ステラと共に連携を取って対抗しようとする。

3機の戦術機は突撃砲をフラッグに向かって乱射するがフラッグは再び飛行形態になりそれを回避していく。

『く! 速すぎて当たらない!』

『なんであんなに乘れんだよ!』

フラッグカスタムのスピードにステラやヴァレリオから驚きの声上がる。彼らは知らないことだがフラッグカスタムは元となった通常のフラッグに比べ、エンジンのリミッターが外されていることで

通常機の2倍近いスピードが出るようになっていた。その際に発生するGは12Gにも達する。並みの衛士では早々耐えられるものではないが……グラハムはそれ以上の速度の機体に乗っていた。よってグラハムはフラッグカスタムも問題なく乗りこなせるようになっていた。

「これで！」

再びMS形態になったフラッグカスタムのリニアライフルの攻撃がステラのストライク・イーグルを撃ち抜く。

『アルゴス4、胸部コクピットブロック被弾。致命的損傷により大破と断定』

『さすがね……これがミスターブシドー……』

管制ユニットの中でステラが呟く。

さらにフラッグカスタムはそこから急降下し、ヴァレリオのアクティブ・イーグルに迫る。

『ちっ、ただでやられるかよ！』

ヴァレリオは突撃砲を撃ちながら短刀で迎え撃とうとする。

「やられんよ！」

突撃砲の攻撃を巧みに回避し、時にデフエンスロッドで防ぎながら接近。そして2本のプラズマソードで両腕を切り裂かれる。

『アルゴス2、両腕部切断。致命的損傷により大破判定』

そしてフラッグは残ったユウヤのアクティブ・イーグルに向かう。

『ちっ、来いよ!』

もはや1機になり勝ち目のないユウヤは短刀による格闘戦を試みる。

『（あの機体スピードは速いがおそらく装甲は大したことない……
だったら!）』

アクティブ・イーグルが全速力でリニアライフルを回避しながらフラッグカスタムに接近する。

「ふっ、いい気概だ……だが!」

そしていざ2機が接近した瞬間……フラッグカスタムは再び2本のプラズマソードを抜き去り、アクティブ・イーグルの右腕を切断。
次いで管制ユニットを切り裂いた。

『アルゴス1、管制ユニット切断。衛士即死、大破判定』

こうしてグラハムとアルゴス試験小隊の模擬戦は終わりを告げた。

「ちくしよお！ テメエ、ユウヤなにやってんだよ！？」

機体を降りたゲイルは真っ先にユウヤに詰め寄った。

「うるせえな。こっちの指示も聞かずに真っ先にやられた奴が文句言ってるじゃねえよ」

ユウヤは冷静にゲイルに反論する。ゲイルはグラハムに敗北したことに憤慨しているがユウヤは逆にあそこまで完敗するとグラハムの腕に感心していた。

「しかしさすがはユニオンの部隊長殿……あそこまで強いとはねえ」

「しかも今日の機体は専用機じゃないんでしょう？それであそこまで強いなんてタリサが憧れるのもわかるわ」

ヴァレリオやステラも負けたことは悔しいだろうがそれ以上にユウヤと同じくグラハムの腕に感心していた。

「ちっ、くそがあ!!」

そしてゲイルはタリサたちの予想通り大荒れだった。

それからしばらくしてユウヤたちアルゴスの面々が休憩所に行くところにはユニオンの制服を着たタリサがいた。

「よお、大佐はどうだったよ？」

「どうもこうも噂通りだぜ」

「ええ、あそこまで強いとは思わなかったわ」

タリサの問いにヴァレリオとステラが苦笑いしながら答える。

「ちっ、おいサル女！テメエ左遷されたんじゃないのかよ！？」

いまだにイライラがおさまらないゲイルはタリサに詰め寄る。

「へっ、アタシは左遷されるなんて一言も言ってねえよ。アタシの転属先は最初っからユニオンだったっうの」

「んだとこら！」

タリサの言葉にゲイルが詰め寄る。

「よせよゲイル。間違ってたのは俺たちなんだしさ、な？」

そこにヴィンセントが割って入り、なんとかゲイルを諫める。

こうしてアルゴス試験小隊とユニオンの顔合わせの日は過ぎて行った。

#23 失態と期待（前書き）

更新です。

どうしてこうなった？ここまで唯依よりもユウヤのほうが出番が多い……まあヒロインじゃないからって言ってしまうばそれまでになっ
てしまいますが……

穴だらけの駄文ですがよろしく願います。

もし良かったら感想をいただけるとうれしいです。

#23 失態と期待

「まったく……前途多難だな」

グラハムが溜息をつく。5月9日のユーコン基地のブリーフィングルーム。ここでは先程まで『XFJ計画』の全体ブリーフィングが行われていた。

全体ブリーフィングではアルゴス試験小隊の面々の他にもグラハムたちユニオンの3人。技術顧問のハイネマンに整備スタッフ十数人とかなり大勢となっていた。

そんな中でユウヤは終始不満気な表情だった。日本との共同開発というのでも不満なのにブリーフィングの内容も大ざっぱな開発スケジュールと『烈火』のスペック。そして帝国側の要求仕様のみだった。

その中で唯一ユウヤが興味を持ったのが『烈火』の性能の高さだったが流石にそれだけで不満がなくなるわけではない。

もちろん問題があったのはユウヤだけではない。ゲイルも同じである。もつとも、ユウヤよりも性質が悪いかもしれない。簡単に言えば説明をする唯依を厭らしい目つきで見ていたのだ。ステラとあった時もそうだったがゲイルは女性にそういう視線を送ることが多いらしい。ちなみにタリサはその身体的幼さからそういう目で見られることはなかったが……身体的特徴に関係なく女性として扱うグラハムとは真逆である。

その態度を見咎めた唯依がユウヤを呼び止め、態度を改めるように

言っていたが正直効果は薄いだろう。また、その直後にユウヤが搭乗する機体は『烈火』が組みあがるまで高等練習機である戦術機『吹雪』に乗るということでユウヤはさらに不満だったらしい。

もつとも、『烈火』は性能こそMSだが操縦系統などは不知火や吹雪を流用しているので日本の運用思想に馴れるという意味ではないかもしれないが。

「ブリッジス少尉」

グラハムは唯依と話し終え、その場を去ろうとするユウヤに話しかける。ちなみにグラハムの隣にはタリサがおり、キャシーはすでに格納庫に戻っている。

「大佐……」

「少尉、『烈火』の操縦系統、運用思想は日本の不知火や吹雪をもとにしている。それに馴れておくのは悪いことではない」

「…わかってますよ」

ユウヤは不満気にもグラハムに返答する。

「少尉、敢えて言おう。気に入らんのなら実力で示せ。いつも軍人にできるのはそれだけだ」

「…はい」

「まあ、頑張れよトップガン」

傍らにいたタリサがユウヤに社交辞令のように応援の言葉を送る。
そしてユウヤはグラハムに頭を下げるとその場を後にした。

それから数時間後、ユウヤたちアルゴス試験小隊は合同テストに臨むべく演習場に集結していた。その場には他にもソ連軍、そしてユニオンも参加していた。ユニオンが参加した理由は少しでもタリサをサキガケでの戦闘に馴れさせるという理由があった。

アルゴス試験小隊はそれぞれユウヤが吹雪、ヴァレリオがアクティブ・イーグル1番機。ゲイルがアクティブ・イーグル2番機、そしてステラがストライク・イーグルである。

『CPよりユニオン各機。JIVE S起動。全機即応体制』
コンディション・レッド

C P役を務めているキャシーからフラッグカスタムとサキガケに通信が入る。

『『了解』』

グラハムとタリサは通信が入ってすぐに機体を起動させ、自分たちが受け持つ区画の対応を始める。各小隊の戦域図に膨大な数のB E T Aの反応が現れ始める。

『消えろ!』

タリサがG Nショートビームキャノンで戦車級を焼き払い、フラッグカスタムとサキガケが宙を舞う。

飛行形態のフラッグカスタムが光線級の攻撃を回避しながら変形し、リニアライフルで次々にB E T Aを撃ち抜いていく。

一方、その光景をB E T Aを駆逐しながら見ているものがいた。

「クリスカ、あのひと……」

「うん。この前の奴だ」

ソ連軍の『紅の姉妹』スカーレット・ツインこと、クリスカ・ビャーチェノワとイーニャ・シエスチナの2人である。彼女たちはタリサの乗るサキガケを見ていた。

彼女たち……特にクリスカは以前のタリサとの広報任務でタリサに墜とされたことを屈辱に感じていた。初めて出会った自分たちの能力がまるで通用しない存在。もしかしたら自分たちの存在を脅かしかねないとすら考えていた。

その報告を聞いた彼女たちの上官もタリサに非常に興味を持っており、何かしらの動きを見せようとしていたのだが……結局その前にタリサがユニオンに転属となったので何も起きなかった。

「そしてあれが……グラハム・エーカー……」

クリスカの視線がフラッグカスタムに移る。もう1人……ソ連の上層部はタリサの能力に興味を持つと同時にユニオンの隊長であるグラハムの存在も重要視していた。

クリスカとイーニャはこの合同テストに臨むにあたって上官からグラハムへのリーディングを命じられていた。うまく行けばいろいろなユニオンの情報を得られると考えていたからだ。

「（やるしかない。それが私の……）」

クリスカはBETAを撃破しながらグラハムの乗るフラッグカスタムにリーディングを試みる。しかし……

「っ！！リーディングが……ブロックされた!？」

クリスカは立て続けに現れたリーディングできない存在に困惑していた。

同時刻、ユニオン側ではグラハムとタリサが順調にBETAを殲滅していた。

『おら、どっけええええええええええ！』

低空飛行するサキガケはGNロングビームサーベルとGNショットビームサーベルで要撃級、突撃級を切り捨てながら進む。そこに突撃級が突進してくるがサキガケはそれを僅かに上昇して回避し、すれ違いざまにGNロングビームサーベルで切り裂く。

「ふつ、タリサ、見事と言わせてもらおう……もうここまでサキガケを乗りこなすか……」

タリサの成長にはグラハムも驚いていた。もともと高機動近接格闘が得意なタリサだったがここまでサキガケと相性がいいとは思わなかった。この成長速度の速さはNTであることも強く関係しているだろう。実際、宇宙世紀においてNTとして戦ったパイロットたちは初めてMSに乗ってたった数回の戦闘でエース級の相手と渡り合っていた。

「私も負けてられんな」

グラハムは笑いながらリニアキャノンでタリサの援護をしながら自身もプラズマソードをもって切り込み、BETAを切り捨てる。するとグラハムが何かを感じ取った。

「っ!?!? この不快感……なるほど、『紅の姉妹』か!」

グラハムは不快感とその元であろう人物たちを推測する。かつてミ
ーシャにされたのと同じ不快感。この基地でリーディングを行える
のは『紅の姉妹』しかないことはグラハムも知っている。

「だが、人の中を覗き見るのは感心しないな……『紅の姉妹』!!」

グラハムは馴れた感じで『紅の姉妹』からのリーディングをブロックする。

『大佐、どうかしたんですか？』

するとタリサから通信が入る。その顔は明らかに心配しているような表情だった。実はBETAを相手に無双していたタリサだが僅かにグラハムから妙な感覚を感じ取り、通信を繋げて来たのだ。

「なに、ただソ連の女性方からアプローチがあっただけだ」

その言葉にタリサはある程度理解し、不機嫌そうな表情になっていた。

その頃、アルゴス試験小隊は苦戦を強いられていた。

「(クソッ！なんだこの危ういバランスは！？)」

問題だったのは初めての日本機、吹雪へと搭乗しているユウヤ。彼は吹雪をうまく使いこなすことができず、BETA以上に乗機である吹雪に苦戦していた。……が、問題なのはユウヤだけではなかった。

『おらおらおら！死ねよ化け物がぁ！！』

アクティブ・イーグル2番機に搭乗しているゲイルである。ユウヤ同様、BETAとの戦いは初めてである。そんな彼は以前のシミュレーションで経験したBETA戦とはまるで違うこと困惑し、突出していた。

『ちっ！おいゲイル！飛び出すんじゃねえ！』

そして吹雪の操縦に苦戦するユウヤと突出するゲイル。ヴァレリオとステラは2人のフォローでいっぱいだった。この状況を見ている人間の大半がヴァレリオとステラに同情していた。

合同テストの結果、ユニオンとソ連は問題なく自分たちの受け持った区画のBETAを掃討していたがアルゴス試験小隊は散々だった。アルゴス試験小隊の受け持った区画は結局最後まで防衛線を押し上げることができず、しかも1人で突出したゲイルはBETAに撃墜された。ユウヤはなんとかステラの援護で撃墜こそされなかったが散々だった。

一方、ユニオンは僅か2機で他の小隊よりもいち早く受け持ち区画のBETAを殲滅したことでその強さを証明した。

「よう、お待ちかねだぜ」

そして帰還したユウヤが吹雪から降りるとヴィンセントに促された方向を見る。そこには唯依が立っていた。

ユウヤは唯依に敬礼すると唯依も事務的に答礼し、2人は直立不動で睨み合う。

「本日の結果……少しは恥じているのか、少尉？」

「はっ………最悪ですよ、中尉」

ユウヤが恥じているのは事実だった。確かに慣れていない機体だったがそれでは済まされない失態だ。もっとも、多少乗りなれた機体だったにもかかわらずに無謀に突出して撃墜されるという大失態を犯した者もいたが……

「貴様は当初、吹雪の挙動に戸惑っていた。乗りなれない機体である以上、それはやむを得ない。だが機体特性を理解していれば、例えば急速後退ではなく緩旋回を選ぶこともできたはずだ」

「お言葉ですがね、中尉」

そんな唯依にユウヤが反論する。

「米軍機なら問題なく行えた挙動ですよ」

「ほう……続ける」

その後、ユウヤは吹雪の主機出力不足し、ピーキーな機体特性にかみ合っていないことを説明し、吹雪が第3世代機として粗悪品だと言う。さらにはいくらMSとはいえその運用思想を受け継いだ『烈火』も期待薄ではないかと告げる。

「要するに機体のせいだと言いたいのか」

「そんな機体を前線に出すことが問題なんじゃないですか？ 衛士の命はタダじゃない」

「練習機とはいえ吹雪は我が国の前線でも実戦配備されている」

「ひどい話だ」

唯依の言葉にユウヤは呆れる。

「だが、帝国の衛士は貴様が直面した状況より過酷な前線に送り出されても吹雪をうまく使いこなしているぞ？」

「信じられませんね」

「その衛士は貴様が絶賛する陽炎（F-15J）も同じように使いこなすぞ？」

「……………」

「つまり貴様の技量は帝国衛士に比べ、明らかに劣っているということだ。ハッキリ言おう。貴様は未熟だ！」

ユウヤは唯依の言葉に怒りを覚える。たとえ上官だろうと女でなければ2、3発殴っているだろう。

「機体のせいだと？我々の先達はもつと性能の劣る機体でBETAの侵攻を必死に食い止めていた！だからこそ我々はこうして暢気に演習ごっこに興じていられるんだ！最前線にはテストパイロットなどという『職業』はないんだぞ！」

それまで沈黙していたユウヤだが唯依の言葉で口を開いた。

「演習ごっこ……だと？衛士が命を懸けて繰り返す試験運用や演習を『ごっこ』呼ばわりですか？じゃあMSを開発したはいいいけど結局自分たちだけじゃ完成させることができずに他国に縋ろうとする

のはごっこ遊びじゃないんですか？」

「…………それは『XFJ計画』のことを言っているのか？」

「(そうだよ、そしてその日本代表がアンタだ!)」

実際、唯依自体も今回の計画には批判的だった。だがMSが完成し、量産できれば帝国軍衛士の死亡率を下げるができる。ひいては日本の国土を取り戻すことができると思って個人の感情を押し殺し、今回の任を引き受けたのだ。

「いや、わかった、わかりました! お2人の言い分はよくくわかりましたから

この続きはあとで、ね? そろそろ整備を始めたいかなんて…あははは」

ヴィンセントが唯依とユウヤの仲裁に入る。周りの整備士連中からはブーイングが起こるがこままでは本当に整備が始められないのだ。ちなみに整備士たちは唯依とユウヤのどっちが先に白旗を上げるかという賭けをしており、今回のことで決着がつくと思ったのでブーイングが上がったのだ。

「ローウェル軍曹……邪魔して済まなかった」

唯依がヴィンセントに詫び、その場を去ろうとして……足を止める。なぜなら目の前からグラハムとそれに付き添うようにタリサがやってきていたからだ。

「た、大佐……」

唯依は慌てて敬礼し、ユウヤとヴィンセントも敬礼する。それにグラハムとタリサも答礼するとグラハムはユウヤに話しかける。

「ブリッジス少尉、このあと少しいいかな？」

「あ、はい」

グラハムの質問に答えるとユウヤはグラハムについていく。一方、タリサは先程の会話を聞いていたのか唯依を睨んでいた。ユウヤの発言にも問題はあると感じたが先程の唯依の『演習ごっこ』『テストパイロットなどという職業』の発言に腹を立てているらしい。

ユウヤは強化装備から制服に着替えるとグラハムとタリサと共に休憩所に来ていた。

「で、大佐も俺に小言ですか？」

ユウヤはさっきの唯依とのやりとりで気が立っているのか棘のあるような聞き方になっている。その態度にタリサは今度はユウヤを睨みつけていた。

「少尉、どのような状況、どのような機体でも即時に対応する。そういう資質が衛士には必要だと私は考えている」

グラハムはタリサをなだめるためにタリサの頭を撫でながらユウヤに話しかける。タリサはグラハムに撫でられてご満悦だった。

「……………大佐も機体ではなく俺に問題がある？」

ユウヤはタリサの変貌ぶりに呆然としながらもグラハムに訊ねる。

「無論だ。物資に限りのある日本では推進剤も貴重な物資だ。それを補うために日本の戦術機は主機出力が低く、ピーキーな機体特性となっている。潤沢な物資を持つアメリカとは機体特性が違って当然だ」

グラハムはユウヤを真っ向から見つめながら言う。その真っ直ぐなまなざしにユウヤは何も言わずにグラハムの言葉に聞き入る。ここまでユウヤが大人しくしているのはグラハムが嫌悪している日本人ではないというのも大きいだろう。ましてやグラハムの実力は先日の模擬戦で直に味わっている。自分よりも遥かに実力が上だとわかっている相手の言葉だ。

「私も君の挙動は拝見させてもらった。どうやら君は米軍式の機動で日本式の吹雪を操ってしまっているようだ。だからこそ上手く操れなくなる。」

戦術機の運用を最終段階にしている米軍に対し、日本は戦術機の前線での運用を主にしている。根本から運用法が違うのだ、米軍式のやり方が他の国の戦術機に通じるわけではない」

その言葉をしっかりと聞いていたのか、ユウヤはさっきとは少々違う表情になってきていた。

「もっと詳しいことは君の専属整備士に聞くと良い。しっかりと機体特性を理解し、機体に合った挙動ができれば君は良い衛士になる」

「っ!？」

仮面で非常にわかりにくいがグラハムが笑顔になっているのを見たユウヤは驚愕する。そしてそれと同時にユウヤは不覚にもグラハム

の言葉で喜んでいる自分がいることに気づいた。

国連軍最強部隊の隊長であり自分など齒牙にかけないほどの強さを持った衛士のアドバイスと『良い衛士になる』という言葉……ユウヤもそれほどグラハムに好意的だったわけではないが今の言葉は十分嬉しいものだ。

「あ、ありがとうございます！大佐！」

ユウヤはグラハムに勢いよく頭を下げるとそのままヴィンセントに話を聞くべく格納庫に向かっていった。

「……大佐、なんでトップガンにアドバイスしたんですか？」

先程まで頭を撫でられ、ご満悦だったタリサは頭から離れたグラハムの手にな残惜しさを覚えながら質問する。

「ふっ、私もかつてはテストパイロットだったからな。それに人は変わるものだ。ブリッジス少尉ならきつといい方向に変わる」

そう、グラハムも以前はテストパイロットだった。もっともそれはこの世界に来る以前、魂が融合する以前の00の世界でのことだが……

そのときにグラハムはフラッグのテストパイロットとなり、しかも初乗りでフラッグが空中での変形は想定されていないと知らずに空中変形を披露したのだ。

この翌日からの訓練でユウヤの挙動が見違えるようによく初めたのだった。

ちなみにユウヤがグラハムと話していた同時刻、合同テストでユウヤ以上の大失態を演じたゲイルにはイブラヒムの雷が落ちていた。

#24 禁断のシステム（前書き）

一ヶ月も空いてしまい申し訳ありませんでした！！

言い訳するならまず大学の単位がやばいこと。このままじゃ留年確定です。

第二に・・・・・・1週間ほど前、我が家の愛犬が永眠いたしましたして・・・・・・それでしばらく更新意欲がわかず・・・・・・

とりあえず更新しましたのでどうぞです。

感想お待ちしています。

#24 禁断のシステム

グラハムがユウヤにアドバイスを行ってから数日、ユウヤは着実に吹雪を乗りこなし、組み上がった烈火に搭乗して訓練を行っていた。

「ふむ、ブリッジス少尉の問題も大分解決してきたな」

グラハムは唯依たちと共にアルゴス試験小隊の訓練を見ていた。映像に映るユウヤの乗った烈火はまだ機体に馴れていないからかややぎこちないがそれほど悪いわけではない。

このぎこちなさも訓練の数をこなして機体に馴ればなくなるだろう。やはりあの初日のグラハムからのアドバイスが効いたのかユウヤは次からの訓練では吹雪の機体特性に合った操縦を心がけ、烈火が組み上がるまでにかなり乗りこなしていた。

そもそもユウヤは操縦技術自体は悪くない。むしろ操縦技術は高いと言っている。今まで米軍機にばかり乗っていたために少々柔軟性が足りていなかったただけなのだ。

機体の特性に合わせて操縦法を変えられれば乗りこなすのはそこまですぐで時間はかからないだろうとグラハムは考えていた。

「大佐、いったい大佐はブリッジス少尉に何を？」

「なに、ただ単にアドバイスをしただけだ。もともと同じテストパイロットだったものとしてな」

唯依の質問に無表情で答えるグラハム。唯依自身もユウヤの上達に

は正直に驚いていた。2回目の訓練以降、最初の訓練とは見違えるほどの進歩を見せていたのだ。

もつとも、あくまでも唯依が感心しているのは訓練や機動についてだけである。ユウヤの唯依に対する態度に関しては唯依は不満だらけだった。ただし、唯依は決してそういった私情を任務に見せようとはしないが。

「篁中尉、ブリッジス少尉の普段の態度が気に入らんのなら腹を割って話してみることにだ。いつまでもそのままでは中々改善しないぞ」

このことについてはやはり当人同士の問題なのでグラハムもそこまでするアドバイスできない。グラハムが日本人ならばある程度何とかできたかもしれないがそうではない。

「アルゴス3、致命的損傷、大破です」

CPの声が響き、映像にはゲイルが搭乗するアクティブ・イーグルがユウヤの烈火によって撃墜されていた。その要因は性能差もあるが一番の原因はゲイルの個人プレーであった。

「……………それよりも優先すべき問題があるようだが……………」

「…はい……………」

グラハムは勿論、唯依も、そしてその場にいたイブラヒムもゲイルに頭を痛めていた。

それから数時間後、烈火の訓練を見終えたグラハムは自分たちの格納庫に戻ってきた。そこではコンソールを叩いているキャシーとちやうど訓練を終えたのであろう強化装備に身を包んだタリサがいた。

「キャシー、システムのほうはどうだ？」

「あ、大佐。準備はできています」

「そうか、ならすぐに始める。頼むぞ」

グラハムはそれだけ言い残すとパイロットスーツに着替えるため、更衣室に移動していった。

「なあ、キャシー。システムってなんのことだ？」

残されたタリサはキャシーにグラハムの言っていた言葉について訊ねる。

「大佐の新型に搭載するためのシステムよ。システム自体は出来て使いこなすためにこつちに持って来てたの。ただ外から制御できるようにする調整が中々できてなかったんだけどね」

「へえ」

「……………私としてはあんまり賛成できないんだけどね」

不意に、キャシーが呟く。その呟きにタリサは訝しげな表情をする。

「ん？どういうことだよ？」

「このシステムは危険すぎるのよ。衛士にかける負担が大きくて私は好きじゃないの。まあ、大佐の機体はだいたい衛士に負担をかけるものが多いんだけど……………この機体は負担のベクトルが違うの」

そこにパイロットスーツに着替えたグラハムが戻ってきてシミュレーターに乗り込む。

「キャシー、始めてくれ」

「……了解。シミュレーター開始……『ゼロシステム』……起動します」

「（危険って……どういう……）」

タリサは先程の言葉が頭に引っかかりながらも訓練をするグラハムを見ていた。

一方、シミュレーター内のグラハムは『ゼロシステム』を用いて対BETA戦を行っていた。

「（これがゼロシステム……）」

グラハムはフラッグカスタムを巧みに動かし、BETAを殲滅していく。普段の能力に加え、ゼロシステムの影響でさらに高い戦闘力を示している……が……

「くっ！」

当のグラハムはゼロシステムを扱うのに四苦八苦していた。傍目にはグラハムのフラッグカスタムはいつも以上の戦闘力でBETAを殲滅しているように見える。

ユニオンフラッグが要撃級をリニアライフルで撃ち抜く。撃ち抜かれた要撃級が動きを止めるが……次第にグラハムの脳裏に別の光景が映し出される。

「っ!？」

それはこの世界における最悪の未来。フラッグカスタムの翼に光線級の攻撃が掠り、フラッグカスタムが地上に墜落。そして戦車級に群がられ、食い尽くされる未来。ビジョン

「ぐう！（これが……ゼロシステムの!）」

ゼロシステムがもたらす負荷から見える幻影に苦しみながらもプラ

ズマソードで要撃級と突撃級を切り裂く。

「ええい！邪魔だ！」

フラッグカスタムは近づいてくるBETAをプラズマソードで切り裂き、リニアライフルで撃ち抜く。さらにはミサイルで殲滅していく。

「…敵……私の敵は！」

『大佐、危険です！システムを停止します！』

シミュレーター内にキャシーの音が響き渡り、ゼロシステムとシミュレーターが停止した。

「大佐、すげえ……けど……」

シミュレーターが停止する数分前、タリサはゼロシステムを起動さ

せ、いつも以上の戦闘力を発揮するグラハムのフラッグカスタムに見入っていた。

「(…………やっぱり、大佐の精神にかかる負荷が大きい…………)」

だが一方のキャシーは苦い顔でモニターを見ていた。するとフラッグカスタムが要撃級を撃ち抜いたところで一瞬動きが止まった。

「…………なあ、キャシー…大佐どうしたんだ？　なんか…………嫌な感じがする…………」

タリサも次第にグラハムの精神的な変調を感じ取ったのかその表情が曇っていく。

「タリサ…………っ！？　大佐！」

するとキャシーが見ていたほうのモニターに映されているグラハムの精神状態にさらに変調が出始める。

「大佐、危険です！　システムを停止します！」

キャシーはその言葉と共にシステム及びシミュレーターを停止させるとタリサと共にすぐにシミュレーターのハッチを開く。

「大佐！」

「大佐！　どうしたんだよ大佐！」

タリサとキャシーがシミュレーターの中を覗きこむと息を荒くしながら俯いているグラハムの姿があった。

「…私は……大丈夫だ……キャシー……続きを……」

「駄目です！ やっぱりこのシステムは危険すぎます！ せめて休憩してください！」

グラハムの言葉にキャシーは反論し、タリサの協力でなんとかグラハムをシミュレーターから出し、グラハムの部屋に運んだ。

「なあ、キャシー！ その『ゼロシステム』ってなんなんだよ！？」

グラハムを休ませた後、タリサはテスト前に聞きそびれたことをキャシーに訊ねていた。グラハムの状態を見てタリサは声を荒げている。キャシーもタリサの真剣な表情に『ゼロシステム』について語り始めた。

「：『ゼロシステム』……分析、予測した状況の推移に応じた対処法の選択や結末を衛士の脳に直接伝達するシステム。簡単に言えばどうすれば勝てるのか……それを衛士にあらかじめ見せることができるシステムよ。」

急加速や急旋回の衝撃や加重の刺激情報の伝達を緩和し、普通じゃ稼働できない環境下での機体制御も可能になっているわ」

「……そんだけすげえシステムってことはなんかりリスクがあんのか？」

タリサはキャシーの説明に疑問を持つ。その質問にキャシーは頷き、説明を続ける。

「システムが提示する戦術は基本的に単機での勝利を目的にしたものの。目的達成のためには衛士の意志や倫理に反するものも平然と選択されるし、自機の自爆や友軍の犠牲もいとわない行動……これらの選択を強要されることもある。」

それが衛士の精神に膨大な負荷をかけるの。このシステムはただ使うだけじゃ駄目……ただ使うだけじゃシステムに命令されるままに動かされて暴走するか……最悪精神が負荷に耐えられずに精神崩壊を起こしたり、廃人になる可能性もある」

「……なんだよ……それ……なんでそんな危ないシステムを大佐が！」

『ゼロシステム』の危険性を聞かされ、タリサはキャシーに詰め寄

る。

「……私だってこんな危険なシステム使ってほしくない。これはまともな人間に使えるものじゃないの。けど……大佐はいずれ来るハイヴ攻略を有利に行えるからって……どれだけ言っても聞かないのよ」

詰め寄ってきたタリサにキャシーは辛そうな表情で答える。キャシー自身も搭乗者に異常なまでの負荷を与える『ゼロシステム』を良く思っていなかった。しかし軍人である以上、上官であるグラハムの命令は絶対だし技術主任のカタギリも認めているため、システムのテストを行うしかない。

「乗りこなすのって……どうやるんだよ？」

「……衛士が自身の感情をコントロールしてシステムの命令を抑え込むだけの強靱な精神力を持つこと。それだけが『ゼロシステム』を乗りこなせる条件よ。カタギリ大尉は大佐がNTだからもしかしたらって言ってたけど……」

それだけいうとキャシーはさらに暗い顔になってしまう。

「キャシー、テストを再開してくれ」

するとそこにさっきまで自室で寝ていたはずのグラハムがやってきた。

「大佐！起きて大丈夫なのかよ！？」

タリサはグラハムに駆け寄る。

「心配はいらん。キャシー、頼む」

グラハムはタリサを優しく退けるとキャシーを見る。

「大佐！いくらなんでも無茶です！もう少し休まないと……」

「無茶は承知している。だが、多少無茶をしなければ『ゼロシステム』を使いこなすことは出来ん」

「大佐……」

仮面の奥から覗く真剣な表情にキャシーは何も言えなくなる。

「……わかりました。ただし、今日はあと1回だけです。それ以上は絶対にいけません」

「……承知した」

渋々ながらも了承するグラハム。だがそのグラハムの前にタリサが立ちふさがった。

「大佐、なんでそんな無茶すんだよ！そこまで無茶しなくなつて……」

タリサはキャシーに『ゼロシステム』の危険性を聞いてから最悪の想像ができてしまっていた。即ち、グラハムがシステムの負荷によって廃人になる光景である。グラハムに恋心を抱いているタリサには止めたいという感情が大きかった。

「……人類が明日を生きるために……使えるものは使わなければならん。私にはカタギリやキャシーのようにMSの開発はできません。ならば少しでも私自身の戦闘力を上げるしかない」

「っ!？」

グラハムの眼差しにタリサは言葉を失う。確かに現在の人類はBE TAとの戦いでかなり窮地に立たされている。いくらユニオンの手によってMSが開発され、戦力が増強されたとはいえ戦力は多いに越したことはない。個人的な戦闘力の上昇でもないよりはしたほうがいいに決まっている。

「……タリサ、君が心配してくれるのは嬉しい。だが、私には『ゼロシステム』を乗りこなす必要がある」

グラハムはそれだけ言うとシミュレーターに搭乗していった。それを見送ったタリサは拳を握り締める。そして……

「キャシー! アタシもシミュレーターやるぞ!」

「ちょ、タリサ!？」

キャシーの驚きの声を背に隣のシミュレーターに入ってしまった。

「ふう、まったく……大佐、タリサのほうのシミュレーターも起動させるので少し待ってください」

『ふっ、了解した』

グラハムに通信を入れるとキャシーはタリサのほうのシミュレーター

ーも起動させる。一方、シミュレーターに乗ったタリサは起動されたモニターを見つめ、操縦桿を握る。

「（大佐を止めらんねえなら……アタシがもっと強くなって、できるだけ大佐が無茶しなくてすむようにしてやる！）」

グラハムは『ゼロシステム』を使いこなすために……そしてタリサは少しでもグラハムの負担を軽くするために、決意を新たにすのだった。

#24 禁断のシステム（後書き）

どうでしょうか？

ゼロシステムは何度かWを見直して書いてみましたが・・・

感想待っています。

#25 少女の決意（前書き）

更新しました。

今回はタリサが中心ですね。

ちなみにユウヤは実力が原作よりも上がる以外は原作どおりに進みます。

感想よろしくお願いします。

#25 少女の決意

2001年6月21日……ユーコン基地の試験部隊やユニオンは耐環境試験のため、西インド諸島のグアドループ基地に来ていた。

アラスカとはまた違う、照りつける太陽と蒼い海。気候もアラスカとは違い、完全な真夏である。

「…それにしても暑いな、おい」

ヴァレリオが数少ない日陰に入って横に座るユウヤに愚痴る。

「当然だろ？ じゃなきゃ耐環境テストになんねえよ」

「まあ、そうだけだよ…お前は暑くねえのかよユウヤ？」

「暑いに決まってんだろ。ただ、真夏のグルームレイクよりマシだ。あそこは地獄だったからな」

そう言うユウヤの視線の先には烈火やアクティブ・イーグルを初めとする戦術機に蟻のように汗を流しながら群がる整備士たちがいる。そしてその中にはヴィンセントの姿も確認できた。

彼ら整備士やユウヤたちはもともとこの基地に所属していたほとんどの要員たちがしているように熱帯標準軍装を着崩し、インナーシャツとハーフトラウザーという軽装になっていた。それだけグアドループ基地の熱気が凄いのだ。

しかも厳格なイブラヒムや唯依も日中はそうしている。もっとも、

これはグアドループ基地の所属士官たちから「そんなものを着こまれていたら見てるほうが暑くなる」ともう抗議を受けたのだが……
もっとも、全ての人物がこの抗議を受け入れたわけではない。

現に今この場にいないが唯一グラハムだけは日中でも普段通りの服装だった。しかしグラハムは大半を『ゼロシステム』のテストに費やしている場合が多いのであまり基地の士官たちとは会わないのだが……

「うへえ、日焼け止め塗っててもこれだよ……」

それから数十分経過するとヴィンセントがユウヤやヴァレリオがいる日陰にやってきた。

「休憩か？ご苦労さん、まったく整備士連中には頭が下がるぜ」

「おう、もっと敬え。今回の主役は俺たちだからな」

ヴァレリオが上げた手にヴィンセントがハイタッチする。

「確かに今回の主役は整備士^{おまえら}達だ。耐環境試験じゃ、俺たち衛士は最後のほうしか出番ないしな」

耐環境試験では実証実験機が過酷な環境下でも正常に動作するかどうかというテストである。そのため、テストパイロットである衛士たちよりも整備班や開発技師たちの実務や苦労は遥かに大きいのだ。

一方その頃、ユニオンの格納庫では相変わらず『ゼロシステム』のテストを繰り返すグラハムとそんなグラハムの助けになろうと努力するタリサの姿があった。

「キャシー、大佐はどんな感じだ？」

外部から『ゼロシステム』の制御をしているキャシーの背後から休憩に入ったタリサが顔を出す。

「大分良くなってきたわ。テスト後の精神的な異常も小さくなってきたるし……使いこなすのはもう少し……かな？」

「そっか……アタシももっと頑張んなきゃな」

実はタリサは今まで恋というものをしたことがなかった。少なくともあの朝鮮半島でグラハムに助けられるまでは一切したことはない。

それから朝鮮半島でグラハムに救われ、初めての恋をしたタリサではあったが……グラハムと再会するまでの4年間ユニオンに入るために訓練を続けていたため再会した後のことをあまり考えていなかった。そのためどうアプローチしたらいいかわからなかったのだ。

ならばさっさと想いを伝えてしまえばいい……と言うのがキャシーの言い分である。

「タリサ、気持ちは解らないでもないけど……今のご時世、いつ死ぬかわからないのはタリサもわかってるでしょ？」

「っ！？……それは……」

キャシーの言う通り……いま世界ではBETAによって多くの人間たちが命を落としている。そのため、好きな人と結ばれるということ自体が稀である。

「確かにユニオンでは戦死者は出てないけど、大佐も、タリサも必ず大丈夫ってわけじゃないのよ？ だったらせめて自分の想いぐらい伝えておいたほうがいいんじゃない？」

確かにキャシーの言う通り……と考えてしまうタリサ。結局、答えを出せないままタリサは気晴らしに基地の中を散策しに行くのだった。

「はあ……」

タリサはため息をつきながら基地内部を歩く。頭にあるのは先程のキャシーとの会話。タリサもグラハムに想いを伝えたいとは考えている。考えてはいるのだが……

「むう……」

自分の身体……主に胸……にタリサは視線を落とす。タリサも年齢は18なのだが……自分の身体には凹凸がない。4年前、グラハムに初めて会ったところから身長もスタイルもほとんど成長していない。

「ステラぐらいスタイルがよけりやなあ……」

アルゴスにいた頃のスタイル抜群の同僚を思い出して軽くへこむタリサ。もしもグラハムの好みの女性がステラのようなタイプだった

ら……そう考えた彼女は頭を振ってそんな暗い考えを振り払う。

「ええいアタシらしくないぞ！当たって砕けろだ、とにかく隙を見て……」

「なにが当たって砕けろなの？」

「うわぁ！！」

タリサがやる気を出しているとタリサの背後にステラが立っていた。

「す、ステラ！？ど、どうしたんだ？」

「今日の夜は東西の試験部隊で交歓会をやるって言われたから伝えに来たのよ。ユニオンの人たちもどうかしらと思って……」

「あ、ああ……わかった、大佐とキャシーに伝えておくよ」

タリサはどぎまぎしながらステラの言葉に頷き、ユニオンの格納庫に戻ろうとする。

「あ、タリサ……大佐とのこと、頑張ってね♪」

「ぶっ！？／／／／／」

バツチリと聞いていたステラに激励されたタリサは噴出してしまったのだった。

それから数時間後、グラハムたちユニオンメンバーは他の交歓会の場へと足を運んでいた。そこには顔がまだらに赤くなっており、アロハシャツを着たヴァレリオとエプロン姿でバーベキューの用意をするステラ、そしてユウヤやヴィンセントの姿があった。ユウヤとヴィンセント、ヴァレリオはすでにビールを飲んでいた。

「あ？VGどうしたんだその顔？面白おかしいことになってるぞ」

その場にやってきたタリサがヴァレリオの顔を指さして笑う。

「あゝ、日焼けだ日焼け。変な風に焼けちまったんだよ」

嘘である。真相はヴァレリオの他にユウヤとステラしか知らないが、ヴァレリオはステラのシャワーを覗こうとして熱湯を浴びせられたのだ。

「大佐、一杯どうですか？」

そこにユウヤがビールを持ってグラハムに近付く。ユウヤも当初のグラハムへの悪い感情はほとんどなくなっていた。

「ふむ、いただく」

一方、タリサとキャシーはバーベキューの準備をするステラに近付く。

「あらタリサ、もうすぐ準備できるわよ。それと……告白はいつするの？」

ステラは悪戯な笑みを浮かべ、後半の言葉を小さな声で言う。

「なっ！……べ、別にいつだっていいだろ／＼／」

ステラの言葉に先程、廊下で会った時の自身の決意が蘇る。廊下での別れ際のステラの励ましによってタリサはユニオンの格納庫に戻るまで赤面する顔を元に戻すのが大変だったのだ。

「そんなこと言っているとホントに誰かにとられるわよ？まあ、ユニオンには大佐に恋心を抱いてる子はいないけど……」

そんなタリサに今度はキャシーが口を開く。その言葉にタリサはさ

らに顔を赤くしてしまった。

「なんだったらこっちにいるうちに告白しちゃったら？海が近いからシチュエーションはバッチリよ」

ワイワイと恋バナに興じるステラとキャシー。だがタリサには溜まったものではなかった。一応励ましてくれてはいる2人に感謝はしていたが……

ちなみにどうでもいい話だがゲイルは他の試験部隊の女性衛士をナンプアしていた。そしてその悉くに失敗していた。

「あ、そういえばそのままビール飲めるんですか？」

不意にヴィンセントがグラハムに質問する。グラハムは当然仮面を付けたままであり、口の部分は開いて居るが飲みにくいだろう。

「問題はない」

そう言ってグラハムは仮面に手をかける。そしてその瞬間、ユウヤ、ヴィンセント、ヴァレリオの視線が集中する。どうもグラハムの素顔が気になっていたらしい。一応言っておくと実はタリサもグラハムの素顔を見たことはない。

カチャリ、と音がするとグラハムの仮面の口付近の部分だけ外れた。顔の鼻から下は完全に露出したがいまだに完全に顔を見るには至っていない。この口付近の部分は着脱可能でノーマルスーツを着てヘルメットを被ったときも外している。

その光景にグラハムの素顔が見れると期待していた男共はガックリ

とうなだれていた。

「…！？貴様は！」

「ん？……げ…」

そんな騒動の中でステラはすでにバーベキューの準備を終え、肉を焼いていた。そしていくつか焼き上がり、タリサが肉を頬張っていると背後から驚きの声が聞こえる。

タリサが振り向くとそこには見知った顔……と言うよりタリサが見たくない顔が2つあった。タリサと因縁があるクリスカとイーニアだ。

この交歓会はもともと西側と東側の試験部隊が友好を深めるためのものである。彼女たちがいても何ら不思議ではない。もっともクリスカとイーニアは上官であるイエジー・サンダーク中尉からの命令で出席しており、タリサは東西の試験小隊所属ではなく、ステラに誘われてきたので会うのを回避するのは可能だったのだが。

「……食うか？」

だが会ってしまったものは仕方ない。タリサはクリスカとイーニアに紙の皿に乗せた肉を差し出すが……

「……いらない」

イーニアはそれを拒否する。その言葉にタリサはムツとする。

「ここにはめいれいできただけ……にくはたべない」

「んだよ人がせっかく気を利かせてやったってのに」

もともと気の短いタリサはイーニアの言葉に不機嫌になる。するとタリサを不快感が襲いかかる。

「っ!?! またかよ……勝手に人の中に入ってくんなって言ってる!」

「!?!」

その不快感の原因が目の前の少女だとタリサはすぐに理解し、声を張り上げる。おそらくイーニアがまたもタリサにリーディングをしようとしたのだろう。リーディングをブロックされたイーニアはタリサの怒声も合わせてビクリと震える。するとそこにクリスカが割って入る。その顔は困惑に染まっていた。

「貴様は……貴様らはいったいなんだ!?!」

普段冷静なクリスカが珍しく声を荒げる。クリスカが言った『貴様ら』というのは恐らくタリサ……そしてグラハムの2人のことだろう。

リーディングがまるで通用しない人間であるグラハムとタリサに、まだクリスカたちは困惑と……恐怖に似た感情を覚えていた。

「ああ? いきなりなんなんだよお前ら!」

一方、タリサは今にも掴み掛りそうな勢いである。

「タリサ！」

だがそこにタリサを唯一止められる人物が止めに入る。騒ぎを聞きつけたグラハムである。その声を聞いたタリサはビクリと身体を震わせる。

「た、大佐……」

タリサは先程とは打って変わり、おどおどした目でグラハムを見る。

「…ふう、私の部下が迷惑をかけた……だが……何かにつけて人の心を覗き見るのは関心しないな」

グラハムはそれだけ言うとタリサを連れ、その場を後にした。

「あ、あの……大佐？」

交歓会の会場の外れに來たタリサは無言のグラハムに視線を向ける。
「怒っているのか？」と不安になっていたのだが……

くしゃ

「うえ！ た、大佐！？／＼／＼／＼／」

タリサの頭の上にグラハムの手が乗せられ、そのままグラハムはタリサの頭を撫でる。

「タリサ、君のその真っ直ぐな気性は好ましいが……もう少し抑えることも覚えたほうがいい」

グラハムは優しく微笑み、タリサの頭を撫でながら言い聞かせる。
その言葉にタリサは顔を赤くしながら自分の頭を撫でるグラハムの手の感触を甘んじて受けていた。

「あ、あの……たい……」

タリサが意を決してグラハムを見上げようとしたとき……

「あれ……？ 大佐、もう帰るんですか……？」

そこにヴァレリオがやってきた。タリサとは別の意味で顔が赤い。
恐らく酔っぱらっているのだろう。

「ああ、私たちはお暇させてもらおう。だがジアコーザ少尉、少々飲みすぎではないか？」

グラハムはすでに酔っぱらったヴァレリオを心配する。

「これぐらい大丈夫ですって。……ん？　どうしたタリサ？」

「……VGのドアホオオオオオオオオオ！！！！！」

タリサはヴァレリオの顔面に思いっきりとび蹴りを食らわしていた。

#26 告げる想い、報われる想い（前書き）

更新です。ようやく書けた！

少々不自然に感じる方もいるかもしれませんがこうなりました。

穴が多いでしょうがよろしくお願いします。

感想お待ちしております。

#26 告げる想い、報われる想い

6月22日、西インド諸島グアドループ基地近海。そこでは東西の試験小隊がいくつかの種目に分かれてスポーツで競い合っていた。

ステラとイーニアはそれぞれ西側と東側の女性衛士と共にビーチバレーを行っており、ユウヤとヴィンセント、唯依とクリスカはそれぞれ軍用ボートで沖に出ていた。

ことの発端は昨日の交歓会のことだ。結局あの後、ろくに交流を深めることができなかった東西の試験小隊に今度は『有意義な行為』……所謂スポーツで決着をつけるようにとの広報官であるオルソン大尉の言葉だ。

ちなみに水着は唯依は競泳用のような水着、ステラは大胆なカットのワンピース、クリスカとイーニアは同じ柄のビキニ。そしてステラが行っているビーチバレーを見学しているタリサはセパレートタイプの水着だ。

「はぁ……」

なのだが、タリサはどこか元氣なく溜息を吐いていた。その理由は至極簡単なのだが……

「あら、タリサー1人なの？」

するとそこに試合を終えたステラがやってくる。

「ん？ あぁ、キャシーは整備だって。大佐は基地司令のそこ」

詰め寄ってくるステラにタリサはつい素直に答えてしまう。ちなみにタリサが言っていることは本当である。これまで訓練漬けが続いていたので南の島であるグアドループにいる間に多少休んでおこうという話である。

「ふむ……そうなると今夜か明日が勝負かしら？あとでキャシーに相談しましょう」

「す、ステラ？」

タリサをそっちのけでステラは1人いろいろと考えている。

「タリサ、大丈夫よ。私とキャシーに任せなさい」

「え……あ……ええ!？」

普段強気なタリサだが有無を言わせぬステラの迫力に狼狽えるしかなかった。そんな中、ボートに乗って沖に出ていたはずのヴィンセントが慌てて戻ってきたのだった。

一方、沖に出ていたユウヤと唯依、そしてクリスカは付近にある無人島に辿り着いていた。当初、ボートレースのためにユウヤはヴィンセントと、クリスカは人数不足から唯依とペアを組んでいた。

しかし途中でクリスカが体調を崩し、それに気付いたユウヤが唯依たちのボートに泳いでに合流した。そして残るヴィンセントはこのことを知らせるために先に戻ったのだ。

ユウヤと唯依もボートを漕いで元の浜辺に戻ろうとしたが天候が急変し、この無人島に避難したというわけだ。

「イー…ニア……」

「気が付いたか、ビャーチェノワ少尉」

無人島の洞窟の中でクリスカは目を覚ます。その傍には唯依が座っていた。そして唯依はクリスカに事の経緯を説明した。

「そうだったのか……どうやら世話になったようだな」

「気にするな。天候の悪化は貴様のせいではない」

2人が話しているとふと、クリスカは思いついたように唯依に訊ねる。

「タカムラ中尉、聞きたいことがある」

「なんだ？」

「ユニオンはあなたたちの計画に協力していると聞いた」

「……ユニオンの情報なら話すわけにはいかんぞ」

クリスカがユニオンの情報を欲しているのではないかと思った唯依は一応釘をさす。もっとも、唯依もたいしてユニオンの情報を知っているわけではないが。

「そうじゃない。私が気になっているのはグラハム・エーカー大佐とタリサ・マナンドルについてだ。奴らはいったい何者なんだ？」

「……それは…どういう意味だ？」

「奴らは普通じゃない。何か知っていることがあったら教えてほしかった」

昨日の一件もそうだがクリスカの疑念は消えていなかった。なぜグラハムとタリサにはリーディングが通用しないのか。彼らの存在は自分たちを脅かすものではないのか、と常に考えるようになってしまっていた。

ソ連上層部はグラハムやタリサが自然発生したESP能力者ではないかと考えている。もつとも、あくまで確証のない推測だがあなたがち外れてもいない。現段階では別段、クリスカやイーニアが用済みとされてはいない。ソ連にとって彼女たちの存在も得難いものであることに変わりはないのだから。

だがそれでもクリスカの不安は消えなかった。いつ上層部から自分たちが用済みとされるかもしれないと考えてしまうのだ。

「……悪いが私に答えられることはない。私も大佐たちと特別親しいわけではない」

「……そうか……」

2人の間に沈黙が漂う。すると再びクリスカは口を開いた。

「ではもう1つ、ユウヤ・ブリッジスについて聞かせてもらいたい」

「え!?!?……彼に興味か?」

「衛士として」

クリスカは淡々と言葉を続ける。その口調は方程式を澱みなく暗唱する様に似ていた。

「彼は優秀な衛士だという評判は聞いていた。だが、先日 of 合同演習の結果で私は失望した……いや、失望していた」

過去形……それはつまりクリスカが今はそうは思っていないことを意味する。

「しかしここ最近、次第に実力が上がってきている。彼にいったい何があった？」

クリスカがユウヤに抱いていた疑問。それはイーニアが彼を気にかけていることもそうだがユウヤの成長だ。合同演習の結果には正直見るべきものはないとクリスカは考えていた。しかしユウヤはその考えに反して実力を上げていた。

「……そうだな、時間があるときは大佐に相談したりしているようだが……私が思いつくのはそれぐらいだ。あとは本人に聞けばいいだろう？ 幸いにも彼もこの島にいるぞ？」

唯依もユウヤの成長には目を見張っていた。当初は動かすのに四苦八苦していた吹雪を合同演習から数日である程度まで乗りこなせるようになり、烈火も同様に乗りこなした。当初抱いていた未熟者という印象が一気に払拭されたのだった。

翌日、ユウヤはクリスカと共に無人島の森の中を歩いていた。昨夜、この無人島についた際に乗っていたボートのところに戻っていたユウヤだが、最悪なことに元の場所にボートはなかった。恐らく流さ

れでもしたのだろう。それによってボートにつけられていたGPSも紛失し、自力での帰還は不可能となっていた。

そして、ユウヤとクリスカは救助を待つ間の水を確保するために2人で行動していたのだ。唯依は足を捻挫していたことと捜索隊への監視のために残った。当初はユウヤが1人で行く予定だったのだがクリスカが水を探すなら目は多いほうがいいと付いてきたのだ。

「おい、本当に大丈夫なのか？」

「しつこいぞ、それに信じてほしいと頼んだ覚えはない」

海の上で体調を崩したクリスカを心配するユウヤだがクリスカは無用だと切り捨てる。

「なんだよその言い草……スターリンが他人の身体を心配しちゃうけないとでも言ったのか？それともレーニンか？」

「……………」

ソ連に対する知識を総動員し、ユウヤはクリスカに嫌味を言うがクリスカには軽く無視される。

「ああ、そうか…なるほどな、コルホーズ」

「貴様が何を言っているのかよく解らない」

首を傾げるクリスカにユウヤは言葉を続ける。

「お前、西側で『紅の姉妹』って呼ばれてんの知ってるか？」

「知っている」

「西側の衛士からお前ら凄え評判悪いんだがその原因が分かった。お前のその性格が評判を落としてるんだ。それが良くわかった！」

その言葉にクリスカは軽く溜息を吐くと逆にユウヤに話しかける。

「私の話はいい、それよりも……」

「ん？」

「お前はエーカー大佐と親しいと聞いた。お前に聞きたい、奴らはいったい何者だ？」

「は？」

クリスカの言葉にユウヤの頭にはすぐさま疑問符が浮かぶ。

「なんだそりゃ？何者って……」

「奴らは普通じゃない。篁中尉から貴様はエーカー大佐と親しいと聞いた。何か知らないか？」

するとユウヤは顎に手を当てて考え込む。親しい……と言うより単純に烈火の機動などで相談していただけなのだが。

グラハムはいろいろ的確にアドバイスしてくれるのでユウヤは訓練の機動についてよく質問したりしている。グラハムのほうもユウヤのその向上心が好ましいのかハッキリと質問に答えている。

まあ確かに親しいかどうかと言われればユニオンの隊員を除けばユニオンで1番話している時間は多いかもしれない。ステラはキャシーと仲が良くなっているがグラハムとそれほど話すというわけではないし。

「まあ、確かに普通じゃないっていやあ普通じゃないな」

ユウヤはグラハムが常に付けている仮面やその服装について思い出す。服装はユニオン独自の制服だというのはわかるがグラハムはその中でも陣羽織を羽織るというさらに違ったものだ。仮面についても最初見たときは『変』と思ったものだ。

「けど俺だってそこまで知ってるわけじゃないぜ？大佐と話すのだから戦術機やMSばかりだしな」

「そうか……」

ユウヤの答えに軽く落胆するクリスカ。それほどグラハムやタリサの存在はかなりに気になっているのだろう。

「そんなに気になるんなら大佐本人に聞けばいいじゃないか」

「……………」

その言葉にクリスカは無言になる。それからしばらくしてクリスカは再び口を開く。

「じゃあ次だ。貴様はイーニアをどう思っている？」

「……………はあ？」

先程の質問とはまるで関係ない内容にユウヤは思わず声を上げて聞き返してしまう。

「どういう意味だよ？」

「そのままの意味以外ない」

「聞き方を変える……………お前は何でその質問を俺にするんだ？」

「理由は解らないがイーニアはお前を気にかけている」

「……………え？」

ユウヤにはクリスカの言葉に真意が理解できなかった。

「俺はお前たちのことなんて殆ど知らないんだ。それでどう思うかとか、気に懸けられてるとか言われてもな……………」

「それは私たちも同じだ。貴様について、データベースの情報以上のことをあまり知らない」

「あまり？」

「だから昨晚、タカムラ中尉に言われた。聞きたければ本人に聞けと」

「あの野郎」

面倒事のお鉢が回ってきたことにユウヤは顔を顰める。

「データベース情報以上に私が知っている中で最も理解できないのがそれだ」

「は？」

クリスカの言葉にユウヤは呆けたような顔をする。

「貴様とタカムラ中尉は同じ日本人なのになぜいがみ合い、衝突する？それが昨日は……」

「俺は日本人じゃない！」

台詞を遮る形でユウヤが怒鳴り声を上げる。

「データベースで見たんだろ？だったら二度と間違えるな」

反射的に怒鳴り声をあげてしまったことにユウヤはクリスカから目を逸らす。さすがに昨日に体調を崩していたものにするのではなかったと反省する。

「貴様、何か日本に対して含むところがあるのか？それにしてもわからない。常に冷静であるべき衛士がそんな些細なことで感情的になるとは……」

「些細って……あのなあ、他人からしたら些細なことでも本人からしたらとてつもなく重要なこともあるんだ」

「そういうものなのか？」

クリスカは心底疑問に思っているようにユウヤに訊ねる。

「なのかって……お前さあ……」

「私が自分を語らないのは名誉のためだ。私個人ではなく、祖国や党、部隊のためだ」

「俺にとっちゃ、それこそくだらないことに思えるけどな」

ユウヤが言った言葉にクリスカの心が粟立つのを感じる。

「他人よりもまず自分のことを考えろよ。個人があって、組織があつて、国がある。その逆はあり得ないぜ」

「私個人のことなど……」

そこまで言うところクリスカの足元がふらつき、ユウヤがそれを抱きとめた。

「って、だから言っただろ、無理だって。仕方ねえ、戻……」

「私に触るな!」

しかしクリスカはユウヤを突き飛ばし、その反動で木の幹に身体をぶつける。

「おい、大丈夫か!?!」

「私に近寄るな!」

そうして歩き出そうとするクリスカだが、再び足元がふらついてユウヤに抱き留められる。

「お前なんでそう無理ばかりするんだよ。昨日倒れたのだってどうせ何か無理が祟ったんだろ？もしあの時、お前ら2人だけで嵐に巻きこまれてたらどうなったと思う？」

それは最悪の想像。ユウヤがいたからとにかく唯依と体調を崩したクリスカだけでは切り抜けられたとは思えない。

「何のために無理してるか知らないが、それで2人とも死ぬかもしれないなかったんだぞ？」

「……………すまなかった……………今この状況を招いたのは、確かに私だ」

己の非を認め、素直に謝ったクリスカにユウヤは感心する。

「い、いや…そこまで言っただけでいいし」

「私は……………海が恐ろしいんだ。イーニアも私も……………海を見たのは初めてなんだ」

「海、見たことなかったのか？」

ユウヤは抱き留めているクリスカの身体が震えていることに気づく。

「あんな巨大で、底知れない水の塊が存在することが信じられない……………それが動くことが信じられない……………見るだけなら平気なんだ。戦術機に乗ってれば平気なんだ……………けど、沖に出ると引きずり込ま

れてしまいそうで……恐ろしいんだ……」

「そうだったのか……」

そしてユウヤは気付く。クリスカが今回のボートレースをイーニアと代わったのは同じく海への恐怖心を抱くイーニアを思っていたのだ。

「（お前だって人の心配してるじゃねえか）」

「貴様たち……いったい何をやっている？」

声のした方向には木の枝を杖代わりにした唯依の姿があった。

それから数時間後、遭難していたユウヤたちは無事に救助された。その後、クリスカたちはユウヤが日本人を毛嫌いする理由を知ったりとそれなりに友好を深めた3人だった。

しかし唯依は足が回復した後、『紅の姉妹』の2人と共に水着姿で撮影を行うことになるのだが……それは別の話だ。

そして場面は映って6月23日夜。タリサは浜辺にいた。前日は遭難したユウヤたちの捜索でステラたちの企みは実らなかったがユウヤたちも無事救助されたため、この日の夜……ついに決行された。

タリサはステラに指示された場所で待機しているのだ。一方、ステラの企みを聞かされたキャシーはほくそ笑みながらグラハムに浜辺でタリサが話があるということを伝えに行った。

「(うう……結局ステラとキャシーに押し切られちゃったけど……告白……どうやって切り出しゃいいんだ?)」

悶々とその後のことを考えるタリサ。だがしっかりと告白の仕方を考えていることから告白する気はあるらしい。

「タリサ……」

「!?!」

すると背後からタリサが好意を寄せる男性の声が聞こえる。振り向くとそこにはいつもと変わらないグラハムの姿があった。

「なにか話があると聞いたが？」

「た、た、大佐！え、えと、その／＼／＼／／／／／」

タリサはグラハムを前にして顔を真っ赤にし、テンパり始める。まだ心の準備ができていなかったらしい。

「落ち着け、私は逃げたりしない」

そんなタリサをグラハムは微笑み交じりになだめる。それから数分してどうにかタリサも落ち着いてきた。

「で、私に話とは？」

改めてグラハムは問いかける。初めに言っておくがグラハムは決して鈍感ではない。タリサの反応を見ればグラハムは普通に察していた。だがそれでもグラハムはタリサの言葉を待つ。

「え、えっと……アタシは……／＼／＼／／／／／」

それは彼女……タリサの決意を無駄にしないためであった。そしてタリサは顔を真っ赤にしながらも必死に言葉を紡ぐ。

タリサとしてステラとキャシーの2人に押し切られた形だったが折角のシチュエーションである。ここで想いを告げようと心に決めていた。

「アタシは……大佐のことが好きだ！初めて……朝鮮半島で会った時からずっと……／＼／＼／／／／／」

最後は少々小さい声になりながらもタリサの想いは確かにグラハムに伝えられた。あとは返事を待つだけだが……

「タリサ……」

「!?!」

グラハムの言葉にタリサの身体がビクリと震える。するとグラハムは手をタリサの頬に添える。

「た、大佐?／＼／＼」

その行動にタリサはグラハムを見上げる。

「タリサ、君の気持ち……喜んで受け取らせてもらおう」

「え?……じゃ、じゃあ……」

「私も君を愛しく思っている。この気持ち、まさしく愛だ。私は君を愛している」

「~~~~~!!!!!!／／／／／／」

それを聞いた瞬間、タリサは歓喜の余り声にならない悲鳴を上げる。タリサはグラハムに受け入れられるとは欠片も思っていなかったのだ。

一方、グラハムがタリサに好意を抱いていたのは本当だった。勿論、タリサのような初めて会ったときから……と言うわけではない。2度目に光州作戦で再会した時もあるまで興味以上の対象に留まっていた。

しかし明星作戦でNTに覚醒したタリサと一時的に互いを感じ合ったこと。そしてユーコン基地に来てからタリサと過ごすうちに明確に好意を持つようになっていたのだ。もっとも、タリサと違って表に出すことは一切しなかったが。

「タリサ……」

タリサの告白を受け入れたグラハムは自身の仮面に手をかける。恋人関係になるならばタリサの前で仮面で顔を隠す必要はない。そう考えたグラハムは仮面を外した。

「っ!?! 大佐……その傷……」

仮面を外したグラハムの顔にタリサは絶句する。タリサが初めて見

たグラハムの素顔。それは美男子と言っても差し支えない……だが、タリサが驚いたのはその顔に刻まれた痛々しい傷跡だ。

「……この傷が恐ろしいか？」

優しく微笑みながらグラハムはタリサに問いかける。

「んなことない。驚いたけど……顔の傷なんて関係ない。大佐こそアタシでいいのか？アタシはその……こんなに子供っぽい体型だし」

タリサは自身のコンプレックスである小さい身体のことを言うが……

「愚問だな。私は女性をスタイルで決めたりはしない。そんなことは関係なく君を愛おしく感じる」

真っ直ぐにグラハムを見つめるタリサ。それからタリサは目を瞑り、軽く背伸びする。グラハムもタリサとの身長差から軽く屈み、そして2人の唇は重なり合った。

翌日、グラハムの部屋に2つの影があった。一方はグラハム、そしてもう片方はタリサである。

「ん……」

ベッドで寝ていたタリサは目を擦りながら起き上がる。タリサの小さい身体は糸纏わぬ姿になっていた。

「起きたか、タリサ」

声のした方向には上半身裸でズボンを履き、水を飲むグラハムがいた。仮面も付けておらず、顔と同じように上半身に刻まれた傷跡がありありと見えている。

「た、大佐！？／／／／／」

グラハムに気づいたタリサは顔を真っ赤にして自分の身体をシーツで隠す。昨夜、惜しみなくその肢体をグラハムに見せたがやはりタリサは恥ずかしいらしい。

「タリサ……2人きりの時は名前で呼べと言ったはずだ。恋人を階級で呼ぶのは無粋だろう？」

苦笑いしながらタリサの頭を撫でるグラハム。

「うう…わかったよ…グラハム…／／／」

タリサは羞恥心と幸福感に包まれ、グラハムに大人しく撫でられていた。

#27 結ばれたその後（前書き）

更新です。今回はグラハムとタリサが結ばれた翌日の話。

そして次回はいよいよソ連に行きます。

穴だらけの駄文ですがよろしく願います。

感想お待ちしております。

#27 結ばれたその後

グラハムとタリサが結ばれた翌日。グラハムの部屋にはグラハムの姿はなく、代わりに……

「んんう……」

タリサの姿があった。タリサはグラハムのベッドの中で転がっている。その理由は極めて単純だ。

グラハムと結ばれたその日の夜、タリサはグラハムと一夜を共にした。まあその辺はいつ死ぬかもわからないのだからすっかり愛し合いたいという気持ちから来たのだが……

一夜を共にしたタリサだが、翌日になって身体の一部に違和感を覚え、少々歩くのが辛い状況だったのだ。まあ簡単に言ってしまうとタリサの身体は小さい。それに反してグラハムのアレが大きかったのだ。

その結果、歩くのが辛い状況だったタリサにグラハムは今日1日ゆっくり休むようにと言い残し、仕事に向かった。そしてタリサはグラハムの部屋に残った。

ちなみにいつまでも裸だと風邪を引くからという理由でタリサは裸の上にグラハムの上着を着ている。もつとも体格差がありすぎてかなりブカブカだが。

「んんう……大佐の匂い……／＼／＼／＼／＼」

「な、なんだよ…?」

「いやゝ、タリサ……もしかして大佐の上着の匂い嗅いだ?」

「ぶっ! な、なんで! ? / / / / /」

タリサの反応にキャシーは少し驚いたような表情になる。しかしすぐに再びニヤニヤと笑いだす。

「え、本当にしてたの? 一応冗談のつもりだったんだけど?」

「~~~~~ッ!!!! / / / / /」

墓穴を掘ってしまったタリサはさらに顔を赤くする。

「で、昨夜はどうだったの? キリキリ吐いてもらおうわよ♪」

満足に動けないタリサはキャシーの質問の嵐に悶絶するのだった。

一方、グラハムはシミュレーターターの訓練を終えて食堂に来ていた。

「あ、大佐！」

グラハムが昼食を持って声のした方を見るとそこにはゲイルを除くアルゴス試験小隊のメンバーが揃っていた。

「一緒にどうですか？」

「ふむ、では同席させてもらおう」

ステラの誘いにグラハムは快く承諾して席に着く。そして仮面の口の部分を外すとグラハムは食事を口に運ぶ。

「あ、大佐。ステラに聞いたんですけどタリサと付き合い始めたって本当ですか？」

「む？」

食事を進めるグラハムに不意にヴァレリオが問いかける。昨日の今日でステラが知っているのかという……単純にキャシーがタリサに着替えを届けに行くときに偶然会って話したという簡単な理由である。

「間違いない、タリサと私は恋人同士という関係だな」

ヴァレリオの質問にグラハムは即答する。

「へー、タリサの4年越しの想いも報われたってわけだ。こりゃ今

度会ったらからかってやるかな」

ニヤニヤと笑う。口ではこう言っているがヴァレリオにとってもタリサはもとと同じ部隊だった仲間である。心の中ではしっかり祝福している。

「ん、まあチョビが大佐と付き合うってもの不思議な感じだけどおめでとうございます。大佐」

「ふ、その祝福…ありがたく受け取らせてもらおう」

昼食のミートボールを食べながらユウヤも笑顔で祝福する。やはりユウヤは完全にグラハムに対して友好的になっていた。

ちなみにその後、グラハムがタリサと付き合い始めたことは一気に基地内に広まっていった。勿論、話を広げたのはヴァレリオとヴィンセントである。

昼食を終えたグラハムが格納庫に向かおうとしていると目の前に2人、見覚えのある人影を見つけた。

「何か用かな？」

その人影とはソ連のクリスカとイーニアだった。彼女たちは警戒するような視線を向けながらグラハムを見ている。

「エーカー大佐、あなたに聞きたい。あなたたちはいったいなんだろう？」

「あなたたち…とは？」

グラハムはクリスカの質問の内容を解つていながら敢えてとぼけた様に返す。

「あなたとタリサ・マナンダルのことだ。あなたたちには私たちのリーディングが効かなかった…あなたたちはいったいなんなんだろう？」

「それは、ソ連が知りたがっていることか？」

「上層部はあなたたちを自然発生したESP能力者だと解釈している。あなたたちのことを知りたいと思ったのは私個人の意思だ」

クリスカは一切淀みがない瞳でグラハムを見つめる。その瞳に嘘は見られなかった。

「……私とタリサは『人類の革新』とされるNTという存在だ」

「…ニュー……タイプ……」

そこからグラハムはNTが高い洞察力や反射能力を持ち、死者の念すら感じることが出来る存在だと説明する。それは以前、ミーシャに説明したものと同じ内容だった。

「…そんな存在が……」

クリスカはグラハムが話した情報を頭の中で整理している。NTの能力はクリスカたちの能力とは違う部分が多い。クリスカたちの能力はリーディングとプロジェクションだがNTの能力は同じNTとの感応現象や死者を感じたり、先読みをしたりといったものだ。

「ところで私も聞きたいことがあるのだが？」

「なんだ？」

「君たちはミーシャ・イリユーナという少年を知っているか？」

グラハムがそう訊ねるとクリスカとイーニアの表情が明らかに変化する。

「ミーシャをしってるの？」

「ああ、私たちの部隊にいる」

イーニアの問いかけにグラハムはハッキリと答える。すると今度はクリスカが口を開く。

「ミーシャは昔、私たちと同じ施設にいた。その後、別々の場所に

配属されたのだが……」

どうやらクリスカやイーニアと違い、プロジェクトンができないということがあったために彼女たちとは別の場所に配属されたのだろう。

「私たちも『黄昏の魔弾』の噂は聞いたことがあったがまさかミーシャだったとは……」

ユニオンの衛士は異名のが知られすぎていて本名はそれほど有名ではない。実際、ユニオンのメンバーの中で名前が知られているのはグラハムとカタギリぐらいのものである。

「このこ、ミーシャにもらったんだよ」

そう言いながらイーニアは常に一緒にいるクマのぬいぐるみを見せる。話を聞くに、それはミーシャがクリスカたちとは別の部隊に行く少し前にイーニアにプレゼントしたものでらしい。そのため、イーニアはこのぬいぐるみにミーシャという名前を付けたのだ。

「あれ〜？ エーカー大佐じゃありませんか？」

するとそこに嫌な笑みを浮かべながら1人の人物がやってきた。アールゴス試験小隊のゲイル・クラウザーである。ゲイルの登場にクリスカはイーニアを自分の背中に隠す。案の定、ゲイルは彼女たちからも嫌われているのだ。

ちなみに当初、ユウヤを低く評価していたクリスカだが、ゲイルに關してはそのユウヤよりもさらに低く評価していた。しかも最近ユウヤへの評価は上がってきたがゲイルへの評価はさらに降下中で

ある

「何か用かな？クラウドザー少尉」

「いえいえ、エーカー大佐があのチビと付き合い始めたと聞きましたね」

「ふむ、間違いはないが……それがどうかしたか？」

相変わらず嫌な笑みを浮かべるゲイルにグラハムは内心嫌悪感を浮かべる。

「いやあ、本当だったんですか？エーカー大佐の趣味があんなちんちくりんとは驚きましたよ」

グラハムとタリサにいい感情を持っていないゲイルは馬鹿にしたように言葉を続ける。

「ふっ、君のような下種な男にはタリサの魅力は解るまい……話がそれだけなら私は失礼させてもらう。ビャーチェノワ少尉、シェスチナ少尉、君たちも自分たちの部屋に戻ったほうがいい」

「はい。エーカー大佐、失礼します」

クリスカは敬礼するとイーニアを連れてその場を後にする。それを見届けたグラハムもゲイルに背を向ける。

「クラウドザー少尉、君も少しは協調性というものを身につけた方がいい。そうでなくてはブリッジス少尉に差を付けられるだけだぞ」

「っ!?!?……へっ、俺があんな黄色い猿に負けるわけがないでしよう? 1対1なら俺の方が上なんだからよ」

「……そう思いたければそう思っていればいい……」

それだけ言い残してグラハムはその場を後にした。

それから数時間、グラハムは訓練を終えて自室に帰ってきていた。

「あ、大佐。おかえり」

自室に入ったグラハムを出迎えたのはベッドの上に座るタリサだった。

「む、まだ部屋に戻っていなかったのか?」

その姿にグラハムは素直に驚く。さすがにもう歩けるようになって自分の部屋に戻ったと思っていたのだろう。

「えっと、その……大佐の傍にいたかったから……／／／／／／／／／／」

グラハムの問いかけにタリサは顔を赤くしながら呟く。普段の勝気な性格はどこへやら、どうやらタリサはグラハムの前では常にこうなるらしい。

「駄目…だったか？／／／」

身長差からタリサは自然と上目遣いになる。その姿にグラハムは微笑みを浮かべる。

「愛する女性に傍にいたいと言われて嫌がる男がいるわけがない。だが、2人きりのときは名前で呼べと言ったはずだが？」

「あ…う…：…ぐ、グラハム…：…／／／／／／」

「タリサ、愛している」

グラハムはそう言いながらタリサの頭を撫でる。恥ずかしげもなく平然と愛を囁くグラハムにタリサは嬉しいやら恥ずかしいやら大変である。

「グラハムう…：／／／」

それでも頭を撫でるグラハムの手に軽く陶醉し、甘えるタリサだった。

一方、ユニオンの基地では……

「そうか、グラハムにね……」

『はい、あんまり顔には出しませんが幸せそうでしたよ』

「そうか、ご苦労様。グラハムのサポートは大変だろうけど頼むよキャシー」

『了解です』

カタギリはキャシーとの通信を切ると目の前に鎮座する数機のMSを見上げる。ちなみにキャシーとは何度か近況報告などで通信をしているのだ。そして今回の通信でキャシーはグラハムにタリサという恋人ができたことを報告していた。

「さて、僕も僕にできることをしないとね。グラハムが帰ってくる前に両方とも完成させないとね」

そうしてカタギリは新たなMSの製作に精を出すのだった。

#28 絡まる思惑（前書き）

更新です。タイトルが思い浮かばない。

とりあえず次回から本格的にソ連編です。そしてゲイルの死亡カウ
ントダウンが始まります。

ちなみにソ連ではこの世界でのあの方々が出ます。1人この話のラ
ストに出ますが……

感想お待ちしています。

#28 絡まる思惑

「ふう……はあああああ!!」

グアドループ基地からユーコン基地に帰ってきて数週間、JIVE Sを用いた訓練でユウヤの搭乗する烈火が縦横無尽に駆け回る。これ自体は別段珍しい光景ではない。ユウヤはすでに烈火を自身の手足の如く使いこなしている。

しかし、今のユウヤは若干戸惑っていた。それと言うのも烈火が振るっている武装が原因である。

「(前の長刀に比べて勝手が少し違うが……基本は同じだ!)」

現在、烈火が振るっているのはグラハムたちユニオンが技術提供のために持ってきた武装『MA-M92斬機刀』。もともとはザクウォーリアと同じザフト製MSであるジンハイマニューバ2型に装備されている標準武装である。

この武装『斬機刀』は日本刀型の実体剣で稼働時間がザクウォーリアに比べて短い烈火がエネルギーを消費しないようにと言う理由と主な搭乗者が日本人と言うことを想定してユニオンが持って来ていたのだ。

これまで烈火に装備されなかったのはユウヤが戦術機に装備された短刀の扱いには慣れていたが長刀を初めとする刀型の武器に馴れていなかったためだった。

そのため、まずは烈火の初期装備だった『不知火』などの戦術機も

使用している『74式近接戦闘用長刀』の扱いに慣れてから斬機刀を装備する予定となっていたのだ。そして斬機刀は烈火の右腰と左腰に1本ずつ計2本装備されている。

「はあ！」

そのうち1本を両腕で振るって烈火が要撃級を両断し、突撃級の背後に周って防御力の低いところを切り裂く。もともと斬機刀は切れ味では以前装備していた近接戦闘用長刀を遥かに凌駕する一品であり、衛士の技量によっては縦に並べたジンを両断できる代物である。最初こそ若干戸惑ったユウヤだが、これまでずっと近接戦闘用長刀を使ってきただけあって斬機刀もすでにある程度ものに始めている。

ちなみに斬機刀を見た唯依がその形状から非常に興奮していたの言うまでもない。

「お、ステラ」

訓練を終えた後、基地の中を歩いていたタリサは偶然ステラと鉢合わせした。

「あら、タリサじゃない。大佐は一緒じゃないの？」

「ああ、なんか用事があるとかで別行動中だよ。キャシーは機体の

調整中。ステラは？」

「私はこれからアルゴスのみんなで飲みに行こうって話になって行くところなんだけど……暇ならタリサもどう？」

ステラの言葉にタリサは「ん〜」と頭を掻きながら考える。

「いいぜ。久々にステラたちと飲むのも良さそうだしな！……けど、まさかあのバカは来ないよな？」

あのバカ……それが指す人物はたった1人しかない。ゲイル・クラウザーである。先程の訓練でもゲイルはまたも個人プレーに出て小隊のメンバーに迷惑をかけていた。

普通、それだけ迷惑をかければある程度直そうとするものだがゲイルは一切それをしない。むしろイブラヒムから雷が落ちるたびにさらに反発して個人プレーをするという悪循環を生んでいる。

そのためタリサはゲイルを『バカ』と呼び、アルゴスのメンバーも最初は色々と注意していたがそのたびに差別的な言葉をゲイルが吐くため、訓練以外ではほとんど話をしなくなっていた。

「大丈夫よ。彼は誘ってないわ」

ステラはため息を吐きながらタリサの言葉を肯定する。するとタリサは笑顔になった。

「んじゃ行くか」

そして2人は飲み屋へと向かって行った。

飲み屋でヴァレリオ、ヴィンセント、ユウヤと合流したステラとタリサ。しかしその中でユウヤは荒れていた。

「まったくよお！ あいつらいったい何を楽しみに生きてるんだよ！？」

ユウヤは愚痴の合間にグビグビとビールを飲んでいく。その光景をヴィンセントが無表情で眺めている。

ユーコン基地の敷地内にある多国籍が特徴の繁華街・リルフオート。そのスペイン風の飲み屋でユウヤたちアルゴスの面々とタリサは杯を重ねていた。

「ユウヤ、いつにも増して荒れてるわね」

グラスを傾けながらステラがヴィンセントに尋ねる。

「ああ、こいつ『紅の姉妹』スカーレット・ツインを飲み^に誘おうとしてフラれたんだってよ」

そう、ユウヤはここに来る前に偶然イーニアに出会い、飲みに行かないかと誘ったのだ。しかし最初は乗り気だったイーニアもユウヤだけでなく他のアルゴスの面々がいると知ると行かないと言い出し、さらにはクリスカがやってきてユウヤと言い争いになったらしい。

クリスカ曰く「祖国奪還を願う最前線の衛士たちに少しでも早く強力な戦術機を送ることが自分たちの使命であり、遊んでいる暇がない」ということだ。

勿論、ユウヤにもクリスカが言っていることが分からないわけではない。しかしユウヤにとってはそれが全てではない。時にはこうして仲間と羽を伸ばすことも必要だとユウヤは考えている。

しかし一方のクリスカにはそれが理解できておらず、最前線の衛士たちを考えれば自分の身体などどうなってもいいと考えていた。

「うるせえぞヴィンセント！ テメエだって篁中尉にフラれっぱなしだろうが！」

「はいはい、落ち着けよユウヤ」

ヴィンセントは落ち着き払ってユウヤを宥める。ヴィンセントもアルゴスの面々と交流を深める意味合いで何度か唯依を誘っているのだが結局うまく行っていない。

「なんだなんだ？ 我らがエースは『紅の姉妹』スカーレット・ツインの撃墜に失敗してヤケ酒かあ？」

「ぶう！！」

からかうようなヴァレリオの言葉にユウヤは思わず飲んでいたビールを嘔き出す。

「うお！ きったねえな！ おい！」

「けほっ、バカ！ 誰がアイツらなんか……」

「そうか？ あのちっこいのはとにかく、クリスカって奴は結構いい女だぜ？」

「けっ、あんな胸がでかいだけの性悪女のどこがいいのさ？ だいたいユウヤは無人島で2人きりになっても手を出さなかったんだろ？ VGみたいな変態とは違うんだよ」

ヴァレリオの言葉にタリサが食いつく。ちなみにタリサがクリスカを嫌うのには性格のこともあるがクリスカの胸がでかいことも関係している。いくらグラハムの恋人になれたと言ってもやはりもう少し胸が大きくなってほしいタリサだった。

「それがよ、実はユウヤはあのちっこい方が好みらしいぜ？」

「ああ、だから唯依姫にも興味ゼロなのか。実はロリってか？」

それを聞いたユウヤは再びビールを嘔き出し、再び飛沫がヴァレリ

タリサは勢いに任せて反論したがそれは失敗だった。なぜなら……

「へえ~~~~」

ヴァレリオとヴィンセントはニヤニヤと笑っており、ステラは「あらあら」と微笑ましいものを見るような視線になっている。先程のタリサの台詞はヴァレリオにさらにかう材料を与えただけだった。

「さすがは4年間も大佐のことを想ってた奴の言うことは違うなあ？」

「そうねえ、中々言えないわよねえ」

ヴァレリオとステラは結託してタリサをからかい始める。

「で、タリサは大佐とどこまで行っただ？キスはもうしたのか？それとも夜の方も経験済みってか？」

ここぞとばかりにヴァレリオがタリサに質問する。その表情から明らかにからかっているのは丸わかりだった。

「あら、その辺は私がもう聞いたわよ？夜は大佐は凄いいけど優しいのよね？」

「す、ステラ！？／／／／／」

タリサの顔が真っ赤になる。ちなみにステラが入手している情報は以前、グアドループ基地にいたときにキャシーがタリサを尋問して得た情報だった。

この後もタリサは次々にヴァレリオやヴィンセント、ステラにからかわれ続け、ついには顔を真っ赤にして暴走し始めたのだった。

一方その頃、ユーコン基地の統合司令部12階『プロミネンス計画』の本部には5人の人影があった。

そのうち1人はユニオンの隊長であるグラハム。他にもアルゴス試験小隊のイブラヒムやソ連のサンダークにハイネマンの姿もある。

「それは…決定事項でありますか？」

イブラヒムが重々しく口を開く。その表情は憂い色を浮かばせており、決して機嫌がいいとは言えないだろう。

「あくまでご提案ですよ、ドーウル中尉。もしよろしければ一緒にしませんか？　と言う誘いにすぎません」

テーブルを挟んで向かい側に座るサンダークの口調は柔らかい。しかしその裏にはすでに規定プランだという臭いが漂っている。

その場にいる『プロミネンス計画』の責任者であるハルトウィックが何も言わないところを見るとソ連だけでなく、各方面の意向なのだろう。

イブラヒムとて、優れた戦術機を開発するのに過酷な任務を課するのは当然と考えている。しかし、然るべき準備を怠って徒に部下を死地に送り込むのは重大な背任と考えている。しかもそれが政治的な思惑からと言うことならば尚更だ。

「ドーウル中尉、君の意見を聞こうか？」

ハルトウィックが窓の外に目を向けたまま、口を開く。

「……は、サンダー中尉の『要請』は想定外のカリキュラムです。ので我が隊の現在の練度では不安が残ります。相応の予備訓練を重ねた上での派遣を進言します。……以上です」

こう言っているイブラヒムだが、少なくともユウヤとヴァレリオ、ステラならば問題はないと考えている。ヴァレリオとステラは歴戦の衛士だし、ユウヤも最近の成長は目を見張るものがある。

しかし、それでもイブラヒムが懸念しているのはアルゴスで1番の問題児『ゲイル・クラウザー』のことである。訓練でも何かと個人プレーに走りがちでそれをフォローしようとしてチームの連携を崩し、人間的にもアメリカ人以外を差別し、見下した言動が多い彼には人間的にも、衛士としても問題が多い。

以前、タリサがアルゴスにいた頃も彼女が起こした問題に頭を痛めていた。しかしゲイルに比べれば遥かに楽だった。タリサは確かに問題は起こすが仲間とのコミュニケーションも取れているし連携も

しっかりしていた。

イブラヒムもゲイルに幾度となく雷を落とし、その行動を矯正しようとしているのだが……ハッキリ言ってもうまく行かない。イブラヒムも今まで問題がある衛士は何人か見てきたがここまで酷いのは初めてだった。

だがそれでも個人での操縦技術は優れている。実際、1対1の模擬戦では何度かヴァレリオやステラに勝ったこともある。ただし、チーム戦になると一気に勝率がなくなる。

「何を仰いますやら……我が試験部隊はここ最近目覚ましい成果を上げているじゃないですか？」

口を開いたのはサンダークやハルトウィック、グラハムではなくイブラヒムの隣に座るハイネマンだった。どうやらハイネマンも今回のことに1枚噛んでいるらしい。そんなハイネマンにイブラヒムは内心苛立ちを募らせる。

「4名中2名が最前線生き抜いた衛士ですし、メインテストパイロット首席開発衛士も成長目覚ましいではありませんか？まあ、約1名不安材料はいますが……」

一応ハイネマンもゲイルのことは懸念しているらしい。

「その不安材料が小隊の衛士たちの命を危険に晒す危険が高いと考えるが？」

そんなハイネマンに今まで黙っていたグラハムが口を開いた。

「正規部隊やあなたがたユニオンの方々も護衛につくのですし、心配いりませんよ。彼らなら。それともユニオンの方々は彼らをサポートする自信がないと？」

「我々にも出来ることとできないことがある。貴官の言う不安材料やBETAの行動いかなではどうなるかわからん」

グラハムの言う通り、戦場では不測の事態がつきものだ。しかも基本的に行動が読めないBETAが相手な上、連携を顧みない不安材料^ルがいてはどうなるかわからない。

しばらくの沈黙の後、ハルトウィックが振り返る。

「貴国のご提案、謹んでお受けする。派遣部隊はアルゴス、イーダルの他、欧州、アフリカ、中近東、アジア地域の4部隊としたい」

ハルトウィックの決定にサンダークは微笑み、イブラヒムは奥歯を噛みしめる。そしてグラハムはこれからの戦いのことを考えていた。

極東ソビエト戦線での国際合同運用試験の実施はこうして決定した。

そしてその部隊となる極東ソビエト戦線カムチャツキー基地には合同運用試験の情報が届いていた。

「まったく、後方の試験部隊を前線に出すとは……」

その情報を聞いて不機嫌そうになっている1人の女性。美しい容貌をしているがそこには歴戦の衛士としての威厳がある。彼女はカムチャツキー基地のジャーランド大隊を指揮する『フィカーツィア・ラトロワ』、階級は中佐である。

「ふん、せいぜい邪魔にならなければいいが……」

「ラトロワ中佐。見てみないうちから決めつけるのは早計だぞ？」

ラトロワの背後から1人の男性が声をかける。その顔には大きい傷が刻まれている壮年の男性が立っている。男性を見たラトロワは男性を見るとすぐに敬礼をする。

「大佐はこの後方部隊が戦力になると？」

「それは解らん。だが、私は自分で見たものしか信用しない男だ」

その人物はソ連でエースとして名を馳せる人物……このマブラヴの世界での『ロシアの荒熊』と称される衛士、『セルゲイ・スミルノフ』だった。

#29 北の大地の出会い（前書き）

思ったより早く更新できました。

今回はセルゲイさんの他に00から3人出ます。初めに行っておくと彼らはあくまでマブラヴ世界の人物としての登場で決して転生とかではありません。

そして囃ませ退場へのカウントダウン。たぶん次回か次々回です。

穴だらけの駄文ですがよろしく願います。

感想お待ちしています。

#29 北の大地の出会い

2001年8月3日、アルゴス試験小隊、イーダル試験小隊を初めとするユニコンの試験小隊とユニオンはソ連軍カムチャツキー基地にやってきていた。

試験小隊がブリーフィングを終えた後、ユニオンのメンバーであるグラハム、タリサ、キャシーはこのカムチャツキー基地の部隊に挨拶に来ていた。

この基地で特に戦闘力が高いのはジャール大隊、ベアー大隊の2部隊である。その2部隊を指揮するのはジャール大隊がロシア人であるフィカーツィア・ラトロワ中佐。そしてベアー大隊が『ロシアの荒熊』と呼ばれ、ソ連で英雄視されているセルゲイ・スミルノフ大佐である。

セルゲイ・スミルノフ大佐のことを前もって資料で知っていたグラハムだが、当然彼がいることには驚いていた。

「失礼します」

グラハムがタリサとキャシーを連れて指令室に入るとそこには基地司令の他に4人の人影があった。1人はグラハムも顔を知っている。顔に大きな傷が刻まれている壮年の男性と女性が2人、そして恐らくタリサやキャシーと同年代の少女だ。

「国連軍独立機動部隊ユニオン隊長のグラハム・エーカー大佐です」

「同じくユニオン所属、タリサ・マナンドル少尉です」

「同じくユニオン所属技術副主任、キャシー・ルーファ中尉です」

基地司令に敬礼したグラハムに続いてタリサとキャシーも敬礼する。

「よくぞいらっしやいました、ミスターブシドー。私はこの基地司令の……」

基地司令の自己紹介を聞きながらグラハムは自分たちを観察するようになっている4人をチラツと見る。ちなみに基地司令は小太りの男性である。少なくともユーコンのハルトウィックのように衛士だった人物ではないのだろう。

「それからこちらが我が基地のそれぞれベアー大隊とジャール大隊の隊長を務める……」

4人を基地司令が紹介すると彼らも全員、敬礼する。

「ベアー大隊を預かるセルゲイ・スミルノフ大佐です」

「同じくベアー大隊副官、ホリー・スミルノフ大尉です」

まずセルゲイと横にいた女性……ホリーが挨拶をする。ホリーの名前を聞いた瞬間、グラハムは脳裏に彼女のことを思い出す。

ホリー・スミルノフ……ガンダム00の世界ではセルゲイ・スミルノフの妻であり、本編ではすでに故人だった人物だ。どうやらこの世界では存命中だったらしい。性がスミルノフであることから恐らくこの世界でも夫婦なのだろう。

「ジャール大隊を預かるフィカーツァ・ラトロワ中佐です」

「同じくジャール大隊副官のナスターシャ・イヴァノワ大尉です」

次いで金髪の女性、ラトロワと栗色の髪の少女、ナスターシャがグラハムたちに敬礼する。

「基地司令殿、此度は試験小隊の実戦試験の協力ありがとうございます
ます」

グラハムは基地司令に礼を言う。グラハムたちユニオンもXFJ計画の協力者なのでこういった挨拶はしつかりする。

「いえいえ、これで戦術機開発に貢献できるのでしたら喜んで……」

基地司令が明らかな愛想笑いをしながら返答する。しばらくしてグラハムたちユニオンのメンバーとセルゲイたちが指令室を後にするとセルゲイがグラハムに話しかけてくる。

「エーカー大佐、貴官は今回の実戦試験どう考えている？」

セルゲイの疑問はある意味もつともだった。試験小隊の中には実戦経験がない小隊も存在する。それは前線の部隊にすれば非常に不安要素が多いことだ。僅かな油断が命取りとなる戦場で実戦経験がないものたちを気に懸けていては逆に隊のものの命が危険に晒される。

「懸念事項は多いと言わざるを得ん。中には実戦経験が豊富な者もいるが問題は多い」

それを聞いているタリサの脳裏には一瞬にしてアルゴス試験小隊の

ゲイルの顔が思い浮かんだ。タリサの中では問題がある衛士の筆頭なのだろう。

他にもユウヤもゲイルと同じく実戦経験がないがヴァレリオやステラとのチームワークは問題ないし、仲間2人が実戦経験豊富なのでフォローもできる。

「私も第1次派遣のドゥーマ小隊のことは聞いている。だが我々は軍人だ。ならば最善を尽くすしかないだろう」

ドゥーマ小隊……アルゴスやイーダルに先んじて派遣された第1次派遣部隊であったが、BETAとの戦いを見てシエルショックに陥り、護衛部隊にも被害が出ていた。言うまでもないセルゲイが心配しているのはそれだ。アルゴスやイーダルがドゥーマ小隊と同じような状況にならないと言い切ることはできない。もちろん、アルゴスはヴァレリオとステラと言う歴戦の衛士がいたのでそこまでの心配はないだろうが……

「確かにその通りだ。だができるだけドゥーマ小隊の2の轍を踏むことだけは避けてもらいたい。私も味方が原因で部下を失いたくからな」

「それは重々承知しています」

グラハム・エーカーとして……ガンダム00の世界で次々に部下を失ったグラハムにはセルゲイの気持ちは痛いほどよくわかる。

「しかし次の作戦で実戦に出るアルゴス試験小隊についてはシエルショックの心配はないでしょう。隊員のうち2人は前線を経験した歴戦の衛士です。ただ問題があるとすれば……実戦経験のない残り

2人のうちの1人が暴走する危険性があることですが……」

グラハムは今後のために1番の懸念事項をセルゲイとラトロワに説明する。アメリカ人以外を激しく差別し、さらにはチームワークがまるで取れないゲイルのことだ。最悪の場合はグラハムも足を切り落とすなりなんなりして回収するつもりではあるが……

「なるほど……確かに問題ではあるな……」

ゲイルが暴走して1人で突出すればそれだけで味方部隊に混乱が生じる可能性がある。最悪の場合は暴走の末、友軍誤射を起こす可能性もある。もちろんこれらはあくまで可能性の話であり、起こることは限らない。……だが、結局この心配は当たってしまうことになる。

一方、ユウヤたちアルゴスの面々はブリーフィングを終えて解散していた。その中でユウヤは基地の中を散策しながら考え事をしてい

る。

考えているのはまずは烈火が使用するために新たに持ち込まれた試作武装『試製99型電磁投射砲』……日本帝国が開発していた史上初の戦闘用レールガンである。

すでにユニオンによってビーム兵器が開発、配備されている今、実弾兵器はあまり注目を浴びることは少ない。しかしビームはその日の天候によって威力が減退する場合がある。そういった状況では逆に実弾武装の方がいい場合もあるのだ。なにより『試製99式電磁投射砲』は連射製が高く、多くの敵に攻撃ができる。

その辺りはガナーザクウォーリアのオルトロスも広範囲に攻撃できるがやはりビーム兵器である以上、天候などによって威力が減退する。その点、実弾兵器である99型電磁投射砲ならばそういった心配なく敵を殲滅できるのだ。

しかしユウヤが考えているのは、まず実戦試験のタイミングで試作兵器であるこの武器が使用されること。実戦では試作武装など不安要素以外の何物でもない。もう1つは烈火の開発コンセプトと真逆であるということだ。

この『試製99式電磁投射砲』は烈火が装備しているビームライフルに比べて重量が遥かに重い。それは烈火の機動性が犠牲にされていることを意味する。まあその辺はブリーフィングの後に唯依に投射砲を見せてもらったときに唯依に教えられた。平たく言えば『なりふり構ってられない』ということだった。

もう1つ考えていることは唯依が言った言葉……

『今、私が失いたくないもの……それは烈火と……その首席開発衛士
メンテナンスパイロット
である貴様なのだ』

初めて唯依が口にした自分を心配する言葉。その後にはユウヤも唯依に投射砲を見せてくれたことに礼を言った。なんだかんだでユウヤも変わってきているのだ。

「（烈火も……電磁投射砲も必ず無傷で持ち帰る……だから安心しろよ中尉）」

……それも、かなりいい方向に……あのグアドループでユウヤと唯依、クリスカが遭難した事故以来、ユウヤの中の日本人への差別意識は多少なりとも薄まっていた。

「いいじゃねえかよ。な？」

そうしてしばらくユウヤが歩いていると聞き覚えのある声が聞こえる。言うまでもない、アルゴス最大……いや、ユーコン基地最大の問題児であるゲイルだ。どうやら女性……恐らくこの基地所属だろう……をナンパしているらしい。ナンパにはただ声をかけるだけで断られれば引き下がるものもいるがゲイルのナンパは性質が悪い。所謂、力尽くと言うやつだ。

「なあ、いいじゃねえか？俺はアメリカのエリート衛士だぜ？」

「断る。私には貴様の相手をしている暇はない！」

ゲイルに手を掴まれている女性は銀色の長い髪に金色の瞳の女性だった。

「おい！なにやってんだ！」

「ちっ！」

ユウヤが2人に近付いていくとゲイルは舌打ちをする。

「んだよ、ブリッジス。いまこっちは取り込み中だぜ？」

「何を取り込み中だ。こっちの基地でまで問題起こすじゃねえよ」

ユウヤとゲイルは一食触発の空気である。

「へっ、良い子ちゃんが」

ゲイルはそれだけ言い残すと唾を吐き捨ててその場を後にする。

「すまない、うちの隊員が迷惑をかけた」

ユウヤは先程までゲイルが絡んでいた女性を見ると謝罪する。すると女性も顔を横に振る。

「いや、助かった。ありがとう。貴官は？」

「俺はアルゴス試験小隊のユウヤ・ブリッジス少尉だ。ここにはユニコン基地から実戦試験できたんだが……」

「……そうか、貴官が……」

ユウヤの自己紹介を聞いて女性の顔が少々曇る。やはりこの基地の人間からは先日のドゥーマ小隊の1件もあってあまりいい顔をされ

ないらしい。

「私はベアー大隊所属、ソーマ・スミルノフ少尉だ。さっきはありがとう、ブリッジス少尉」

「ソーマ！」

彼女……ソーマがユウヤに挨拶をすると1人の青年が走り寄ってきた。その青年をユウヤが見ると制服に中尉をしめすマークがあったのでユウヤは慌てて敬礼する。

「兄さん？」

「こんなところにいたのか……君は？」

青年はユウヤの方を見て訊ねる。ユウヤは敬礼をしたまま青年に挨拶する。

「はっ。アルゴス試験小隊所属、ユウヤ・ブリッジス少尉であります」

「さっきちょっとガラの悪い男に絡まれて……彼に助けてもらったんです（兄さん？）」

ソーマがユウヤに対するときとは違う対応をする。まあ確かに同じ階級の同僚と兄とは当たり前だろう。

「そうか……妹が世話になった。私はベアー大隊所属、アンドレイ・スミルノフ中尉だ」

「いえ、もともと私の隊の人間が原因ですので……（なるほど……
兄妹か…）」

ユウヤも相手が中尉…それも唯依と違って初対面の相手なので一応敬語を使っている。その内心ではソーマがアンドレイのことを『兄さん』と呼んだことに納得した。

この2人……セルゲイやホリーと同じくガンダム00の世界とは似て非なる人物たちだ。その証拠に実はこの2人、血の繋がった兄妹である。そしてユウヤが心の中で思ったことは……

「（似てない兄妹だな）」

結構失礼なことだった。

「君たちアルゴス試験小隊のことは聞いている。今度の戦闘で実戦試験をする……」

「はっ、その際はよろしくお願いします」

「ああ、じゃあ私たちはこれで失礼する」

そう言ってユウヤに背を向けるアンドレイ。するとソーマが不意にユウヤに近づく。

「ブリッジス少尉、先程の男だが……隊から外した方がいい。アレは隊に害をなすだけの人間だ」

「……けど、俺にそんな権限はないからな…無理だ」

ソーマはユウヤにそう忠告にユウヤは顔を顰めながら答える。ユウヤにもゲイルは外した方がいいとは思っていた。しかしユウヤはアルゴスのコールサイン1を任されているが実質的に指揮官はイブラヒムである。ユウヤにそんな権限はない。

そしてユウヤの初実戦の時は着実に近づいていた。

#29 北の大地の出会い（後書き）

と言うわけで00ではすでに故人だったホリー。そしてアンドレイとセルゲイの娘版のピーリスです。

ソーマの性格はピーリスとマリーの性格が混ざった感じですよ。

#30 実戦開始（前書き）

更新です。

とりあえず本格的な戦闘は次回、そして奴が消えるのも次回になってしまいました。申し訳ない。

理由はまあ、思ったよりも長くなりそうだったので一端ここで切りました。

それとユニオンのレオンですが名前を変更してミシエルにしました。こちらの理由はTEにレオンと言う名前のキャラがいるのを思い出したので……

穴だらけの駄文ですがよろしくお願いします。感想お待ちしております。

#30 実戦開始

2001年8月13日、ユニオンとユウヤたちアルゴス試験小隊はカムチャツカ州の補給基地前にて、警戒態勢に入っていた。

「アルゴス1より各機、準備は良いか？」

『アルゴス2了解』

『へっ、アルゴス3了解』

『アルゴス4了解』

ユウヤ（アルゴス1）の呼び掛けに全員が答える。ちなみにアルゴス2がヴァレリオ、アルゴス3がゲイル、アルゴス4はステラである。

小隊員からの返事を確認し、アルゴス試験小隊は自分たちが受け持つ区画へ向かう。その区画ではフィカーツィア・ラトロワ中佐率いるジャール大隊だった。

「（そう言えばあいつ……本当に大丈夫なのか？）」

ふと、ユウヤはことは違う第1区に配置されたイーダル試験小隊の『紅の姉妹』の片割れであるクリスカ・ビャーチェノワのことを考える。

それは今から約10日前のこと、クリスカとイーニアはジャール大隊の隊員たちに絡まれていた。2人に対して数人の……まだ少年と言う年齢の隊員たちが囲んでいた。

明らかに敵意を見せるジャール大隊の隊員たち。その彼らに同じソ連軍であるはずのクリスカは困惑の表情を浮かべていた。

「私たちは祖国のために戦う同胞……なのに何故お前たちは敵意を向けるんだ？」

その困惑にクリスカは率直な質問で訊ねる。しかし返ってきたのは激しい罵声だけだった。

「同胞？調子に乗ってんなよ党のメス犬が！」

「自分たちだけ先に逃げやがった癖に……何が同胞だ！」

「散々搾取しやがって……ぶっ殺すぞクソアマ！」

「いざとなったら捨て駒じゃねえか！」

口々に浴びせられる罵声の嵐。そんな彼らにクリスカはさらに困惑していく。

「ま、待ってくれ！お前たちだってソ連軍の……」

「違う！お前たちは：ロシア軍だ！ソ連なんて初めからねえんだよ！お前らロシアが押し付けたんだ！」

「な…何を言ってるんだ？……わ…わからない……なんのことだ？」

クリスカは自分たちはソ連軍だと信じている。それ自体は間違っていないし対外的にはそうなのだろう。しかし最前線で戦っているロシア人でない者たちにはそうではない。

「とぼけてんじゃねえぞ！お前たちの部隊にはロシア人しか入れないんだよ！アラスカに逃げたのはほとんどロシア人だろ！前線で戦っているのはそれ以外だ！」

ソ連には確かにロシア以外にも多くの共和国があった。だがソビエト連邦はあくまでソビエト連邦でありソ連軍はそれを護るための1つの軍隊である。それがクリスカが認識していることだった。

しかし真実はソ連はロシアとそれ以外の被支配民族があり、前線で戦っているのは一部を除いてその被支配民族の人間なのだ。そしてロシア人は他の被支配民族を戦わせ、後方に下がった。それは紛れもない事実であり、彼らジャール大隊の言っているのはそう言うことだ。

だがクリスカはそんなことは知らない。いや、教えられていないのだ。ソ連はあくまでソ連。そこに民族の差別などないと：クリスカ

は思っている。そして彼らの言葉から言い知れぬ不安を覚えたクリスカはその場にへたり込んでしまった。

「クリスカあ！クリスカあ！！」

そんなクリスカにイーニアは縋りつくように抱きついてくる。彼女たちを囲っているジャール大隊の隊員たちは口々に再び罵声を浴びせる。

「おいおい、こんな小汚ねえ所にへたり込んで何しようってんだ！？ビビりすぎて小便でも漏らしたか！」

彼らは侮蔑の視線を向けながら彼女たちの包囲を狭め、にじり寄る。

「ちっ、やっぱり腰抜けじゃねえか。みつともねえ」

「確か48番格納庫にある紫のS u - 37 U B、こいつ等のだぜ」
チエルミニナートル

「おーおー、おもちゃだけは1人前かよ？」

「こんなんでも良く衛士とか言えるよな？クソの役にもたたねえぜ」

「（役に…立たない？）」

彼らの侮蔑の言葉がクリスカの心に突き刺さる。

「こいつらどうする？剥いちまうか？」

「ああ、金網の刑な？8番格納庫前のフェンスが良いんじゃない？」

「332中隊のオヤジに喰わせるぐらいなら先にいただいちまおうぜ！」

「（喰わせる？ いただく？ ……なんの…ことだ？）」

彼らの言葉にクリスカは心の中で疑問符を浮かべ続ける。恐らく彼女たちには『そういった知識』が一切ないのだろう。

ジャール大隊の隊員たちに囲まれ、イーニアがクリスカから引き剥がされて羽交い絞めにされる。イーニアは必死になって抵抗し、クリスカのフライトジャケットの袖を掴み続けている。

「がっ！」

すると突然横から衝撃が加わり、クリスカは自分を羽交い絞めにしていた衛士の上に仰向けで倒れこむ。

「イーニア！」

その声の主はクリスカではない。先程の横からの衝撃…それは悲鳴を聞いて駆けつけ、クリスカとイーニアが暴行されようとしていることを瞬時に理解したユウヤだった。

「な…（こいつら…ガキじゃねえか！）」

ユウヤは殴ってから初めて気付いた。クリスカとイーニアを囲っていたのは10代前半という年齢だろう少女少女だった。正確な人数は少女が4人、少年が3人だ。

とにかくユウヤは暴行を受けかけていたクリスカとイーニアの安否

を確認する。しかしそんなユウヤたちになおも少年たちが食いつく。

「女の前だからってカッコつけると後悔するぜ？にーちゃん」

ユウヤに挑みかかるような口調で近付いてきたのは1人の少女だった。

「だいたいなんだよお前は！死にてえのか！」

「お前らこそなんだよ！整備兵か！？」

「ふざけんなよ！俺たちは衛士だ！よく見ろよバーカ！」

「なっ！？」

それを聞いたユウヤは彼らの胸にある衛士の証であるウイングマークに目が行く。そしてユウヤは再び現実を痛感する。

BETAとの長期間にわたる戦いで圧倒的な劣勢に立たされていた人類は開戦当初、数年で成人男性のほとんどを失っていた。そのため、ユーラシアでは徴兵年齢が年々引き下がり、現在では女性だけでなく少女まで徴兵の対象になっていた。それがないのはいまだに戦場になっていないアメリカぐらいのものである。

実際、タリサも4年前の初陣の時点で彼らと変わらない14歳だった。他にも恐らくイーニアは彼らとそう変わらない年齢だろう。

「おい、お前。なに余裕かましてんだ？仲間殴った分はキツチリカタつけるからな？」

良く見ると彼らの手には鉄パイプや軍用ナイフが握られている。ユウヤもそれなりに生身の格闘もできるが6対1（ユウヤが殴った1人はまだ延びている）の状況でしかも相手は武器を持っている。しかも彼らは全員同じ部隊の人間であるため、連携も問題ないだろう。

「（援軍は見込めそうにねえな）」

一瞬ユウヤがそう考えたとき、その考えは裏切られた。

「何やってんだお前ら！」

その咆哮と共に褐色の小さい何かが鉄パイプを持っていた少年を吹き飛ばした。

「「「「「なっ!?!」」」」」

驚きの声が上がったのは少年たちである。ユウヤはその声に聞き覚えがあったので驚きは少なかった。

「まったく、味方相手になに武器持って囲んでんだよ」

そこにいたのは褐色の小柄の少女、タリサだった。どうやら顔見知り（ユウヤ）が武器を持った連中に囲まれてるのを見て少年のうちの1人に飛び蹴りを喰らわしたのだ。

「なんだこのガキ！」

「ああ!?!」

囲んでいる少女の1人の言葉にタリサは拳を鳴らしながら睨みつけ

る。もともとネパールでも勇猛なグルカ民族出身である彼女は自身の格闘戦も得意でしかもNTとしての能力もある。その気性から武器を持っている彼らに物怖じした様子はない。

「おい、このガキが着てんのユニオンの軍服だぜ？」

「そーそー、確かユニオンの衛士だ！」

「マジかよ。こんなガキがユニオンの衛士？ユニオンの隊長ってロリコンの変態なんじゃねえの？確か変な仮面被ってたよな？これじゃあ本人の実力も怪しいもんだぜ」

「っ！？」

少年たちは『ガキ』と呼んでいるが実年齢はタリサの方が上である。ただ単に幼児体型なだけだ。彼らは場の空気やユニオンの戦いを直接見ていないためにこんなことを言っている。そしてその彼らの言動はタリサを激昂させるには十分すぎるものだった。

「デメエら……ぶち殺す！」

「っ！？（なんだこれ？……このプレッシャー……チョビが？）」

本気でブチ切れたタリサにユウヤを含むその場の全員が息を飲む。完全に切れたタリサからはNTではないユウヤたちにすらわかるほどのプレッシャーを放っている。

タリサを切れさせた原因は簡単だ。タリサは自分を馬鹿にする言葉には怒りを露わにする。その辺は短気な彼女なら当たり前である。しかし、それ以上に彼女を憤らせているのは尊敬する上官であり、

最愛の恋人であるグラハムを侮辱した発言である。

ユウヤもグラハムと友好的なので先程のグラハムを侮辱する発言には怒りを覚えた。しかしタリサのそれはユウヤの比ではない。今にも殺しにかかりそうな雰囲気である。

「タリサ！」

「っ!？」

突然背後から声がかかり、タリサから発せられていたプレッシャーが沈静化する。その声の主はタリサの手綱を唯一とることができるグラハムだった。また、その背後にはラトロワの姿も見える。

「た、大佐……」

グラハムの姿にタリサは先程の獰猛さが嘘のように大人しくなる。するとグラハムの背後にいたラトロワが少年たちの前に出る。

「貴様らにお客さんと遊んでいる暇などないはずだが？」

別段怒鳴っているわけではない、しかし凜とした威厳をもつラトロワの声に少年たちは直立して硬直している。

「歓迎パーティーはお開きだ！貴様らはすぐ持ち場に戻って機体の整備補給の状況の確認だ！急げ！」

「「「「了解!!」」」」

ラトロワが命令すると少年たちは一目散に走り去って行った。彼ら

を見送るとラトロワはグラハムに向き直る。

「部下がお見苦しいところを見せました。大佐」

「……構わんよ。前線ではこういうこともある」

グラハムも別段咎めるつもりはないらしい。次にラトロワはユウヤたちの前に来る。ユウヤは瞬時にラトロワのフライトジャケットにある中佐の階級章に気付き、敬礼する。

「ありがとうございました。大佐、中佐、おかげで……」

「ふん、貴様ら…分を弁えて行動しろ。いいな」

僅かにユウヤとクリスカ、イーニアを値踏みするようを見ると1度グラハムに敬礼し、ラトロワはその場を後にした。

「大佐、ありがとうございました」

ユウヤはラトロワの姿が見えなくなると改めてグラハムに敬礼して礼を言う。

「なに、私は偶然ここを通りかかったただだ。だが、無事で良かった」

グラハムはユウヤの言葉に笑みを浮かべながら答える。

「ではな、行くぞタリサ」

「は、はい！」

グラハムはそのままタリサと共に去って行った。

ユウヤたちからある程度離れるとタリサはグラハムに尋ねる。

「あの…大佐？ ホントにあそこに来たの偶然だったのか？」

「そんな訳ないだろう？ 君があれだけ強烈なプレッシャーを放っていたのでな。君を探していたのもあって簡単に見つけられた」

「あ……」

確かにタリサはあの時、怒りでユウヤたちですらも察知できるほどのプレッシャーを放っていた。NTではないユウヤにもわかるぐら이다。NTであるグラハムなら多少距離があっても感じることはできる。そしてその途中でラトロワに会ったので一緒に来たというわけだ。

「…けど、大佐はなんでアタシを探してたんだ？」

タリサの言葉にグラハムはタリサの方を向いてその頬に手を添わせる。

「うえ！？ た、大佐？／／／」

「私が愛する女性に会いたいと思ってはいけなにか？」

「あ……う……／＼／＼／＼／」

相変わらず恥ずかしげもなく愛を囁くグラハムにタリサは真っ赤になっってしまった。

と、1番最後は少々余分だったがその時にクリスカが暴行を受けかけたことで彼女が神経症にでもなったのではないかと心配になったのだ。

『なあ、ヤンキー共は随分静かだぜ？寝ちまってんかねーだろうな？』

『さあ？震えて声も出ないんじゃないの？』

『装備だけは1人前、衛士は腰抜けってところだろ?』

それはアルゴス試験小隊の護衛を務めているジャール大隊の衛士たちのオープンチャンネルでの会話だった。

その後もユウヤたちを嘲笑する会話が続けられる。ヴァレリオやステラはある程度馴れているのか反応していないし、ユウヤも任務に集中するために無視を決め込んでいる。だが……

『いちいちうるせえぞ!クソガキども!』

アルゴスの問題児は黙っていてはくれなかった。そのことにユウヤは頭を抱える。

『なんだよ、ホントのことだろ?後方で震えてるだけのビビりがよ!』

『黙ってたのが聞こえねえかガキ共!化け物に無様に負けて祖国を追われた負け犬共が!』

『っ!?実戦経験もないクソヤンキーが!いい気になるんじゃないやねえ!』

ゲイルの言葉に逆にジャール大隊の衛士たちが激昂する。このまま壮絶な口喧嘩が繰り広げられると思われたが……

『振動波、急速に増大!波形パターンネガティブ!』

CPからの報告が急速に舞い込む。どうやらBETAが出現したらしい。それからしばらくして、洋上の艦隊や各方面の戦車部隊から

の砲撃が降り注ぐ。

今回の作戦は海中から出現するBETAに対し、第1段階では水上艦の爆雷攻撃、第2段階上陸地点での支援砲撃や航空爆撃。第3段階がそれを掻い潜った敵への機甲部隊や戦闘ヘリの直接打撃。そして第4段階が混戦になった場合の戦術機、及びMSによる戦闘である。当然、ジャーल大隊やことは別のイーダル試験小隊の護衛についているセルゲイ率いるメドヴィエチ大隊にもMSが配備されている。ちなみにラトロワが搭乗しているのはブレイズザクウォーリアである。

『おいおい、マジかよ?』

ここでヴァレリオが戦場の異変に気付いた。すでに状況は第2段階：つまりは支援砲撃の段階に入っている。だが、明らかに砲撃が薄いのだ。どうやら戦車の数が足りていないらしい。

『これじゃあ：相当数が撃ち漏らしになるわよ?』

その頃、アルゴスの後方で待機していたグラハムとタリサも現状に気付いていた。

『大佐！』

「わかつている。タリサ、すぐに向かうぞ」

グラハムたちはすぐにカスタムフラッグとサキガケを発進させる。この2機の機動力ならBETAが戦術機部隊に接触する前に到着できるだろう。グラハムは発進と同時にゼロシステムを起動させる。グラハムもこれまでの訓練ですでにゼロシステムを使いこなしていた。実戦で使うのは今回が初めてではあるが、恐らく問題はないだろう。

こうしてカムチャツカの戦いの火蓋は切って落とされた。

#31 散る生命、そして……（前書き）

ようやく更新です。

大学のレポートや試験勉強の合間に書いていたのでやたら時間かかりました。

今回でついに奴が退場です。

それと以前感想版でいただいた意見でセルゲイさんの部隊名をベアー大隊からメドヴィエチ大隊に変更しました。

感想お待ちしております。

#31 散る生命、そして……

戦闘開始から数十分、ユウヤたちアルゴス試験小隊とはまた別の場所であるここ、第1区ではクリスカとイーニアが所属するイーダル試験小隊とその護衛部隊であるセルゲイ・スミルノフ率いるメドヴィエチ大隊がBETAとの戦闘を開始していた。

この第1区でも戦車部隊の数が足りておらず、すでに戦術機による戦闘が始まっていた。戦車部隊の数が足りないのは簡単に言えばひと月前のBETAの地中侵攻によって受けた損害からまだ完全に立ち直っていないのだ。

数少ない生き残りとは各戦域から補充兵と戦闘車輛が無理やり抽出されてあてがわれていた。しかし、いくら個々が最前線の精鋭でも数が足りていないうえに僅かひと月という短期間では連携、火力共に以前の水準に達していなかった。だが、この事実こそソビエト軍の1部の者たちによって秘匿されていたのだ。

「クリスカ……こいつらみんなやつつけばほめてもらえる？」

「勿論だよ、だから早く終わらせよう……イーニア」

クリスカとイーニア：『紅の姉妹』が駆るチェルミナートルが戦場を縦横無尽に駆け回ってBETAを駆逐する。その光景をメドヴィエチ大隊の隊長であるセルゲイがBETAを倒しながら見ていた。

「……なるほど、いい腕だ。初実戦とは思えん……メドヴィエチ1からメドヴィエチ大隊各員、一気に食らいつくすぞ！」

『『『了解!』』』

セルゲイの号令にメドヴィエチ大隊の面々が抜群の連携でBETAを駆逐する。セルゲイも愛機であるブレイズザクウォーリアのビームライフルとファイアビーを一斉射し、BETAを次々に焼き尽くす。

「ふふ、あの人がかりにいい恰好はさせてられないわね」

そのセルゲイの奮闘にセルゲイの妻であり、メドヴィエチ大隊の副官であるホリーがガナーザクウォーリアのオルトロスでBETAを焼き払う。

ソ連軍に配備されたMSは数機は研究用に後方へ回され、セルゲイやホリー、ラトロワのようなエースには優先的に配備されていた。

『ソーマ!』

『はい!』

さらにスラッシュザクウォーリアに搭乗しているアンドレイとブレイズザクウォーリアに搭乗するソーマも互いに連携をとり、他の部隊員のフォローをしながらBETAを殲滅する。この2人も現段階ではセルゲイやホリーに及ばないが十分エースであった。

一方、ユウヤたちアルゴス試験小隊の方でもジャール大隊が戦術機及び、MSによる戦闘を開始していた。ラトロワはブレイズザクウォーリアで、ターシャはスラッシュザクウォーリアで、他の衛士たちも数名はザクウォーリアに搭乗している。

さらにその戦場にグラハムとタリサが駆るフラッグカスタムとサキガケも到着し、戦線に参加した。フラッグカスタムは上空からリニアライフルを連射して要撃級を撃ち抜き、さらにその足元にいた小型種のBETAも巻き込まれて次々に死んでいく。

「おらああああああ!!!!」

タリサが操るサキガケはBETAたちに対してGNビームサーベルとGNショットビームサーベルを両手に持って格闘戦で斬殺していく。さらにある程度近付いてきた要撃級に対してはショットビームキャノンで迎撃し、空に舞い上がる。すると視界にジャール大隊の戦術機が入る。

「ちえ、言うだけあっていい動きしてるな」

数日前のジャール大隊の衛士たちのことを思いだす。現在、目の前で展開されている戦いが彼らが間違いなく精鋭であることを物語っている。

「まあ、それでもアタシの方が上だけだな！」

しかしその動きを見てもタリサは自分の方が彼らよりも技量が上だと確信する。当然、その自分よりもグラハムの方が上であることは理解しているが……

そしてタリサはジャール大隊の衛士たちに見せつけるようにサキガケで再びBETAの殲滅を開始した。

それとほぼ同時刻、ユウヤたちアルゴス試験小隊も行動を開始していた。ユウヤの烈火は99型電磁投射砲の砲撃体勢に入っていた。砲撃体勢に入ったために通常よりも機動力が低下している烈火を援護するようにヴァレリオとゲイルのアクティブ・イーグル2機とステラのストライク・イーグルが突撃砲を構えている。

「（やってやる……俺はそのためここにいるんだ！）」

近接戦闘を繰り広げているユニオンのグラハム機とタリサ機、そし

てジャール大隊の姿がユウヤの視界に映る。混戦状態になりつつある戦場にユウヤの手に汗が流れる。

「（味方を巻き込むのは許されない……）」

例によって鬼神の如き働きでBETAを殲滅しているフラッグカスラムとサキガケ、そして精鋭の名に恥じない動きをしているジャール大隊。しかし、明らかに数が足りなかった戦車部隊は連携精度が低く、撤退も遅い。そんな戦車部隊に追い縋るBETAたちをグラハムたちは撃破しているが、やはりBETAはそうそう簡単には数を減らしてはくれない。

「くそ……」

そんな状況にユウヤは悪態をつく。本来、今ユウヤたちがやろうとしている長距離砲撃はこのように混戦状態になる前に行うべき戦術なのだ。しかし面制圧を行うはずの戦車部隊の数が足りず、混戦状態で長距離砲撃を行わなければならなくなった。

『アルゴス4よりアルゴス1！NE－62－31よ！！』

不意に、ステラから通信が入る。ユウヤがステラに教えられた戦域を見ると現在、グラハムたちが交戦している場所とは別方向の海岸からBETAが上陸し、戦車部隊の側面に向かっていった。その先には遮る味方も、障害物も存在しない。

「（気付いてねえのかよ中佐！？）」

データリンクは正常、対処しきれていなかった。そこにグラハムから通信が入る。

「大佐！」

『状況は確認している。ラトロワ中佐にはこちらから連絡しておく、君は砲撃に集中しろ。敢えて言おう、君ならうまくやれる』

99型電磁投射砲の威力を知るグラハムはBETAの存在を確認し、すぐにユウヤに連絡してきた。この状況でもっとも効率良くBETAを殲滅できるのは99型電磁投射砲だと理解していた。

「了解！」

グラハムの言葉を聞き、ユウヤはステラからの通信に耳を傾けながら砲撃の準備に入る。ユウヤにとって、正直先程のグラハムの通信は有り難かった。特に最後の言葉……最強の衛士に信頼されているという自負がユウヤの迷いを払拭する。

『アルゴス4よりアルゴス1！ジャール大隊、及びユニオンの安全区域までの後退を確認！』

「（よし！）」

ステラからの通信にユウヤはトリガーを押し込む。

「（米軍上がりを舐めんな……こちとら射撃はお家芸なんだ！！）」

そして99型電磁投射砲から閃光が放たれる。轟音が響き渡り、烈火には激しい反動が加わる。目にも止まらぬ速さで速射される120mm弾が突撃級の堅牢な装甲すらも飴細工のように撃ち貫き、他のBETAたちも全て蜂の巣にしていく。結果、海岸線を埋め尽く

していたBETAの8割が一瞬でただの肉塊に変わっていた。

『なんだありゃあ!?!』

『中佐! いったい何が起きたんですか!?!』

一方、その光景にジャール大隊の面々は驚きを隠せなかった。ガナーザクウォーリアのオルトロスにも決して劣らない威力。しかも実弾兵器であることから機体の稼働時間を短くすることはない。

「あの坊や……」

その光景を見ていたラトロワは呟きながらユウヤの乗る烈火を見る。

圧倒的な火力にも驚いたが彼女がより注視していたのはユウヤの挙動だ。99型電磁投射砲のトリガーを引くまでの動きに新兵に有りがちな迷いがまるでなかった。それはグラハムからの通信が原因ではあったが……ユウヤは見事に友軍誤射を起こさずにBETAのみを撃ち抜いていた。

「ジャール1より各機、休憩は終わりだ！残飯を平らげろ！」

『『『了解!!』『』『』』』』

そして残されたBETAたちにジャール大隊が向かって行った。

「ふう………」

砲撃を終えたユウヤが一息つく。するとCPから通信が入った。

『CPより、アルゴス1』

「あ？なんで中尉が？」

ユウヤが通信から聞こえる唯依の声に疑問を口にする。もともと、CPはアルゴス試験小隊の指揮官であるイブラヒムが行っていた。が、イブラヒムはすでに残的殲滅に移っていたために唯依にインカムを渡し、戦術機データの検証を口実に小隊の状況確認と行動の指示を頼んだのだ。

これはイブラヒムの気遣いだった。イブラヒムは唯依がユウヤたちを心配していることを見抜き、彼女にインカムを渡した。ようは『声をかけてやれ』ということだ。

『いや、緊急事態だ。アルゴス1、現状を報告せよ』

唯依は適当に誤魔化しながらユウヤに現状の報告を要請する。その内心には僅かな気恥ずかしさが生まれていた。

「……アルゴス1了解。全機健在、損害なし。中尉の大事な投射砲も含めてな」

ユウヤも少しばかり苦笑いしながら現状報告を行う。

『そう…か……よくやった、アルゴス1。初陣にしては上出来だ』

唯依は出来るだけイブラヒムのように振る舞う。そして気恥ずかし

さから付け加えてしまった後半部分を書いてから後悔した。

「そりゃあこっちの台詞だ……」

『え?』

ユウヤの言葉に唯依は疑問符を浮かべる。そしてユウヤは笑顔で次の言葉を紡いだ。

「あんたが手掛けた投射砲がみんなを救ったんだ……日本人も、結構やるじゃねえか」

それを聞いた唯依の胸に暖かいものが込み上げてくる。それがなんなのか唯依にはまるで解らず、必死にユウヤに悟られまいとし、なんとか気の利いた返答をしようとしたが上手くしゃべることができない。

「…CP、指示を頼む」

『……状況終了、アルゴス試験小隊は直ちに帰投せよ』

「アルゴス1、了解!」

それを最後にCPからの通信はいったん切れる。するとアルゴス試験小隊の横に残敵の殲滅を終えたジャール大隊が追いついてきた。作戦開始前と同じようにオープンチャンネルでジャール大隊の衛士たちから通信が入る。その彼らの口調には獲物を横取りされた腹いせか……または圧倒的な威力を見せられたことへの反発か、苛立ちが一段と強くなっていた。

『おい、ヤンキー。あんま調子に乗るなよ？ テメエは突っ立ってトリガー引いただけなんだよ』

「っ!？」

『これが実戦だなんて思ったら大間違いだぜぼくちゃんよお!』

『あのキャノンなしでやってみな! 話はそれからだ腰抜け!』

その言葉にユウヤは無意識に操縦桿を握り締める。そんなことはユウヤにも……いや、ユウヤが1番良くわかっていた。自分はただトリガーを引いただけ……もしも別の衛士がやっても同じ結果になっていただろう。

「そうだ……お前らの言う通りだ……」

そんな呟きが烈火のコクピットに響く。だが……まだ終わってはいなかった。

『CPより各機! 振動波、急速に増大!』

CPから入った通信にユニオン、アルゴス試験小隊、ジャール大隊に緊張が走る。その通信が意味するものは……新たなBETAの侵攻である。

『くっ! 1日に2度目だと!？』

通信を聞いたラトロワは再び部隊を展開させてBETAの迎撃に向かおうとする。今までこのカムチャツカ基地も何度もBETAの侵攻を受けているが、このように間を置いての侵攻は初めてだった。

この報告を受けてユニオン、アルゴス試験小隊、ジャール大隊はすぐに迎撃に向かう。するとすぐに上陸したBETAを目視できる位置まできた。

「ちい！」

それを見たユウヤは再び99型電磁投射砲の砲撃体勢になる。まだ99型電磁投射砲には十分残弾が残っている。しかも今回はまだ混戦状態ではないのでこの選択は最善だった……そう……最善だったはずだった……

『っ！？ブリッジス少尉！クラウドザー少尉を止めろ！』

「は？」

一瞬、ゼロシステムの予測によってグラハムがユウヤに通信を入れる。一方、ユウヤは突然のグラハムの通信に呆気にとられた。そして、その僅か数秒の間に……

『お、おい！？』

ヴァレリオの驚きの声上がる。その原因はすぐにわかる……ゲイル・クラウドザーが乗るアクティブ・イーグル2号機が単機で突撃したのだ。

アクティブ・イーグル2号機に乗るゲイル・クラウザーは焦りにもいた感情を胸に抱いていた。その理由は単純明快である。

「（ふざけんな！ふざけんな！ふざけんな！黄色い猿が功績を上げて俺が何もしてないだ！）」

それは言うなれば『嫉妬』と言う感情が1番近いのかもしれない。そもそも、ゲイルは日本製の烈火や99型電磁投射砲は大したものではないと考えていた。しかしアラスカで烈火の性能がユニオン製のMSには劣るものの既存の戦術機を遥かに凌駕するものであることを思い知り、今回の作戦で99型電磁投射砲の米軍にもない圧倒的威力を見せ付けられた。そしてそれを操っていたのは日本人とのハーフであるユウヤ・ブリッジス。

ゲイルが散々蔑んでいた日本製の兵器で日本人のハーフであるユウヤが自分よりも先に功績を上げた。それをゲイルはアメリカが日本に敗北したかのように感じたのだ。ゲイルにとってそれは認められない事態だった。ある程度日本を認めているユウヤに対し、米国以外の国を見下すゲイルは米国が他の国に負けるのは持ち前の差別意識も手伝って容認できるものではなかった。

そして、そんな感情が胸の中に渦巻いていたゲイルが新たなBETAの出現を知ったとき……

「（そうだ……あいつに……黄色い猿に功績を上げられたんだ……なら……俺にも簡単にできるはずだ!!）」

もはやゲイルに冷静な判断は出来ていなかった。ゲイルは感情の赴くままにアクティブ・イーグルをBETAの大群に向かって突撃させた。

『アルゴス3何やってんだ!? さっさと戻れ!!』

いきなり突撃したゲイルにヴァレリオは通信を開いて怒鳴り声を上げる。

『うるせえ! 俺は米軍のエリート様だぞ!! あれぐらい俺が蹴散らしてやる!!』

ヴァレリオの通信を受けたゲイルはやはり冷静な判断ができていなかった。もはや功績を上げることしか頭にない。

「くっ!」

ユウヤはゲイルを援護するために99型電磁投射砲を構え、トリガーを引こうとする。しかし……

「（駄目だ…これじゃあゲイルに当たる!!）」

ユウヤは舌打ちしてトリガーから指を離す。99型電磁投射砲は連射による面制圧を目的としている。端的に言えばマシンガンに似ているのだ。これらの特徴は連射によって弾幕を張り、面で制圧すること。99型電磁投射砲はこれに高い貫通性を付与することでマシンガンを遥かに凌駕する面制圧能力を手に入れている。だが、これらの武器に総じて言えることは精密射撃には向かないということである。例えば、強盗犯が民間人を人質にとったとする。優れたスナイパーならばスナイパーライフルで犯人のみを撃ち抜くことができるだろう。しかし、マシンガンで同じことをやれるかと聞かれれば答えは否だ。どんな優れたスナイパーでもマシンガンで人質を避けて撃つことなどできない。

現在の状況、ゲイルの乗るアクティブ・イーグルはちょうど99型電磁投射砲の射線上にいるのだ。この状況からゲイルを避けてBETAを撃ち抜くなど不可能。どう上手く撃っても流れ弾がアクティブ・イーグルに当たる。99型電磁投射砲の流れ弾は通常の突撃砲の比ではない。突撃級の装甲ですら容易く貫くその威力に戦術機が耐えられるはずがない。最悪、管制ユニットに当たってゲイルは即死。そうでなくてもアクティブ・イーグルが戦闘を続行するのに支障をきたすだろう。そしてその間にBETAによって食い殺されるのは目に見えている。勿論、ゲイルごとBETAを殲滅するという選択肢もある。しかし、ユウヤにはいくら嫌悪感しか抱いていない相手とはいえ、背後から味方を撃つという選択ができなかった。

「くそ、アルゴス4！ 投射砲を頼む！ それとバッテリーを！」

ユウヤはそう言うのと烈火に装備していた99型電磁投射砲を取り外し、消耗した烈火のバッテリーを交換する。

『ユウヤ、どうするつもり！？』

「決まってる！ ゲイルを連れ戻す！！ ビームライフルを貸してくれ！」

驚きを隠せないステラの問いかけにユウヤは装備を外し、ステラのストライク・イーグルが装備していたビームライフルを受け取る。

『無茶だぞユウヤ！ あいつはもうずっと先に行っちゃってる！！』

「烈火の機動性なら追いつける！」

確かに機動性に優れるアクティブ・イーグルが相手でもそれを凌駕する烈火なら追いつけるだろう。幸いにも予備のバッテリーに交換したので稼働時間は問題ない。

「俺は…絶対に味方を見捨てない！」

それだけ言い残し、ユウヤは烈火を全速力でアクティブ・イーグルの後を追わせた。

『ちっ、しゃあねえな。ステラ、俺はユウヤを何とか連れ戻す。99型電磁投射砲を頼むぞ』

『…ほんと……仕方ないわね』

『ああ、ゲイルの野郎はとにかく……ユウヤは死なせたくなえからな』

ヴァレリオはそのままユウヤの後を追ひ、ステラはため息を吐きながら99型電磁投射砲を持ってユウヤとヴァレリオの帰還を待っていた。

一方、グラハムとタリサも急いで突出したゲイルのもとに向かっていった。ゼロシステムの予知でゲイルの暴走を知ったグラハムはどうにかゲイルを回収しようとする。しかし、その前に先程はいなかった光線級のレーザーの雨が立ちはだかる。

「ええい！邪魔をするな！！」

グラハムはレーザーを回避しながらリニアライフルで光線級を撃ち抜いていく。

「どけよお前ら！！」

タリサもレーザーを回避しながら急降下し、GNビームサーベルで光線級を切り裂きながらゲイルのもとに向かう。タリサは正直言っ

てしまえば大嫌いなゲイルが死のうと関係ない。しかし、グラハムが救おうとしているので必死になっていた。

一方、グラハム自身もゲイルには嫌悪感しか抱いていない。しかし、それでもグラハムには見捨てるという選択肢が存在しなかった。かつて多くの部下を失ったグラハムにはどんな人物であれ、味方であるゲイルを見捨てることができなかったのだ。

ちなみに一応ラトロワたちも最低限動いてはいるが、先程の戦闘で消耗しているのもあって補給なしでは無理ができない状況だった。

「おらおらおらおら！死んじまえよ化け物どもがあー！！」

突出したゲイルはビームライフルを乱射してBETAを駆逐していた。さすがに戦術機の中でも優れた性能を持つアクティブ・イーグルと人格に非常に問題はあっても衛士としての腕自体は高いゲイルである。そう簡単にやられるということとはなかった。

「死ねよ…死ねよ死ねよ死ねよ！！死ねよおおおおおおお
お！！！！！！！」

我武者羅に、咆哮しながらビームライフルを乱射するゲイル。だが、碌な援護もないこの状況でそんな戦いが長く続くはずもない。管制ユニットの火器管制に強い警告音が響き、ビームライフルの残弾がゼロとなっていることを告げる。戦術機に装備されているビームライフルはザクウォーリアと違ってカートリッジ式であるため、戦術機の稼働時間を縮めることはないが、当然こうして弾切れが起こる。

「ちい！『ゲイル！』ああ！？」

弾切れになったビームライフルのカートリッジを交換して再び乱射を開始する。するとゲイルの眼に自分を連れ戻しに来たユウヤの烈火の姿が映る。

『さっさと後退するぞ！このままじゃ……』

「なんだあブリッジス！俺に手柄をとられんのが嫌になったかあ！？」

網膜に映し出されるユウヤにゲイルが嘲笑うかのような声を上げる。そしてゲイルはビームライフルで突撃級を撃ち抜く。そのゲイルのアクティヴ・イーグルの横に要撃級が強靱な前腕を振り上げていた。

「けっ！この化け物が！いい気になるな！」

ゲイルはビームライフルで要撃級の前腕の片方を撃ち抜く。ゲイルはそのままビームライフルを連射し、要撃級を殺そうとした。だが……

「っ！？」

再びコクピット内に警告音が響き渡る。カートリッジ交換後も無茶苦茶に乱射していたためにあつと言う間に残弾がゼロになってしまったのだ。

「ちっ！この……があー！！」

次の瞬間、前腕の片方を失った要撃級が振り上げていた前腕が勢いを失わずにアクティブ・イーグルに振り下ろされる。その結果、アクティブ・イーグルはビームライフルごと右腕を持って行かれた。アクティブ・イーグルはその衝撃で転倒する。ゲイルは急いで機体を起こして戦闘を再開する。どうやら右腕を失っただけで行動できないほどの支障はなかったらしい。

ガリガリガリ……

「な、なんだ！？」

しかし、管制ユニット内に何かを齧る音が響き始める。どうやら転倒したときに数体の戦車級に取り付かれたようだ。するとすぐにガクンという衝撃と共にアクティブ・イーグルが再び転倒する。無数の戦車級によって右足を噛み砕かれたのだ。そして転倒したアクティブ・イーグルにさらに多くの戦車級が群がり始める。

「な、なんだよ！動けよ！動け！動けよおおおおお！！！！！！」

錯乱したゲイルは操縦桿を必死に動かすが残った左腕と左足も戦車級に碎かれていてもはやその行動は意味をなさない。

ガリガリガリガリ……

「動けよ！動け動け動け！！」

そしてついに管制ユニットに戦車級が迫る音がより鮮明に聞こえてくる。

「ふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな！！俺はエリートだ……米軍のエリートだぞ！！」

『ゲイル！早くこっちにこい！』

ゲイルが喚き散らす、BETAがそんなものを気に留めるはずもない。ユウヤからの通信もはや恐怖と焦燥と怒りに支配されたゲイルの耳には届いていない。ついには管制ユニットが食い破られ、ゲイルの眼に赤い体躯の異形の姿が映りこむ。その歯がゲイルを食い殺さんと迫ってくる。

「ふざけんなよおお！！俺は米軍のエリート様だぞ！！お……ぎゃああああああ！！」

喚き散らしながらゲイルは戦車級を蹴り飛ばそうとする。しかしゲイルが突き出した足は戦車級が大きく開けた口に入ってしまった、食い千切られた。

「あ、あ、あ、ああああああ！！お、俺の足、俺の足があああああ！！」

食い千切られ、血が噴き出す足を押さえようとする。しかしその眼前に戦車級の口が再び迫っていた。

「ふざけんなよ！俺は！俺はあひゃふvんkdんういshdしvj
うえbd！！」

腕を食い千切られ、半身を食われ、もはや言葉にならない悲鳴を上げながら……ついにゲイルの身体はこの世界から消失した。

「くそ！どけよ！」

ユウヤは烈火のビームライフルを撃ちながらゲイルのアクティブ・

イーグルの反応がある場所まで向かう。

『ふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな！俺はエリートだ……米軍のエリートだぞ！！』

繋ぎっぱなしの通信からはゲイルの絶叫が響き、その周りから僅かに『ガリガリ』と言う音が聞こえている。それをユウヤはすぐに話に聞いた戦車級が戦術機を噛み砕いている音だと理解する。

「ゲイル！早くこっちにこい！」

ユウヤがゲイルに自分の方への退避を促すがゲイルからの返事はない。

『ふざけんなよ！俺は！俺はあひゃふvんkdんういshdしvj
うえbd！！』

通信から響くゲイルの声にならない悲鳴。それが聞こえたとほぼ同時にユウヤはビームライフルで周辺のBETAを撃ち殺し、アクティブ・イーグルが横たわる場所に到達する。そこには……

「……ゲイル……？」

管制ユニットが既に存在せず、ただの無残な残骸となったアクティブ・イーグルがあった。

「あ……ああ……」

初めて味わう身近な者の死……いくら嫌悪感しか抱いていなくとも見知った顔が死んだことにユウヤは呆然とする。それは戦場であま

りにも無謀な行為……戦場で動きを止めることは死を意味する。周りのBETAを攻撃することすら忘れ立ち尽くすユウヤ。そんなユウヤの烈火に死神の鎌が忍び寄る。

『ユウヤ!!』

「っ!？」

通信越しにユウヤを連れ戻しに来ていたヴァレリオの叫びが木霊する。その叫びで我に返ったユウヤ。その眼前には前腕を振り上げユウヤを殺そうとする要撃級の姿があった。

「（俺は…死ぬ……のか？）」

迫る要撃級。ユウヤの脳裏には今までの出来事が走馬灯のように駆け巡る。

自分と母を捨てた日本人の父親……そのことで涙を流す祖父に怒鳴られる母親……日本人とのハーフと言うことで蔑まれる日々……功績を上げて誰にも恥じることない米国人になるという誓い……自分の親友になったヴィンセント……アラスカで出会ったアルゴス試験小隊の仲間であるヴァレリオとステラ……ソ連の何故か放っておけない紅の姉妹の2人……国連最強の衛士・ミスターブシドー……そして……

『今、私が失いたくないもの……それは烈火と……その首席開発衛士である貴様なのだ』

カムチャツカ基地で、出撃する数日前に唯依がユウヤに言った言葉がリフレインする。

「（…そうだ……烈火も投射砲も……無傷で持ち帰るって言ったじやねえか！…こんなところで……俺は……俺は死ねないんだ！！）」

……その瞬間……ユウヤの中で何かが弾ける……そして……

「……………」

……ユウヤの瞳からハイライトが消えていた……

#32 覚醒（前書き）

ようやく更新できました。夏は色々と忙しかったです。

今回は上手く表現できてるかわかりませんがユウや無双です。

穴だらけの駄文ですがよろしく願います。

感想お待ちしております。

#32 覚醒

ユウヤが搭乗する烈火に迫る死神の鎌……要撃級の腕が振り下ろされようとしている。その光景をユウヤの援護に来たヴァレリオはアクティブ・イーグルで周りのBETAを蹴散らしながら見ていた。

「アルゴス1！すぐに下がれ！やられちまうぞ！」

ヴァレリオの叫びも空しく、ユウヤの乗る烈火は動きを見せない。その足元に転がるアクティブ・イーグル3番機に目を奪われている。

このままではゲイルだけではなくユウヤも死ぬ……ヴァレリオからすればゲイルの死は自業自得だった。功を焦つての突出。その結果、ゲイルの命を優先したユウヤは99型電磁投射砲を撃てずに救援に出してしまった。実に最悪の事態、ジャール大隊は先程の戦闘からいまだ補給を受けることができておらずグラハムとタリサも光線級に足止めされている。

ヴァレリオはゲイルが嫌いだった。アメリカ人と言うだけで他の国の、今まで死に物狂いでBETAと戦ってきた衛士たちを侮辱するあの男が……だが、同じアメリカ人でもユウヤは違う。最初のうちは多少の衝突はあったもののゲイルと違って連携の重要性は理解していたし、付き合ってみれば悪い奴ではないと思った。いや、寧ろ気に入っていると言ってもいい。それは同じアルゴス試験小隊のステラも同じだ。ユウヤたちが来るまで同じ試験小隊だったタリサもそのまま隊にいればユウヤと馴染んでいたとヴァレリオは考えている。

そしてユウヤは勝手に突出したゲイルを助けようとしていた。ユウ

ヤもゲイルには嫌悪感しか抱いていなかったのに……それでもユウヤは言った。

『俺は……絶対に味方を見捨てない!』

ヴァレリオは思った。『馬鹿だ』……と。散々自分を馬鹿にし、さらには自分勝手に突出したゲイルを助けようとする。本当にユウヤは馬鹿だと思った。そんなことしたってゲイルは悪態を吐くばかりで感謝などしないだろう。だが、だからこそヴァレリオはユウヤを死なせたくなかった。どんな嫌いな相手でも、その命を助けようとする生粋の馬鹿……ヴァレリオはそんな馬鹿が好きだった。だから、そんな馬鹿^{ユウヤ}を救いようのない馬鹿^{ゲイル}のせいで死なせたくなかった。思った。

それでも、ユウヤの頭上には要撃級の巨大な腕が振り上げられている。アレが直撃したらいくら戦術機よりも遥かに頑丈な装甲を持つMSの烈火でも耐えられない。

「ユウヤあああああああああ!」

そして振り下ろされる死神の鎌。ヴァレリオは瞬時に、かつてヨーロッパで見た仲間の死を思い出し、ユウヤの死を連想してしまう。

だが……

「な……」

ヴァレリオの予想はいい意味で覆された……なぜなら……

『俺はこんなところで…死ねないんだ!』

烈火は、要撃級の腕が振り降ろされるよりも速く……腰の斬機刀を引き抜いて要撃級を真っ二つに両断していた。

一方、烈火の中のユウヤは自分でも驚く程に冷静に周りの状況を見

ていた。先程ゲイルの死を目の当たりにして動揺していたのが嘘のように思考がクリアになり、目の前の要撃級の動きがまるでスローになったかのように良く見える。

そしてユウヤは要撃級の腕が振り降ろされるよりも速く……反射的に烈火の左腰に装備されている方の斬機刀を引き抜き、そのまま股下から頭部に向けて一刀のもとに両断した。

「っ!？」

ユウヤはそのまま付近の要撃級の真上に跳躍し、斬機刀で串刺しにする。少々高い跳躍だったが光線級は全てフラッグとサキガケに攻撃を仕掛けており、ユウヤに攻撃する個体はいない。

「消えろ……!」

要撃級に刺さった斬機刀を引く抜くとビームライフルを連射して周りのBETAに攻撃を仕掛ける。

右、左、後ろ、前、多方向に放たれたビームは寸分変わらずにBETAに命中し、一撃で絶命させていく。結果、光線級を除けば接近戦しか行えないBETAは烈火に近づく前に全て死骸となって大地に横たわる。

「……………」

ふと、ユウヤはビームライフルの残弾数をチェックする。残りはあと3発ほど……するとユウヤは自分に最も近付いているBETA3体をその3発の残弾で撃ち抜き、すぐにカートリッジを入れ替える。

「……ゲイル…」

一瞬、ゲイルが乗っていたアクティブ・イーグルの無残な姿に視線を向けるユウヤ。その時間は本当に僅かで、すぐにユウヤは視線を外してその場から離れてヴァレリオのもとに向かった。

「…すまない……」

その言葉は間に合わなかった、救えなかったことへの謝罪か……ユウヤは確かにその言葉だけを残してその場から離れた。

「VG！」

あの場所を離れたユウヤはすぐに自分の救援に来てくれていたヴァ

レリオのもとに降り立った。

『まったく、ユウヤ…あんま無茶すんなよ？』

ヴァレリオはユウヤの無事を確認すると苦笑いしながら通信を入れる。そんなヴァレリオにユウヤの方も「すまない」と謝罪する。そんな素直な返答に少々呆気にとられるヴァレリオだが、すぐに周りのBETAに視線を向ける。いろいろとユウヤに文句を言っていてやりたいヴァレリオだが…今はそれどころではない。どうにか合流した2人だが未だにBETAに囲まれているという現状は変わらない。

「アルゴス2、ビームライフルのカートリッジはどれだけ残ってる？」

『あ？まだ大分あるぜ？俺たちはジャール大隊が戦ってる時は後方にいたおかげでカートリッジは使ってないからな』

ユウヤの質問にヴァレリオはビームライフルで向かってくるBETAを殺しながら答える。確かにアルゴス試験小隊は先程の侵攻では直接的な戦闘は行っていないかったためにカートリッジ自体はまだ補給がなくともしばらくは戦える。

「そうか……」

ヴァレリオの返事を聞いたユウヤは何を思ったのか自身の搭乗機である烈火が持っていたビームライフルをヴァレリオのアクティブ・イーグルに渡した。

『って、おいアルゴス1？お前どうするつもりだよ？』

ビームライフルがヴァレリオ機に渡されたことで烈火の現在の装備は両腰に装備されている2本の斬機刀だけとなっている。つまりは接近戦で戦わなければならない状況だ。

「アルゴス2、援護を頼む。俺が格闘戦で退路を切り開く」

『おいおい！正気かよ！？』

MS及び戦術機の格闘戦は衛士の技量が直接反映される。ユウヤも決して格闘戦が弱いわけではない、いや寧ろこれまで吹雪、烈火と接近戦を主眼に置いた日本製の機体で訓練していただけあって向上している。

だが、それでもどちらかと言えばユウヤは射撃の方が得意だ。何より、ユウヤはこれが初めての実戦での格闘戦になる。ヴァレリオが不安になるのも当然だ。

「大丈夫だ、頼む」

それだけ言うとユウヤはそのハイライトの消えた双眸をBETAに向け、烈火のフットペダルを踏む込んでBETAへと向かって行った。

『おい！つたくしゃあねえなあ……』

ヴァレリオは呆れながらもビームライフルを両手に持ち、烈火の後を追って烈火の援護を始めた。

一方、ユウヤは通信から聞こえるヴァレリオの声に若干の申し訳なさを感じながらも左手で右腰に装備されたもう1本の斬機刀を引き

抜いた。日本人ならばこれを何と呼ぶかはすぐにわかるだろう。即ち、『二刀流』である。今のユウヤが駆る烈火は2本の斬機刀による二刀流の状態でBETAに向かって行っていた。

「（…奴らの動きが見える……これなら…やれる!!）」

ユウヤには不安はなかった……いや、多少はあったかもしれないがそれ以上の確信があった。先程の命の危険から続くこの感覚……思考がクリアになったこの感覚がなんなのかはわからないが…今の自分なら烈火の性能を100%引き出すことができるという確信があった。

「死ねよ……!」

斬機刀が輝き、要撃級が体液をまき散らして斬殺される。だがそれは一撃では終わらない。次々に繰り出される攻撃は烈火の行く手を阻もうとするBETAを瞬く間に切り殺していく。

「…次……!」

ユウヤは切り殺したBETAからすぐに視線を外し、自分から最も近い位置にいるBETAを斬機刀で斬殺する。自分に近付いてくるBETAに即座に反応して切り裂き、さらに要撃級の前腕の攻撃を回避して蹴り飛ばし、突撃級にぶつけてはそのまま2体まとめて斬機刀で切り捨てる。

『おいおい、援護してくれって……援護いるか?』

ヴァレリオがユウヤの駆る烈火の動きを見ながら呟く。今現在、ユウヤは一方的にBETAを斬殺し続けているのだ。ヴァレリオも一

応援はしているが、それは必要なのではないかと思えるほどにユウヤの動きは凄まじい。

『ユウヤ、お前はいったい何者なんだ？』

そしてユウヤの動きを見ていたヴァレリオが小声でそんな疑問を口にする。今のユウヤの動きはいつもとは明らかに違いすぎる。確かにユウヤは腕は良かったがここまでではなかった。ヴァレリオも同じ性能の機体でいつもの（・・・）ユウヤと戦えば経験の差で勝てるだろう。しかし、今のユウヤにはたとえ同じ性能の機体でも勝てる気がしなかった。下手をしたらステラと自分が組んでの2対1でも負けるかもしれない。今のユウヤに1対1で勝てるのはヴァレリオの知る中ではグラハムかタリサぐらいのものだった。

『ま、仲間が頼もしいのは良いことだな』

だが、ヴァレリオはすぐに気を取り直してユウヤの援護を始める。多少の疑問はあるがユウヤは信頼できる仲間であることには変わらないのだから。

一方、ヴァレリオと同様の驚きは唯依たちがいる後方司令部でも起こっていた。ゲイルの無断突出、それを救助しようとしたユウヤ。そしてしばらくしてからゲイルの乗るアクティブ・イーグルがシグナルロストしたこと。それぐらいならばまだそこまで驚きはしなかった。ゲイルの性格上、唯依もイブラヒムもそれはいつか起こると予想していた。その予想を外れさせるためにイブラヒムも今までゲイルの性格を変えようと思っていたが徒労に終わってしまったが……

ゲイルのシグナルロストを受けてイブラヒムは拳を握りしめて内心悔しがった。この事態をある程度予想しながらもゲイルを変えることができずに部下を死なせた。これは決してイブラヒムのせいではないが、イブラヒムはやはり隊を預かる者として責任を感じていた。

さらに、ゲイルが搭乗していたのがアクティブ・イーグルだったことも痛かった。世界にはMSが配備されているとはいえ、戦術機が用済みと言うことはない。寧ろ、MSの数が足りない戦場では優れた戦術機は必要だ。その貴重な実験機が1機失われてしまった。これで残ったアクティブ・イーグルはヴァレリオの乗る1機だけとなったのだ。

そしてXFJ計画の参加者がもっとも危惧したのはユウヤが烈火でゲイルを救助に行ったことである。いくら腕が良くても実戦経験が

ない衛士がBETAのど真ん中に突っ込んでいった。これを見たほとんどの面々は烈火が失われること、それによるXFJ計画の頓挫も覚悟した。しかし……

「…ブリッジス少尉……貴様はいつたい……？」

唯依の疑問が自然と口から零れる。ゲイル機がシグナルロストし、烈火の動きが止まってほんの数秒……烈火は自身に近付いていた要撃級を瞬時に斬殺し、今なお2本の斬機刀を縦横無尽に振るって一方的にBETAを切り殺し続けている。

「それに……あれは……二刀流……」

日本人であり、武家の出身である唯依は烈火の動きに目を奪われていた。唯依も幼い頃から剣術は習っており、その中で二刀流のことも当然知っている。かつて、生涯無敗と謳われる剣豪が用いた2本の刀を使う剣術。唯依の眼には両手に2本の斬機刀を持って戦う烈火の姿は紛れもない『侍』の姿に映っていた。あれだけ日本人を毛嫌いしていたユウヤが日本人の象徴ともいえる『侍』の姿に見えるのを唯依は不思議な心境で見守っていた。

その頃、ユウヤたちと同じ戦場にいるジャール大隊の面々も驚きを隠せずにいた。ジャール大隊は最初のBETA襲来で大幅に消耗し、

いまだ補給のできていない状況である。当然そんな状況で勝手に突出した馬鹿^{ゲイル}を救出するために隊員を犠牲にするわけにもいかなかった。ジャール大隊の隊長であるラトロワはある程度距離をとりながらBETAに銃撃を浴びせていた。彼女の考えでは何とか時間を稼ぎ、別方面で展開しているセルゲイ率いるメドヴィエチ大隊が援軍に来てくれるのを期待していた。

そんな中で、ラトロワは勝手に突出したゲイルは生きていられないとは思ったし、ユウヤも同様だと考えた。今まで多くの戦いを経験してきたラトロワはゲイルのように無謀な突撃をする者が真っ先に戦死することはわかっていたし、ユウヤも実戦経験がない衛士があのBETAの大群に囲まれたら終わりだと考えた。

一応ジャール大隊の任務はアルゴス試験小隊の護衛ではあるが、補給もともに受けていない消耗した状態で意味のない突撃をした者まで護るつもりはない。下手をすればジャール大隊が全滅する危険があるし、最悪の場合は自分たちの後ろにある基地が落とされて祖国を奪還することができなくなる危険がある。如何に任務でも身勝手で意味のない行動をした人間を救うのと自分たちの後ろにある基地を護るの……天秤にかけるまでもなかった。

しかしそんな中でラトロワにとって信じられない出来事が起こった。ゲイル機がシグナルロストした。これはいい、こんなことはあの無謀な突撃を見ればわかりきっていたことだ。ユウヤの烈火がBETAに囲まれた。これもいい、いくら味方を助けるためでも単機で突出すればそうなるのは目に見えていた。

では、そのBETAに囲まれていたはずの烈火が2本の斬機刀を自在に操ってBETAを切り殺し続けている姿は？……これにはラトロワも、他のジャール大隊の面々も予想外だった。

『おいおい、あのヤンキー…初実戦じゃなかったのか？』

ジャール大隊の1人の呟きが通信から聞こえる。ラトロワたちは当然、アルゴス試験小隊の大まかな情報を知っている。ヴァレリオとステラはかつて、ヨーロッパの最前線で戦い続けた経験がある。しかしユウヤとゲイルは米軍のエリート部隊にいたものの実戦は初めてだった。BETAとの戦いで初陣の者が戦死するのは珍しいことじゃないし、寧ろ隊の足を引っ張らなければ良い方だ。現にゲイルは単機で突出したとはいえ、圧倒的な物量によって戦死した。アルゴスよりも先にこの地に降り立っていたドゥーマ小隊などはシエルショックを引き起こしたりもした。

だがユウヤはどうだ？明らかにあの動きは初めて実戦に出るものの動きじゃない。筋が良いとかそんな次元の話じゃない。アレはまだ粗削りなどところがあるが、間違いなくエース級の動きだ。射撃武器を使わずに格闘戦だけでBETAを駆逐している。それは烈火がMSだという理由だけでは片づけられない。恐らくジャール大隊にはあの動きについていける人間は自分以外にはいないだろう。

「ふん、やるじゃないか…ボウヤ」

ラトロワはそこまで考えて、思考を切り替える。とにかく今はこの状況を打開するのが先決。ユウヤのことも気になるが…優れた能力を持つ味方がいるのは悪いことではない。

「ジャール大隊に告ぐ！お客さんにばかり良い恰好をさせるなよ！何としてもここを守り抜くぞ！」

『『『了解！！！！』』』』

ラトロワの号令にジャール大隊から元気よく返事が返ってきた。

『……大佐、ユウヤの奴……もしかして……』

光線級の殲滅を終え、他のBETAを殲滅しながらタリサはユウヤを見て驚いたとともに感心する。それと同時にグラハムに通信で問いかける。タリサの疑問は「ユウヤもNTに目覚めたのではないか？」というものだ。

「いや、ブリッジス少尉の私たちとは明らかに異質のものだ。なにより、NTとなったのならば私たちが感じるはずだ」

グラハムには神によって与えられたガンダム00の世界以外の全て

のガンダム世界の知識がある。そこに存在するNTは互いの存在を感知し合うことができるため、ユウヤがNTに覚醒すればこれだけ近くにいる同じNTであるグラハムやタリサにはすぐに感じ取れる。

それができないとなれば少なくともユウヤはNTに目覚めたわけではない。ユウヤがNTになったという可能性を潰すとグラハムの脳裏にはいくつかの可能性が浮かぶ。1つは特殊なシステムによる事例。グラハムの乗るカスタムフラッグに搭載されたゼロシステムのように戦闘力を飛躍的に向上させる系統のシステムだが：烈火にそんなものが搭載されていないことは重々承知している。なにより、この手のシステムには乗り手に何らかのリスクが発生する。ワンオフの機体ならとにかく、量産を前提にした烈火にそんなものを載せるのはナンセンスだ。

もう1つの可能性は衛士に何らかの能力が目覚めた場合。NTでないことはグラハムとタリサが感じ取っていないので明白。そう考えたとき、グラハムの脳裏に1つの可能性が思い浮かぶ。

「…SEED……か……」

『SEED』……グラハムの知識の中にある能力でその名は『Superior Evolutionary Element Designated-factor』の略称。『人類の革新』とされるNTとはまた別種の人類の進化の可能性ともされる。これが発動すると集中力や反応が異常に強化される。その能力が覚醒したのなら、ユウヤの動きにも納得できる。

『SEED?』

グラハムの呟きが聞こえたのかタリサが頭に疑問符を浮かべる。

「説明はあとだ。タリサ、まずはこの場のBETAを殲滅するぞ！」

『了解！』

内心ではかなり気になるタリサだが、グラハムの言葉に頷いて再びBETAの殲滅に集中するのだった。

「これで……！」

烈火の斬機刀が要撃級を切り裂く。さらにその背中を護るようにアクティブ・イーグルがビームライフルを撃ちながら追走する。ユウヤはアクティブ・イーグルが追いつける速度で移動し、どちらかが

孤立するのを防いでいた。

『ちっ、BETAの野郎…キリがねえな』

ヴァレリオが悪態を吐きながらビームライフルで攻撃する。さらにユウヤは左腕に持っていた斬機刀を突撃級に投げる。投げられた斬機刀は垂直に突撃級の頭部に突き刺さり、さらに烈火はそれを引き抜いた勢いを利用して要撃級を切り捨てた。

「ぼやいてる暇はないぞ、VG。何とかここを突破する」

いつもとは違って冷静なユウヤの言葉にヴァレリオは「へいへい」と言いながら苦笑いする。

『おい！ユウヤ、VG！生きてるか！？』

するとそこに空から援軍が現れた。タリサの乗るサキガケとグラハムのカスタムフラッグである。

『大佐、それにタリサ！ありがてえ！！』

正直、2機では次第にきつくなっていたのでこの2人の援軍は喜ばしいことだった。さらに……

『こちらメドヴィエチ大隊、セルゲイ・スミルノフ大佐だ。直ちに貴殿らを援護する』

別方面での作戦行動を終えたセルゲイ率いるメドヴィエチ大隊が救援に来たのだ。メドヴィエチ大隊は補給を受けずに連戦となつてしまったジャール大隊を補給に向かわせるとすぐにユニオンやユウヤ

たちの援護を始める。

『ブリッジス少尉、無事か？』

不意に、ユウヤのもとに1本の通信が入る。その声はほんの数日前に聞いた声だ。

「スミルノフ少尉か？」

その声の主は数日前にゲイルが強引にナンパしようとしたソーマ・スミルノフ少尉だった。ソーマは自身の搭乗機であるブレイズザクウォーリアのファイアビーミサイルを一斉射して烈火とアクティブリーグルの周辺のBETAを焼き払う。

そして新たに救援として現れたメドヴィエチ大隊の介入やジャール大隊が補給を受けて戻ってきたため、どうにかBETAの殲滅は完了したのだった。

#33 語られる過去（前書き）

ずいぶん更新をお待たせしてしまい、申し訳ありません。その理由は活動報告のほうに書いてありますので暇だったら読んでみてください。

今回はサブタイのとおりです。

相変わらずの穴だらけの駄文ですがよろしく願います。

#33 語られる過去

作戦終了の後、基地に戻ったユウヤに第1に送られたのは称賛の声だった。BETAとの戦いで見せたエース顔負けの機動はこれが初実戦とは思えないほどの機動だった。

そのことにこの実戦試験を提案したハイネマンは非常にご満悦でユウヤを讃え、ユウヤを馬鹿にしていたソ連軍の衛士たちもゲイルの無断突出に不満はあったもののユウヤへの認識を改めた。

その一方で困惑するものも多かった。困惑している主な人物はユーコン基地でのユウヤの機動を知っている唯依やヴァレリオにステラ、イブラヒムなどのアルゴス試験小隊の面々とクリスカとイーニア、そしてユウヤ本人であった。

このユウヤが行った機動によって99型電磁投射砲と共に重要な烈火の近接戦闘における実戦データもとることができたため、それだけならば喜ばしいことであった。

だが、それと同時に今回の作戦でそれなりに損失が出てしまった。まずはゲイルが戦死したことによる人的損害だ。これによって今回の実戦テストのメインであったアルゴス試験小隊に欠員が出てしまった。しかし、これに関してはこう言ってはなんだがあまり重要視している人間はいなかった。

ハッキリ言って、ゲイルがアルゴス試験小隊のチームワークを乱していることは明白だった。今回のことにしてもゲイルの独断専行が原因であることは疑いようもないことだ。

さすがにユウヤやヴィンセントのようにそれなりに付き合いが長い人間はいくら嫌っていたとはいえ、そう簡単に割り切ることはできなかったが上層部からすれば寧ろチームワークを乱すだけの問題児を失ったことなど大した問題ではなかった。それよりも問題だったのはゲイルが乗っていた貴重な実験機であるアクティブ・イーグルを失ったことだった。これによってアルゴス試験小隊に配備されているアクティブ・イーグルはヴァレリオの搭乗している機体のみになってしまったのである。

MSの配備が進んできているとはいえ、まだまだ戦場で最も多く使われているのは戦術機である。その実験機であるアクティブ・イーグルを失ったのは正直言って相応の痛手だった。

作戦終了の翌日、ユウヤは格納庫に鎮座している烈火の目の前に来ていた。烈火の足元にはもろもろの点検作業に追われる整備兵の姿が見え、その中には親友であるヴィンセントの姿もあった。

「…ふう…」

ユウヤは整備兵の邪魔にならないところで烈火を見上げながら昨日のことを思いだしていた。基地に帰還した後に行われたデブリーフィング終了間際に基地司令と政治将校が突然現れてユウヤたちアルゴス試験小隊に英雄金星勲章が授与されることが決定したと告げた。その理由としては最初の戦いにおいて99型電磁投射砲による砲撃

で多くのソビエト軍人の命と装備を救った功績による…というのが授与の理由らしい。

「（あの感覚は……なんだったんだ？）」

そしてユウヤはあの戦いで謎の感覚に考えを巡らせていた。要撃級の前腕が振り下ろされるまさにその瞬間に頭の中で何かが弾け、一気に思考がクリアになった。しかもその後は自分でも驚くほどに冷静に、そして的確に機体を動かして戦うことができた。作戦終了後に自身の戦闘データを見ると本当に自分が動かしていたのか疑問に思うほどだった。しかし、それは間違いなくユウヤがやったもので機体を動かしているときのことは自分でも覚えていた。

「…クソ！」

だが、その事実が逆にユウヤをイラつかせていた。自分があれだけの動きを実現する能力があったのなら、ゲイルを助けることができるのではなかったかと……だからこそ今回のソ連からの勲章授与はユウヤにとっては大して嬉しいことではない。99型電磁投射砲に関して、自分はただ狙いを付けてトリガーを引いただけだ。そして何より仲間を救うことができなかったのに勲章をもらって喜ぶ気にはなれなかった。

「ここにいたのか」

「ん、中尉？ どうしたんですか？」

烈火の前で黄昏ているユウヤに背後から唯依が声をかけた。

「……ブリッジス少尉、クラウドザー少尉の戦死は残念だが…アレは

貴様の責任ではない。あまり思いつめるな」

そんな言葉をかける唯依にユウヤは呆気にとられる。どうやら唯依はユウヤを心配してここまで来たらしい。

「あの状況での独断専行など誰にも予測は出来ん。アレは誰がどう見てもクラウザー少尉の自業自得だ。貴様是最善を尽くした、あの戦闘を見れば誰でもわかることだ。寧ろ、初めての実戦であそこまで動けたこと自体が誇るべきことだ」

その通りだ、ゲイルが戦死したのが自業自得なのは紛れもない事実。何よりユウヤはアルゴス1として指揮を執っていたが歴戦の衛士ではなく、これが初めての实戦だ。しかし、だからと言ってユウヤにも簡単に割り切れるものではない。

「（まあ、とはいえ：味方が目の前で死んだのだ、そう簡単に割り切れと言うのも無理な話か…）んっん！いいかブリッジス少尉？確かに今回、貴様はクラウザー少尉を救えなかったかもしれない。だが、貴様の働きで多くのソ連の軍人の命が救われたのも紛れもない事実だ。少なくとも：貴様は誰も救えなかったわけではない。だから：その……」

必死にユウヤに慰めの言葉をかけようとする唯依。しかし生来の不器用さ故か、あまり上手く言葉が出てこない。

「ぷっ……」

そうして少々慌てている唯依を見てユウヤは笑みを浮かべる。

「な、なんだ？なにがおかしい？」

そのユウヤの表情に不満気な唯依はジト目でユウヤを見つめる。

「いえ、ありがとうございます中尉。中尉の慰めのおかげで少しばかり元気が出ました」

「む、そうか。それならばいいが…」

少々照れた表情を浮かべながら唯依はユウヤの顔を見る。まだ僅かに影はあるが、少なくとも唯依が話かける前よりは大分マシになっていた。

「では貴様もゆっくり休め。1人欠員が出たとはいえ、実戦試験はまだ続くからな」

「はっ」

ユウヤが敬礼したのを確認すると唯依はユウヤに背を向けて格納庫を後にする。この2人の関係も初めて会ったときよりは大分改善されてきていた。

唯依を見送ったユウヤは再び格納庫に鎮座する烈火を見上げて握り拳を作る。

「（あの感覚がなんだったのかわからねえが……もしもアレを自由に使えるようになれば……）」

ユウヤは烈火を見上げ、ただその事だけを考えていた。

一方その頃、ユニオンにあてがわれた格納庫ではキャシーが数機のハロと共に忙しそうにカスタムフラッグとサキガケの整備を行っていた。2機共に被弾箇所はゼロであるため、実際はGN粒子の補給とシステムチェックが主な仕事はある。

「よっ、お疲れさん」

そこにドリンクを持ったタリサがやってきてキャシーにドリンクを渡す。

「ありがとう」

キャシーはタリサに礼を言うと言作業を一時中断してドリンクに口を付ける。するとタリサがおもむろに口を開いた。

「なあ、キャシー…大佐、何があったんだ？」

「それは…今の太助の状態のこと？」

「他に何かあるってんだよ…」

僅かに沈み気味な声でタリサがキャシーの言葉を肯定する。するとキャシーもすぐにタリサの問いかけに答える。

「私だって太助のことはユニオンに着任してから後のことしか知らないわ。当然、太助が昔何があったかも知らない。まあ、カタギリ太尉なら何か知ってるかもしれないけど」

キャシーの言葉にタリサが僅かに俯く。作戦終了後、明らかにグラハムの様子がおかしいのだ。普段から仮面で表情が分からないが明らかに雰囲気暗い…なによりグラハムと同じNTであり、恋人でもあるタリサはそのことをより顕著に感じ取っていた。思い当たることと言えば先の作戦におけるゲイルの戦死ぐらいしかない。しかし、なぜグラハムがゲイルが戦死したことであそこまで暗くなっているのかが分からない。特別親しかったわけでもない、寧ろグラハムもゲイルに対して嫌悪感を抱いていたのは明白だ。過去に何か接点があるのかとも考えたが、グラハムとゲイルが会ったとき2人とも明らかに初対面な反応だったのでそれもないだろう。

「太助…なんで…」

そして恋人であるグラハムが辛そうにしているのを見てタリサも辛かった。言うまでもないことだがタリサはグラハムにベタ惚れである。普段は強気な彼女がグラハムの前でだけは非常に従順で借りてきた猫のように大人しいことからそれはわかる。まあ、タリサがグラハムと接するときの姿はどちらかと言えば猫と言うより犬だが……そんなことはどうでもいい。タリサにとって問題はグラハムが

なぜ辛そうにしているのかが分からないその一点にあった。NTとはいえ人の心が読めるわけではない。なのでグラハムがなぜ辛そうなのかも分からない。

「はあ…そんなに気になるなら直接聞きに行けばいいじゃない？」

そんなタリサを見かねてキャシーが溜息を吐きながら答える。

「確かにただの部下とかが直接本人に聞くのは気が引けるかもしれないけど、タリサは大佐の恋人でしょ？ だったら恋人の過去を聞くぐらい大丈夫だと思うわよ？」

「そっか…そうだよな…サンキュー、行ってくる！」

「は…いい、頑張ってね」

キャシーの助言を受けてタリサは大急ぎでグラハムのいる部屋に向かう。それを見送ったキャシーは再び作業に戻った。

「まったく、タリサは普段あんなに気が強いくせにどうして大佐にだけは押しが弱いのかしら？」

キャシーが作業を再開しながら疑問を口にする。しかし、好きな人のことに関して色々と思い悩む…タリサもやはり恋する乙女なのである。

カムチャツカ基地のグラハムにあてがわれた部屋。そこではグラハムが1人、少々暗い雰囲気を纏っていた。その姿は仮面こそ着用しているが服装はいつもの制服ではなく、アンダーウェアとして着用している黒いタンクトップ姿であり、半身に刻まれた痛々しい傷跡が露出している。

「……………」

そんなグラハムの考えているのは先の作戦でゲイルが戦死したこと……ではない。きっかけはゲイルのことだが、今現在は別のことがある。

「大佐、いるか？」

すると扉の向こうから自分を呼ぶ声が聞こえ、グラハムは立ち上がる。確認するまでもない、自分が愛する少女の声を聞き間違いない。ほどグラハムは馬鹿ではない。扉を開けるとそこにはタリサの姿があった。

「タリサ、なにかあったのか？」

「え…えつと…その…」

詳しくなにかあったのか尋ねようと思ってきたタリサだが、いざグラハムを目の前にと上手く言葉が出ない。

「ふっ…はいりたまえ」

そんなタリサに微笑みを浮かべ、グラハムは自分の部屋へと彼女を招き入れる。タリサが部屋に入って扉が閉まったのを確認するとグラハムは仮面をとって部屋に備え付けられたデスクの上に置く。これはグラハムなりのタリサとの接し方である。タリサと恋人同士になってから、2人きりの時はグラハムは仮面を外すことにしていた。恋人の前で仮面を被る必要はないと判断しているのである。

「君がこの部屋に来たのは…昨日からの私のことを案じてくれていたのだろうか？」

「うえ!?!…あ…うん…えつと、なんでわかったんだ?」

中々話を切り出せないタリサにグラハムは苦笑い交じりで問いかける。タリサはそのことに驚きの声を上げるものの、事実なのでコクリと頷き、今度は彼女の方からグラハムに問いかける。それに対してグラハムは微笑みを浮かべている。

「確かに私とタリサはまだ共に過ごした時間は少ないが…恋人になってからは濃密な時間を過ごしたと自覚している。それぐらいはわかるつもりだ」

「あう……」

グラハムの言葉にタリサは顔を真っ赤にしてしまう。濃密な時間と
言われてタリサはどうにも夜のベッドの中でのことを思いだしてし
まったらしい。

「~~~~~!!……なあ、大佐……じゃなかった、グラハムはなん
で……その…」

自分の頭に浮かんでしまったピンク色の思考を首を左右に振って振
り切ったタリサは本題を切り出す。その際に2人きりと言うことで
階級ではなく、名前でグラハムのことを呼びなおす。

「……そうだな……少々信じられないはなしかもしれんが……それでも
構わないな」

一方のグラハムは全てを話すつもりだった。タリサにも大分心配を
かけてしまったようだし、何よりここまで親密になったのにこれ以
上隠しておくのも不誠実のようにグラハムは考えたのだ。タリサが
頷いたのを確認するとグラハムは話を始める
。

「私……厳密には私とユニオンの技術主任であるカタギリはこの世
界の人間ではない。神によって別の世界からこの世界に來た人間だ」

グラハムの言葉にタリサが呆然とする。しかし、それも無理はない。
グラハムは『少々』信じられない話と言ったが少々どころの騒ぎで
はない。しかも神がどうこうという件は国連の司令官であるライン
ハルト元帥にも話していないことだ。

「ふっ……やはり信じられないか？」

呆然とするタリサにグラハムが苦笑いしながら尋ねる。しかしタリサはすぐに凄い勢いで首を左右に振って否定する。

「んなことない。確かに信じらんねえような話だけど…大佐がこんなことで嘘言うような人じゃないって知ってるし」

タリサはそういうもののやはり驚きは隠せていないのだろう。さっきまでどうにか名前と呼んでいたグラハムのことを再び階級で呼んでしまっていた。

確かに信じられない話ではあるが同時にそう考えると納得できる部分もある。今まで影も形もなかったMSやビーム兵器を初めとする強力な兵器が別の世界の技術だと考えれば十分納得できる。

「そうか……」

グラハムはその言葉に嬉しくなって微笑を浮かべる。グラハムは続いて神から多くのMSやグラハムがいたのとはまた別の世界の物事に関する知識を与えられたこと、NT能力もその1つだと付け加える。

そして次にグラハムは自分が何故、気分が落ち込んでいるのかを話し始めた。

「私はその世界でMS部隊の隊長をしていた」

グラハムの脳裏に蘇るのは対ガンダム部隊として設立された『オーバーフラッグス隊』のこと……

「その部隊には私のことを快く思わないものもいたが…それでも私を慕ってくれる者たちがいた」

思い出されるのはフラッグのパイロット…通称『フラッグファイター』として優れた技能を持っていたパイロットたち。グラハムを慕っていたハワード・メイスンにダリル・ダッジ、グラハムを『上官殺し』と馬鹿にしていたジョシュア・エドワーズ。

「彼らは優れた隊員たちだった。しかし、続く激戦において次々に戦死していった」

初めの戦死者はグラハムの命令を聞かずに突出し、振り返ちにジョシュア・エドワーズであった。その死に方はつい先日に関死したゲイルによく似ていた。その結果、連鎖的にハワードやダリルのことを思い出したのだ。

「じゃあ、大佐が落ち込んでたのって……」

「落ち込んでいた……と言うほどのものではないがな…ハワードやダリルのことを思いだして少々感傷的になっていたようだ。思えば……私は隊長失格だ…優れたフラッグファイターを次々に死なせてしまったのだからな」

いつの間にか名前ではなく、いつもの階級で呼んでしまっているタリサに苦笑いしながら、グラハムは過去を思い出すように遠い目をする。

「なあ…大佐、大佐がいた世界ってどんな世界だったんだ？」

タリサはその質問が余計につらい過去を思い出させるかもしれない

とも思ったが……それ以上に知リたかつた。昔のグラハムが歩んだ過去を……

「……………」

「…えつと……駄目…かな？」

無言になってしまったグラハムにタリサは遠慮しがちに尋ねる。しかしグラハムはしばらくすると優しく微笑みを浮かべる。

「構わんよ…ここまで話したのだ、昔話をするにはちょうどいいかもしれない」

するとグラハムは静かに、自分がいた世界のことを語り始めた。

「私がいた世界は24世紀の、この世界とは異なる歴史を辿った地球だ」

「24世紀!？」

タリサはグラハムがいた世界の年代を聞き、さらに驚く。現在の地球は20世紀、グラハムのいた世界はそれより約400年も未来なのだ。

「その世界ではこの世界のようにBETAの侵略はなく、少なくとも人類規模で存続が危ぶまれるということはない」

「へ……」

グラハムの説明にタリサは関心の声を上げる。生まれたときから地

球がBETAに侵攻されていたタリサにとってはBETAがいない世界と言うのは相当興味があるらしい。

「だが、それと同時に人類同士の戦いが終わることもなかった。世界は太陽エネルギーの恩恵を受けて発展し、3つの巨大な国家群であるアメリカを中心とする『ユニオン』、ヨーロッパ諸国を中心とした『AEU』、アジアの国々を中心とした『人類革新連合』に所属する国々がその恩恵を受けていた」

「あれ？『ユニオン』って……」

そこでタリサが3つの国家群の中に自分が所属する部隊の名前があることに気付く。当然それが偶然でないことはすぐにわかった。

「ああ、『ユニオン』は私がかつて所属していた勢力の名前だ。何かと愛着があるのでな…部隊名に拝借させてもらった」

タリサの疑問にグラハムは笑顔で答える。そこからさらにグラハムは説明を続けていく。

「私はもともと孤児でな、空を飛ぶことに憧れて軍に入り、ユニオン直属の特殊部隊『MSWAD』に所属するMSパイロットになった。今私が乗っているカスタムフラッグ：あれの原型になったユニオンフラッグはもともとユニオンで開発された最新鋭機だった」

グラハムは昔を懐かしむようにタリサに自分の過去を聞かせる。しかし、僅かにグラハムの表情が暗くなる。そうしてかつて、フラッグがユニオンの次期主力候補機であった頃に自身がテストパイロットを務めていたこと、そして他の次期主力候補機の1つであったブラストのテストパイロットであり、師であったスレッジ・スレーチ

ヤーを死なせてしまったことを話す。

「そのことで私を『上官殺し』と揶揄するものもいた……まあ、確かにその通りなのだから仕方ないがな」

「なんだよそれ！だって……聞いている限り事故じゃねえか！」

グラハムの言葉にタリサが凄い勢いで反論する。恩師であるスレッグ・スレーチャーの出来事はブラストがそれまで主力機であったリアルドのパワーアップ版でしかないと知っており、グラハムの乗るフラッグに対して特攻に近い突撃をかけ、グラハムは回避するためによむを得ずブラストの翼を切断し、それが原因でブラストは墜落、パイロットのスレッグ・スレーチャーも死亡したというものだった。確かに傍から見れば事故にしか見えないがグラハムにとっては自分が殺したことに変わりはないと考えている。

「……だが、私がうまくやれていれば死なせずに済んだかもしれない。私が殺したのも同じことだ」

「っ！？けど……」

2人の間に沈黙が流れる。しばらくしてグラハムは説明を続けるために再び口を開いた。

「そうしてフラッグがユニオンの次期主力機に決定し、いくらかの時が経ったのち……彼らは現れた」

グラハムの脳裏に深く焼き付いているMSとの出会い……自身の運命を変えた出会いをグラハムは思い出す。

「彼ら？」

「私設武装組織『ソレスタルビーイング』……当時の三大国家群のどのMSをも遥かに凌駕するMS『ガンダム』を所有する組織だ」

「ガン…ダム……」

「彼らは武力による紛争根絶を宣言し、地球上のありとあらゆる戦場に介入し始めた」

「っ！？それって……」

タリサはソレスタルビーイングの活動目的に驚愕する。

「そうだ…ソレスタルビーイングは存在そのものが矛盾している。それでも彼らは紛争に介入し、戦闘を続けるものを攻撃した」

「……………」

「さらに、彼らの目標は紛争だけでなくその源となるものにも向けられた。私が知っているものでは当時のタリビアに存在した麻薬畑だ」

ソレスタルビーイングが所有するガンダム。それが世界に出現してからほどなくしてガンダムのうちの1機がタリビアに現れた。その目標となったのは紛争の元凶となる麻薬畑。そのとき、グラハムはフラッグで出撃しようとしたがフラッグの開発者であったレイフ・エイフマン教授に止められた。その時の言葉がグラハムの脳裏によみがえる。

『わしは麻薬と言うものが心底嫌いだな。焼き払ってくれると言うなら…ガンダムを支持したい』

ガンダムを支持するというのはユニオンの人間としては問題があっただろうが…グラハムにもエイフマン教授の気持ちは解る。

「当時の三大国家群のMSとガンダムの性能には大きな開きがあった。そこで私は対ガンダム調査隊…後にオーバーフラッグスの隊長に任命された。オーバーフラッグスはMSWADから選抜されたエースによって構成された部隊だ。隊員は全て私のあの機体……カスタムフラッグと同型のオーバーフラッグに搭乗していた」

グラハムはそう言うものの厳密には同じ機体ではない。グラハムのカスタムフラッグは耐Gリミッターが解除されており、パイロットの安全性が無視された改良が施されている。それに対して他の隊員に配備されたオーバーフラッグはリミッターは解除されておらず、パイロットの安全性が確保されている。

「だが、それでもガンダムとの性能差は明確だった」

「そんなにガンダムって凄えのかよ?」

「ああ…私はその圧倒的な強さに心奪われた。あの気持ち…まさしく愛だ」

「む…」

タリサが僅かに眉を顰める。グラハムとの付き合いの中でグラハムがこういう言い回しをするのはわかっている。しかしそれでもこういう言い方をされると嫉妬するらしい。

「ふ…やはり君は愛らしいな……」

「ん……」

そんなタリサの気持ちを察したグラハムは微笑みながらタリサの頭を撫でる。頭を撫でられたタリサは顔を赤くしながら気持ち良さそうに目を細める。

「そして私たちオーバーフラッグス隊を含むユニオンは人革連、AEUと共同で大規模な軍事行動を開始した」

「大規模…って……どれくらい？」

グラハムの言葉にタリサが疑問符を浮かべる。タリサにとってみれば大規模な作戦と言えはかつて参加した『明星作戦』が思い起こされる。

「名目上はタクラマカン砂漠での3ヶ国合同演習……しかし、その実態はガンダム4機を誘き寄せて3ヶ国の圧倒的戦力による持久戦で鹵獲する作戦だった」

ガンダムと三大国家群のMSとの圧倒的な性能差を覆し、ガンダムを鹵獲するためにとられた作戦は膨大な数による持久戦だった。4機のガンダムは三大国家群の目論見通り、長時間に渡る攻勢に疲弊した。

「この作戦で多くの犠牲を払うことになった。私が隊長を務めていたオーバーフラッグス隊からも犠牲は出た」

三国家群と4機のガンダムとの戦いは熾烈を極めたが、その圧倒的な物量にガンダムたちは次第に消耗していった。

「数十時間にわたる持久戦の末、私たちはガンダムを鹵獲寸前のところまで追い込むことができた。しかし……そこに新型のガンダムが現れた」

「えっ!？」

持久戦の果てに三国家群はガンダムを追い詰めることに成功した。だが、あと一步のところで3機の疑似太陽炉搭載機『ガンダムスロ―ネ』が介入し、結局作戦は失敗に終わることとなった。

「新たに現れた3機のガンダム……彼らはそれまでの4機とは明らかに異なる過激な武力介入を開始した」

タクラマカン砂漠で現れた3機のガンダムスロ―ネはその後、他の4機と同じように武力介入を開始した。そのやり方はそれまでのガンダムとは似て非なるものだった。

それまでの4機は紛争が起こっている地域や紛争の元凶となるものへの介入であり、決して民間人を巻き込むようなことはしていないし、極力命を奪わないように戦っていた。その行為はテロであることには違いないが少なくとも無差別ではなかった。

しかし、3機のガンダムスロ―ネは民間人の働く兵器工場を初めとし、軍人だけではなく民間人にも多くの犠牲者が出た。さらには紛争や兵器とは何ら関係ない結婚式場までもが攻撃を受けた。そのやり方はもはや無差別テロそのものだった。

「なんだよそれ！そいつらなに考えてんだ！？」

グラハムからガンダムスローネが行ってきたことを聞いたタリサは怒りに顔を歪ませる。その横で、グラハムもまた当時のことを思いだして拳を握りしめていた。グラハムもガンダムスローネによって大切なものを奪われていた。

「新型の3機は私たちオーバーフラッグス隊が駐屯していた基地も強襲した。結果、その襲撃でフラッグの開発者であったレイフ・エイフマン教授が殺害され、私以上にフラッグを愛していた男……ハワード・メイスンもその戦いで戦死した」

エイフマン教授はソレスタルビーイングの計画の内容を突き止め、それを知ったガンダムスローネによってGNメガランチャーの直撃を受けて死亡。ハワードはオーバーフラッグス隊の連携でガンダムスローネツヴァイを翻弄している中でスローネツヴァイを撃墜するために突出し、GNフアングで機体の全身を串刺しにされて戦死した。

「私はあの時……ハワードの墓前で誓った……必ず、フラッグでガンダムを倒すと……」

「大佐……」

自ら握りしめた拳を見ながらグラハムはかつての自分の誓いを思い出す。グラハムはその誓い通り、それから先は基本的にフラッグの系統の機体にしか乗らなかった。アロウズに所属したときは一時的にアヘッドの近接型カスタムであるサキガケに乗っていたがしばらくしてフラッグを母体に開発されたマスラオとその強化発展型であるサノオに乗り換えている。

「私は新型のうちの1機に一矢報いることはできたが：ハワードの仇を討つことはかなわなかった」

ハワードが戦死した後、従業員が民間人であるアイリス社軍需工場がガンダムスローネに襲撃された際にグラハムは単機で現場に急行、性能で圧倒的に劣るカスタムフラッグでガンダムスローネアインのビームサーベルを奪い、片腕を切り落とすという戦果を挙げた。

「そして、それから間が開かぬうちにソレスタルビーイング内から裏切り者が出現し、30機の疑似太陽炉搭載MS、ジンクスがユニオン、AEU、人革連に譲渡された」

「あれ…？ジンクスって確か…」

それを聞いてタリサは以前、ユニオンの専用の疑似太陽炉搭載機のデータをキャシーに見せてもらったことを思いだす。その時はキャシーもユニオンの機体をタリサに把握させるために見せたものだった。

「そうだ、現在ユニオンで運用されている疑似太陽炉搭載機はその時にソレスタルビーイング内からもたらされたものを基にした機体だ。ソレスタルビーイングからもたらされた30機のジンクスはそれぞれの国家群に10機ずつ配分され、各国のエースたちが搭乗することとなった。私が隊長を務めていたオーバーフラッグス隊も解体され、その人員は全てジンクスに搭乗することとなった」

それは当然のことだった。ジンクスの性能はガンダムと互角であり、オーバーフラッグの性能を遥かに凌駕している。優れたパイロットをより優れた機体に乗せればより戦果を上げることができる。人革

連のエースであつたセルゲイ・スミルノフやソーマ・ピーリス、A EUのエースであるパトリック・コーラサワー、ユニオンのフラッグファイター、ダリル・ダッジを初め、多くのエースがジンクスに搭乗しソレスタルビーイングへの反撃を開始した。

「じゃあ、大佐もジンクスに……？」

タリサの問いかけにグラハムは首を横に振って否定する。

「いや、私はジンクスには乗らなかつた。私はフラッグでガンダムを倒すとハワードの墓前で誓つた。男の誓いに訂正はない。それを察してくれたカタギリはジンクスのうちの1機を解体し、疑似GNドライブをフラッグに移植する許可をとってくれた」

当時のカタギリを初めとするユニオンの技術者たちの不眠不休の作業でグラハムが乗っていたカスタムフラッグにジンクスの疑似GNドライブが移植され、『GNフラッグ』として

生まれ変わった。しかし、この機体はもともと完全に規格の異なるパーツを無理やり溶接したために機体バランスは劣悪でフラッグの特徴の1つだった可変機構も失い、さらに高機動時のGも解決されていないパイロットのことをまるで考えていない機体だった。

「フラッグへのGNドライブ換装作業が終わる前に状況はさらに動いていた。ユニオン、A EU、人革連は総力を結集して宇宙へと全てのジンクスを投入し、ソレスタルビーイングとの最終決戦に突入した」

三大国家に分配された全てのジンクスは1つの指揮系統のもとに国連軍として統一され、ソレスタルビーイングとの戦いは開始された。

初戦はジンクス部隊が数でガンダムを圧倒するも仕留めるには至らず、ソレスタルビーイング側もガンダム4機のうちの1機、ガンダムデュナメスが味方を庇って負傷するという痛み分けの結果に終わった。

2度目の戦いではガンダムスローネツヴァイを奪取した外人部隊のゲイリー・ビアッジこと、アリー・アル・サーシェスが国連側に合流しての戦いだった。ソレスタルビーイング側はガンダムエクシアが地球に降りていたためにガンダムのうちの1機を欠いていた。しかし、前回の戦いで負傷したはずのデュナメスが奮戦、多くのジンクスが撃破され、スローネツヴァイとの戦いでデュナメスは互いに相打ちになって大破。この時の戦いでグラハムのことを慕っていたフラッグファイターの1人、ダリル・ダッジはデュナメスに対して特攻を行い、戦死した。ダリルが戦死したことは地球にいたグラハムのもとにも届いた。

そして3度目の決戦、この戦いはまさに最後の総力戦だった。国連軍側にはソレスタルビーイングの裏切り者であるアレハンドロ・コナーが搭乗する7基もの疑似GNドライヴを搭載する大型MA、アルヴァトーレが合流してソレスタルビーイングに甚大な被害をもたらした。

「この3度目の決戦が近づいたとき、私のGNフラッグが完成し宇宙へ上がった。しかし、私が着いたときにはすでに戦いは終結に近付いていた」

国連軍とソレスタルビーイングの決戦は熾烈を極めた。国連軍側は残ったジンクスの大半が撃墜され、大型MAアルヴァトーレもエクシアとの戦闘によって撃破された。ソレスタルビーイング側もこの戦いでキュリオスとナドレ、ガンダムのサポート兵器だったGNア

ームズが大破した。

「宇宙に上がった私が戦場に向かうと、そこには私が初めて目にしたあのガンダムがいた」

決戦が行われていた場所へと駆けつけたグラハムはちょうど、アルヴァトールとその中に格納されていたMSアルヴァアロンとの戦いを終えた直後のエクシアと出くわした。

「あの時、私は運命を感じたよ。私とあのガンダムは運命の赤い糸で結ばれているのだと確信した」

「むう……」

またもグラハムのこのような言い回しにタリサは少しだけ嫉妬する。しかし、グラハムもそんなタリサの態度を察しているのか宥めるように頭を撫でる。わかっているならもう少し言い回しを変えればいいのだが……グラハムも微妙にタリサの反応を楽しんでいる節があるので変えようとはしていない。

「そして……あのガンダム……少年との一騎打ちが始まった」

グラハムの脳裏に、自身が駆るGNフラッグとエクシアの戦いの光景が蘇る。互いに、ビームサーベルとGNソードで斬り合い、機体が次々に損傷しながらも一歩も引かない。そして開かれた通信から互いの言葉が投げかけられる。

失ったものの仇を討つために、愛を超え、憎しみとなったその思いを抱いて戦うグラハム・エーカー。世界を変えるために……紛争根絶のためにガンダムと言う力を振るう少年、刹那・F・セイエイ。

2人の激闘は互いの機体の胴体を貫き、相討ちと言う形で一応の終わりを見た。

「じゃあ…大佐の身体の傷って……」

タリサの視線がグラハムの顔に刻まれた傷へと向けられる。顔だけではない…タリサも幾度か見たことがあるが、グラハムの右上半身にも痛々しい傷痕が残されている。

「…タリサの思っている通りだ。私の身に刻まれた傷はあの時、ガンダムと相討った時に付いたものだ」

グラハムは自身に刻まれた傷を手でなぞりながら、かつての戦いを思い返す。

「生き残った私は、カタギリの叔父であるホーマー・カタギリ司令のもとで教えを受けた。そして、ガンダム…少年との戦いから4年…国際連合は地球連邦と名を変え、正規軍とは別に、その治安維持を名目とした独立治安維持組織『アロウズ』が発足した」

独立治安維持組織アロウズ…名目上は地球圏の治安を守るための独立部隊だった。しかし、その実態は地球連邦に従わないものを弾圧することだった。それどころか地球連邦の不利になる存在ならば民間人であろうと虐殺する組織だった。

「なんだよ…それ……」

アロウズが行ってきたことにタリサが絶句する。自分たちの不利になるものならば民間人すら虐殺する…それはもはや軍隊とは言えない。軍隊は本来、民間人を護るために存在する。その軍隊が民間

人を虐殺しては本末転倒だ。

「……私もまた…アロウズにいた」

「え!？」

その言葉にタリサは驚愕する。まだそれほど長い付き合いではなくとも、グラハムがそう言ったことを好まない性格であることは容易に想像がつく。実際、グラハムはそう言った虐殺行為を好んではいなかった。しかし、当時のグラハムの頭にあったのはガンダムと決着をつけるという…その一念だけだった。

「幻滅したか？」

グラハムは苦笑いをしながらタリサに視線を向ける。たとえ自分がそう言った虐殺行為を好んでいなかったとしても、加担していたのは紛れもない事実。

「そんなことない! そりゃあ、驚いたけど…でも、大佐がどういう人かは知ってるし…それで大佐を嫌いになったりしねえよ」

タリサはグラハムの言葉を否定する。そんなタリサにグラハムは優しく微笑み、彼女の頭を撫でる。

「アロウズが反政府組織の弾圧を続ける中で、ソレスタルビーイングはアロウズを標的とし、再び活動を開始した。そのことに私は歓喜したよ…これで、ガンダムとの決着をつけることができるよ……」

ソレスタルビーイングの活動再開と共に、グラハムは地球連邦…正確にはそれを裏から操るイノベーターによって独自行動のライセン

スを与えられ、現在はタリサが搭乗しているアヘッド近接戦闘型『サキガケ』を駆ってソレスタルビーイングのダブルオーガンダムに執着した。

「その時に私が戦った2つのGNドライブを搭載したガンダム……それに乗っていたのはかつて戦った、あの時の少年だった。1度目の戦いは少年の機体が万全ではなかったために決着はつかなかった。しかし、サキガケではガンダムと渡り合えぬと考えた私は、盟友へと新たな機体を求めた」

当時、アロウズの技術顧問となっていたビリー・カタギリはジンクスやアヘッドに変わる主力機開発を行っていた。彼は自身の前に現れたグラハムの要望に応え、もともとはアヘッドをベースに開発していた計画を1度白紙に戻し、GNフラッグの後継機として再構築された。

その結果、フラッグの系統の正式後継機ともいうべきMS『マスラオ』が開発された。この機体はかつてのカスタムフラッグやGNフラッグと同じようにパイロットの身体を考えない機体となっていた。実際、現在でこそスサノオの性能の方がグラハムに追いつかなくなっているが、当時のグラハムはマスラオ及び、スサノオに搭乗してきたときは口から血を流していた。

「マスラオを得た私は再び、少年と対峙した。しかし、この戦いでも私と少年の決着はつかなかった」

アフリカにある軌道エレベーターで起こったクーデター。アロウズの横暴を許すまいとした一部の連邦将校はアロウズの実態を世に知らしめるため、タワー内部にいた市民を人質にとった。この出来事に一時的に艦から離れていたダブルオーライザーはアフリカタワー

に急行。この行動を予測していたグラハムもまた、マスラオに搭乗してダブルオーライザーを待ち受けた。この時、グラハムはトランザムを発動して交戦したものの結局、途中で他のガンダムの介入を受けて撤退。ここでも決着がつくことはなかった。

「それから数ヶ月……ついに私は少年と決着をつける場を得ることができた」

アフリカタワーで起こったブレイクピラー事件。クーデターによってアロウズの真実を知ったタワー内部の市民を口封じのため、衛星軌道兵器『メメントモリ』を使用して攻撃したのだ。メメントモリ自体は急行したダブルオーライザーによって中破したが、奮闘空しくメメントモリの一撃は直撃こそ避けられたもののピラーをかすめ、外壁がオートパージしてしまう。

その結果、アフリカタワーからリニアトレインによって脱出した市民たちもオートパージされた外壁に巻き込まれ、全滅。結局、その時点でアロウズの実態を世間に知らしめることができなくなってしまふ。さらに成層圏より下の外壁が地上の都市部へと落下してしまうものの、市民を護るためにソレスタルビーイングを初め、連邦正規軍、アロウズ、反連邦組織『カタロン』が一致団結して落下してくる外壁を迎撃し、奇跡的に都市部への直撃は回避された。皮肉にも、この悲劇的な出来事はそれまで敵対し合っていた勢力が1つになったのだった。

「私はアロウズを裏から操っていたイノベイターたちの特命を受け、少年との果し合いに臨んだ」

「イノベイター？」

タリサが初めて聞く単語に疑問符を浮かべる。もともと、タリサはNTに関することはグラハムから聞いているが他のことに關しては聞いていなかった。そこでグラハムは自分が知っているイノベーターのことをタリサに話す。イノベーターとはNTと同じように人類が革新した姿の1つ。脳量子波による空間認識能力、反射能力の増大、さらに特定の状況下での他者との意思疎通を可能とし、細胞の活性化することで老化が抑制され、寿命が常人の倍以上になる。細胞の活性化以外は非常にNTと似通った能力を持っている。

「もっとも、私が従っていたのはイノベーターを模して人工的に生み出されたイノベイドだったが……だが、私にはそんなことは関係なかった。私はただ、少年と決着を付けられればそれで良かった」
そして始まったラグランジュ5での果し合い。スサノオとダブルオーライザーは互いにトランザムを発動させ、互角の戦いを繰り広げた。

「かつて、少年は私に歪みがあると言った。私と少年は同じく戦うことしかできない存在だ……いや、そう思い込んでいた」

当時のグラハムはガンダムと戦い、勝利することだけを求めている。しかし、あの時の刹那はすでに純粹種のイノベーターへと革新し、戦うだけの存在ではなくなっていた。

「私が求めていたものは勝利のみ……だが、少年が求めていたものは私とは違った」

グラハムの脳裏には刹那との戦いの最後が思い出される。

『私が求めるのは戦う者のみが到達する極み……私は君に勝利し、その先にある極みを手にする!』

『勝利だけが望みか!?』

『他に何がある!』

『決まっている! 未来へと繋がる……明日だ!!』

遂についた決着……スサノオはダブルオーライザーによってサーベルを折られ、両肩にビームサーベルを突き立てられて大破した。

「私は少年に敗北した……だが、少年は私を殺さなかった」

グラハムは敗北した後、自らの死を望んだ。しかし、刹那はグラハムを殺さずにそのまま去って行った。そしてこの後にグラハムはマブラヴの世界へとやってきたのだった。

タリサに自身の過去を話し終えたグラハムは自室のベッドの上に寝転がっていた。

「…ん…ん…大佐…」

寝転がっているグラハムの腕の中には穏やかな寝息を立てているタリサの姿がある。そんなタリサの頭を撫でながら、グラハムはかっていた世界に思いを馳せる。

「（ふっ、皮肉なものだ…私のいた世界ではソレスタルビーイングと言う共通の脅威を相手に三大国家群は力を合わせ、1つになることができた…だが、この世界は…）」

グラハムの考えているのは2つの世界の人類の在り方…かつての世界では共通の脅威を相手に3つの国家群は1つに纏まることができた。しかし、この世界はBETAという共通の脅威がいるにもかかわらず1つにならない。

ソレスタルビーイングはあくまでも紛争の根絶と言う目的があり、少なくともグラハムが戦ってきた刹那たちは関係ない者たちを巻き込もうとはしなかった。しかし、BETAは人類を殺すことに躊躇がない分、ソレスタルビーイングよりも遥かに脅威だ。

「…少年……この世界に來たのが君だったら……どうする？」

かつてダブルオーライザーのランザムが見せた輝き……今のグラハムにはアレが分かり合うためのものだということは理解できる。

そうしてグラハムは眠りにつくまでの間、かつて自分が対峙した刹那と言う少年のことを考えていたのだった。

#34 夢の中で(前書き)

最新話更新です。

なんだか最近、マブラヴのネタが一番思い浮かびます。

穴だらけの駄文ですがよろしくお願いします。

もしよかったら感想お願いいたします。

#34 夢の中で

———あれ…？なんだこれ？———

ふと、タリサの視界には見覚えのないものが映る……それは満天の星空……それも頭上だけではなく足元にも星が見える。その光景は決して地球では見られないもの……

———宇宙？———

そう、それはまだタリサが見たことがない宇宙の姿だった。生まれてからずっと地上で暮らし、BETAと戦ってきたためにタリサは宇宙を実際に見たことはない。

———そっか……これが宇宙なんだ———

そう納得するとともにタリサは「やけにリアルな夢だな」…と考える。

———ッ！？なんだ！？———

瞬間、タリサの眼に二色の光が映った。緑とオレンジ……鮮やかな二色の光が互いにぶつかり合い、火花を散らす。

———あれは……スサノオ！？———

タリサが視界に捉えたのは忘れるはずもない漆黒のMS。かつて、朝鮮で自分を救ったスサノオの姿。

《生きてきた……私はこのために生きてきた！たといノベイター
の傀儡かいらいに成り果てようとも……この武士道だけは！！》

さらにタリサの頭の中に声が響く。この声は聞き覚えがある、間違
いなくグラハムの声。

《そうまでして！？》

そしてもう1つ……こちらは聞き覚えのない声だ。若い男の声……
それはスサノオと対峙している白と青に両肩に2つの太陽炉を搭載
した機体から聞こえてくる。

———あれが……ガンダム……———

タリサは思わず呟く。グラハムの話に聞いたソレスタルビーイング
のガンダム……ダブルオーライザーがそこにはあった。スサノオと
ダブルオーライザーは何度かぶつかり合うと互いに距離をとる。

《このままでは……》

《埒があかん！》

《ならば！》

《さすれば！》

刹那とグラハム……2人の言葉が交互に発せられ、次の瞬間2機に
変化が起きる。

《《トランザム！！》》

スサノオとダブルオーライザーは赤く輝きだし、先程とは段違いのスピードで再びぶつかり合う。

———これって…大佐の…記憶？———

そこまできてタリサは理解する。これはグラハムのかつての戦いの記憶なのだと。何故この光景を自分が見ているのかはわからないが、恐らくグラハムとタリサ…互いに理解しあった2人のNT能力が起こした現象なのだろう。

———すげえ……———

その2人の戦いをタリサは感嘆の声を出して見守る。トランザムによって増幅された緑とオレンジの粒子はぶつかり合い、その姿は何とも言えぬ美しさがあった。

《はああああああああ！！》

《ぬおおおおおお！！》

幾度目かの激突の中で、ダブルオーライザーから膨大な量の緑の粒子が放出され、その光は互いにぶつかり合う2機を包み込んでいく。

———な、なんだ！？———

タリサの疑問に答えるように、辺りの光景が白く、そして緑の粒子に満たされた場所へと変わる。そこにはグラハムと…そしてダブルオーライザーのパイロットである『刹那・F・セイエイ』の姿があった。

《ここは…いったい?…私はすでに涅槃にいるというのか?》

再びタリサの頭にグラハムの声が響く。グラハムは得体のしれない、粒子に満ちた空間に戸惑っていた。

《…違う……》

《少年?》

グラハムは自分の言葉を否定した刹那に視線を向ける。

《ここは…量子が集中する場所だ》

《何を世迷言を……》

《わかるような気がする……イオリア・シュヘンベルグがガンダムを…いや、GNドライヴを造った訳が……》

《なに!?》

刹那の語る言葉にグラハムが反応する。イオリア・シュヘンベルグ……ガンダムの生みの親にしてソレスタルビーイングの創設者……彼がGNドライヴを造った理由、それはソレスタルビーイングが創設された理由でもある。

《武力介入はこのための布石……イオリアの目的は…人類を革新に導くこと……》

革新…世界は違えども、それは宇宙世紀における人類の革新と呼ば

れたNTのそれに非常によく似ている。

《そう、俺は……変革しようとしている》

1度、目を瞑った刹那がもう1度目を開ける……すると刹那の瞳の色が金色に輝いている。刹那は度重なる戦いの中で、純粹種のイノベーターへと変革していた。

《…変革……それが君が会得した極みだというのか…》

刹那との会話の中で、グラハムはかつてカタギリの叔父であるホーマー・カタギリのもとを訪れたときのことを思いだす。その記憶はこの光景を見ているタリサへもNT同士の感応を通して伝わる。

《ソレスタルビーイングが再び？》

ハワイに建てられたホーマー・カタギリの家……そこは純和風の造りであり、ホーマー・カタギリとグラハムが互いに座って対面していた。

《その折には、是非とも私に戦う機会を与えていただきたい》

《……復讐か……》

そう呟いたホーマーにグラハムは真っ直ぐに見据えて答える。

《私が求めるのは戦う者のみが到達する極み……》

《（少年は、かつて私に歪みがあると言った……だが、彼とて戦うことしかできない存在……だからこそ私は望む……君と戦うことを！）》

再び、スサノオとダブルオーライザー……グラハムと刹那はぶつかり合う。

《その極みにある勝利を！》

《勝利だけが望みか！？》

《他に何がある！》

《決まっている！！》

ダブルオーライザーがスサノオを押し戻し、GNソードの柄を連結させてスサノオに迫る。

《未来へと繋がる……明日だ!!》

スサノオに迫るGNソード、だがスサノオはそれをソウテンで弾き飛ばし、逆にダブルオーライザーに斬りかかる。

《斬り捨て……ごめええええん!!》

ダブルオーライザーを両断しようとする刃……しかしダブルオーライザーはそのソウテンを両手で挟むことで受け止める。

《白羽取りだ?!?》

驚愕するグラハム。ダブルオーライザーはそのままソウテンの刃をへし折り、腰のビームサーベルに手を伸ばす。

《これが俺の……戦いだ!!》

2本のビームサーベルがスサノオの両肩を貫き、コクピットのグラハムへもその衝撃が伝わる。続いて、ビームサーベルに貫かれた両肩が爆発し、その衝撃でスサノオのフェイスマスクが碎け散り、中に隠されていたカスタムフラッグの頭部が露わになった。

——…大佐——

その光景にタリサは我が目を疑った。話には聞いていたがやはり、グラハムが敗北するのが信じられないのだろう。だが、事実決着はついた。グラハムの敗北という形で……

《……く……く……ぐう……》

グラハムは自身の敗北を悟り、コクピットから姿を現す。そのグラハムにダブルオーライザーはビームサーベルを向ける。

———な!?!や、やめろ!!———

それを見てタリサは咄嗟にグラハムの前に立ち塞がろうとする。今、生きているグラハムを知ってはいても、グラハムが殺されようとしている姿に耐えられない。だが、当然のようにこれは過去の映像……そんなことは関係なく、グラハムはダブルオーライザーを見据える。

《た、戦え……少年……!!……私を切り裂き……その手に勝利を掴んで見せろ!!》

———大佐……!!?!———

そうしてダブルオーライザー……いや、刹那に吼えるグラハムにタリサは悲しそうな顔を向ける。目の前のグラハムは自らの死を望んでいる。それがタリサには感じられてならなかった。

《っ!?!》

しかし、すぐにグラハムの顔が驚愕に染まる。ダブルオーライザーはトランザムを解除し、ビームサーベルの刃を消滅させた。

《何故だ!何故止めを刺さん!?!》

グラハムの疑問に、刹那はゆっくりと答える。

《…俺は……生きる……生きて明日を掴む……それが……俺の戦いだ……》

この言葉にタリサ…そして恐らくこの時のグラハムも悟っただろう……今の刹那はすでに戦うだけの存在ではないということ……

《生きるために…戦え……！》

刹那はグラハムにその言葉だけを言い残し、去って行った。そしてそれを見ていたタリサの意識も次第に薄れて行った。

「…ん…う……」

不意に、タリサが目を覚ます。すぐに視界に入っただのは数日前から世話になっているソ連軍補給基地の一室の天井……そして自分を腕枕してくれているグラハムの穏やかな寝顔だった。

「…大佐……」

タリサは視界に入ったグラハムの顔にそつと手を触れる。その寝顔にタリサはつい先程見たあの戦いを思い出す。グラハムの駆るスサノオとガンダム最後の戦い、そして決着……敗北して自ら死を望んでいたグラハムと、グラハムに『生きる』と言った刹那。

「…グラハム……」

改めてグラハムの名前を言い直すタリサ……その胸中には複雑な想いがあった。グラハムを歪めた元凶であるソレスタルビーイング、しかしそれらの出来事がなければグラハムはこの世界に来ることはなかったかも知れない。そうなれば、こうしてタリサとグラハムが互いを感じ合うこともなかった。

「…ん……」

タリサはそうした想いを胸に秘めながらも、グラハムに抱きついた。せめてグラハムがこの世界で未来を生きられるように……グラハムを護りたいと願いながら、再びタリサは眠りについた。

#34 夢の中で（後書き）

最新話でした。今回はタリサとグラハムがNT同士だからできたことです。

正直、NTならこれぐらいできそうな気がするので書きました。

#35 ソ連の内情(前書き)

一ヶ月近くお待たせしてすみません。大学4年生は忙しいです
感想お待ちしております。もしよければ後書きもどうぞ。

#35 ソ連の内情

2001年8月16日 ソ連軍前線補給基地

「ふう……」

すでに日も完全に沈んだ夜、強化装備を着たユウヤが烈火から降りて一息ついた。ユウヤはついさっきまでシミュレーターによる自主訓練を行っていた。以前の戦いで体験した『あの感覚』を自分のものにするために訓練を行っていた。

「（くそ！まだ上手く行かねえ！）」

しかしどうも訓練の結果は芳しくないらしい。どれだけシミュレーターで訓練しても『あの感覚』を呼び起こすことは出来ていなかった。

「（やっぱシミュレーターじゃ駄目なのか？）」

その結果にユウヤはある1つの答えに辿り着く。あの時、『あの感覚』を感じたのはまさに絶体絶命の時だった。シミュレーターでも1人では到底無理なシチュエーションでの戦いを行ってみたものの、『あの感覚』を呼び起こすことはできない。そこでユウヤが思っていた可能性はただ1つ、本当に命の危険がかかった実戦で、同じ状況になることだった。

「…っ！？（って、なに考えてるんだ…俺は！？）」

そこまで考えて、ユウヤは頭を振ってその考えを振り払う。仮に、同じ状況になることで『あの感覚』を呼び起こせるとしよう。しかし、実戦で同じ状況になるなどまずありえない。いや、なっていないのだ。何故なら、実戦では自分1人ではなく、ステラやヴァレリオと言った仲間がいる。同じ状況になるということは、即ちその2人を危険に晒すということだ。すでにゲイルと言う仲間を失ったばかりであるユウヤには、自分の都合で仲間を危険に晒すなどできるはずもなかった。そもそも、こうしてユウヤが『あの感覚』を自分のものにしようとしているのも、2度と仲間を失わないためだ。なのに、仲間を危険に晒しては本末転倒だ。

「……ふう……」

そこまで考えて、ユウヤは溜息を吐いて再び考え込む。

「精が出るな」

「……スミルノフ少尉……」

ユウヤが考え込んでいると、格納庫にやわらかい女性の声が響いた。ユウヤが声のした方向に目を向けると、そこには銀色の長い髪の女性、メドヴィエチ大隊のソーマ・スミルノフ少尉がドリンク片手に立っていた。

「サンキュ……けど、どうしてここに？」

ソーマがドリンクを手渡すと、ユウヤは礼を言ってドリンクに口を付ける。そこでユウヤはソーマが何故此処にいるのかを問いかけた。

「さっき、ローウェル軍曹とすれ違った。少尉が1人で訓練をして

いると聞いてな」

そう言いながらソーマはユウヤの隣まで歩いてくる。

「前回の作戦では大活躍だったみたいだな。映像記録は見せて貰った。見事な動きだった」

素直にユウヤに称賛を送るソーマ。実際、あの烈火での戦闘映像を見たソーマ含むスミルノフ一家は純粋に驚いていた。まだ実戦経験もないはずの衛士がして見せたその機動は、ソーマが所属するメドヴィエチ大隊の精鋭たちにも匹敵、或いは凌駕するものだった。ソーマ自身も、模擬戦である動きをされたら勝てるかどうかかわからない程だ。

「別に：大したことじゃない：：：どれだけ凄い機動ができたって：：目の前で仲間1人救えなきゃ意味がない」

しかし、やはりユウヤも先の作戦のことを忘れることは出来ていなかった。あれだけの動きを自分ができたなら：何故ゲイルを助けられなかったのかと、唯依に励まされてなおも考えてしまうのだ。

「……それでも、貴官のおかげでソ連軍の衛士たちの命は救われた。それは紛れもない事実だ」

ソーマ自身も、ユウヤの葛藤は解っている。彼女も実戦経験豊富な衛士であり、その実戦の中で仲間を目の前で失うことなど何度も経験してきた。『もっと力があれば……』そう考えたことも一度や二度ではない。

「………そういえば……」

しばらくの間の沈黙の後、不意にユウヤが口を開く。その口から出た言葉は、ユウヤが抱いていた1つの疑問だった。

「…どうして此処の…ジャール大隊の連中は同じソ連の人間であるはずのあいつらを毛嫌いしているんだ？」

それは数日前から抱いていた疑問の1つ。実戦に出る数日前、紅の姉妹こと、クリスカ・ビャーチェノワとイーニア・シエスチナがジャール大隊の少年たちに暴行されかけた時のことをソーマに話す。前線の人間の中には、後方の人間を嫌っている者が多いことは知っているが、だからと言ってあそこまで嫌うことができるものなのか？それが、ユウヤが抱いた疑問だった。

「…そうか…他国の人間は知らないものは知らないか…」

ソーマはそう言うのと、少しずつソ連のことを話し始めた。

「言葉にしてしまえば簡単なことだ。ソ連には特権階級であるロシア人と、そしてそれ以外の被支配民族で構成されている。ジャール大隊や、私の所属しているメドヴィエチ大隊の大多数は、そうした被支配民族の生まれだ」

「被…支配民族…？」

それは米国人であるユウヤにとって聞きなれない言葉だった。そんなユウヤを見ながら、ソーマは淡々と喋りつづける。

「BETAのソ連侵攻の際、特権階級であるロシア人は被支配民族の人間たち戦わせ、自分たちは早々にアラスカまで逃げた。さらに、

後方に下がったロシア人特権階級は何かにつけて前線に無理難題を押し付け続けたんだ。そんなロシア人が、目の前を我が物顔で歩いていたら彼らも面白くないだろう？」

それを聞いて、ユウヤは沈黙する。アメリカにも人種差別と言うものはあるが、それでも実力があれば認められるし、階級差別などと言うものはない。しかし、ソ連では被支配民族と特権階級であるロシア人の間には民族蔑視、階級差別による大きな壁ができています。恐らく、ジャール大隊の少年兵たちは、後方のロシア人のことを同胞などとは思っていないのだろう。被支配民族である彼らは前線でBETAと命を賭けた死闘を繰り広げ、片や特権階級であるロシア人は後方でのうのうとしている。ジャール大隊の少年兵たちにはそれが我慢できないのだろう。

「……………」

ユウヤにも、ジャール大隊の者たちの気持ちはある程度解る。ついこの間、実戦を終えたばかりのユウヤだったが、前線が最悪の地獄だというのが理解できた。そんな場所に、被支配民族である彼らを置き去りにしてさっさと逃げて行ったロシア人に対する憎悪は想像を絶するものがあるだろう。だが、それと同時に…ユウヤの心の中の冷静な部分が別の回答を出した。

「…けど、それじゃあ……………」

「ああ…そうだ……………」

ユウヤは、アラスカに来たばかりの頃の自分を思い出す。日本が関わるXFJ計画に反発していた、自分の姿を…そんなユウヤの言わんとしていることはソーマにも理解できた。ソーマはユウヤが言

葉を発する前にそれを肯定する。

「それは個人的な感情だ。彼らの行いは規律を乱す行為……規律を失った軍は悲劇しか生まない」

そう……ジャール大隊の彼らの想いは、どこまで行っても個人的な感情だ。個人的な感情で規律を無視しすれば多くの悲劇を生む。例えるなら、戦争で勝利した軍が欲望のままに暴走し、略奪と暴行を繰り返すように。なにより、あの時ジャール大隊の少年兵たちが暴行しようとしたのは紅の姉妹の2人だ。彼女たちが暴行によって精神的に異常をきたせば、一部の彼女たちを自分たちの計画に利用しているソ連上層部が黙ってはいないだろう。

「……しかし……それでも私たちにはどうすることもできない。私には彼らの憎しみを消す手段はない……何より、ソ連と言う国が昔から抱えている問題だからな」

ソーマが自嘲気味に笑う。確かに、そもそもジャール大隊の少年兵たちとソーマとは部隊からして違う。何より、特権階級と被支配民族との溝は昨日今日できたものではない。それこそ、何十年も続いてきた問題なのだ。

「……なあ、スミルノフ少尉も……被支配階級の人間なのか？」

これまでの話を聞いて、ユウヤは前線にいるソーマ。いや、ソーマだけでなく、他のスミルノフ一家の面々やジャール大隊の指揮官であるラトロワも被支配民族なのかと考える。しかし、ソーマはそれを否定する。

「いや……私は……私たち家族はロシア人だ……私たちだけじゃなく、

ラトロワ中佐もな」

「っ!？」

ソーマの言葉にユウヤは驚愕する。

「そんなに驚くことでもないだろう？ロシア人の中にも、被支配民族だけを戦わせることに反対な者もいる。父さんがその筆頭だった」

苦笑いしながらソーマはユウヤに語る。もともと、スミルノフ一家も特権階級であるロシア人だったが、セルゲイやホリーの夫婦は階級差別を快く思っておらず、自然とその子供であるアンドレイとソーマも階級差別を嫌っていたこと。結果、セルゲイとホリーは最前線であるカムチャツカに自らの意志で志願し、アンドレイとソーマの2人も両親と共に戦うためにこの最前線に志願したのだ。幸いにも、上層部の中には少数ながら階級差別をなくそうとする者もおり、セルゲイたちはすぐにこの最前線に赴くことができた。

「そのおかげか、ロシア人でも私たち家族やラトロワ中佐は被支配民族出身の者たちに受け入れられた。だが、だからと言って数十年にも渡った階級差別がなくなったわけではない」

セルゲイたちの配属当初、メドヴィエチ大隊の面々も特権階級のロシア人と言うことで快く思われていなかった。しかし、そこはセルゲイたちスミルノフ一家の数年単位の努力により、よほどのことがない限り、ロシア人に絡むことがなくなった。

「：最前線に来て、私は改めて実感した：BETAに勝つには、一致団結しなければいけない……なのに、私たちソ連は祖国を追われてなおも下らぬ差別に振り回されている……これでは：BETAに勝

つなど考えられない」

そう語るソーマの手は震えている。それは、怒り故か、それとも悲しみ故かはユウヤには解らない。

「…ああ……そうだな……」

ユウヤはただ、頷くことしかできなかった。

「…大佐、入るぜ」

ところ変わって、ここはグラハムの滞在している部屋。そこにはタリサが扉の前に立っていた。タリサが外から声をかけ、部屋の中に入る。本来、この部屋はグラハムにあてがわれたはずの部屋なのだが、タリサもほとんど此処にいることが多かった。タリサが部屋の

中に入ると、ちょうどグラハムがユニオンの基地と通信をしている所だった。

「む……タリサ、戻ったか。ではなカタギリ」

『ああ、彼女によろしくね』

音量的にはグラハムにしか聞こえないぐらいの声であった。グラハムが通信を切るとタリサはグラハムに近付いていく。

「何かあったのか？」

タリサがグラハムに問いかける。タリサもこの所、大分敬語が抜けてきていた。それでもいまだに名前で呼ぶことには慣れていないのだが。

「単なる近況報告だよ。私たちの新しい機体のことも兼ねてな」

「へえ……大佐の新しい機体か……」

タリサもスサノオが改良を受けていることは知っており、グラハムの新しい機体には興味津々であるらしい。

「……ん、シャワーを浴びて来たのか？」

自分に近付いてきたタリサからほのかに香る洗剤の匂いと、僅かに濡れたタリサの髪を見てグラハムが尋ねる。ちなみにいうと、一応この基地にもシャワーを浴びるための浴場はある。これは基地内を清潔に保つことで病気が起こりにくくすることためである。しかし、やはり最前線であるためか簡易的なものであり、男女共用で運が悪

ければ浴室内で遭遇する可能性も有り得る。さらに最前線ではトイレも男女兼用であったりする。

「…だって、大佐の部屋に行くのに汗臭いのやだったし……」

グラハムの言葉にタリサは顔を赤くして答える。もうグラハムの前では完全に乙女である。ただの恋する女の子である。

「ふ…そうか……」

タリサの返答にグラハムは優しく微笑み、ベッドの上に腰掛ける。するとタリサもグラハムの横に座り込んだ。先日、グラハムが自身の過去をタリサに見せ、タリサが夢でグラハムと刹那の戦いを見てから、2人の距離はさらに縮まっていた。

「そう言えば大佐、前に言ってた……『SEED』ってなんなんだ？」

隣に座るグラハムに視線を向け、タリサが尋ねる。以前、ゲイルが戦死したあの作戦でユウヤの機動が激変したときにグラハムが呟いた単語。それがタリサの頭の中にはずっと残っていた。

「そうだな……簡単に言えば…NTとはまた別の方向での人類の進化の形だ」

自分のことを全て話したタリサに、今更隠す気もないのかグラハムはゆっくり語り始める。

「『SEED』は私がいた世界とはまた別の世界での、一部の人間にのみ発言する現象だ」

もともと、ガンダムSEEDの世界に存在するその能力。それは『Superior Evolutionary Element Destined-factor』の頭文字をとって『SEED』と呼ばれ、『優れた種への進化の要素であることを運命づけられた因子』を意味する。その内容は思考がクリアになり、集中力や反応速度が異常なまでに高まること。それによって格段に戦闘能力が強化されるのである。グラハムはユウヤの機動の激変はこの能力に関するものだと考えていた。NTに覚醒したのなら、同じNTであるグラハムやタリサも感じ取ることができる。しかし、それがなく、能力が急激に上がったというならばそれぐらいしか考え付かなかった。

「じゃあユウヤはその『SEED』に……」

「無論、確定しているわけではない。もしかしたら、私の知識の中にはない別の能力の可能性もある」

そもそもグラハムは『SEED』を持っていないのでその感覚は解らない。何より、『SEED』はNTと違って他者との感応などの能力はないので仮にグラハムが『SEED』を持っていたとしても分からない。

「そっか…じゃあユウヤにアドバイスとかって……」

「無理だな…『SEED』を自分の意志で発動する方法は、『SEED』を持たない私にはわからない」

グラハムの返答を聞いてタリサは残念そうにする。タリサ自身、ステラからユウヤが鬼気迫る勢いでシミュレーターを繰り返している

と聞いた。ステラもユウヤのことを心配しているようだったので、何か手助けができればと思ったのだ。

「だが、これは私の勘だが……彼ならば問題あるまい……大事なのは、彼を信じることだ」

残念そうにしているタリサの頭をグラハムが優しく撫でる。

「しかし……そこまで私以外の男の心配をするとは……少し妬けるな」

「うえ!？」

突然のグラハムの発言にタリサは慌てる。タリサからすれば、かつて同じ部隊の仲間が心配していたために、その力になればと思っていたに過ぎない。それをグラハムがこんな発言をするとは思わなかった。

「あ、え、あ、えと……か、勘違いすんなよ？アタシが好きなのは大佐だけで……ユウヤのことはステラが心配してたから気になっただけ……」

必死にグラハムに弁解するタリサ。タリサの想い人は今も昔もグラハムただ1人だ。寧ろ、その想いはグラハムと結ばれたことでさらに強くなっていると言ってもいい。なので変に勘違いされてグラハムに嫌われるのは絶対に嫌だった。

「無論、タリサの好意を疑ってなどいないさ……だが、私は割と嫉妬深い人間だ。どんな理由であれ、愛する女性が別の男のことを考えているのは良い気分ではない」

「け、けど…ムグッ!？」

まだ必死に弁解を続けるタリサの唇をグラムハムは自身の唇で塞ぐ。

「ん…たい…ふぁ……」

部屋の中には淫靡な水音が響き、最初のうちは驚きから拙い抵抗をしていたタリサも次第にその行為を受け入れる。

「…はふう……」

深いキスが終わると、タリサの眼はトロンと潤んでおり、その姿にグラムハムは愛らしさを感じた。そしてそのまま、グラムハムはタリサをベッドに押し倒した。

#35 ソ連の内情（後書き）

……書いててわかったことですが、どうも私が恋愛ものを書くとうしても甘くなるようです。どうしてこうなった……特別書こうと思ったわけではないのに指が勝手に甘い展開を書いていく……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3128o/>

MUV-LUV ALTERNATIVE ～武士道～

2011年12月19日14時46分発行